

奇譚クラス

電撃文庫

奇譚クラス

9



THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



三三三三三

IBM. 2805

悦特 No. 5

「悦虐小説と緊縛写真」特集

狂集

臨時増刊・限定版

悦虐小説集

一 換の花 片矢
青色の螢光燈 川田
植民地加虐秘史 進
ベンガルの黄昏 山野
夕暮の窓辺で 古川
北国湯場哀話 吉野
国際スパイ団監房 野中
実説 白木屋お駒 川野
気遣にされた令嬢 飛田
良二

忘年会奇譚 白金 紅次
悲風刺青悲談 岩 広志
車中汚辱 九鬼 麻里
愛恋の日に 古川 裕子
灸点三昧 長谷川 清
続・半公刑脱走囚 篠原 咲恵
縛恋(ばくれん) 草薙 久入
夏子抄(「罪ある女」の日記) 桜井章一郎

現代緊縛風景百二十態

新星のまたたき 春丘 リル
苦痛への迎撃 絹川 文代
罪なき女囚 大塚 啓子
黒蛇の獲物 絹川 文代
格子なき監房 愛川 悦子
愚謝の眼差 顔 典子
幽艶なる受刑 花坂 道子
戯言の反抗 大塚 啓子

美女裸縛 絹川 文代
仇怨の欄間 桜井 葉子
憤辱を包む麗姿 益田 房子
軟強肌 大塚 啓子
君知るや麗囚の真意を 絹川 文代
嬉戯の拘束 桜井 葉子
プロファイル 岩井 知子
泣泣の像 絹川 文代



好評裡に発刊!! 注文殺到 定価三百円 (略特五)

四馬孝・責画集

美女の鼻 鑑賞
奥様御機嫌 如何
小さいコルセット
女小舟の中の漂流娘
女マンホールの宝物
女の顔は玩具か

奇譚クラブ臨時増刊号

「悦虐小説と緊縛写真」特集号

定価 各一部 三百円 (送共)

- 第一集 緊縛女体特集 略号(悦特第一)
- 第二集 悶悦姿態特選 略号(悦特第二)
- 第三集 嵐を慕う蝶 略号(悦特第三)
- 第四集 拘束美態特集 略号(悦特第四)
- 第五集 緊縛風景120態 略号(悦特第五)

本誌特号の女体緊縛写真と四馬孝画の緊縛画が、ずらりと各集順に拘束を競って満載されています。ぎゅっりと詰った悦虐のむせかえる妖しい雰囲気と共に、どうかその快楽を満喫して下さい。



限定版特別号 第三弾

「緊縛写真グラフィック集」

特価五百円 略号「グラフ」

表紙三度刷、内容グラフィック印刷

画題「縛り人形」 絹川文代 花坂道子

くどくどと宣伝文句を並べたて
るまでもなく、全巻これ縛られた
美女の淫態です。門外漢はいざ別
らす好事家は必ずやその価値を見
出して下さると思います。自
信を以てお贈りするこの限定版を
どうか手にとって、心ゆくまで鑑
賞して下さい。

◎豪華な内容とモデル陣

巻頭裸身緊縛一頁大扉

ながしめ 絹川文代

荒縄全裸緊縛 大塚啓子

落ちた腰巻九態(野外) 大塚啓子

円い乳房 愛川悦子

浴室におびえて九態 絹川悦子

縄の陶酔 絹川文代

恍惚境 悦虐の末 絹川文代

いためられた乳房 桜井葉子

耐えられる? 桜井葉子

月経帯の強制 二態 大塚啓子

手吊りと逆手吊り五態 大塚啓子

全裸悦虐態 大塚啓子

白痴美の誘惑 大塚啓子

はねかえす縄 大塚啓子

うろうろ許して! 大塚啓子

雪白の肌は縄にまみれて 大塚啓子

優姿ハダカ縛り 絹川文代

忘却の彼方 絹川文代

股間縛り背正面二態 絹川文代

捕われの麗人二態 絹川文代

湯責め二態 大塚啓子

浴室にて責める四態 大塚啓子

何にしようと言うの 桜井葉子

新人媚態集八景 桜井葉子

いじめぬく二態 絹川文代

メンスバンドの狼巻 絹川文代

観念横臥の図二態 絹川文代

変形手足しばり四態 愛川悦子

裸身をさらして六態 愛川悦子

豊満くらべ 九態 桜井葉子

亀甲縛り正背面二態 愛川悦子

想めしき縛目二態 大塚啓子

後手首腰縛 四態 大塚啓子

新人緊縛ポーズ集8態 桜井葉子

隅から隅まで 4態 愛川悦子

鏡面万華鏡模(裏と表) 愛川悦子

四十項目 百十五ポーズ





奇譚クラブ

早秋特大号
(復刊第六十五号九月号)

目次

絵物語「網にかかった女」

四馬 孝・画

▽罨に落ちた小羊

▽襲いかかる狼の手

▽息もつけぬ猿ぐつわ

▽後手のいましめ

▽美しい変化

▽非情の鉄棒

▽煙草の火

▽はかない休息

絵

切腹画「女郎花割腹」

戯画選「娘子軍自刃」

南村 俊平・画

口

マソヒチック・フォト

頭

「驕慢」 「圧倒」

読者投稿画廊

巻

「ファンタジック・エネマ」

宮崎 昭平・画

「戦陣の血祭」

浜 毅・画

「ボニイ」 「山の頂」

ENOG・画

四馬孝傑作集「三角木の仕置」

四馬 孝・画

目次裏「風流いろは草紙」

佐保 忍・句
滝 れい子・画

投稿画「ある夜の夢語り」

遠藤仙二路・画



グラビヤ・フォト

不安と羞恥と嘆願	モデル：津川 路子
美しきミノムシ	モデル：絹川 文代
怨嗟とあきらめ	モデル：春丘 リル
山また山谷また谷	モデル：絹川 文代
女囚引廻しの図	モデル：桜井 葉子
ひっ捕えた妖獣	モデル：絹川 文代

緊縛と表情について「特に手足などの」	大熊 寿夫	46
映画通信 男性責めシーンを拾う	菅 良太	58
随 想「悦虐は卑猥に通じない」	松井 頼子	60
縛り写真撮影 アイディアの見本例	牧 高志	68
観戦記「女相撲と女斗美」(その三)	雪崎 京人	74
長篇連載小説「宇宙のどこかで」	佐治 麻造	78
緊縛の 縛られたインテリ令嬢 イメージ	浦田 紀大	92
エッセー「縛りは貴重品たれ」	宮部透可志	96
浣腸マニアの告白 私 の 浣腸	春村 玲子	98



連載第三次元小説「影の国」	雪俊	遙	102
男性責小説「妖禪」	榎村	奏	114
倒錯の倫理性「仏・米の映画にふれて」	菅	良太	124
創作演習地	三条	卓史	126
映画通信 最近縛られた女優達	大河原	珠樹	134
愛好者の記録	とま・かつひ		136
或る強盗事件	南	時夫	138
マゾ通信「マゾ男性よ嘆くことなかれ」	諸岡	堅雄	146
懸賞愛読者原稿入選作品			
零の舞踏会（その四）	氷見	龍也	150
マニアの独り言	S・S	生	158
乗馬ズボン 夕陽を染める乙女たち	藤山	秀緒	160
シリーズ			
一悦虐者の回想「快樂」	一ノ瀬	悦子	166
告 白 女装の楽しみ	比良野	裕	170
浣腸通信「あるヒント」	津川	八郎	173
読者通信			174

風柳 ころは草紙

滝保 刃切 画
れい子 画

ち

血紅 散る

柔肌 に

刺す

九寸五分

ぬ

濡れ

九寸五分

り

りきんて

解け

ぬが

こんなときにも

使う
なり

うらみの
猿ぐっわ



る

留守

采曲の

縛自

のくせが又出たり

わ

あすれじの

形見に

残すいれほころ

か

可

愛さが

余って

憎き

お

おそい

こんな

仕置が

待つてゐる

夜は

麗

肌の白



ある夜の夢語り

遠藤仙二路・画



異常な気配に、ハッとして起き上った私の目の前には、北海道に居る筈の妹が、出刃庖丁を持った人相の悪い男に縛られて、今、猿ぐつわをされようとしていました。驚いて見廻すと、私の周りには、それぞれ、後手に縛り上げられて猿ぐつわ

とされた女達がいるのです。よく見ると、それは、今、病院で療養中の筈の妻をはじめ、九州の従妹、青森の姉、高知の叔母、名古屋の義姉など、その他にもまだ、四年前に嫁いだと聞く初恋のヒトや、島根の片田舎に出張中、世話してくれた下宿先の娘さんなどが、ズラリと並んで



厳しい縄目に
苦しげに踞っている
ではありませんか……
痛々しくも美事な眺め
でした。



一体どうしたことだ？
と私は呆然として皆
の美しい縛られ姿に見惚
れていました。



……突然睨り出した眼がまし
時計が、今度こそ本当に私を
現実の世界に引戻してしま
いました。

枕の下から、私の描
いたこの緊縛画
がのぞいていま
した。

私は今夜
もまた縛
り絵を枕
に敷い



てお掃ようと思
いながら、出勤の
準備にかかった
のでし
た。

S Endo 5/2

網にかかった女

四馬 孝・画

(1) 罠に落ちた小羊

彼女はハッと気がついたが、時すでにおそく、扉の錠は固くとざされ、完全に男のワナに落ちたことを知らされた。



(2) 襲いかかる狼の手

背後から襲いかかる男の手を払いのけて必死になって争ったが、所詮女の身では抗すべくもなく、床へ押し倒されて、荒々しく洋服をはぎとられてしまった。



(3) 息もつけぬ猿ぐつわ

着ているものをすっかりむしり取られた彼女は、手馴れた男によって忽ちのうちに、きっちりと猿ぐつわをかまされてしまった。「う、う、う、う、」もがいても頬に布が喰い込むばかり。



(4) 後手のいましめ

両手を捻じあげると手練の早業で後手に縛り上げ、柔かい餅肌を楽しむかのように、じわじわとゆっくり縄を巻きつけ、足首も揃えて縛った。



(5) 美しい変化

無惨にも全身を縄と皮紐とで縛り上げられてしまった彼女は、すでに男のなすがまになるより仕方がなかった。何という、それは哀れにも美しい変りようであろうか。



(6) 非情の鉄棒

男は目を血走らせ、息をはずませて、すっかり自分自身の残忍さに酔っていた。彼女は
はその哀れな弄りものとして、次々に行われる男のいたぶりに喘ぐのだった。



(7) 煙 草 の 火

ゆるやかに上る煙草の煙が、ふっときれたかと思うと、押し殺したようなうめき声が、女の猿ぐつわの奥で鳴った。火が消えると新しい煙草が取り出されて、白い肌へ…。



(8) はかない休息

哀れな小羊は、その休息の間も、鉄鑕につながれて、中腰のまゝで、厳しい縛しめに耐えねばならなかった。そして又この後に、どのような苦しい責めがあるのかとおののきながら。





女郎花割腹

露をだにいう

やまとの女郎花

娘子軍自刃

戦に破れし七人の少女たち、めいめい腹
かつさばき、或は相刺しに果てる壮烈に
も哀れな場面。

南村俊平・画



驕 慢

「足の先を口へ入れて、舐めさせたり、顔をふんづけてやったり、こんな私って、
どうだろう。もっと、もっと、いじめてやりたくなるわね」

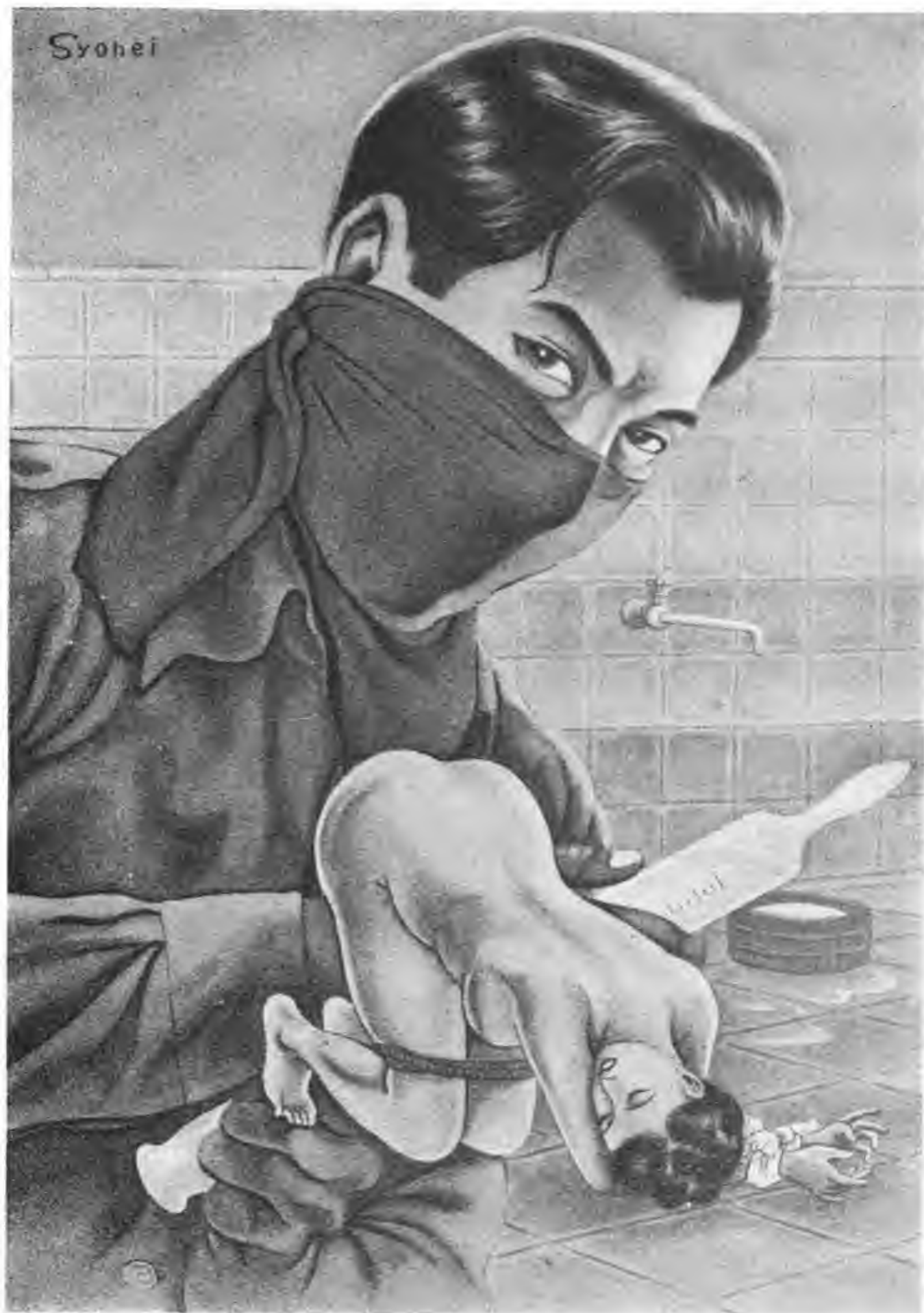
圧 倒

「後手を逆にとって、手首をポンと折り曲げると、手首が脹れ上って自由がきかなくなる。私の下敷になって、どんな気持ちだい。」



ファンタジック・エネマ

浣腸マニヤの描いた浣腸の幻想は、このように憧れの夢を絵画化しました。



(読者投稿)

宮崎昭平・画

戦陣の血祭

戦端が開かれると共に人質にとられていた敵方の姫君は、あわれにも大の字の磔にされて、今や戦陣の血祭にされようとするところである。





ポ ニ イ

ENOG・画

足首に小鈴をつけたこの可愛いポニイはお尻に鞭の一閃を受けると、馬車を引いて街の中をリンリンリンと走ってゆくことだろう。

(この画の作者は、住所氏名御連絡下さい)



山の頂

ENOG・画

車で山の頂へ乗りつけたカップルは、奇妙な饗宴をくりひろげたのち、レディだけが一本杉にこのような形で残された。これは何事の結末か？

三角木の仕置

(四馬 孝・画)

哀れにも痛々しい風情をたたえて、三角木の責めを甘受する美しい娘鈴代の可憐さ。



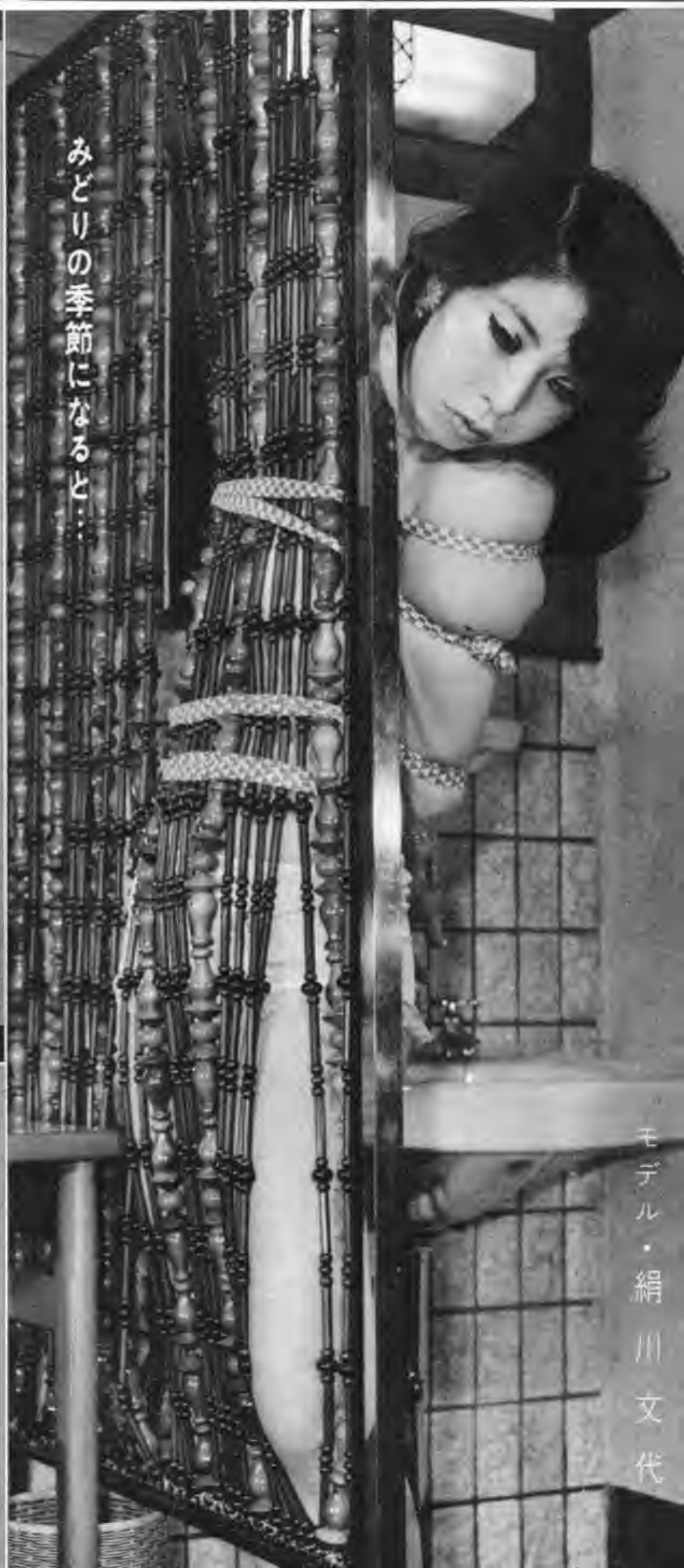
不安と羞恥と嘆願



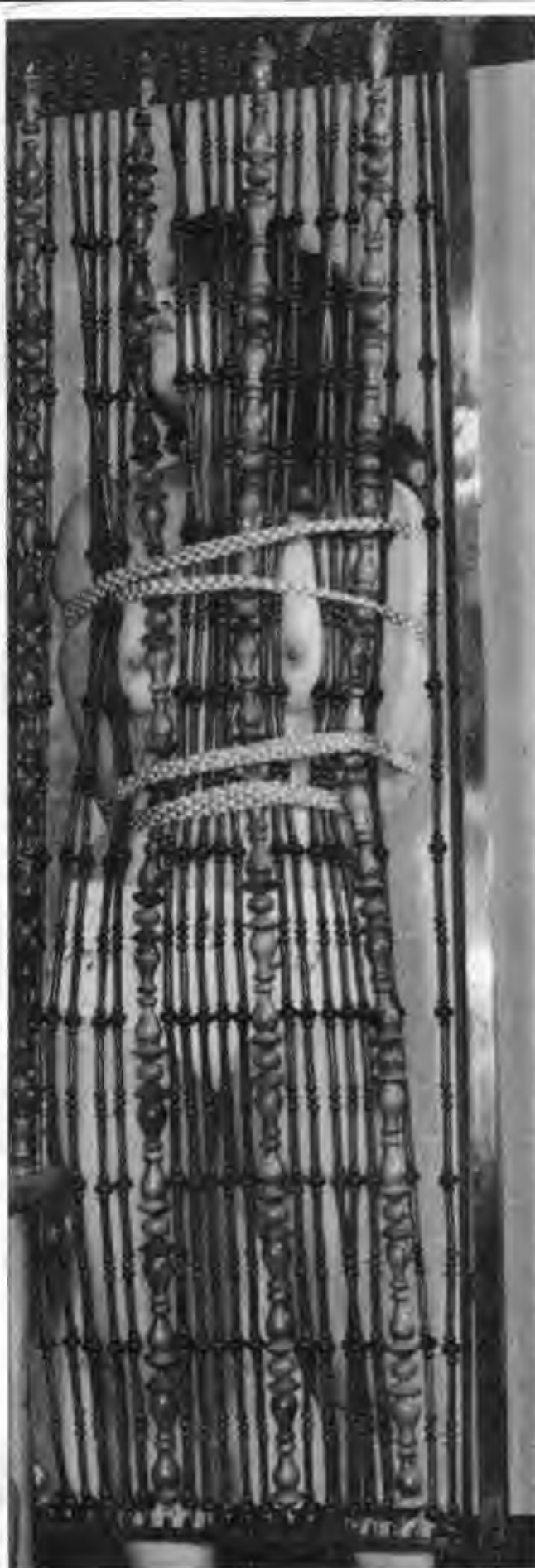
モデル・津川路子







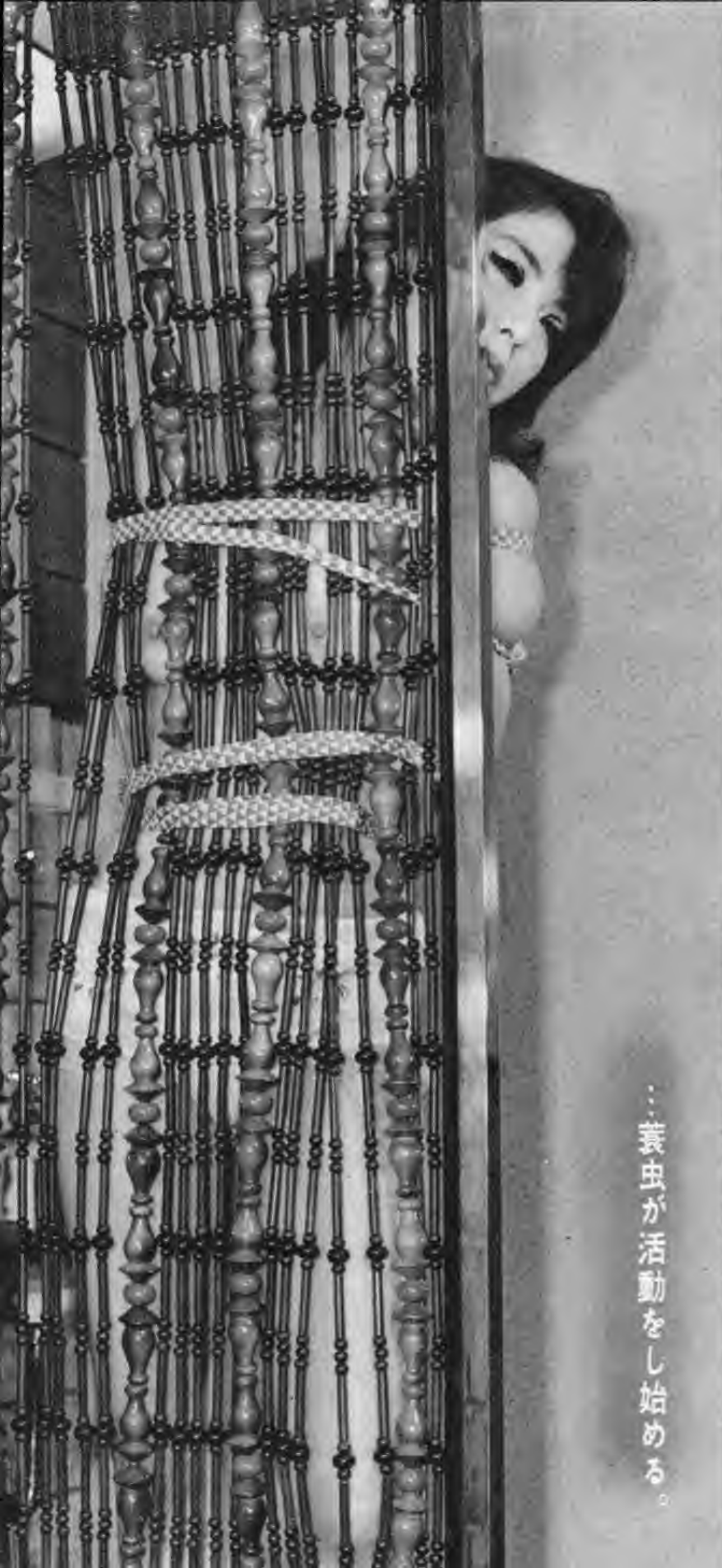
みどりの季節になると...



美しき
ミ
ノ
ム
シ



…蓑虫が活動をし始める。



怨
嗟

と

あ
き
ら
め

モ
デル
春
丘
リ
ル







山また山
谷また谷



やわはだの



たえうるかぎり
しりもせで



おろかならずや
なわもつきみは





構成 辻村 隆



囚女引廻しの図

モデル・櫻井 葉子





ひっ捕えた妖獣



みた処、人間の形はしているが.....





こんな姿にされて

ますます美しくなるのは……

やはりどこかの星から紛れ込んできた

獣の一種に違いない。

モデル・絹川文代



新しい文献研究誌

奇譚クラブ

早秋特大号

1960年 9 月 号

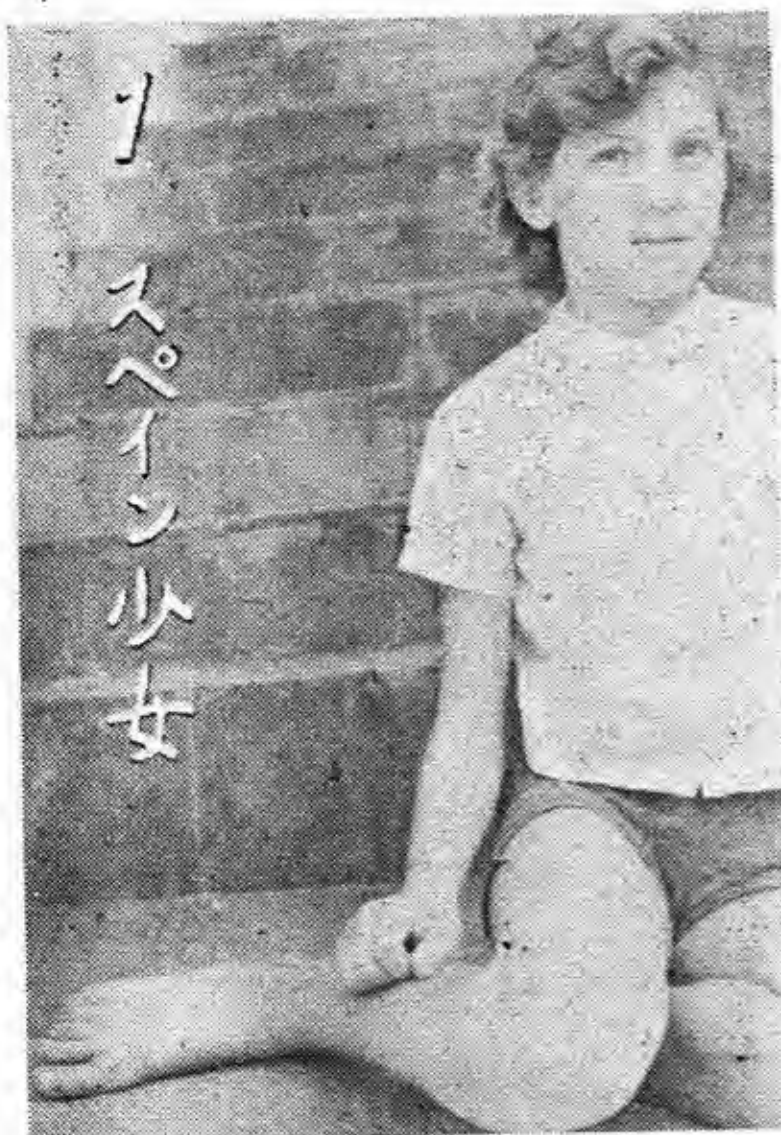
(第十四卷 第十三号 通刊第四百四十五号)



緊縛と表情について

大熊 寿夫

特に手足などの



緊縛写真にとって表情の大切なことは言を待たないところであり
ますが、本誌では最近限定版の第五弾として『緊縛女体の表情アッ
プ』の刊行を企画中とのことを限定版第三弾『緊縛女体グラフ集』
にて知り、まことに時宜に適したものと、鶴首待望する次第です。
今迄も勿論、表情のことをおろそかに考えていたわけではないと
しても、率直に言って矢張りどちらかといえば、アイデアやポーズ
に重点がおかれて、表情はややもすると二の次にされ勝ちだったで
あらうことは自然であり、またやむを得なかったことだとは思いま
す。たしかに、緊縛で先ず問題になるのは、モデルの良しあしとか
アイデア（構図）それから全体としての姿態、ポーズでありましょ
う。けれども、それと同時に、表情ということも、またゆるがせに
できないことであることは確かでしょう。

表情とは、ある心の状態なり感情なりを形に現わすということだ

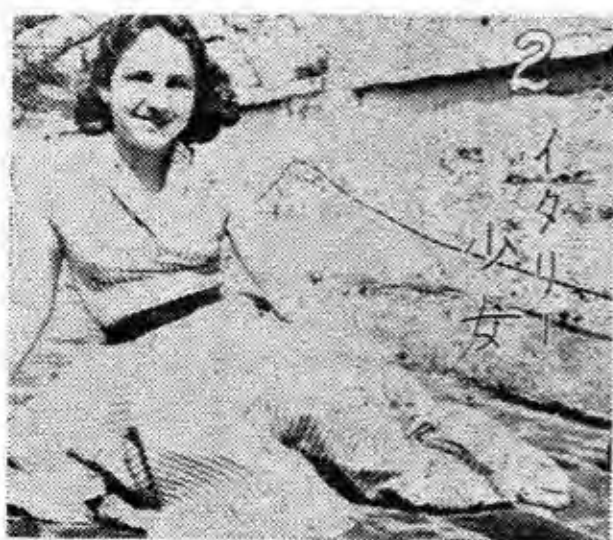
あるとすれば、それは主として全身の姿態と、それから特に顔、手足など身体の各部分によって表現されることになると思います。

そして、この表情のもとになる感情としては、かなしみ、くるしみ、あきらめ、恍惚、等々いろいろありましようが、この様々の感情が、緊縛モデル嬢の姿態、顔、手、足等を通じて如何に表現されるかということに焦点がある筈です。

先ず姿態についていうと、本誌の写真には大抵、題名がついているので、その題名を少し長くりますが一寸拾ってみますと、例えば心情に関係あるものだけに限っても観念、放心、含羞、愉悦、はかなきもだえ、美貌の憤悶、寂々たる喜悦、忍従の哀婉、柔肌の喘ぎ、歎泣の像、嬉戯の拘束、戯虐の反抗、幽艶なる受刑、しずかなる受縄、懇謝の眼差、苦痛への迎聘、哀美抽出、黙悶……等々と、その語彙（ボキャブラリー）の豊かなことには驚嘆する次第ですがモデル嬢たちは、そのような感情なり情態なりを、それぞれ演出に努めるわけで、この点については、私がこれ以上、附け加える必要はないと思います。

ただ強いていえば、最後の出来上った姿だけでなく、それに至るまでの経過を動的に捉えていただきたいと思っています。例えば、いつかの杉美美さんの傑作、「女が縛られるまで（急襲）」のように。

次に、身体の各部分として、顔についていえば、顔の表情は勿論、目と口の動きが中心になるとしてそれ以

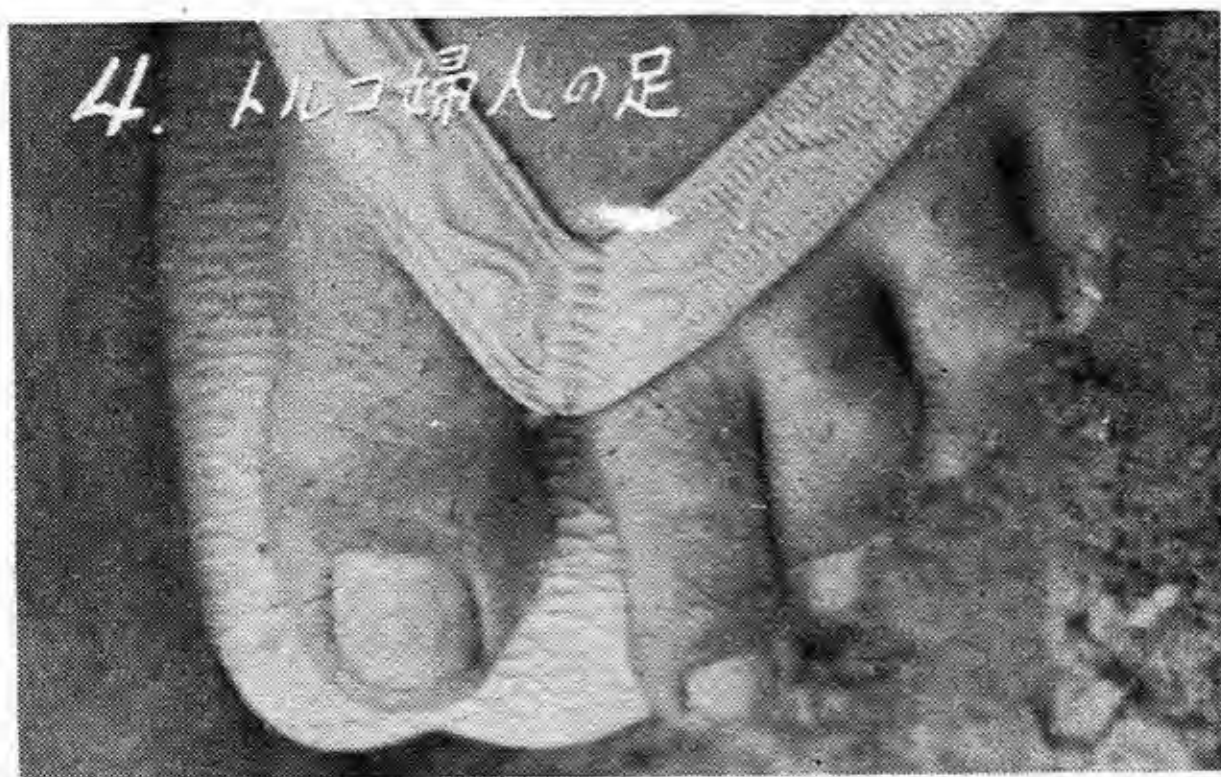


外に鼻の表情をいろいろ追求していたきたいと思います。勿論、鼻の表情といっても、鼻をうごめかすとか、鼻が高いとか、へし折るとか比喩的なことは別として、実際には鼻を手で抑えるとか、クリップで挟むとかして表情を出すのでしょうか、こ

れは、三四、一発行の臨時増刊『悦特第一集』の口絵「スポーツ・ライト」「華鼻受難」によって十分試験に合格済みです。前者ではただ絹川さんの鼻を指で下側から一寸押しただけのものですが、これが何んと実際には、すこぶる情緒のある写真になり、このように一寸した工夫で、これ程効果をあげ、新しい分野を拓くことも出来るものかと、あらためて驚くとともに、近來の大収穫だったと思っています。「華鼻受難」も嫌味のない面白いものが出来ました。この種のもものは兎角グロになったり、そこまでゆかなくとも、少くとも嫌味を伴い勝ちなものではないかと想像しますが、両者ともあつ

さりとした美しいものに出来上ったのは、作成者の手腕によることもさることながら、モデルの絹川さんの美貌によることが多いと思います。

この頃、絹川さん大塚さんなど、なかなか顔の表情が豊かになってきて、殊に最近刊行の『女体緊縛グラフ集』における絹川さんの後手にねじ上げられて、猿ぐつわ、胸に三巻き程されて乳房は盛り上げて息づき、顔はやや仰向けに、目はかすかに半眼をみ開いて恍惚とした表情などは、何回見直しても見飽きない至高の表情美として讃辞をおしみません。絹川さんも最近では、受縄のエクスタシーにひたるようになったのではありますまいか。『真紅の自画像』のつづきでも、絹川さ



んの緊縛に関する御感想が知りたいものです。

第三に乳房やヘソのこと。乳房は表情といってよいかもしれませんが、はだけた胸元からはみ出す乳房の風情は、あぶな絵式の美しさがありましようし、また、括られてくびれた乳房のあやしい息づかいも一つの表情といえましよう。乳首をアップで鮮明にとってみるのもよいでしょう。愛するものについては、その身体の隅々まで知りたくなるのは、ファンとしての人情故、モデル嬢の身体の各部分をアップで出されることは、それ自身、読者を十分喜ばせるに足るものです。(従って、乳房に限らず手でも足でもどの部分でも、必ず、モデル嬢の名を明記されるよう、特にお願いしておきます) 乳房は、昔の浅草のオッパイ小僧のように徒らに大きいだけでは、却って興ざめのものかも知れません。なお、乳房を男の手で抑えてみる(もし許されるなら) 或はモデル自身で乳房へ手をやってもらうなど、表情的に工夫の余地もありましよう。

ヘソは、光線の使いによっては、アップでも面白いものができるかも知れません。もっとも緊縛との関連を、どうつけますか。第四に手の表情。これは従来も時折手がけられて来たようです。同じ手といっても、その瞬間の感情や状況によって、例えば捕われた時、両手をねじ上げられた時、両手首を括られつつある瞬間、括られた手首をゆるめようともがいている時、更に紐をはずそうとして手で操作している時、あきらめて観念してしまった時、鉛筆でも指と指の間へ挟まれて責められている時など、その他、可成りの変化もあるでしょう。手指が虚空を掴んだり、しっかり握りしめたり紐をまさぐったり、ただらりとした最近の絹川さんの『無言の表情』は手によって心の動きを示そうとした試みの一つでありましよう。

手を撮るときは（手に限らず足でもそうですが）必ずアップで撮って下さい。全体の一部を引伸ししたのでは、先ず十中八、九は失敗です。何故かという、全体を撮る時は殆ど顔にピントを合せるので、たとえ絞って焦点深度を深くしても、アップで手や足そのものを狙ったようには鮮明には撮れないこと。全身写真のうちの一部である小さな部分を引伸しても鮮明度に欠けること。シャッター・チャンスは顔や姿態を主として狙うから手や足の表情まで良い時に写されることは、むしろ例外であること。従って、要するにつけたりや二の次のものになってしまうこと、によるものです。よって部分を狙われるからには、あくまでもそれだけをアップで追求して下さい。手でも足でも、指は勿論のこと、爪の形まで鮮明に写らなくては意味がありません。

第五に、足の表情。これは今迄、結果的にいうと一番おろそかにされて来たところのもので、これまた己むを得ないところではあります。しかし、他誌はいざ知らず、本誌においては、矢張りここまで気を配っていただきたいと思います。それで、少し詳しく書いてみましょう。

足の表情といっても、ただ足さえ写っていればよいという性質のものでは勿論ありません。女性のただの素足位ならば、一年のうち半分以上も、街のどこにも氾濫しているものです。私達が本誌に期待するところのものは、これらの街では容易に楽しめないところのもの、すなわち、足の指や爪の恰好や、更にその表情までもがアップで鮮明に写されていることにあります。街で足の指や爪を仔細に鑑賞するためには、素足の綺麗な女性の傍に近寄って、更にその足許にしゃがみ込みでもしなければ観察出来ませんが、このようなこ



とは實際上、不可能でしょう。仮りに万一出来たとしても、表情の動きにまで接することは先ず絶無に近いでしょう。嘗て二、三の雑誌で、少年の頃、家の女中の足許にしゃがみ込んで足の爪を観察したという人々の手記を三、四編見たことがあり、また、瀬戸内海の船旅で三等席だと雑魚寝で、女性の素足が目の前至近距離に鑑賞出来るため、いつも必らず三等にしているという紳士の話しも読んだことがあります。この

のような場合は滅多に恵まれるものではありません。

それで、いやしくも本誌の貴重な誌面を飾るためには、仲々普段観察出来ないものを載せていただきたく、それでこそ、求めて容易に得られない芸術品が、本誌によって始めて得られる喜びに読者



をさそうことが出来る次第です。多寡が足かというなかれ。従来の奇クを一寸のぞいても、専ら足部をテーマにしたものだけでも「女の足の蠱惑」「拇指反った素足の美」「足部憧憬の悲願」「足舐め小説マゾヒストの会」「女の足の魅力」「若い女の足に狂う」「素足狂崇者の手記」「縄と足の遍歴」「素足礼賛」「女優の素足」「春の女の素足」「女性の素足礼讃」等々両手を使っても数え切れない程あるし、更に記事の中で部分的に足を取扱ったものについては、今ここに一々挙げる煩わしさを避けますが、要するに足といっておろそかにすることは出来ません。記事に現れるものは畢竟、氷山のわずか一角に過ぎないからです。そして、上記の記事をよく読むと足部愛好者のほとんど一致した好みは、足の指と爪のただずまいと

足指の表情にあるようです。そして、これをフィルムにしっかりと収めてしまいうには、写す角度と距離が重要になって来ます。立ったり腰かけたりしている女性の足を、普通の写し方、すなわち斜め前上方から撮ったのでは殆んど価値がありません。どうしても、足の指と爪の面と直角の方向から、而も接写しなくては、指や爪の恰好は正確には分りません。ピントは拇指の爪のフチか半月形に合わせるのです。以上が基本的の考え方。次に、表情としては、例えば緊縛を受ける苦悶の際には足指が蹠の方に向ってくの字型に強く折り曲げられるでしょうし、また、くすぐられる時には、おそらく指が甲の方に向って反りかえる、その場合、足指全部の場合もあるでしょう。拇指のみ反りかえて、あとの四指は蹠の方に曲げられることもありましょう。後の方が風情としてはよいかも知れません。映画「カラマゾフの兄弟」では、マリア・シエルがベッドに大の字に縛りつけられて、足の裏を男に羽根で擦られる場面があり、これはスチールにも新聞広告にも大きく載ったものですが、残念ながら両足の裏しか見えません。一体に外国の女優さんは、顔や手だけでなく足の指の表情まで驚く程豊かであることは、映画雑誌などからでも知ることが出来ます。日本人でも、足の拇指のつけ根のところに愛らしいえくぼのようなものが出来る人もあり（私はある貴婦人の素足の写真をプロクサー・レンズをつけて接写させてもらい、これを引伸してみてはじめてえくぼを発見した。肉眼では気が付かなかったけれども）、接写して拡大してみると、そのなめらかな甲の中に血管がひそやかに走っていたり、爪にはくつきりと半月形が浮んでいたたり五本の指の根元には可愛らしい毛が生えているのさえはつきり見えたり、肉眼では分らなかった造化の美を発見して、思わず喜びの声

をあげることもあるわけです。(雑誌に印刷した場合、果してそこ
まで出るかの懸念はあるとしても、少くともその位の心組みで……)

愛好者というものは、婦人雑誌の浴衣写真の中にたまたま一つで
も気に入った足を見出せば(浴衣写真というものは、角度の関係か
らいて、大抵ダメなものです。ただ、まれに横座りや、立姿でも
一寸片足をあげて爪先立ったため、小さいながら鑑賞に値するもの
が出来る)、その写真一枚のために、いな、スペースからいえばわ
ずか一センチか一センチ半平方位の足部のために、一冊の婦人雑誌
なり映画雑誌なりぐるみを敢えて買って恨まないものなのです。パ
カパカしいとわらうなかれ。たしかに、局外者、縁なき人々、ある
いは未だ開眼されざる人からみれば、正にバカバカしいに相違あり
ません。しかし、愛好者というものは本来的にそういうものなので
す。このことは特に銘記していただきたいと思ひます。

従来の本誌の写真は、おそらく何百枚か、或はそれ以上にのぼる
でしょうが、さて、私が以上に縷述した『足』という観点からみま
すと、折角横座りのいい姿勢になつていても足の拇指が隠れていた
り(殊にベッドの場合は足の甲の半分は埋没してしまう)隠れてい
なくても角度が斜めだったり、角度はうまく直角でもピントがはず
れていたり、小さ過ぎたり、甚だしいのはわざわざ心なくも足先を
カットしてしまつたり、これでは愛好者は切齒しなくてはなりませ
ん。兎に角、本誌の今までの何百枚かの写真のうちで、足として鑑
賞に堪えるものは、三十三年八月号の口絵『ニューモデルの緊縛模
様』の益田房子さんの右足(これも全身なので足部はわずか一セン
チ余り、ピントも足に合してなかったため鮮明でないけれども、角
度が先ずよかったので、益田さんの美しい足の拇指と爪が辛うじて

鑑賞出来る)一葉のみというに至っては、全く惜しいというもおろ
かな話でありましょう。(『悦特第五集』の「懣辱を包む麗姿」左
下の益田さんの右足も写角は申し分ないのですが残念ながら小さ
さる)

足を追求された写真も、二十枚近くあつたとは記憶していますが
折角の試みも写角の関係から、ただ足らしきものが写っているとい
うのにすぎなかつたり、または全身
の一部を引伸した
ためボヤけていた
り、足首の縄のみ
ゴテゴテ多すぎた
り、或いは何年か
前の足舐めポーズ
で男女ともに全身
を入れてしまった
ためグロになつて
しまつたり、これ
では本誌の品位を
傷つけるおそれさ
えありません。
それで私にいわせ
ると、本誌一般の
緊縛写真には感服
するものが多いし



クイタリ
貴婦人の足



(手のアップも大体同感) それから前にも書いたとおり、鼻のアイデアには公く敬服しましたけれども、足部に関する限りほとんど満足出来ません。

それで、結論としてお願いしたいことは、一つは全身写真を撮られるに際しても、出来れば足部にまで(特に角度)気を配っていたきたい。へ(註) V(そしてこれは目的のポーズを何ら傷つけることなしに、全く簡単に出来ると思うのですが)二つには、足の美を追求される際には出来るだけ接写で鮮明に細部のデテールを出して

いただきたい。そして、

このように、一般人の気づかないところにまで神経を行届かせて、その中から思いがけない美を発見し、愛好者を喜ばせるとともに、眠った人々をも開眼させてゆくことが本誌がますます他を引き離す所以でもあるし、又マニヤの一人としてこのことを熱望する次第です。

へ註V気を配るといっても別に大したことではなく、参考写真の女性の横座り写真の足の角度(①

②③⑫⑬⑭)にして、拇指が出来るだけよく見えるようにすること、簡単な簡単、他愛もないバカみたいなことですが、この他愛のないことによって、愛好者にとっては千金の重みがつくのですから、奇妙なものです。私の使ったモデルは皆素人なので、足指の表情までつけてもらうわけにはゆきませんでした。

(具体例)

以上いろいろ書きましたが、私としても書きつ放しでは無責任のような気がしますので具体例を記すことにします。要するに新奇にいろいろ考案されると共に、過去の実例をみられることが一番手っ取り早いと思うからです。これは既刊の奇クの挿絵写真のなかから私が気づいたものを一覧表としました。考えてみれば、まことに釈迦に説法で無意味なことではありますが、更に考えると、一葉の絵でも見る人によって見方はいろいろなので、読者の一人として、こういうところに興味を持ったということを申し上げるのも全く無意味ではないと思います。配列は順序不同ですが悪しからず。

全身

三四、四特大号「夜光島」(二八九頁)但し男の顔は除く。◎「調教師」(二六五頁)エビ責め、これに類したものは出来ないか。エビ責めにはいろいろ変型があるようですが、何んといっても正規なものに止めをさします。パンツか腰巻をはかすれば正規のエビ責めも十分公開可能ではありませんか。私もやってみました、中々いい写真がとれました。但し顔と足首をくつつけることはムリですがその必要は何らありません。「牛乳風呂の饗宴」(二二五頁)全身

但し男には帽子をかぶせて顔をかくす。右手の女は省く。「責め衣」(一七八頁一八〇頁)男の顔を除く。「悪魔の遊戯」(一五五頁)男の顔は除く。

三〇、三特大号「押えつけ」ハ伊吹V(口絵)「川柳アイデア十態」ハワン公はベッドの下でおあずけしV(目次裏)男の顔は除く。

三〇、二特大号⑥「強盗に入られたときのこと」(二三五頁)モデルさん総動員で。但し配置をもう少し考える。

二八、九「二女連縛」(口絵)非常に美しい。この種のを、益田、絹川両嬢に。

二八、五「荒縄による緊縛感のスポット」(口絵)何れも秀作、但し九葉目のは足先まで入れてもらいたかった。

二八、四「妓の影」(四九頁)

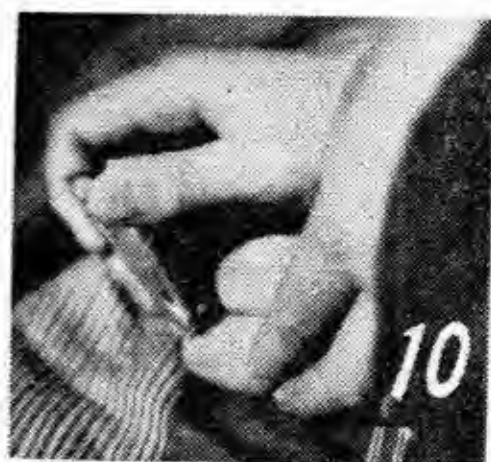
二八、二「変の字問答」(五七頁)

二七、七「女劔戟王健在なり」(一四九頁)男は頬冠りをさす。「女天下時代」(口絵)男は向うを向かす。

二七、九「紐と肌」(一〇九頁右下)

二七、八「悦虐の記録」(一九〇頁)「習作十五態」(口絵)折込二葉のうち前葉の中下

臨時増刊号 S特第三集「地獄の無法地帯」(一〇二頁)吊しは難しいかも知れないが、瞬間だけなら可能ではないか。そして乳房



と顔のみ撮る。このようなとき足指はどうなるか、それも撮ってみる。

三三、二「姉妹先生の惨虐な責め」(三七頁)連縛二人の全身。「歌姫誘拐」(口絵)女性の上半身、左右の男の顔は除く。

二八、四「後手と高手小手による緊縛美の考察」(写真十葉)何れも美しく、秀作。

三三、九「お座敷シネプロ始末記」(九七頁)花坂さんがよいであらう。

臨時増刊号 悦特第一集「縛られた妻以前」(一六九頁)の絵について男の手だけを入れる。体は入れない。

三三、一二「水野十郎左衛門」(一三七頁)縛ってさらわれるところ。男の顔は入れない。

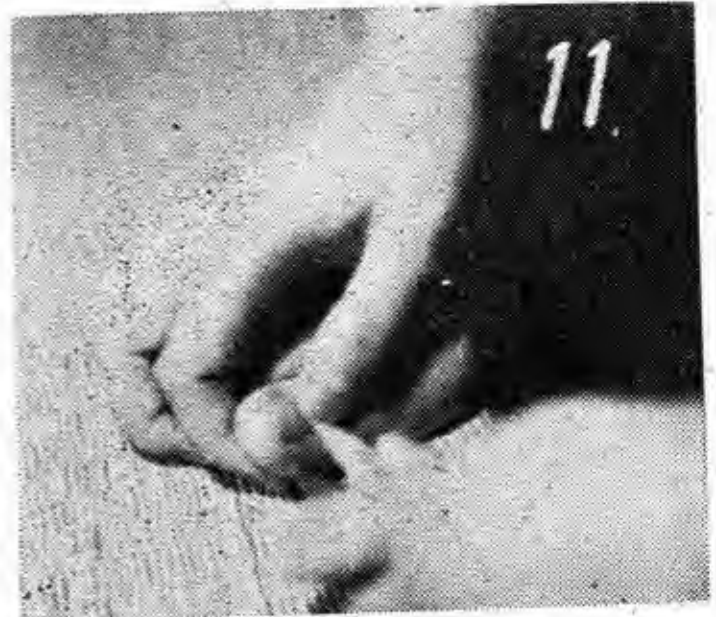
なお、女の縛られるまでの過程の組写真。寝そべって身を投げ出し、いてる姿で足を押さえられて足鎖をハメられつつある姿、(男は手のみ)など。

顔

臨時増刊 S特第三集「執念の賛」ハ四馬孝V顔のみ、男は入れない。「美貌の誘惑」ハ四馬孝V顔のみ、鼻にポイントを置く。「楽しい期待」ハ四馬孝V顔のみ。

臨時増刊 悦特第四集「流浪八年」(一五九頁)顔のみ。

三一、六「美貌の屈辱」ハ四馬孝V



三〇、二特大号「鼻つまみ」△伊吹▽

二九、八「三度女性の鼻について」(二一九頁)以下の三葉は何れも良くない例、殊に二葉目は醜悪。

二八、五「縛られた妻以前」(二三三頁)これを女性同志で行う。よって顔もそのまま入れる。

臨時増刊 S特第三集

「地獄の無法地帯」(一一四

頁)顔の部分アップ。乳房アップ。或は両者を入れる。

臨時増刊 悦特第二集「美囚第十四号」(口絵)にあるような顔の諸表情。

三四、二「魔教團」(一二〇頁)(一一六頁)顔の部分。「妖婦の生贄」(一〇五頁)顔に水をかけられているところ。

三三、六「やくざしがらみ草紙」(二四頁)顔の部分△花坂さん▽縛者の手は入れる。◎「革製縫ぐるみ」△四馬▽顔と足、出来なければ足のみ。実際にこのような恰好可能か。

臨時増刊 S特第三集「スポット・ライト」△華鼻受難△△絹川▽共に秀作。

手

三五、六「声なき表情」△絹川▽「蠢く蒼い群」(五七頁)三人

の手のみ。——その他この事例多し——

足

臨時増刊 悦特第五集「縛恋」(一八一頁)足の部分(以下、足とは足首以下の足部を謂う。脚線は通常含まない)

臨時増刊 悦特第四集「拘束美態特選集」(口絵写真)第一頁左上図の絹川さんの左足の表情アップ。次の「今昔競艶」左上図の絹川さんの左足の表情アップ

三一、一〇「黒女皇」(一四二頁)足の部分のみ。男の顔は絶対に入れないこと。

三一、七「梶井君の恋」(七三頁)女性の足部を入れる。一寸難しいかもしれないが、男の顔は入れないで出来れば脚線も入れる。

三〇、一〇特大号「あるマゾヒストの手帖から」(一二三頁)女性の足と男の手のみを入れる。「女性の下着について」(四六頁)両足とも写す。これは和服の方がよい。(四四頁)両者とも表情すこぶるよし。「悪魔」(三〇頁)男の顔は入れない。或は男のハナと舌を入れてあとカット。

三四、十一「被虐の一夜」(一〇九頁)脚線も入れる。但し男の顔は除く。「特高拷問史」(六九頁)但し、これを足の爪のよく見える角度から写す。

三〇、五特大号「悪魔」(一八七頁)男のハナと口のみ入れて後カット。

三四、十二「真紅の腰巻」△絹川▽中上及び中下の足部を左上から接写。「夕ざれの下田」△滝れい子▽足の部分のみ。男の顔は除く。

三〇、四 特大号「調教師」(二五四、二五五頁) 女性は全身、男はハナと口のみ。「牛乳風呂の饗宴」(二二九頁) 女性は大股から全部入れる。男はハナと、口だけ辛うじて入れること。

三〇、三 特大号「ヴィナスの重石」(二一五頁) 左足ヒザ以下男は髪の毛のみ。足指にピンとを正しく合すこと。都合により女性には全身でもよい。◎「ボクの責め方」(一〇一頁) 手足首を十文字に縛った部分。この手足のみ全部入れてアップで正確にとる。但し実際にこういうポーズが可能かどうか疑問。

三〇、二 特大号「夜光島」(二九七頁) 両者の下半身。◎「外国雑誌にみるフェティシズム」右上、ストッキングは取る。男は除いて足のみ大きく、足の爪の形までよく分るように。◎「川柳マニア十態」ハのぞく目に、女の足はグツとのび、男の手のみ入れる。フスマにかけた手。

二九、五「土蔵」ハ滝れい子Vこの右足の部分を素足で行う。

二九、六「孤児院の折檻」(一三九頁)

二九、三「半吊り二態」(口絵) 下の分の下半身。但し、もう少し写角を右上方から撮る。

二九、六「美しい暴君」(八八頁) 男は手とハナの穴のみ。目の方までは絶対に入れない。

二八、二「燐光」(七六頁) そのまま足指にウンと力を入れてもらう。この爪がよく見える角度から。

二八、一「少年の恋」(一三九頁) これは女性だけに限る。三人以上でもよい。

限定版『女体緊縛グラフィック集』◎(一八頁) 手首から足先までを入れる。(一九頁下) 手の表情、足の表情それぞれのアップ。いろいろ

ろの角度より。(二〇頁上) 手足それぞれアップ。(二〇頁下) 手足アップ、写角を変えていろいろに撮る。

三三、一二「白い玩具」(四二頁) 顔を足で踏んでいるところ。男の顔は入れない。「バーナナの人々」(三八頁) 足の部分のみ、表情豊かに。

臨時増刊号 S 特第三集「肉体の太鼓」(八九頁) 男の顔はカット。「佳肴一尾」ハ絹川V右頁左上の左足首以下の表情アップ。「厚遇の座席」ハ絹川V左頁中下の右足の表情アップ。

三四、二「妖婦の生贄」(一〇一頁) 足だけ、男の顔は除く。

三三、六「迫りくるスリル」ハ四馬孝V足部。

三三、七「お町の最期」(一二四頁) 足首緊縛の図アップ。

臨時増刊号 悦特第一集「長期刑」(一三二頁) 手の緊縛と足の緊縛の部分アップ。「ニューガールの緊縛模様」ハ益田房子V(口絵) 右頁の右足首以下アップ。

臨増、悦特第四集「憤怒を包む麗姿」ハ益田V

(口絵) 左下図の右足首以下アップ。足の爪を特に鮮明に。

二七、七「女天下時代画集上下」(口絵) 女性ハ両方とも全身でもよい。下の男の顔は見えないように。



◎私のアイデア◎

一、踏み絵（ペディキュアしていない方がよい）

二、足を足の裏の方から握る。従って甲の方に手指が出る。これを甲の方から接写。この場合、足の指をくの字にしたり、反りかえらせた表情もつけてみる。

三、足の甲を押える。或は撫でたり握ったり、若くは拇指をつまむといったぐあいに、いろいろ工夫してみる。

四、モデル全部を輪にして足を投げださせ、この輪になった足首全部を紐で括ってつなぐ。

五、足錠又は足鎖をはめられつつある足首、即ち男の手で正にはめられようとしていてるところから完全にはめられてしまう迄の連続組写真。足を投げ出して、その両足首に鎖をはめられつつある状態。或は片足は男の手に握られ、もう片方にはめられつつあるなどいろいろあるであろう。いずれの場合も足指、足の爪がよく分るように。

六、足の爪を切っているところの足部アップ。これは必ずしも緊縛と関係ないかもしれないが、足鎖をつけたままで足の爪を切らせてはどうか、足の爪を切る女囚のあわれさを現わす。

（追記） 順序不同、分類なし

臨増、悦特第一集「燐光」（一八〇頁）男の顔はカット。「濡れる朱唇」△四馬▽男の顔はカット。

三四、九「演技の表情」（口絵）女性の表情八葉。

三四、七「焼アイロン」△北原▽勿論、上の女の顔はカット。

二七、一〇「責め場面插画集」△喜多玲子構成▽第一頁下図及び

第三頁上図（スダレとウチワのあるもの）「切支丹迫害史画集」女囚二人斬首の図。

臨増、悦特第二集「マダム紅鶴」（一五〇頁）「くすぐられるよるこび」（八〇頁）女の顔二つは入れない。「水道責め」△四馬▽男の顔カット。「喰込む縄」△四馬▽

臨増、S特第四集「執念の賛」（一六四頁）「金髪と紅」（一四六頁）男の顔カット。「楽しい期待」△四馬▽

三四、一一◎「被虐の一夜」（一〇八頁）子供はムリであろうから大人を使う外ないが、顔は入れないで向うを向かす。（幻想的なもの右上の手も大きく入れる。「同」（一〇六頁）左足指にもっと力を入れさせ、右上方から撮ってみる。そうすると女の足が強調出来よう。「特高拷問史」（六九頁）足のみ、写角を考慮。

三三、一「女性の素足礼讃」（九〇頁）写真参照。



三五、六「雨の夜の男」

（一八四頁）そのまま「誘拐令嬢の緊縛スタイルについて」（一七〇頁）「特高拷問史」（一六六頁一六七頁）◎「マソヒズム百景」（一四二頁）この男のかわりに何か面白いものはないであろうか。コケシ？「女奴隷の烙印」△滝れい子▽三五、二「N街の朱い室」（一四二頁）男カット。



「女人旅情」(一二七頁)

右の女の足も入れること。

男は除く。「同」(一二二頁)

これは女も男も両方とも入れる。ただし男は目だけ出す。強盗侵入の図。

三三、六「赤いベチコート」(一二三頁) 犬の足を

舐めているが、実際は不可能か？ 何か他に工夫の余地はないだろうか？ 「運命の少女」(一二五頁) 男カット「同」(一二〇頁) 海老責め「やくざしがらみ草紙」(二四頁) 女の顔は

カット。

二八、八「片耳伝奇」(二五一頁) 和服で思いきりはだけさせる。「同」(一四七頁) 「苦悶する裸像」(五七頁) 勿論このように幻想的には撮れないが、きれいな足のモデルと下駄の組合せ。工夫の余地はないか。

二八、七「片耳伝奇」(一四三頁) うんと足をはだけさす。男はカット。「らぶ・すれいぶ」(一二三頁) 手前の男は真黒にする。

「挿絵に現れた縛り絵」(口絵) 四頁左上、お宮、四頁左下、男の顔はカット。

三一、六「明治と昭和の絵くらべ論議」(三八頁四〇頁) 強盗侵入の図。強盗の顔は入れずに感じだけ出すこと。

三三、七「魔教團」(二五〇頁) オンパレード、これは円陣を作らせたら如何。「一本足の穿衣」八四馬V女性の顔の部分。

二八、九「淫火」(一三四頁) 横の分も女性とする。縛り手の顔はカット。「責めの自画像」(一〇〇頁) このように優美な形が実際に出来るなら。

二八、一〇◎「甘美なるアリスの降伏」(一八三頁) 本文にも書いたが益田さん絹川さんがよい。写真でどの程度、美しいものが出るか分らないが、試してみる値打ちはあるのではないか。

二八、一一「現代文学に現れた責め」(一二七頁) 実際にこのように美しい姿が出来るものなら。「拷問部屋」八都築峯子V六葉ともいずれも非常によい。この六葉のようなものが出来ないか。何れも男の顔カット。尚、特に六葉目はよい。後方の手を捻じ上げられた女性の姿は真に迫る。このような写真が出来れば最上。「女が縛られるまで」(写真) 八杉Vアンコールする価値十分。

三三、一二「白い玩具」(四二頁) 男の腹の辺から右全部、即ちこの図の右半分。男の顔は女の足にかくれて見えないように工夫する。「バーナナの人々」(三三頁) 男は頬冠りしたら如何。「蠟涙」(三二頁)

臨増、S特第三集「猿ぐつわと煙草責め」

臨増、悦特第五集「愛恋の日に」(一六〇頁) このようなポーズが出来たら。「夕暮れの窓辺にて」(七九頁) 左足を全部はだけさす。「一揆の花」(六〇頁)

三〇、一一◎「ボクの責め方」(三九頁) ひざ頭から足先まで全部入れる。そして足先は出来るだけ下を向け足の甲や指をカメラに對し直角にする。要するに十本の足指、爪が一番よくはつきりと写る角度で。なお宝塚氏の説明によるとリボンは大して効果がなかった由。「賭場の獲物」八滝V(左頁) その儘。「漂う女」八都築V

映画通信

男性責めシーンを拾う

菅 良 太

男性責めのシーンが強く印象に残っている映画を拾ってみると、僕の脳裏には、あ

ざやかにイタリヤ映画「ヘロデ大王」の拷問場面がよみがえってくる。おそらく同好の諸

氏にも異論のない「庄巻」と信ずるが、劇中、武官が緋色の褌のような物一つで拷問台に仰臥し、大の字状に鎖で固定されて責められる。すでに鞭をいくつか受けて胸や腕に傷が生々しく、失神状態になっているところに水を浴びせられ、灼熱の火箸をおしあてられる。激しい呻きとともに逞ましい上半身がのけぞるさまが美事であった。他

(下図)そのまま「みのむし」へ畔亭数久V足部のみ。

三〇、一〇「七化け小僧出現」(一五一、一五〇頁)そのまま、

「女工哀史以前」(八〇頁)「女性の下着について」(四六、四四頁)足の表情「悪癖」(三〇頁)男の顔カット。

二七、一二「セックスの記憶」(一六一、一五九頁)「夕映え燕の教訓」(一五一頁)◎「指の秘密」(五七頁)男或は女の指を大きくボケさせる。女の足にピントを合せる。うまくゆくと面白い。

「奴隷妻」(三八、三五頁)海老その他。

二八、三「色情の価値」(一〇三頁)

二八、五「縛られた妻以前」(一三三頁)この足も女性でやる。

三四、五「魔教團」(一五八頁)相手が犬はムリであろうが人でもなく何か工夫出来ないか。

三四、二「馬化白書の作家へ」(二二八頁)これを人ではなく何かを挟む。要研究。「妖婦の生贄」(二〇一頁)男のハナのみ。

三三、二「歌姫誘拐」八四馬V男の顔は入れずに麻酔の針をさすところ。

二八、四「妓の影」(四九頁)

二九、一「犯された女」(四六頁)男の顔はカット。

二九、五◎「二百字讃歌」(八四頁)(九〇頁)足の部分のみ。

「土蔵」八滝V(右図)これを素足でやる。

二九、四「収容所脱出」(一九五頁)「これでいいの」(写真)これを素足でやってみる。

二九、二「罪ある女」(二〇〇頁)「痴迷」(一三三頁)

二八、一「少年の恋」(一三九頁)この表情がうまく出来たら。全部女性がよい。

二七、九「サド侯爵と殺生関白秀次」(一〇九頁)モンタージュ。

この式でもっとアップ。「足部憧憬の悲願」八絵、竹中英三郎Vモンタージュ。足指がもっと良く見えるように。

二七、八「拇指反つた素足の美」(七三頁)特に大享し。

二九、九 特大号「奇ク随想」(六八頁)一番上の図。

三〇、四 特大号「責め衣」(一八〇頁)

三〇、三 特大号「ヴィナスの重石」(二〇〇、二〇一頁)男の顔カット。女性は全姿。

(以上)

にも巻頭、二人の反逆者の十字架の晒刑シーンがあったりして今一度、観る機会が欲しい映画である。

邦画では一時騒がれた「人間の条件」で二部三部が軍隊の内務班生活の描写で、三時間の上映も短かく感じるほど、息づまるような場面の連続であった。仲代の梶が殴られるシーンだけでも数えきれない程で、赤い兵隊新城の殴られるシーン、小原二等兵が、女郎の客呼びをさせられるシーン急降下、前支え、スリッパを口に押し込まれるシーン等々。さすが、男性責めファンは僕も辟易するほどのサービス(?)に堪能したものだ。一部二部で梶の憲兵隊での吊り責めシーンがあったが、あの吊り方では苦痛がないように思えて疑問を持ったものだった。但し、その前に、木馬のようなものに跨らされて鞭打たれるシーンの方は、絶叫する梶のアップもあって仲々迫力があつた。

この大作をものにした小林正樹監督が、以前に作った収容所もの「壁あつき部屋」の中で、浜田寅彦の兵隊が南方で捕虜となり、拷問をうけるシーンがあつたのが思い出される。空井戸に突き落され土民の侮辱をうける場面など忘れられない。

責め場面ではないが、「正午に銃殺の鐘は鳴る」の銃殺シーンで被処刑者が上半身裸で縛られ、胸に弾を射ち込まれる描写は、かなり生々しいリアルさで、僕の胸底に迫るものがあった。

「熱砂の風雲児」で、アラブ族に捕われた若い中尉が毒グモの私刑にあう場面があるが、上半身の衣服を剥がれ、大の字に杭に縛られて毒グモを胸に這わされるのだが、すぐに息が絶え、少々アツけない感じだが見捨てられないシーンであつた。「剣闘士の叛逆」で、若い武将が捕われて荒馬にひきずられる場面も僅かのカットであつたが印象が強かった。「十戒」の中で若きモーゼが、鎖で縛られてファラオの面前に曳き出される場面は、屈辱感がしみ渡るようで素晴らしい。

「ヴァイキング」でトニーカーチスが潮責に遭う場面や、「暴れ者」でバートランカスターが警察署で、跨木のようなものに縛りつけられて鞭打たれるシーンも仲々捨てがたい好場面だったが、現代のアメリカに、あのような拷問があるのかと驚いたものだ。

邦画で責め場のうまい新東宝のものでは、「憲兵と幽霊」で中山昭二の伍長が逆吊りになるところを俯瞰撮影で見せてくれたが、縛

られて二人の憲兵に竹刀であさえられる処でカットは残念だったし、シャツにズボン、その上、長靴まで着けていたのはイタダキ兼ねた。ずっと以前の「憲兵とバラバラ死美人」での鞭打ちや逆吊りシーンの凄壮な迫力に及ばなかったようだ。

「風雲アジアの女王」での、高島忠夫の中尉が、匪賊の巣窟で受ける鞭打ちは美事で数えたら十二回程、打たれた。高島は若く体もよいので堪能したものだし、その後で焼け火箸で眼を潰されるシーンも、カタズをのんで見守ったものだった。「女間諜曉の決戦」で、天地茂の中尉が憲兵隊で拷問されるシーンがあつたらしいが見逃した。その他、テレビでも、男性責めの場面はあるにはあるのだが、テレビの責め場には、胸に訴える描写が殆んどないので物足りない。

外国映画では、古代劇で、ギリシャ、ローマを扱ったものには、必らずといってよいほど責めシーンが観られる。その次にはアパッチか討伐隊を主題にしたものが、僕の目当てのものである。それに比して、邦画では殆んどが女性縛りで、男性責めのものが少いのは何といっても残念である。

随 想

悦虐は卑猥に通じない

松 井 籟 子



先日たま／＼久し振りに一緒に一杯のもうかと思つて知人に電話すると、挨拶よりもさきに言われたのが。

「週刊スリラーよみましたか？」

ということだった。

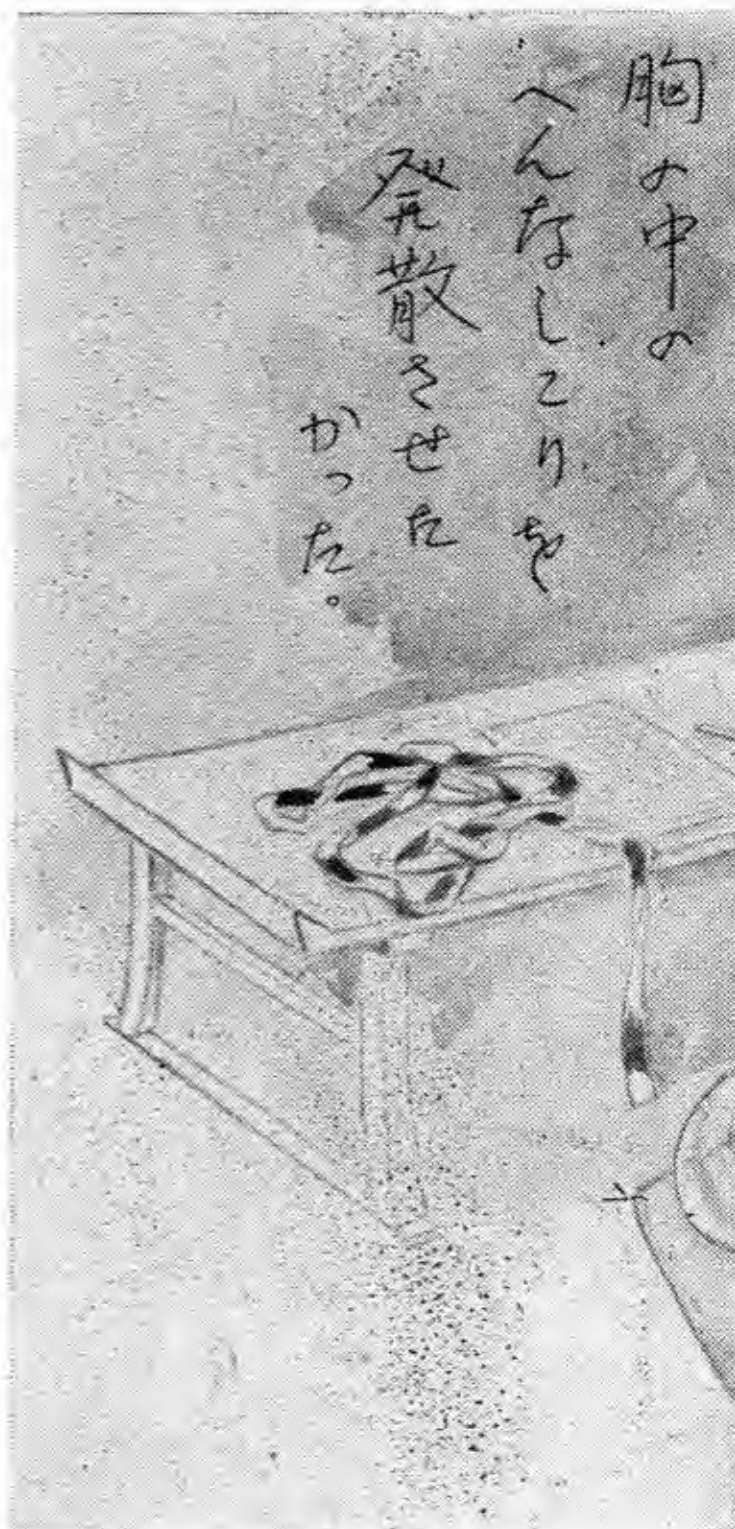
幸か不幸か、その時、私は読んでいなかった。すると、それと前後して、同じ言葉を四人の人からきかされた。

中の一人が、わざ／＼その週刊誌をみせてもくれた。

私は何ともいえない恥かしさで、忿懣と困惑が胸一杯にひろがって、重く胸をとぎすのを感じた。

誰にぶつけていいのかわからない憤りだった。

勿論、それを書いた人に一番多くぶつけ



られる憤りではあるのだが、何かしらん、自分にはねかえってくる憤りであるような気がした。

つまりは自分自身の中にある。アブノーマルな希求が癪にさわったのだ。

私は悦虐ということが、そのまま劣情意識につながるとはどうしても思えない。だから変態趣味というような呼び方で、猥褻なものと同一視されることに憤りを感じるのだが、私がいくら肩をいからせてそれを説いても、一般的にそう見られることが多いのだから、そんな希求をもつ自分が癪にさわってくるの

だ。そんなものがなかったら、どんなにさばさばするだろう。

しかし、それは人を恋する気持と同じで、では神様が、そういう気持をなくしてやろうと仰言ったら、ちよっと待ってくれと言いたくなるようなものだ。

アブノーマルな希求は私にとって、邪魔っけな感情でありながら、私に害をもたらしていない。

対人的、或いは社会的にも、私は悦虐ということに美しさを感じ、猥褻とつながらないことを力説してきた。

一流作家の書いた作品なら、芸術であり、三文作家の書いたものだとも猥褻とみられる偏見と、心の中で戦いながら、長い間いわゆる悦虐小説というものを書いてきた。

その中で私は自分というものとも対決し、又、人間というものを探求してきた。私は終始、真面目な態度で、書きつづけてきたのだ。そして、少くとも、週刊スリラーで紹介された執筆陣の人達をはじめ、本誌へ寄稿する人達は私と同じように真面目な態度で書いていた。

それは、他の低俗雑誌にみられるような、男女の情交を、わざと気をもたせてヤマにして、劣情意識をかきたてるものとは根本的に違っていた。

それなのに週刊誌のとりあげ方は、まるで場末の盛り場の、いかがわしい見世物を紹介するのと同じような印象をおしつけている。

しかし、そう考える人が多いのだろうと思って、その編集者ばかりも責められないのが、実に悲しいことだ。そう考える人が多いということが悲しいのだ。

私は害を流しているとは思えないが。この記事は私に害をする。

息子が一人あると紹介されていたが、大げさな言い方をすれば、その息子の就職に支障をきたすということにもなりかねない。

私は私の悦虐の希求を恥じているわけではないから、子供が素直に理解してくればかくす必要はないのだが、一般の目と同じ目をもってみられないともかぎらないから話したことはない。それほど一般の目というものが、頭から間違ったうけとり方をしていることは、過去何年間にもよく感じた。

たま／＼それを記事としてとりあった週刊誌は、その一般の目の代表のようなものかもしれない。

私はこの頃、怒ることが少なくなった。考えれば考えるほど、何もかも不合理で、それに腹をたてていたら、毎日いらいらしていなければならぬからだ。

だから、すぐに相手の立場を考えて、とび廻る蠅として無視するか、壁としてあきらめるか、忘れてしまいかずることにしている。

その習慣から、悦虐を本当に理解してもらえない忿懣も押し殺してはみたものの、どうにも気持がすっきりしなかった。

しかし、誰に向って、どう発散したらいい

のかわからない。

そんな時、私は、よけい被虐を思う。

私の怒りは、それを精神的にこらえるのにつらすぎて、肉体的にいじめられることを望むようになるらしい。大変飛躍するようだが私の悦虐への希求は、世の中が不合理すぎることにあるのかもしれない。

恋人のある人は、恋人の胸でそれを忘れるだろう。

酒の好きな人は酒におぼれてそれを忘れるだろう。

或いは、パチンコの玉をはじくことで、心を落ちつける人もあるだろう。

私は私が無抵抗な状態にされることで心を落ちつけたいと思うのだ。そうされないとおきらめとか、さとの境地に入れないほど血の気が多いとも云える。

いつもはそれを実行に移すより夢想しているだけで事足りた。

しかし、今度はよっぽど腹が立ったらしい。自分のことを、自分で「らしい」というのはおかしいかもしれないが、人間、自分自身のことさえ充分わからないことだってある。

何にしても、今度という今度、私は紙の上

に書くだけではなく、本当に誰かの手で、私を縛りあげてはしくなったのだ。

もしかしたら、初夏という、解放的な季節感が私を刺戟したのかもしれない。青葉の頃の、空気の中にある毒気にあてられたのかもしれない。

私は誰かの手で、みじめに縛られ、いじめられ、そして、悦びのうめきをあげて、「お前は、やっぱり松井籟子なんだよ。お前の血は、普通の人とは違うんだ。そうだ、変態なんだ。下の下なんだ。何が美しいものか。縛られた女なんて、荷物より醜いものなんだ。苦痛にゆがむ顔に美しさなんかあるもんか。虫けらのような奴。いやらしい女め」と罵倒されてみたくなった。

私が私をいじめてやりたくなったのだから、被虐というより、加虐であるのかもしれない。

誰かの手で縛られて、いじめられることは肉体的被虐であるのだが、精神的には加虐のよろこびであるような、複雑な欲求がむくむくと大きくなった。

では、誰に、どこで……となると、はたと当惑する。

私は縛られてみたいと思う。いじめられた
 と思う。しかし、それがすぐに肉体を許す
 ことにはならないのだ。

私の愛している人が、私をいじめてくれた
 ら、肉体をなげ出して、どんなにされてもか
 まわない。しかし、私は私の愛している人に
 私の欲求を云い出したことがないし、片思い
 のような恋である以上、どうしようもないの
 だ。そのくせ、私の体は私の愛する人だけの
 ものにしておきたいという潔癖さをもってい
 る。

だから、情事という形には絶対入らないと
 いう線で、私を縛っていじめてくれる人はな
 いかと思ったのだ。

それすら誰でもいいというのではない。愛
 情は感じなくても、お互いに好意をもちあえ
 る相手であって欲しいと思うのだ。

こんなことを云うと、なんと自分勝手な我
 ままな女と思うだろう。その勝手さに鼻もち
 ならない感じをうける人もあるだろう。

しかし、女の気持の奥底には、多かれ少か
 れ、こうしたエゴはあるのだから、これも女
 心の一端と思って、辛抱して読んでほしい。

私は古い友達に私の望んでいることを話し

た。

「僕でよかったら……」

と、その人は云った。

無抵抗な状態になるのだから、相手を信用
 しなかったら、たのめない。

「本当に私を縛っていじめるだけで、あなた
 が満足なさるなら……それ以上は何にもしな
 いと約束して下さい……」

と、私は念をおした。

「約束しますよ」

彼は笑って答えた。

「いじめるという言葉の中に、私が厭がるこ
 とをあえてするという意味はふくめないで
 ね」

私は、さらに念をおした。

「大丈夫ですよ。僕は前から一度あなたを縛
 ってみたかったんだから……」

彼は云った。

私は彼の言葉を信用することにした。何し
 る十年近いつきあいである。私がいい年をし
 て、少女のような片想いになやんでいるのも
 知っている。そして、浮気女にみえながら、
 私がその、たった一人の男の為に、体をきれ
 いにしていることも……。十年の友情にかけ

て、それをふみにじる彼ではないと私は思っ
 た。

とに角、私はいじめられたかった。

胸の中の変なしこりを発散させたかった。
 もしかしたら、その片想いさえ、たち切っ
 てしまいたい気持だったともいえる。

そして私は、とうとう、今まで夢にえがい
 ていた情景を、現実に展開させることになっ
 たのだ。

○

彼は、彼がよく行くというアベックホテル
 へつれて行ってくれた。

「シーツを血だらけにしてしまったことがあ
 るんですよ」

彼は言った。

「何故？」

と、きくのを私はやめた。

今までのように、夢の中だけのあそびなら
 「何故？ どうやって？」ときいて、その方
 法を私自身、夢でたのしめばいい。けれど今
 は現実に、私の肉体の上に、加虐の手を求め
 ているのだ。

「同じベッドの上で、彼が他の女を苛めた話
 なんか聞きたくない。」

情事を求めているのではないのに、これも嫉妬というものなのだろうか。

「この家の紐は長いでしょう？」

彼が云った。

大抵、旅館で浴衣につけて出してくれる紐は、普通の腰紐よりは短いものが多い。妙な所で生地を儉約してまうのか、それとも、長いところ／＼して、寝るのに寝にくいせいかもしれない。

それなのに、この旅館の紐は、女の腰紐にしても長めのものだった。

濃い紫色が、肌の色によく合って美しかった。それは、赤や黒とは違った、あそびのムードをもっていた。

私は手をうしろにまわしながら、もう一度念をおした。

「本当に、約束を守ってね」

と――。

普通の人がいいたら随分おかしいことだと思うだろう。

アベックホテルへ入



るというだけでも何かあった時、合意とみなされるのに、自分から抵抗出来ない状態にされることを望み、その上、最後の線を守ってくれという……。すでにそれがノーマルではないといわれるかもしれない。でも私は本当に彼を信じていた。

「そのかわり、どんなにいじめてもいい、痛いめにあわせてもいい」

と、私は云った。

私の手は先ず、後手に縛られた。

「ベッドまでそのまま歩いて行きなさい」

と、彼は云った。

無防備な姿で、縄つきのまま、たとえ、二

尺でも三尺でも歩くということに、私はたまらない恥かしさを感じた。しかし、追われるもののようなみじめさが、ころよかった。

白いシーツの上で、彼は後手に縛った紐の残りを腰の方へぐっとひくと、足首を交叉させて一とまき、からげた。からげた時は、足がのびたままだったから、私はまだ楽な姿勢でうつむきに寝ていられたが、その紐を、ぐっとたぐるように背の上へあげられ、後手に縛った結び目との距離を近付けられると、えびのようにそりかえらざるをえなかった。

私は、ふと狼狽する自分自身を別の目で冷やかにながめた。

しかし、それは精神的に多少痛手でも、肉体的の苦痛は感じなかった。

小さい時から日本舞踊を稽古させられたせいか私の体はわりに無理がきいたし、今でも相当長い距離の水泳が出来る。そんな肉体的な強靱さが助けになっているのかもしれないし、何しろ、彼にしてもはじめて私を縛るのだから、手加減していたのかもしれない。

そのまま彼は私を仰向けになるようにころがした。自分の力では寝返えりも出来なかった。

「くすぐってあげましょうか」

彼が云った。

私は、だまってうなずいた。

しかし、子供の頃、とてもくすぐったく思ってたぐらいの指の動きでは、ちっともくすぐたくなかった。

くすぐり責めというものは、もっと切ない苦しいものだときいていたが、たいしたことないと思った。

しかし、それは序の口だったのだ。彼の指は肉へくいこむように押しつけて要所、要所をくすぐり出した。

「ああ、ああっ！」

と、私は思わず、声にならない声を、のどの奥の方でならした。

「あとがつくと困るでしょう？ 見えない所を



つねってあげよう」

彼はそういうと、二の腕のやわらかい所や、腿の裏側、膝をおりまげると陰になる所を抓った。

息が止るほど痛かった。

彼の手は抓ると思うと、今度は乳の下や脇の下、くすぐりたい所をぐりぐりと押す。

「うう、ああ！」

と、荒い息をして、顔をしかめるのを、

「いい顔……」

と、茶化す。

それに応酬も出来ない。

まるで顔の筋肉を動かす糸が、わきの下や二の腕につながっているように、彼の指の動きで私は顔をしかめ、のぼすことの出来ない体をそりかえらせ、右に左に、自由のきく精一杯にうごめいた。

それは彼に操られる人形というよりは、大きな虫のようだった。醜悪な虫だった。

おかしい恰好に脚をひろげてまげている下半身は、ザリ蟹のようでもあった。くしゃくしゃにゆがめられる顔は、多分、猿みたいだったろう。

人間らしいものといえば、胸の二つの隆起だけ……。

そして私ののは彼の指の動きで、楽器のよう、さまざまの音色をはき出した。

「ああ」だったり「うう」だったり「ウフン」だったり「ヒイー」だったり……。

私は、たしかに陶醉した。

その時だけ何もかも忘れていた。

そのくせ、そうまで体中がさざめいているのかかわらず、やっぱり男と女の普通の愛のあかしは、私のたった一人の人のものにしておきたかった。

私は彼にそれを守ってくれというのが恥しかった。彼には私の体が彼を求めていることをわかっていただろうから……。

けれど、私の心が彼を求めているのだから、私は肉体の欲望に負けるのが厭だった。

彼もまた、私の心を尊重してくれた。

「これ以上あそぶと、僕があぶなくなる」

と、彼は云った。

紐をとりもたらって、汗にぬれた体をぐったりと横たえた。

手首にも足首にも、紐のあとが、くっきりと輪になっていた。

「お風呂の中でもんでごらんさい。あとがうすくなりますよ」

彼は云った。

時間が短かったせい、疲労も感じなかった。

お勘定を払いながら、ホテルの女中さんの

目には、どこかの人妻が、若いつばめとあそびに来たようにみえたらうと思った。そのあそびは肉体を通じ合うあそびの意味だろうが私たちはその意味では清かつたのだ。

しかし、清いと云いきることに、何かしらん、やましさは感じる。誰もこの大人のあそびを解ってくれないだろうから……清くないといわれればそれまでだ。

ただ、自分自身、愛する人への貞操は守ったつもりでいる。普通の男女の交りはしなかったのだから……。子供が捕物ごっこで縛ったり、苛めたりするのと同じことだったのだから……。

そのくせ、妙にやましく思えるのは何故だろう。

私が被虐を望み、彼が加虐を望むことを知りあっている二人にとって、彼に苛められたということが、愛を語り合ったと同じようなことになりはしないかと思うのだ。

しかし、私はたしかに苛められて、たのしかった。

彼も私を苛めてたのしくないことはなかったらう。けれど、私も彼を愛していないし、彼も私を愛していない。二人の間にあるのは

友情に近い好意なのだ。

こんな感情を百万遍、言葉をくりかえして説明しても、普通の人には解らないのではないだろうか。

変態即淫乱とか、悦虐即卑猥と考える人たちに、少しでもアブノーマルな者の心理を解ってもらいたいと思って、打ちあけ話を書いてしまったが、結局は又カに釘といったところだろう。

女流文学者会賞を受賞した「悲田院」の作家、梁雅子が、「道あれど」という第二作を発表した。

娼婦達が、更生しようと努力しながら、世間の目が彼女たちを普通の女としてみないため、その努力がむなしく泡沫のように割れて消えてしまうことを書いているのだが、その中に、アブノーマル雑誌そのもののアブシーンがある。

中でもチエコという売春婦が、更生して女工になり、寮生活をするうちに、男関係の嫉妬から、十人の女工のリンチをうける情景がある。

悦虐作家とよばれる私が、辟易せざるを得

なかったほど、あくどいシーンだ。

芸術という名のもとに、これを書ける人はいいなあと、私は思った。これが本誌に出ていたら、当局が目を光らせるかもしれない。

「……薄い夏ぶとんぐるみチエコの身体を押えつけた。上半身に被せられた夜具の中で叫び、手を動かしている間に、両足がしっかりと縛られたのを知った。やっぱり、やっぱりリンチやりよる。……」

といった描写からはじまって、チエコは猿ぐつわをはめられ、手は胸の上で三尺帯でぐるぐる巻きに縛られ、九人の女によってたかって恥部の毛を焼かれるのである。

書いた人の意図が、真面目な人間探究の、芸術としての高さで書こうとしていることは解るのだが、あまりに露骨で、私は厭悪感をどうすることも出来なかった。

そして考えた。

何故、悦虐に興味を抱くのに、すさまじい女の加虐に厭な感じを受けるのかと……。

本誌や、本誌に似た風俗雑誌のアブ小説をよんで、尿や人糞を扱っているもの以外は、どんな凄惨な責めでも、体を刺戟こそすれ、へどが出そうになったことはないのだが、こ

の「道あれど」のリンチ場面は厭だった。

というのが、そこに美しさのかけらもなかったからだ。

云いかえれば、作者が虐待に対して、ノーマルな感情をもっているからだ。この作者がアブノーマルではないからだ。

往々、小説の中でこういうものを扱うと、その作者はすぐにアブノーマルな性質をもっているように思われる。

しかし、本質的なアブノーマルな作家の書いた虐待場面には、何かしらん、夢のもつ美しさがひそむものだ。つまり、被虐なり加虐なりを体にひびかせて、悦びとするニューアンスが、字と字の間に漂い出すのだ。

ところが、こうしたことに興味の無い人がその事がただけを書くと、容赦なくどぎつくなり、残酷きわまるものが出来上る。

その一番如実なものを、

私はこの作に感じたのだ。

私はやっぱり夢がほしい。美しさがほしい。

同じようなリンチ場

面でも、まだ田村泰次郎の

「肉体の門」の方が美しかった。

谷崎潤一郎や、三島由紀夫がどんなに異常なものを書いても、美しさがある。

醜くゆがんだ老婆の顔を画いた油絵でも美しさがあればこそ芸術とよべるのではないだろうか。

事実を事実のままに書いても、字と字の間から香気が漂い出すことを私は私にはとても出来ないことだけに、他の作家に望んでしま

う。

それにしても、私は書きたい、本当に悦虐小説を……

(おわり)

美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽

大手札型印画紙焼付

略号(はせ)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

特高拷問

△破られたズロースから▽

大手札型印画紙焼付

略号(とく)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

縛り写真撮影

アイディアの見本例

志 高 牧

つれづれなるままに考えてみました。目下の処、頭の中だけの空想事に過ぎません。本誌にふさわしいかどうかは別として、御愛嬌の一つと思召し御判読を賜わらば正しく幸甚。

第1試案 『女兵召募』

恐しく中国めくが、今を去る十後年
前の話なのですから御休心下さい。

『連隊長殿、応募の女兵を連れて参りました。素敵な別嬪で御座ンすよ。部屋に入ってよくありますか』

『よしッ、入れ』

成る程、女兵応募の二人に間違いないが揃いも揃って若く、実は無惨なるかな、捕われの在留邦人女性。終戦直後の満洲某処の情景なのである。一人はお太鼓帯、裾模様の和服、一人は清々しくもワンピースの洋装姿、いずれも衣類髪かたちともに乱れている。

『ウム、仲々の別嬪、東洋鬼にしては珍しき美女共じゃ。逃亡せぬよう荒縄で縛り上げ、先ず医務室で身体検査を受けさせる。それからあとは軍医と万事相談ずくで身共が……』

『何ンでありますか』

『いや、何ンでもない。お前達には全く用のないことだ。早くせんかッ』

日本婦人、腕をしっかりと掴まれて部屋の外に出る。

こちらは中庭と隔てた医務室。打ちしおれて帯を解き着物を脱ぐ和服の女に、一方、シユミーズ一枚になった洋装の女性。女兵召募とは表向き、何んの事はない、同志革命反乱軍の将兵達の玩具になるだけの話であるから情けなくも常軌を逸しているのは致し方なし。

『衛生軍曹殿、これは何んちゅう物品でありますか』

『帯というバンドじゃ』

『では、これは？』

『阿呆！ 赤い腰巻が判らんのか。日婦どもの表徴だッ。下からそんなに引張るものじゃない。そんな事より早よう女達を後手にセンのか。身長何メートルちゅう処から検査をおッ始めるンだ。その前に名前を聴いて置くのをコロッと忘れとった。官姓名と職業、年齢を序でに名乗らせろ！』

『ハイ、名乗らせるでアリマス。そのきものを着たアンタ何ンというの？』



『大和乙女と申し、元踊りの師匠22才』

『……で、こっちの君は？』

『日ノ本洋子、デザイナー23才になります』

『……てな訳でアリマス。日婦兵の尋問を終わりますッ』

斯くて、強制女兵志願？ の日本婦人は、

片や赤い腰巻一枚姿に片や純白のシュミーズ

一枚のまま、荒縄で後手に縛り上げられ、(イ)

「日本洋子 デザイナー 23才になります」

「大和乙女と申し元踊りの師匠 22才」

身長、(ロ)体重、(ハ)視力(ニ)胸部X線撮影を順々

に終ると、再び軍医の前に曳き出され、真白

い胸部を押し拉げての打診、精密検診。――

その優劣差は徒歩行軍に影響するそう。

最後に痔疾の有無を……本来ならば人目を

はばかって診察すべき筈の処を堂々と衛生軍

曹一兵三、へっばこ軍医一の部屋で延々三時

間余に亘って行われたことは何んとしても傷

しい限りではあるまいか。

検診後、むくつけき連隊長が二人の美しい

日本婦人をどのようなにしたかは残念ながら詳

らかではない。

第2試案 『ほんに小憎い料理店』

土台、眼を皿のように開き、二万分の一の

地図をめくってお探しになろうとも、一切ム

ダで御座ンすよというお話な

ンです。

『銀座から新宿の方へ向って

右側の大通りを左に折れ胸突

き坂を下ると、並木に柳が植

わった露路の突当りに、粹な

黒板塀で囲まれたひなびた料

理屋があるのを君は知らない

だろう？』

『仰せの通り一向に知らない

ネ』

『そうだろう。来月から僕が

開店御披露しようとする店舗

なんだもの……』

『じゃ、開店の暁は大いにサ

ービスするンだね。隣近辺ジ

ヤンヤジン吹聴して御ひいき

にしたるぜ』

『処が、そうされちゃ大いに困るんだ。金を払えば誰でもいいとは行かぬ店だね』

綺麗に打水された小径を通過して笹の門をくぐると玄關がある。敷居を跨ぐと、さっぱりした齡の頃なら五十を越したマダムが、ニンワリと顔を出す。

『マダム、頼むよ。今晚は連れがお一人あるんだ』

『アラアラ、まあ……Pさま、Rさま、サアどうぞ……』

で早速トントンと離れの静かな四畳半へ案内されることになっているのだが、機敏なマダムの指図で一行に遅れて廊下を絹ずれの音も艶めかしく、一人の美女が裾を曳いて追うて来るのに気付くだろう。

これぞ正しく絶世の美妓（老婆だったら妖怪物だろうけど……）、それが何んと麻紐一本で後手に縛られているから妙なんだ。一同粹造りの部屋に入る。

『朱実ちゃん、御挨拶しなさい。こんなみじめな恰好ですけど一番綺麗でいい妓（き）なんですよ』

『朱実と申します。どうぞ宜敷しく……』

『……で、初対面の初鼻から縛られた女を紹介

介されたのは開闢以来の事だね。心底から驚嘆申上げた。処で、それじゃ白魚のような三指は突けンじゃないか』

『……ですが、この通り後指で、ふすまも閉めることも出来るンですよ』

垂れ帯の真下ではあるが、きちんと両手首を縛り合わせ縄尻を下げて、どうぞ御随意にと云わんばかりの風情だ。

『どうだ、驚いたろう。マダムの代辞をするようだが、これで多少、横にらみで蟹みたいになるけど、お酌も立派に出来るし、慣れるということは怖ろしいものだ。あれで上手に自分の口先を使って帯揚げ、帯締めから腰紐まで解くンだからネ。だから両手のない黒田節の踊りなぞ朝めし前のへっちゃらさ。わけても一番こたえられんのは、お別れの時の握手さ。大っぴらに女を抱いて、おまけに甘い接吻をして背中の後ろで、しっかりとシエクハンド。ウフフ……』

『成程、よく仕込んだもんだネ。だけど、まさかトイレまでは？』

『……と思うだろう。馬鹿な質問はよし給え。出来る筈がねえじゃないか』

『処で、マダム。この妓の外に、まだその色々美しい女性が……』

『いるんですよ。うちは私以外の女の子という女の子は皆んなあのように後手に縛ってあるンです。』

何故って……株主さまの御命令なんですか。ですから最前仰言いましたおトイレは、雇の婆やが一切致します。お風呂も縛ったままで、どうかすると湯舟の中で泣いたりする妓もいるンです。皆んな揃って戴く御飯の時は、それはそれは賑やかで、せんだっても誰方かが、奇怪ヶ島の女囚だネと感嘆されました。

お写真ですか？ 皆さん大抵、撮らせろなと仰言いますが、極く御ひいき筋以外の方にはお断り申して居りますの。教育上、臭い物には蓋をしなければなりませんもの……』
では、強引にこの店へ行かれますか？ ぼられますよ。高級料理七皿に超特級酒がついておまけに被縛美妓がねんどろに高嶺の花を咲かせて、メめて一席五十万円ではお止めになつた方がよいでしょう。

第3試案 『非売品製作所』

『ようこそお出で下さいました。また御親切にも御紹介を賜り有難う御座いました。私が当製作所の主任兼社長の芝里泰子で御座いま

す。ホホホ……まあ、そんなに何か物をお探しになるような眼付きをなさらずにその椅子にどっかとおかけ下さいまし。

まあ嫌やですネ、そんな……それは薬局かモグリのラバアー、ファクトリーでお尋ねになればよろしいじゃありませんか？

手前共の工房——工場では御座いますから、そのおつもりで——では特別の件のない限り全部、女性の手で運営致して居ります。勿論、看板に掲げました通り非売品ですから、公然とお売りするとは出来ませんが、他家様の庭の花を盗み頂くのと同様に、盗んだり、かっぱらって行かれる分は防ぎようがありませんので、放ったらかしにして居ります。

では、売れない物を作って^{たのし}んでいる工房を御案内致しましょう」

……てな訳で、映画なら主字幕が初めて出る場面となるが非売品が即、非公開という理窟にもなるまいだろうから、一まず彼女の後に従って工房内を巡ることにした。

『こまごました部屋は後廻わしにしまして、

ここが私共の作業室の大部屋で、丁度よござ

んした……只今、皆さん熱心に仕事を娛しん

廊下を絹すれの音も
艶めかしく一人の美女が
裾を曳いて追って来る
のにえづくだろう。



で居られます。広さは三十畳もありましょうか。真ん中に廻り舞台のように一段と高くなって、表と裏とのシキリの背景が約一間と少々、また部屋の都合で四つのグループが同時にお仕事が出来るように仕組んで御座います。

只今、正面になった、つまりこのグループは専ら手芸の方で、皆さん舞台の中央の柱に磔のように縛りつけられた和装の花嫁——花嫁さんは美しい本当のモデルさんです。

ど——を観察しながら持ちきれでフランス人形や日本人形を造っているのです。どうかすると白井権八が小紫の代りに柱に縛りつけられることもあります。



どうかすると白井権八が小紫の代りに柱に縛りつけられることもあります。



ただ、ここでよく前方を御覧下さい。柱がいえ舞台が少し宛動くでしよう。これは他のグループの方々に同じ素材を提供するため、およそ三十秒間毎に十五度の角度で廻わっているのです。勿論必要とあらば、ブザーが鳴ってその場で磔柱が百八十度廻転し縛られた後手首のあたりも早目に観察出来る仕組みになって居ります。次のグループは彫刻をなさって居るのですが、この花嫁さんの後側にはキャミソールにパンティ姿のモデルさんですから、次の廻転まで暫時、手を休めていらっしゃいます。

その次のグループは和洋裁スクールとでも申しましょうか、季節季節の衣裳を変態的にデザインして何がしかの愉悦に浸ろうとなさる一団で、縛られたモ

デルさんに僅かの時間のあい間を見て、着せたり、はかせたり、脱がせたり、そして縛り直したりして寸法をおきめになって居られます。最後のグループは随意科で混成、デッサンなさる方、カメラでポーズをねらう方、中には独り瞑想して小説の題材を考えていらっしゃる方も居るといふ……ですから、よく気を付けませんとスパイされることも御座います。先日「美容とバンド」で、どんなバンドが一番効果的であるかと熱心に討議し詳かにデザインされた型紙を全部バンド会社の女の方に盗まれてしまいました。よく注意したつもりでも、登録洩れのメンバーが出るもので御座います」

『あの——一寸お伺い致しますが、芝里工房の概要は大体、判ったような気がしますが、同性でどうしてあのように縛らなければならぬのですか？ 社員になるには女装すれば男でもして頂けますか？ 資金の点、年齢の点、製作品をかつぱらう方法など参考のため仰言って下さいませんか……』

『ようつべこべと開けっ放しに御尋ね下さいましたねえ。モデルだけに男性のシンボルは御座いません。暗かったので誤魔化されたかも知れませんが、私以下グループの面々は

御推察の通り女性に見えてストッキングで毛ずねをかくしている人間共なんです。全財産の半分を注ぎ込んで下さい。年齢は問いません。別に腰に巻いた赤旗を振る訳ではありません。別が製作品は共有であり共産圏でもある訳です。ホホホ……慣れるとこの通り女の声が出ますが、御加入は当分、見合わされた方がよろしいでしょう。何故って、こんな製作所なんぞ、どなたも信用されませんもの……では皆さま、御免遊ばせ』

——完——

本誌の誇る緊縛写真と緊縛絵画の集大成。その第一陣と第二陣をここに紹介いたします。A5版六十四頁に満載された緊縛美女群はむんむんとむせかえるような体臭を満巻にまき散っています。

限定版特別号 第一弾！

「緊縛フォトアラベスク」

略号「あらべ」 特価 五百円

△収載内容▽全部縛られた女体のポーズばかり二十六項目、写真七十七葉一挙掲載！限定版特別号の第一回発刊として、昨年度上半期撮影の美人モデル嬢の緊縛ポーズを網羅し文字通り表紙から裏表紙に至るまで、可憐きわまりないモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。

（限定版のため一般書店へ出廻っておりませんから直接発行所宛お申込願います。）

増刷出来！乞御申込

限定版特別号 第二弾！

「緊縛写真と緊縛画集」

略号「緊縛」 特価 五百円

△収載内容▽四馬孝傑作緊縛画集二十五項目、二十五葉と「素晴らしき写真集」緊縛写真十九項目、八十四葉とを以て絵画写真が渾然一体となつて奏でられる限定版の醍醐味！

発売以来大好評にて圧倒的なお申込を受けました。一時品切中の所、今回若干増刷！まだごらんにならない方は、売切れぬ中にお早く！



観戦記

女相撲と

女斗美

(その三)

雪崎京人

近松門左エ門の数々の名作浄るり(義太夫劇)の中に「関八州繫馬」というのがある。彼が七十二才、生涯の一番最後に書いた作だが、梅川忠兵衛や紙屋治兵衛の物語の様に人形芝居や歌舞伎劇に度々上演されるポピュラーなものと異なり一般には殆んど知られて居ない。

この浄るりは源頼光が土ぐもの妖怪になやまされ、病気が重く衰弱している。家来達にはその原因(土ぐもの妖怪)が分らず、額を集めて心配している。中でも家臣四天王の

ワタベハノウケ ウスイシヤダミツ ウラベノスエタケ サカタンキントキ
渡辺綱、碓氷定光、占部季武、坂田金時等の女房達が主君を御慰めするにどうすればよいかと相談している。渡辺綱の女房が先ず発言する。

「先ず私が存じより申して見ましょ。見す見す心を引立つるは相撲々々、先ずお座敷に四本柱、括り枕を並べて土俵をつき、四人の我々真裸で、二人づつ西東へ立分れ大関、腰元衆の内で関脇、小結を選び、残りの女中皆前相撲、肌の物(褌)は男の通り、緞子繻珍の二重廻り。アアさりながら、さがりを取って

引く時、中にこたえの張合いなく脇へずっと外れては気の毒か。いやそれも一景であろうか。秀武、定光のお内儀、何と思す^{おほ}』

といいければ、二人は顔赤らめ

『おおざんなさい、一景も半景も、娘子供の時ならばこじおらしうもあれかし、持ち古した墨の肌、腰に廻した肌物(褌)脇へずと外れては手負鳥^{ていぶ}を見る様で凄まじかるう』

と噴き出す。という場面がある。頼光の御前^{ごぜん}で御殿の大広間に括り枕を並べて土俵を作り、

四天王の女房達のいずれも見事な体格揃いの大年増を始め美しい腰元達まで、男と同じ様に綴子繻珍の褌を締め込み、力一ぱいの相撲を取ったら頼光の病気もなおったかもしれない。手負鳥とは巢林子(近松)もうまい形容をしたものである。

古川柳に

ふんどしも女相撲は六ヶ敷いとある如く女性^{おんな}は身体^{からだ}の構造上からして褌を締めにくい。女が褌を締めて相撲を取る場合、



四天王の女房達の言う様にどうしても乱れ勝ちになるのは当然だろう。そこで専門の女相撲は、乱れた場合の風俗上の問題と、本人自身の苦痛を防ぐ意味からパンツをはくのが普通である。しかし江戸時代は言うまでもなく明治は勿論、大正も初めの頃までは褌だけを締めて取組んだもので、大正中頃以後、シャ

ツ、パンツの姿が多くなった様だ。その中で梅の花という当時実力第一の美人力士は如何なる場合でもこれらを用いなかったそうで、この女力士は他と段違いに強く、男の田舎力士などと取組んでもめったにひけを取らなかったということである。

江戸時代、延享頃、女と男の盲人の相撲と

いうグロテスクなものがあのおくらという美人力士に、娘一人に婿八人と称し、一人のおくらに對し八人の男の盲人が組みつく見世物の時、見物が興行主に金をつかませ、土俵の上で八人の盲人がおくらを手取り足取りおさえつけ、手負い鳥の様な光景を見物に見せたりしたので、当局からきついおとがめを受けたという記録がある。女の相撲というからには、国技館の大相撲を見るのと違ってセクシーな興味を多分に、或はそれだけが魅力で見る人が多いので、勢い女相撲の側も機会あらばはらはらさず様なことをして

見せて客を呼ぶ様になったらしいが、ただ何回もいうが、この頃の女相撲はシャツ、パンツをつけているので、これ等の面白さが全然見られないわけである。

それでも

猿ピリを待ってきましたと不埒言い

という様に猿又（パンツ）が激しい相撲でピリリと裂けて肌が僅かに現れると、見物が喜んで待ってましたという情景だ。

私が山梨県のある山間の町で見た女相撲で若柳という美人の女力士があった。二十一、二才位で整った顔立ちの比較的、小柄だが、相撲は仲々強く、敏捷な身のこなしと、落ちていた取口で、土俵際につめなど腰を落した型がよく、踊りなどの演芸も巧みに、関脇を

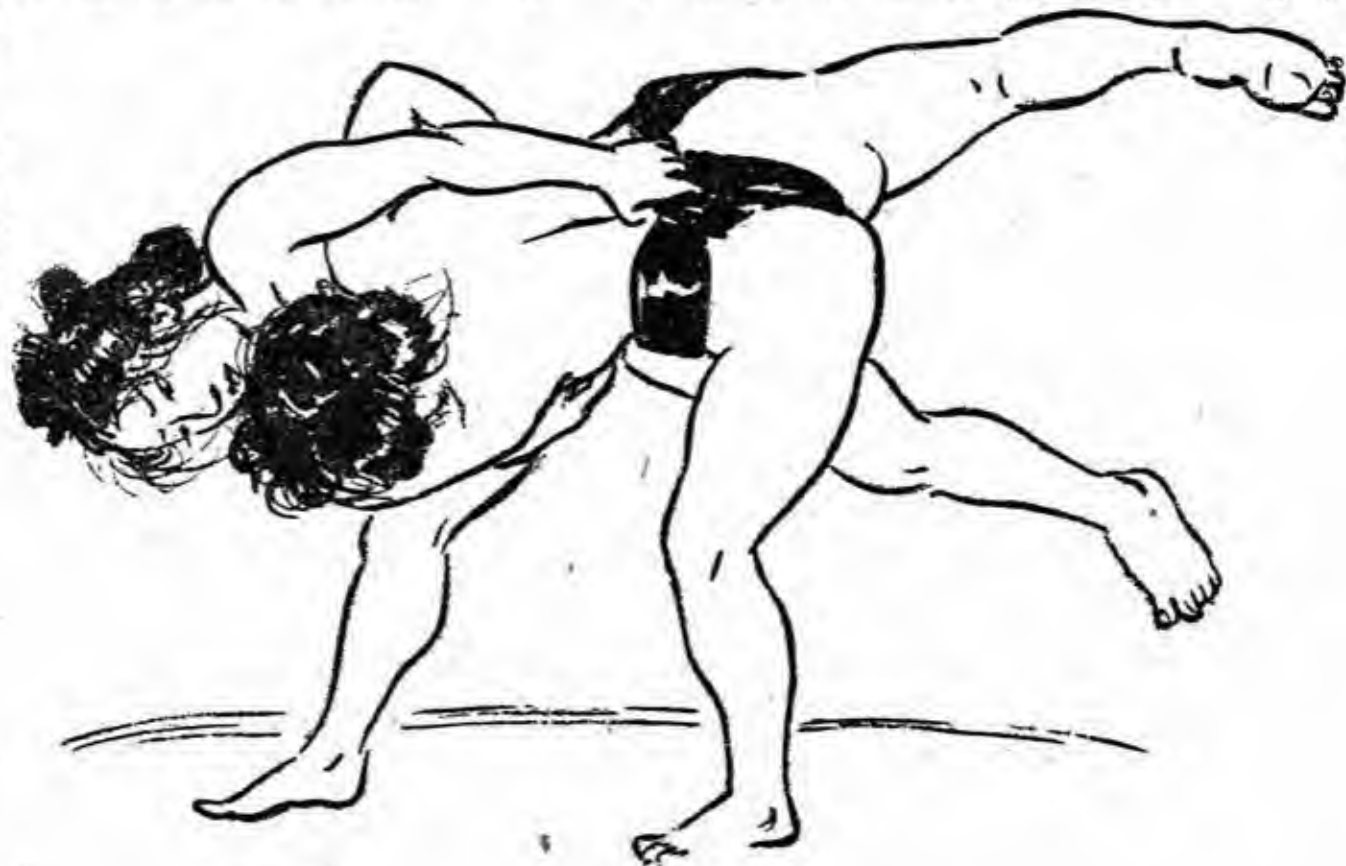
勤め一座の花形だった。この若柳と一行の大関梅の花（これは前述の強豪女力士、梅の花とは（全く別人）と結びの一番を取って見物を沸かせた。梅の花は五尺四寸位の上背があり芸者にでもある様な、いきな美人型だが三十四、五才の姥桜、着やせのするたちか着物を着、はんでんを引かけている時は、なで肩のほっそりした少し寂しげに見える女だったがいざ着物を脱いで黒繻子の褌をしっかと締め土俵に上り仁王立ちになったのを見ると、

見違えるばかりの逞しい体格、寂しげに少しふけてさえ見えた顔立も、いきいきと濃艶に色気溢るるばかりの美人力士。

兩人共、櫓落しの相撲鬻。梅の花の紅梅の咲誇った様な年増の美しさに対し、若柳の体のすみずみまで輝く様な若さの美しさ、共にうっとり見とれるばかりの両女力士だった。行司がこの相撲一番にて本日の打止めと呼び上げる。もともと東の大関、梅の花に対して西の大関、浜千鳥が居るのだが、病の為め土俵入りだけ相勤めて、結びの一番は新進の人氣力士、若柳が代役というわけである。

梅の花としては大関の名誉にかけても負けられぬ一戦、仕切りに入るや若柳、猫が獲物をねらいとびかかる時の様に低く仕切って臀を左右にふってねらいをつけ、立上るや激しく突進、得意の右を差して食い下り、頭を相手の胸につけて腰を落し、向うづけの体勢。梅の花、若柳の体を起そうとするが、若柳、重心を低く腰を落し寄って出るので、梅の花もてあまし石へ廻り、ら小手投を打ったが若動せず、大相撲となった。

行司、はっけよいや叫び乍ら兩人のまわり



を廻っている。

若柳、機を見て左もこじ入れ双差しとなるや猛然と東土俵へ寄り立てると梅の花、若柳

の首を抱えての窮余の首投げ、これがスッポ
リ外れて梅の花、後向きになるのを若柳、後
から相手の体を抱え上げる様に押し立てた。
この時、故意か偶然か若柳の左手が梅の花の
前ミツにかかり横に引いたから耐らない。前



述の頼光四天王の女房連の話の様な有様
となり、満場総立ちの大騒ぎ。

行司は声をからして制止、相撲は中
止。普通なら若柳の反則負けとなる筈だ
が、控力士から物言いが付き、取直しと
なったので見物も大喜び。

梅の花、乱れた禪を土俵下で控力士か
ら締め直して貰い、兩人、再び土俵へ上
り仕切りに入った。行司、軍配を返し兩
人掛声で立上るや猛烈な突張り合い、桜
色の兩人の胸は見る見る真赤に充血し何
ともいえない美しさ。やや突立てられた
若柳、機を見て右を差しガップリ右四つ
又も頭をつけて梅の上手、下手とも禪を
取り、有利の体勢となった。梅の花、右
下手は取ったが左上手が取れず、そのま
ま一呼吸、暫く両者動かず、二人共、腹
に大波を打たせて、流汗りんり、真赤に
上気した頬に乱れたびんの髪の毛が二筋
三筋、べつとりと張りついているのも、

えもいわれぬ風情。

かくては果てじと、梅の花ヨイショッ！
という掛声と共に寄って出乍ら、とうとう左
に若柳の上手禪を取り、上手投を打ったが若
柳足を送ってよく残し、すかさず下手投を打

ったが梅の花これを残し、再び土俵中央、右
四つのまま動かず。

見物も熱狂し、ひいきひいきの名を呼んで
いる。「水だ、水だ」という声もあったが、
この時、梅の花の禪がゆるんで解けかけた
ので、行司締め直してやり、戦いは再開され
た。

勝負が長びくと、梅の花は年齢的にどうし
ても疲れが見えてくる。早く勝負をつけたい
らしく、寄って出乍ら渾身の力をふるって左
からの上手投、見事にきまって若柳の体は一
回転して土俵にたたきつけられた。

梅の花も足がもつれる程疲労した様で、勝
名乗を受け退場。大関に対し善戦し乍ら遂に
敗れた若柳、美しい背中を汗と砂まみれにし
て小走りに退場する女らしい挙措動作に満場
拍手を送ったことだった。

次に回を改めて玄人女力士対素人娘の凄絶
な取組や、女性対男性の相撲の記録、見聞な
どを書いて見たいと思っている。

代理部案内

禪美と禪縛り「略号ふし」

大手札型印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 桜井 葉子

長篇連載小説

宇宙のどこかで

|| 手記「無実の罪に哭く男」より ||

晒
し

警務庁の玄関横にある晒し場は、地上一米の高さの直径十米程の円形で中央に監視台があり、監視台に支持せられた直径八米程の回転輪に六箇の吊鎖がついています。晒し場に追い上げられた私達は腰と足を繋ぐ鎖を更に締められ、鼻環と首枷を短い鉄棒で結ばれて顔を上げ下げ出来ない様にされ、顔の下半分だけでも隠してくれる嵌口具を外されて、代りに鉄の棒を奥歯で噛まされ後頭部で締められます。回転輪から下った吊鎖の先の錠が鼻環にカチリと嵌まり、吊鎖の長さが調節されました。

やがて輪が回り始め、私達は鼻の痛さに上半身を直立させ、膝を曲げた姿勢のまま鎖をガチャつかせ乍ら晒し場の周りを歩かせられ

ます。晒し場の周りに集まった人々は、吊鎖についた罪名と刑を記した札を眺め、嘲けり笑っているのです。顔は正面より稍うつむき加減に固定されたまま、ゆっくり回る輪に曳かれて、よろ／＼と哀れな姿を見られ乍ら歩いていますと、情なくて口惜しくて喚きたくなり、思わず訳の分らぬ声を立ててしまいました。直ちに加えられた鞭の一撃。

「ぎゃっ」

それは電気鞭でした。激痛が鼻へ抜けます。輪の回転は一定時間毎に反対方向になり、又しよつ中、速さを変えますので、鼻を吊られている囚人達は脂汗を垂らして両脚をガク／＼させ乍ら、必死になって歩き回ります。

私も方々の警検署で行われる「晒し」の光景は、しよつ中、見て

佐 治 麻 造

はいましたが、こんなに残酷なものとは思いませんでした。

女囚四〇号でしょう、強制される無理な歩き方に遂に足をもつらせ鼻に加わる激痛に魂切れる様な悲鳴を上げました。電気鞭の痛苦に死力を振り絞って立ち直り、歩き始める女囚に浴せられる嘲笑。

私も、もはや疲れ切ってしまい、恥かしいという様な気持も全くなくなり、只もう早く吊鎖から解放されたいものと、それだけを願う乍ら晒し台の周りを回るのでした。

やっと昼になり、伸ばされた吊鎖を鼻につけたまま其場に崩れ折れます。くつわと鼻の棒を外され与えられた食事を衆人環視の中で犬の様に啜りました知った。人にも見られているに違いありません。情無くてうなだれていますと、三十分の後には再び吊鎖が吊上げられ、戒具の重さによろけ乍ら立ち上って又、苦業が始まりました。本当に半死半生の様な目に遭わされ、漸くのこと吊鎖から解かれた時には、殆んど何も見えず、何も聞えませんでした。

再び出ることのできない死刑囚監房に連れ戻された私には、又も坐り吊りの苦業が待っていました。其の晩は腋鎖の痛さも忘れ、泥の様に眠ってしまったのでございます。

翌朝、又、曳出されシャワーを浴び、もはや再び出られないかと思っていた死刑囚監房の区画を出て拘置所へ連れられました。検事に御礼に行くのです。検事の取調室の手前の囚人控室には、男囚と女囚一人宛が犬の様に繋がれて取調を待っていました。私の恐ろしい姿に息を吞んで、手錠足錠の身を堅くしています。膝を床につき鼻環を床につけて引摺り乍ら、婦人検事の前に進み、そのままひれ伏しました。眼の隅に涙い和服の裾が見えます。出頭状を受けて出頭した若奥様らしい婦人が椅子に腰掛けて取調べられているのでし

た。

「……では、と。当分ここにいて貰いますからね。ホラ、これ」逮捕状を示されたらしい婦人は一瞬、息を吞みます。婦人看守が近付いて婦人の肩を叩きました。手には手錠を持っています。

「さあさあ、立って、手を揃えて出すのよ」

婦人看守が持っている手錠を見た婦人は、思わずよろめいて粹な草履をはいた白足袋が私の眼前でたたらを踏みました。

「あつ、あつ、……手錠……。お願いです。それだけは……決して逃げたりは致しません。手錠だけは……かんにんして……。検事様。御呼びになれば何時でも参ります。帰して下さいまし」

「フ、フ、フ、フ、何云ってるのよ。寝呆けないでちょうだいな。逮捕状はだてじゃないのよ」

「おや、手を出さないの？」

ピンクが立て続けに鳴り、悲鳴を上げて逃げようとする婦人を、もう一人の婦人看守が背後から羽掻い締めにして両手首を握ります。

「あ、あんまりですわ。揉るなんて」

「じゃ、おとなしくするの？」

諦めた婦人は、ワナ／＼震え乍ら両手を差し出した様子です。

「そう／＼。奥様お手をどうぞ、って訳ね」

婦人看守は意地悪く、邪慳に、わざとゆっくりと彼女の両手首に鋼鉄の環を嵌めます。

ガチャリと右手に、そして又、左手にガチャリと冷たい錠の音。

「あつ、あつ、ああ、もうこれで……」

手錠の嵌まった両手で顔を掩うて嗚咽する婦人の両手が、荒々しく顔から引き離され、捕縄で腰に固定されました。



「おやっ。お前、何、見てるの？」

あわてて額を床につける私の背中に革鞭が鳴ります。

「まあ……何という……おそろしい恰好……」

「これは死刑囚なのよ。それよりもどう？ 手錠の味は如何？ 気が落着いたでしょ」

「こんな……こんな……囚人みたいに手錠なんか……」

「オヤ、お前はもう囚人よ。看守さん、その扉をあけて見せてや

りなさいな」

扉が開き、控室の未決囚が見せられた様子です。

「ホラね。お前も今日から、あんな風にして貰えるのよ。フ、フ、フ」

「……まあ、……かんにんして下さいまし……決して逃げたりは……」

身をもんで哀願する手錠、腰縄姿の婦人。

「まあ諦めるのね。あんな恰好で引張り回されるのも気分が変わっていいじゃないの。それよりか、お前、その手錠をあんまり引っ張ると締って痛いわよ」

「は、はい、……少しゆるめて下さいまし……痛いんですの」

「お前のところじゃ奴隷を使っているんだろ？ その手錠、使ったこともあるんじゃないの？ まあね、今迄他人に嵌めてばかりいたんだから、たまには自分が嵌められるのも、いいじゃないの。首枷も足錠もすぐ嵌めて上げるよ」

逮捕状を執行された哀れな婦人は、縄尻で背中を打たれ、廊下へ出る扉の所で恥かしがって必死に哀願していましたが、赦される筈はなく嗚咽し乍ら曳かれて行きました。

「検事さん、あんな奥様暮らしの女は仲々骨が折れますねえ」

「なあに、革鞭を三つ四つ当ててね、後手錠で一晩すりゃ案外おとなしくなるものよ。えーと、あ、そう／＼。御臨終近い方がいたんだったわね。九二五号。ちょっと顔を上げて」

椅子に腰を下してタバコをふかしている婦人検事を仰ぎ見ますと本当に恨めしくなってしまう様にしてしまいました。

「フ、フ、フ、フ、そんな恨めしそうな眼で見ないでよ。私はね、職務上お前を殺した方が良くと判断しただけよ。まあもう諦めて殺して頂ける日をつんだねえ。未だ若い身空で可哀想な様な気もするけど自業自得よ」

「九二五号。嵌口具を外してあげるから検事様に御礼を申上げるんだよ。いいかい？ 電気鞭の味、知ってるだろうね？」

無実の罪で死刑にされる身の無念さ、口惜しさに胸が詰りますが、今更如何にもなりません。

「……検、検事様。いろ／＼と御迷惑と御手数を……掛けました。」

「御蔭様……で……死、死刑を……執行して頂いて……罪の償いをさせて頂け……ます。……ありがとうございます」

涙を流し乍ら途切れ／＼にいます。

「……あの……何とかして……命だけは助けて頂け……」

検事様の合図で忽ち嵌口具が嵌められ、訴える術もなくなりしました。

「じゃ、首を吊る時、又、会いましょうね。フ、フ、フ」

身もだえし、よろめき乍ら廊下を曳かれて行く私の耳に、話声が切れ／＼に入ります。

「……あら、あれごらんないな。死刑囚よ」

「どうして判るの？」

「囚人番号が九〇〇台は死刑囚なのよ……」

死刑囚監房へ蹴込まれた私は、中腰、鼻吊りの苦業を再び始めました。低く呻く死刑囚の動哭が陰惨に聞えて来ます。

中一日おいて三日目の午後早く、三、四人の人が鉄格子の前に立ちました。その中の一人は和服姿の婦人です。私は顔を上げる気力もありませんので、足元しか見ていませんでした。

「あの、この男がそうですの？」

ああ、其の声は妻の声ではありませんか。嬉しさと懐かしさに鼻環の痛みも忘れて見上げた眼に、夢にも忘れなかった妻の白い顔が映りました。嵌められた嵌口具の情なさ、如何にしても声は出ません。唯、もう涙で曇る眼に必死の思いをこらして助けを求めました。

「今生の思い出に、ちらっとは見せてやったが……そう／＼長い間拝ませる訳に行かんわい。眼がつぶれるからな。ハ、ハ、ハ」

鼻環に連絡されている金具が無慈悲にも下方へ押下げられ、もはや白い足袋に包まれた小さな可愛らしい妻の足しか見えなくされてしまいました。思わず身をもんで何とかして顔を見たいものと、鼻の痛さを堪え乍ら身悶えするのですが駄目です。

「……ええと、何と呼べばいいのかしら？」

「九二五号囚とお呼びになればいいのよ」

「そうですか。ええ、九二五号……囚さん……」

「あら、さん付けは、おかしいですわ」

「オホ、ホ、ホ……ええとね、こんなことをわざ／＼云いに来る必要はないんだけどねえ、お前さんが死ぬ迄に、はつきりしとかないと私も気持ちが悪いので、やって来たんだわ。あのね、あんたの死刑が決った翌日にね、離婚手続を済めたわよ。だから、もう私と、あんたは全然関係なしなのよ。いい？分った？まだ自分の妻だなんて思い乍ら首をくくられた日には、私が堪らないからね。早くお死になさいな」

頭上から浴せられる思いも寄らない冷酷な言葉に、茫然としてしまいました。

「……けど何ねえ、本当に惨めな姿ね。まあ分相応の所だけど。フ、フ、フ、お前さんの晒されてる恰好、見たわよ。いい恰好だったわ。じゃ、どうも御手数でした。看守さん、失礼しますわ」

ほのかな残香を残して足音が遠去かります。叶わぬと知りつつ、嵌口具の中で声にならぬ救いを求め、せめてもう一目だけでも姿を見たいものと戒具を鳴らして身悶えしました。再び鼻環の金具が元の位置に戻され、硬ばった腰と膝で中腰の姿勢をとられます。

「どんな心持だったの？悲しかった？お察ししますわよ。フ、フ、フ、フ」

婦人看守にからかわれて、急に怒りがこみ上げて来て、新たな涙が止めどなく流れました。

夜、横になりますと、薄情な妻が恨めしく、離婚されるのは万止むを得ないとしても、もう少し何とかやさしい言葉の一つでも掛けて呉れたらと情なく思いました。それと共に、一目だけではありましたが、久し振りに見た妻の顔と姿と、一緒に暮した日々を思い出して、嵌口具の中で号泣するのです。

翌朝、中腰の苦業が始まると、暫くして男女一人宛の死刑囚が曳き出されました。雰囲気では直感的に死刑の執行だと知り、死の恐ろしさが身体中を戦かせます。哀れな二人は膝もなえてしまった様子で冷酷な革鞭に追われ、床を膝で這う様にして中央監視台の所へ崩折れました。やがて立会の検事の一行が入って来て、首枷の番号札身体の特徴、指紋の対照によって確認を受けた二人に、失神防止剤ハイポンが射たれ、ついで看守の足で床上を転がされ乍ら、医師によって体の各部に閉塞剤が詰められました。スピーカーが残酷な声を響かせます。

「只今から九一二号及び九一九号の死刑を執行する。他の死刑囚もよく見ておく様に」

床に崩れていた兩名の死刑囚はビクッと全身を震わせて起き上り自由の利かない身を悶え乍ら、あたりに哀願の眼をあわただしく走らせます。女囚九一九号の後手錠の嵌った両手の指が開いたり握りしめられたりして、堪え難い恐怖を示して居ます。嵌口具を外され手早くくつわ式の鉄棒で舌を押えられ、ついで首枷を外されました。意味の分らぬ喚き声が区画一杯に響き渡り、他の死刑囚に脂汗を流させます。先ず男の方が絞輪の下へ引摺られ、足錠の鎖と足錠を腰枷に吊る鎖とが、うんと短くされました。生きた心地もないのです。口から泡を出し、途切れ／＼にかすれた喚き声を立てて身をくねらす死刑囚の首に、革の絞輪が巻き付いてしまします。恐怖で一杯に見開かれた眼は、もはや何も見てはいないでしょう。絞輪が巻き付けられた瞬間、上体が前にのめるのが見えました。

私は、もはや正視するに堪えず、眼をつぶろうとするのですが、どういふものか見ずにはいられません。

「あと三分。ボタンを押したぞ。あと三分！」

絞首台の死刑囚の耳許で看守が大声で叫んでいます。失神することと許されず、死の恐怖を満喫させられる三分間なのです。

遺体は医師の検視を受け、先刻、外された首枷を再び嵌められ、四角な木箱に投げ込まれました。ああ、何という扱いでしょうか。死んだ後さえ戒具を外して貰えないのです。

あんまりだと思いました。私も何れ、あの様になるのです。思わず腰が抜けそうになって鼻の痛さに正気に返り、女囚に加えられる刑の執行をもう一度、眺めさせられました。

女囚は、もはや声を立てる氣力を失い、腰が立たない様子です。

やがて先程と同じことが繰り返えされ、刑の執行が終了しました。

初めて見る残酷な光景に私は咽喉をカラ／＼にし、脂汗を流して震え上ってしまいました。明日にも私に訪れる運命なのです。せめて死ぬ前に一度でよいから此の後手錠を外して欲しいものと泌々考えました。

翌々日、又も私の監房を訪れた若い婦人がありました。仰ぎ見ますと故社長の令嬢で、婦人検事も一緒です。外でボタンが押されて鼻環が鉤から外れました。命じられるままに後を向いて嵌口具の錠を外して貰い、口に啣えて床にそっとおきます。看守に頸をしゃくられ、再び我と我が身を鼻環で鉤に吊るしました。

「あら、面白いわねえ。自分で鼻環を吊らされるのねえ。けど此の道具ちよっと便利じゃありません？ 手数が掛らないで」

スラリとしたブリーツスカート、ハイヒール姿の令嬢が中腰吊りの辛さもしらず笑います。鼻の金具が床迄押下げられました。

「九二五号。御嬢様がね、お前が殺される迄に一度からかって、お

きたいと仰言るので、わざ／＼御足労願ったのよ。御あいさつしなさい」

婦人検事に言われ、何かいってやりたいと思うのですが、情なさ口惜しさ、そして恥かしさに胸が一杯になって口が利けません。

「何故、黙ってるか？ ごそ／＼身悶えばかりしやがって。電気鞭を食わせてやろうか」

近い中に絞首される身とは云え、電気鞭の痛さは思い出しても、ぞっとします。

「御、御嬢様……こんな浅ましい姿を御眼に掛けて誠に……申訳ございません。お蔭……様で……死刑に……して頂いて罪の償いを……させてもらえます。……ありがとうございます……」

「フン、それだけかい？」

と婦人検事。

「……そ、そして……御嬢様には……まことに相済まない……と思って居ります……御覧の様な姿で……絞首……台に……吊るされる日を……待って居ります。……幾分なりとも御胸を……晴らして下さりまし……」

身に覚えのない罪を謝罪させられる口惜しさに、涙がポト／＼と床に落ちました。

「そう、じゃあ少しは改悛した訳ね。公判の時に較べてはね。」

「ハ、ハイ………本当にもう悪いことをしたと思って居ります……」

「どう？ 死刑は恐ろしいだろうねえ？」

「……ハイ、それはもう………あの絞輪を見ますと身体中ふるえあがります……」

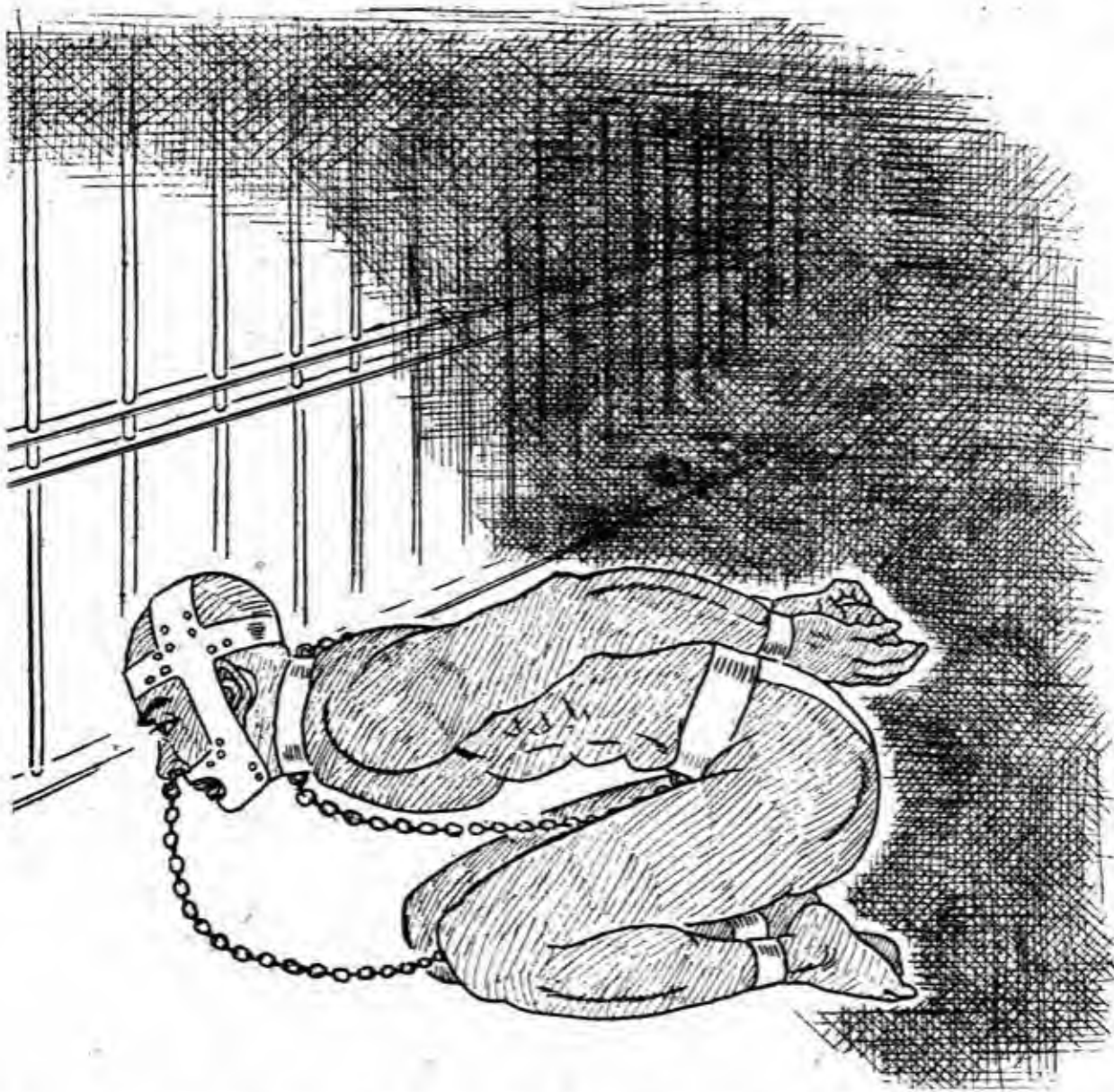
「フ、フ、フ、フ、まあ、せいぜい苦しむがいいわ。検事さん、もうあと何日位で死刑を執行しますの？」

「……さあ、それはねえ、宣告後、何日で執行すると言う規則はありませんのよ。だから此の九二五号でも明日かも知れないし、一カ月後かも知れませんわ。けど宣告後二カ月以上、執行しないという例はありませんの。……これ、九二五号。折角、御嬢様がおいでになったんだから、何か御慈悲を御願ひしてごらんよ。勿論、命を助けて欲しいなんて言っても駄目だけどね」

囚人生活が未だ浅い私は、浅はかにも御慈悲という言葉を真正直に受取ってしまいました。

「……御嬢様、こんなことを御願ひ申上げるのは、分際にあるまじきこととはよく存じて居るのですが……御言葉に甘えて申し上げます……御慈悲でございます。死ぬ迄に……本当に一日だけ、いえ一晩だけでも……一時間だけでもよろしゅうございます。此の……後手錠を外して……いえ……せても前手錠にして下さいまし……ほんとにもう……」

「へーえ。何を云うかと思えばそんなこと？ けどお前、唯じっとしてただけでしょ。後手錠



も前手錠も同じことだと思っただけねえ」

「……それが……ちがうんでございます。御嬢様には御想像もつきませんです。本当にもう辛いんです……」

婦人検事の鋭い声がしました。

「九二五号っ。お前は戒具が嫌だと言うのかい？ 戒具忌避は重い懲戒だよ」

「あ、あ、検事様。決してそんな、戒具忌避などと大それた……死刑囚の私に後手錠は当然でございます。しかし御慈悲を願う様におっしゃいましたので……つい……」

「馬鹿ねえ、本当に。御慈悲というのはね、例えば御手ずから鞭を頂くとか、足蹴にして頂くとか、又、御靴の裏でも舐めさせて頂くとか、そう云う風なことよ。分った？」

「ハイ……よく分りました。御嬢様。御慈悲でございますから御靴の先なりと舐めさせて……下さり……まし……」

屈辱感に思わず語尾が消えます。鼻環が少し上げられ、

鉄格子の間から差込まれた靴の先を舐めさせられました。令嬢は低く嘲笑の声を立て乍ら、意地悪く靴の先を上下させるのです。

「ホラ／＼ここよ、何してるの？ 舐めるのが嫌なの？ フ、フ」

さん／＼からかわれ辱かしめられて、口惜しさの余り靴を掴んで引きずり込みたい衝動に駆られ、無駄とは知り乍らも後手錠の両腕をもがくのでした。

「さあ、これでお終い。面白かったわ」

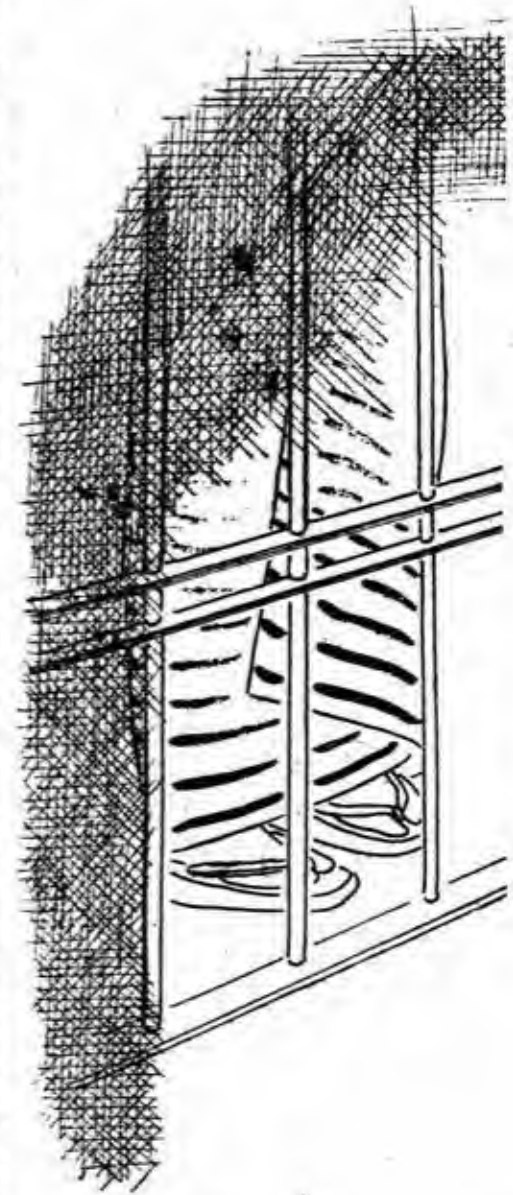
骨身に沁みる囚われの身の悲しさに、じっと床を見ていますと、看守の巧みな革鞭が格子の間から背中中に鳴りました。ハッとして気をとり直し、

「御嬢様。ありがとうございます。本当に……勿体のう……ございます……」

「そう。そんなに云うんならもっと舐めさせてやってもいいけどねもう時間がないのよ。音楽会の約束があるの。じゃあ、さよなら。早く吊るしてもらうといいわ。フ、フ、フ」

額をポンと蹴り検事と連れ立って立去りました。看守に促がされ、鉤環を外されて床の嵌口具を啣え、後向いて錠を締めて貰い、再び中腰の姿勢を取りました。

「フ、フ、フ、大分情けなかったらしいな。察してやるよ。まあ、せい／＼あと一カ月の辛抱だからな。ハ、ハ、ハ、ハ」



死刑執行

それから三日後の午前中に一名、午後になん名かの死刑が私達死刑囚の眼前で執行されました。よもやと思った翌日の午後、一名の女囚が魂を凍らせる断末魔の叫びを鉄ぐつわの中で立て乍ら消えて行きました。自殺防止剤ニヒロンによって与えられる死に対する恐怖に、押えても／＼ワナワナと全身が震え明日にも自分が執行されるかも知れないと考えますと、毎日どんな辛い懲戒を受けてもいいから、命だけは助けて欲しいものと身もだえするのです。

しかし最早、哀願する術も、又その相手もありません。執行迄、失神状態で居れたら、どんなにいいだろうかと考えました。

今度は十日以上も執行がなく、中腰吊るしの苦しさが死の恐怖を紛らせる様になった途端、三名が連続して執行され、中一日おいて又一名。そして一週間程して午後おそく又一名。全く不規則で、毎朝起きますと看守の足音がする度に恐ろしさに震え上り、夕食を囁り終えると、やっとホッとするのでした。

とう／＼私の番が来ました。

「ヤレ／＼、今日も何とか一日、生き永らえたわい」

と考え乍ら、中腰吊るしの身をモゾ／＼させて居りますと、突然数人の足音がして私の監房の前に立止まりました。執行を直感した

私は嵌口具の中で絶叫し、鼻環をガチ／＼鳴らせ何とか逃れる道はないかと空ろな眼であたりを見回します。腰が抜けるのがよく分り、グッと鼻環が吊った途端、鉤環が外れ、鉄格子がガチャガチャと開きました。気付けの革鞭が二つ三つ、荒々しく鼻環に曳鎖がつけれ引き摺り出されます。

「腰が抜けたのなら膝で歩け。しっかりしろ」

ガク／＼する膝で這う様にいざ、ってシャワー室で水をいやと云う程浴びせられ、熱空気で乾かされた後、あの恐ろしい絞輪の下へ追いついて立たされました。容赦のない鞭を全身に浴び乍ら眼前は昏くて何も見えず、嵌口具の中であえぎ／＼辿り着いた私の頭上で、スピーカーが無情な宣告をします。

「これより九二五号の死刑を執行する。皆よく見ておく様に」

嵌口具が外されましたが、声帯がしびれて声が出ません。すぐに鉄ぐつわを咬まされ、足蹴にされて床を転がされ乍ら、もはやどうすることもできないのだから、せめて何とか見苦しくない様にしようとするのですが、全身虚脱した様で正坐することもできません。

やがて例の婦人検事をはじめ、立会の人々が入って来て、確認が行われますと首枷が鈍い音を立てて外れました。

「あっ、その首枷を嵌めておいて下さい」

思わず鉄ぐつわの口で意味の分らぬ声を立て身もだえした途端、婦人検事の姿が目に入りました。あわれみを交えた冷笑を浮べた顔を、本当に無限の恨めしさを籠めて見詰めていますと、鞭が鳴り

「さ、絞輪の下に坐れ」

看守の声に力を振り絞っていざり寄ろうと致しました。

「ホ、ホウ、仲々立派じゃないの。自分で歩くななんてね。九二五号、

賞めてあげるわよ」

しかし、ふと正面を見た眼に革の絞輪が入った途端、もう駄目です。曳き摺った足鎖、腰鎖が大石の様に重くなり、ヘタ／＼と突伏してしまいました。

「やっぱり駄目ね」

看守に両腕を支えられ、やっと絞輪の真下に来るや、首に革の輪が吸い付いて軽く締め付けられました。再び眼前が昏くなり、両脚が伸ばせない様に、又、吊られてから、体が回転しない様にと腰枷や足錠に結ばれる鉄鎖の音も微かにしか聞えません。ボンヤリした耳に

「あと三分！」と云う声。

「ぎえーっ」思わずぐつわから洩れる、我が声とは思えぬ陰惨な呻き声。何とか首の絞輪から、脱けたいものと鎖を鳴らせて身悶えします。ああ、此の恨めしい後手錠！手さえ自由なら、恐ろしい絞輪から逃れるのは訳ないのです。手首の骨も折れよ、とばかり両腕を力一杯もがきますが、頑丈な第三種手錠がどうなるものでもありません。がつきと両手首に嵌まった鋼鉄の環は、私のはかない努力を嘲笑っています。口から泡が流れ、脂汗が全身に噴き出るのを感じます。定かには見えぬ眼で周囲を見回し、口をパク／＼させて哀願を表わしますが勿論、助けてくれる訳がありません。

死の恐怖が全身を電流の様に走破し、開いた口がしまらなくなつた瞬間、グイッと首が締って体を上方へ引き上げられました。床から離れた足先で床を探ります。足先と床は三十糎とは離れていないのですが、足錠と腰枷を結んだ短い鎖は其の僅かの距離すら足を伸ばすことを許さないのです。

ああ、もう少し、ほんの少し脚を伸ばせたらと思ひ乍ら失神してしまつたのでした。

看護婦

あとで分つたのですが、絞首されてから再び意識が回復する迄三昼夜かかったそうです。

フト眼が覚めました。白い天井が先ず眼に映り、体はフワ／＼と宙に浮いた様です。暫くしてベッドに仰臥した自分が分りました。社会の人から見れば、まるで木の様に固いベッドですが、長い間、後手錠でコンクリートの床にそのまま寝ていました私にとっては、本当に羽蒲団の様です。手錠と云えば、今は両手に何も嵌められていません。まるで夢の様です。

絞首台に吊り下げられた時のことが脳裏に思い出されました。

「そうだ。俺はもう死刑にされたんだ。するとここは？」

あたりを見回すべく首を回しますと、鼻環につけられた鎖を感じました。ああ、右足首にも鋼鉄の環の感触があります。どうやらここは粗末乍らも病室らしく、ベッドの横に管のついた瓶等がハンガーに掛けています。

思わず起上ろうとして鼻環の鎖が頭上でベッドに繋いであるのを知りました。首に鈍い痛みが残っています。又、両手首の骨もズキズキします。絞首の時、力一杯もがいて後手錠で痛められたのです。両手を挙げて何十日振りかで眺めますと、鋼鉄のいましめの痕が無残です。両腋の腋鎖は外されています。仰臥して背中全体がベッドにつく安楽さ、肩の付根を責める腋鎖の突起がない嬉しさ、そして我が両手で我が身を自由にまでさわれる喜び。ベッドから一步も離

れることはできませんが、囚人の私には何等苦痛ではありません。指先に鞭痕のふくらみが条になつて感じられました。

つまり一旦、死刑を執行されたのですが、何かの理由で命を助けられることになつて、手当を受けたんだな、と考へ付き、本当に何と有難いことだろうかと嬉し泣きに泣いていますと、扉が開いて看護婦が入つて来ました。

元来、愛くるしい顔立ちの若い娘さんですが、私の眼には其の清らかな白衣と帽子の姿が、天使様の様に思われたのでした。

「おや、気が付いたのね」

テキパキと私の体温や脈等を検査した看護婦は隅のインターフォンで報告します。専門語で返事がありました。

うっとりしてその姿を眺めていますと、眉を少しひそめ乍ら、ベッドの抽出から何か取出しました。

「あのねえ。まだそんな必要はないと私は思うんだけどねえ。可哀想だけど手をお出し」

白い小さな手に第一種手錠を重そうに持って、私の顔を憐れむ様に見乍らいいました。私も少し悲しくなりましたが、囚われの身、致し方ありません。

「お願い致します」

差出した両手に久し振りに第一種手錠が嵌められました。みじめな気持です。

「こんな病院に勤めてると手錠や足錠なんかの嫌な道具を扱わなきゃならないので嫌だわ。どう？ 手錠きつい？ 辛いでしょうねえ。鼻鎖だけで充分なのねえ」

「…あの、看護婦様。その様な…御しんしゃくは要りませんです。

私は囚人なんですから手錠足錠は当り前でございます」

「そりゃ、そうだねえ」

この優しい「天使様」は、私に手錠をはめると一旦、立ち去りましたが、暫くすると女医と一緒に再び来て、改めて診察を受けました。眼鏡を掛けた端正な顔立の女医が、恰かも品物を点検する様に私を診察しました。命じられるままに横になったり俯向いたりしますが、其の度に鼻鎖と足鎖がチャラチャラ音を立てる悲しさ。

「まあ、順調ね。あさってぐらいから運動させてもいいわよ。食事は今夜から普通食ね」

渴きと空腹はかなり激しいのですが、何カ月振りで背中をつけて仰臥できる快さを満喫し乍ら、うとうととしていますと、看護婦が食事を持って来てくれました。貪り喰って一息つき、生きていると言う実感を感じます。

手錠のままとは云え、両手で食器を持って喰れる有難さに嬉しくて涙が出ました。あまりに今迄とは違い、安楽過ぎて却って所在なさに鼻鎖等いじくっていますと、巡回に来た看護婦が、私が何も頼まないのに鍵を取出し、少し締っていた手錠を弛めてくれました。

本当に有難くて思わず手を合わせて拝んできました。其夜は夢に夢見て諦らめていた、手足を伸ばしての安眠を貪った次第です。翌朝、一度目を覚まし乍らも、うつら／＼として居りますと、いきなり頬にビンタを食い、ハッとして今迄の監房生活の習性でハネ起きようとして鼻鎖の痛さに悲鳴をあげました。

「何時迄ねてるのさ」

仰ぎ見ますと、昨日とは別の看護婦が冷笑を浮べて立っています。残酷な懲戒によって骨身に教え込まれた、囚人にふさわしい仕草が

自然に出てしまいました。

「横領、強盗、暴行及び傷害致死罪による死刑囚九二五号。戒具、身体異常……ありません」

鼻鎖一杯迄上体をネチ起し手錠の両手を合掌して挨拶をします。「フン。体に異常ないなら監房へ戻そうかねえ？まあそれはいいとして、ハッキリ云っとくけど、お前は刑を執行中の分際なんだよ。ホラ、この通り鞭もあるんだよ。甘えたりすると承知しないからね。分った？」

「ハ、ハイ、ハイ……よく分りました」

全くいわれる通りで、此の様に石の様なベッドながらも安楽に仰臥など出来るのは分に過ぎたことなのです。やがて朝の囚人食が与えられました。じっと監視されていますので、食器を両手に持って喰るなど飛んでもない話で、鼻鎖を食器の縁で鳴らし乍ら犬の様に喰ります。其日、一日は冷い看護婦に囚人として受けるべき当然の扱いを受け乍ら神妙に致しました。翌朝、再び前のやさしい看護婦さんが来ました。つい上体を半ば起し合掌して御挨拶かけます。「アラ。そんなことしなくてもいいのよ。じっとしてなさいな。どう？気分は？」

床にひれ伏して御礼を申し上げたい程、有難い言葉です。

「も、もったいない御言葉でございます。こんなにやさしくして頂いて……本当にもう御礼の申上げようもございません。御蔭様で大分元氣になりました」

「そう、よかったねえ。けど考えて見ると、元氣になったら何でしょ、又、監房へ入れられるんでしょう？余り早く回復しない方がいいんじゃないの？」

「ハイ、…そんな…大それたことは……」

「ホ、ホ、ホ、ホ……まあいいわよ。ここにいる間は、せいぐ楽

わ」
あんたとは違ってたし、第一、鼻や足に鎖なんかつけてなかった

にしてたらしいわ。話に聞くと監房の中でも後手錠だってねえ。本当に辛いだろうと思うわ。ところで昨日の人、ちょっときついでしょう、まさか鞭は当てなかったと思うけど。あの人の御きげんを損わない様になきゃ駄目よ。きついんだから」

私は正気に戻ってから疑問に思っていたことを訊いた所、やはり私の考え通り、絞首台から下ろされて直ちに此の病院で手当を受けた訳ですが、死刑が完了されなかった理由は知らないそうです。そして此の病院は裁判所内にある病院で、その一隅の囚人を扱う区画内に此の室があるとのことでした。

「けどね、死刑は中止になったけど無罪だって訳じゃないらしいわよ。大分前、無罪が分って中止命令が出ただけで間に合わなくて絞首してしまっちゃってさ、あわてて此所へ運び込んで手当したことがあるんだけど、その時は手当のやり方も全然



或いは、と言う私の儚い願いも消えました。死刑は赦されたものの、無実が判った訳ではないのです。

「あの……手で持ってもいいでしょうか？」

与えられた囚人食を前に、手錠の嵌められた両手を合わせて訊ねました。

「あ、そうか。いいわよ。又ずっとこれから犬みたいにして啜らなきゃいけないでしょ。反則だけど許したげる」

やがて女医の診察が済み、再び入って来られた看護婦さんに運動をさせて頂きました。

鼻と右足をベッドの鎖から解かれ、シャワー室で温湯を浴び体を洗いました。

「乱暴しない？しなければ手錠外したげる」

床にひれ伏して服従を誓いますと手錠を外して下さいました。自由な両手で自分の体を洗う快さ、拘束を受けた身でないとい此の味は判りません。

跪ずいて両手を差出します。

「アラ、後手よ。規則なんだから辛抱おし」

あわてて後へ両手を回し手錠を受け、鼻に革紐をつけられて戸外へ曳かれました。

久し振りに日光を仰いで、生きる喜びを満身に感じ乍ら緑の芝生を踏みしめて、鉄柵の囲いの中を歩きます。鉄柵の向うには社会の人々が三々五々散歩して居り、私の方を指さして嘲笑って居ます。恥かしく思いますが、此の位の屈辱は諦めていますし、両足や腰を伸ばして大股に歩ける自由感、そして動いても首で嫌な音がしない解放感に、嬉し涙を流し乍ら狭い囲いの中を運動させて貰いました。

鼻 虐

略号(はい)

モデル 絹川 文代
大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

美貌の絹川さんの鼻を思いきりいじめぬいた写真。火のついた煙草を鼻の穴に挿し込み、或は浣腸器の嘴管で鼻の穴をこじあけたり果ては金属製のクリップで鼻を挟んで悦虐の涙をハラハラと流させるという逸品。

鼻 責

略号(はき)

モデル 絹川 文代
大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

身動きならず縛しめられて逃げもならず顔の中心である鼻をいたぶられるのは誠にサド的である。足の指で鼻を挟まれバンドの猿ぐつわで鼻をこじられ、観念の眼を閉じた髪を驚ぶかみに愈々鼻の料理にかゝるのだ。

た。

翌日はあのきびしい看護婦です。

前手錠のままシャワーを浴び、自分で後手錠にさせられます。面白半分の様に邪慳に鼻を引っばられて歩かされましたが、足錠の嵌められていない有難さに、それ程苦痛には感じません。囲いの中を二、三回、廻りますと

「私はもう面倒だから自分で勝手に歩き」

といいます。何と有難いことかと喜んだのも束の間、足錠を嵌められてしまいました。錠の締まらない様ヨチ／＼歩きます。立止まることは許されません。

そこへ同僚の看護婦が二人出てきました。

「ちょっと、からかってもいい？」

「どうぞ／＼」

「これ／＼ちょっと、九二五号。此のボールをくわえて来るのよ。そらっ」

そして遂にボールをくわえたまま足錠につまづいて倒れてしまい

各組一枚一組（全部送料共）

[illegible]

クタクタになった私は、汗と土にまみれて看護婦の足許にひれ伏して哀願し、頭をスリッパで踏みつけられて、やっと赦して貰ったのでした。

(続く)

(続)

(緊縛のイメージ)――

縛られた

インテリ令嬢

浦田 紀夫

その一 女子学生

五月十五日付「週刊読売」誌は、全学連ナ
デシコ——流血デモ第一線の女子学生たち

——という題で第一ページに、警官隊にゴボ
ウ抜きにされる女子学生の写真を載せ、続い
て女子美術大学自治会委員長、下土井芳子さ

ん(二〇才)の一問一答と写真を載せて居ま
す。

私は彼女等の行動の是非は判らないし、そ
う言うことは別として、この写真は非常に魅
力的です。若い、一見してインテリのお嬢さ
んの女子学生達が、警官に荒々しく腕を掴ま
れ美しい顔をのけぞらせて跳き、服も乱れ、
喚きながら引きずり出されて行きます。次の
瞬間には、両手錠がガッチリと固く、抵抗出
来ない様に、そのほっそりした両手首に喰い
込むまで嵌められるのでしよう。下土井委員
長は羽田空港で捕縛された様ですが、その両
手錠姿が見たいと思いました。

若さを爆発させるこれ等女子学生が、あま
りの抵抗に手を焼いた警官によって手錠を嵌
められるだけでなく、捕縄で後手にしばられ
叫んだり騒いだり出来ぬよう革の防声具を嵌
められ……あの方方は防声具の用意が少いた
め応急に白布で猿轡を嵌められて五、六十人
も国会前から珠数つなぎに曳き立てられる処
——美しい理知的な顔は興奮に歪み、つばら
な眸は血走り……そういう光景を想像して見
ました。

その二 シンプソン女史の遭難

四年程前でしたか、ベルギー領コンゴの奥

地で地質調査をしたアメリカのジャネット・シンプソン夫人（博士）の冒険旅行記「サヴァンナの彼方」の中に、ジャネット女史が誤解から土人に捕えられる処が出て来ます。

ジャネット女史は、アフリカの背を没する草原地帯で探険隊からはぐれ、土人に捕えられ、両手を縛られて（恐らく後手でしよう）

土人部落へ攫われて行きます。そして手足を縛られて酋長宅の小屋に監禁されますが、二日目に部落へ到着した探険隊が、指輪やガラス玉と交換に彼女を救い出します。そういう記述でした。

他の記録には随分、軽妙な筆致のジャネット女史が、これだけは一つのエピソードとして実に簡単に記述して居る処を見ますと、この思い出は女史にとって決して楽しいものでなかったのでしょうか。そこで私は想像します。



この美しい三十代の婦人科学者（ジャネット夫人は一九一八年生れといいますが、この探険の時には満三十六才だった訳です）は土人に捕えられると、きつと藤ヅルで後手に縛された上、声を出して救いを呼ばぬよう。汚ないぼろ切れで猿轡を嵌められたでしよ

う。草原や谷間を小突かれ引っぱられ、よるめき躑きながら行く彼女の心中は、どんなであつたでしょう。感情を顔に出す白人だけに夫人は泣きじゃくっていたでしょう。そして部落について、部落中が白い美しい獲物に歓呼の声をあげる中を、小屋につながれます。

この本の巻頭の写真の服装では、夫人は淡色（恐らくベージュか淡オレンジでしょ）のシャツ・ブラウス、そして男のような革長靴に白ヘルメットを冠って居ます。縄は、その長身の稍々細っそりして居るが逞ましい肉体にそして革長靴のスラリと長い両脚に容赦なく噛み入ったに違いありません。

二日間も縛られて居ながら、これ程センチシヨナルな冒険が何も書かれて居ないところを見ますと、この四十八時間は夫人にとって何よりも苦しく悲惨なまでに辱められたのでしよう。

絶望と、縛しめの苦痛と、生理的要求は夫人を苛み尽したでしようし、最後には夫人は服を剥がれ裸にむかれて縛り上げられ、屈辱に殆んど失神して居たのではないでしようか。

縄を解かれて味方の手に引き渡された瞬間金髪は乱れ、ととのった顔は土色に歪み、服は破れ、しなやかな両手には縄目の痕が紫色に、幾筋も痛々しく刻まれた夫人は、そのまま隊長の腕の中にガックリ倒れかかり気を失ってしまったに違いありません。

その三

縛られて一番痛々しいのは、何といっても

弱々しいインテリ女性、それも良家の令嬢であり、精神的にも苦勞せず育った彼女等が一番、思いもよらぬ環境に打ち挫かれるでしよう。

そして一方、彼女等の教養は、その中で必死の抵抗をします。最後まで乙女の誇りと身だしなみ、美しさを守ろうとするのでしようし、また、あるものは自尊心を持ち続けようとするでしよう。あるものは自分の人生観、信念を、何とかして支えようと耐えるでしよう。そしてまた、あるものはドライに割り切つて運命に諦め身を任せ、初めから苦しければ泣き、痛ければ、もがくでしよう。そしてそれが限界に来る時、彼女等の多くは屈服します。

生理学的条件はドツと進んでしようし、もう見栄も外聞もなく、身もあらぬ思いで彼女等は泣きじゃくるでしよう。あるものは息たえだえに耐えて気絶するでしよう。

派手なフレアー・スカート、派手な大きなカラーのジャケット、アイラインを引き、アイシャドウをし、ブーフアン・カットの髪、爪を桃色にマニキュアし、バックレスのハイヒールに長手套といった派手な女性。またロングヘアに黒のセーター、細いシルバー・グ

レイのスラックス、黒いストッキングに腫の細い黒の中ヒールといった女性。こういう若々しい派手なのがあります。

又、スーツにタイト・スカートかプリーツのスカートをキチンと着、一〇デニールのストッキングにハイヒール。白手套、ショートカット・ヘア、淡いピンクのルージュ、と言つたオーソドックなスタイル女性。シャツ・ブラウスにショート・スカート。白ソックスにロウヒールと言つた。スポーティな女性。中にはグレイやベージュのアノラックに男のような裾の広いスラックスを穿き、割合、濃い色のストッキングに同じ色のロウヒール、男物のような腕時計をはめる女性など。又、ブラウスなしにシュミーズの上に、じかにシルバーグレイのスーツ、タイト・スカートを着た女など。

かと思ふと、茶のスーツ、ギャザー・スカートに、スーツのウェストをバンドで締め、茶のボンネットを稍々長めの髪のうちろに載せ一〇デニールのシームレス（縫線のない）透き通るように艶やかなストッキングにハイヒール、白手套といったエレガントな女性。また、グレイのスーツ、スカートの黒ストッキング、黒ハイヒール、黒のボンネット、黒

手袋と言った姿もよろしい。それに白い大きなカラー、黒のワンピース・ドレスに黒ストッキング、又は純白のナイロン・ストッキング、黒ハイヒール、白手袋といった女性も実に落着きがありエレガントです。こう言う女

はルージュはつけないかピンクがよろしい。最後に比較的、身なりを一見、構わない、紺のスーツ、スカートに白ソックス、白のスポーツ・シューズ、あるいはグレイのサックドレス式なジャケットやセーターに、紺や格

子縞のスカート、ストッキングに白のスポーツ・シューズ、と言った型があります。しかしこれ等は化粧もせず、目立たない中に自然の美しさと綺麗な肌を、かえって引き立たせて居ます。

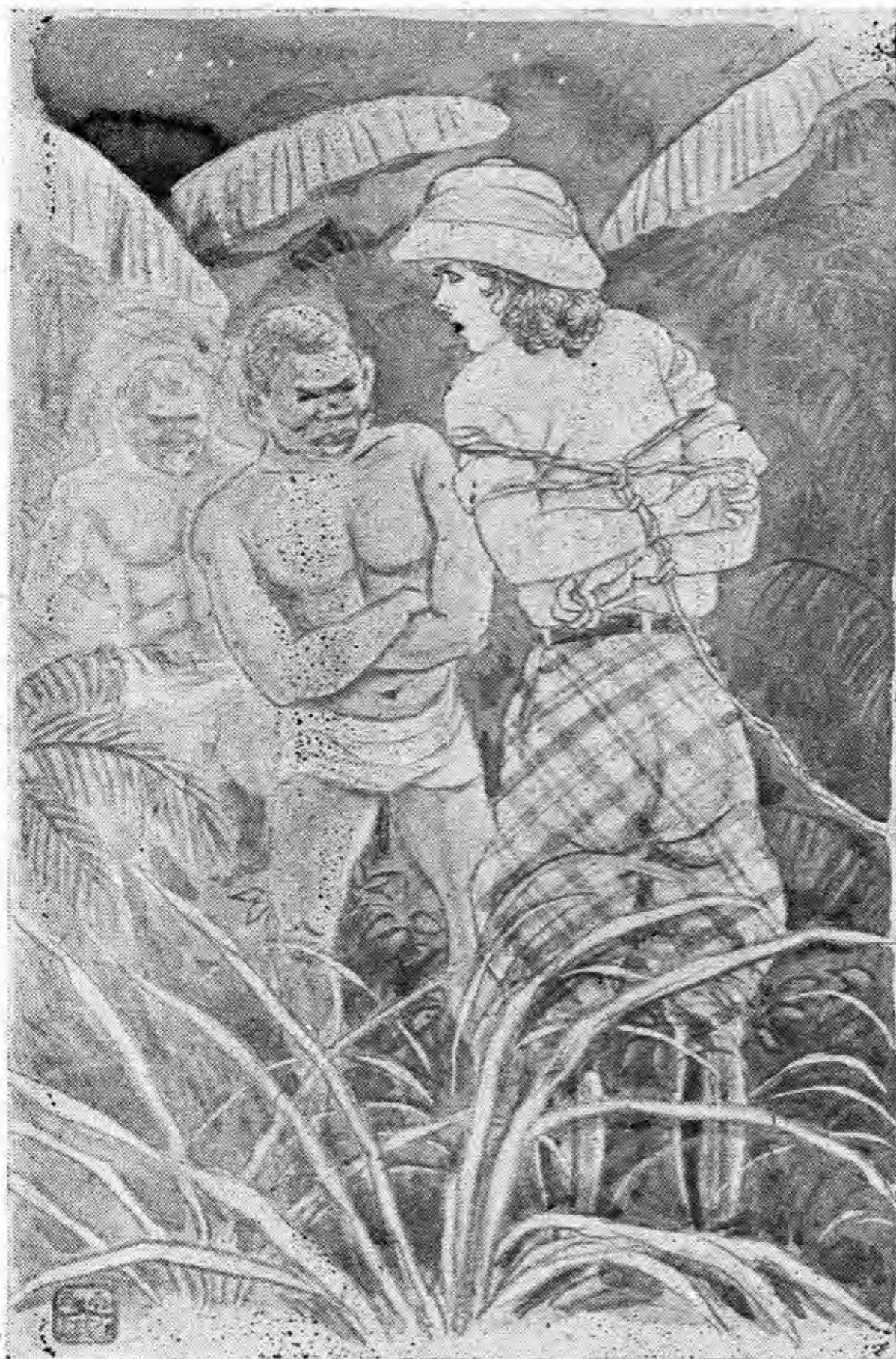
こんな女性達が縛られる姿。

それぞれが、この服装のまま手足を縛られ拷問される姿。先に書きましたように、それぞれの反応を見せる処。本誌には、こういう弱々しい中には必死に跳ぐ姿が欲しいと思います。裸の変わったスタイルを追うのもよろしいが、極く普通の堅縛のスタイル(両手両足しぼり、猿ぐつわ)で色々な服装(勿論、キチンとしているばかりでなく、乱されて)泣き叫び、耐え、拷問されてる処が欲しいと思います。

その四 アルゼリア

の婦人斗士の拷問

実話雑誌、昭和三十三年八月号と同年三月のサンデー毎日にはアルゼリアのジャンヌ・ダーク「ギロチンを免れた女子学生」





縛りは

貴重品たれ

志可透部宮

私は、サドの範疇に入る性格の持主であることを自認してから久しいが、今だに女性の自由を奪うための縄を手にする機会に廻り合わない。否、機会があったのだが条件が揃わずに果さなかった、といい直そう。

私も人並に、今までに接した女性は幾人かあった。妻を別としても、社の女事務員、初恋のヒト、うるさく追い廻わされた女、飲み屋の仲居、キャバレーのツワ者、転び芸者から、その昔の純然たる夜の花まで、数えあげれば思い出す顔だけでも相当にある。といって、何もこんなにモテタンだぞという積りではない。その幾人かの女性の内の大部分が強行さえすれば縛り上げ得たであろうに、私は縄を手にし得な

かった、といたいいたためである。

本誌増刊(S特第四集)に「彗星の苦衷」(大竹与市朗)なる小説が掲載されていたが、作者の主張が、私にはよく判るような気がして、何度も読み返したものだ。だが、物事には総べて、チャンス+タイミング+アーティクルズ(条件)の三要素が必要であらう。ましてや、ことアブプレイとなれば尚更の事と思う。自身の欲求度、相手の気持、周囲の状況などの事柄から始って、実際にリケートな諸問題が、縛り一つにはついて廻るのだ。真にいささかも罪悪感なしにプレイを行い得る状況というものは、仲々成立することではないだろう。たとえ半身であるべき妻ですら、独立した人格を有する以上、みだりに強制は出来まい。相手の

という題でアルゼリアの女学生、ジャミラ・ブヒレド令嬢のことを伝えていきます。それによりますと、

ジャミラ・ブヒレドさん(当時二十二才)はアルゼリアの良家に育った女学生でした。フランスの領土であるアルゼリアでは、独立運動の火の手が盛んになる一方ですが、昭和三十一年秋、フランス人のカフェーが何者かによって爆破されたあと、ある夜、路上でフランス兵に怪しまれた人影が逃げ出す中を発砲され、地べたに倒れました。

それが当時二十二才のジャミラ・ブヒレドさんでした。ジャミラ・ブヒレド令嬢は直ぐさまフランス兵に手錠を嵌められ、肩に傷を負ったまま捕縛連行され、取調べを受けました。所持品をフランス憲兵が調べますと、紛れもない反仏民族主義としての秘密書類が出て来た。彼女はレボだったのです。

こうして彼女は訊問され、拷問を受けました。彼女は語る。

「いきなり私は羽がいじめにされ、服を脱がされスリッパ、パンティまで剥ぎとられました。そして板のベッドに仰向けに縛りつけられました。殴られ、踏みつけられました。何かが私の乳房に……途端に私は物すごいシヨ

嫌がるのを無理矢理に苦しめる”のがサドの真価かも知れないが、プレイとしては私は賛成出来ない。従って陶醉するどころか手も足も出ないのだ。

本誌を毎号飾るモデル嬢達のように、職業的に縛らせてくれるヒトが眼前に現れたとしても、それはあく迄義務的な演技であって、私のような、真に精神的融合によるプレイを希むムツカシ屋には酔い得ないだろうと思う。写真部の方々も、プレイ的な気分の有無はとにかく、読者の目を楽しませるための苦勞ばかりで、灼熱の鉄塊を扱うのとは勿論、趣きも異なろうが、フォトを鑑賞する者が考えるような楽しみは、おそらく無いだろうと独り考えている。

日がな一日、寝ても醒めても、とまではゆかずとも、自ら縛られたいと希うマゾ女性を見出すことは至難なことだろう。女性には共通してマゾ的要素のあることは、体験からよく判るが、それと縛りとは、又別個なものではないだろうか。なればこそ往年のモデル、川端嬢や、古川裕子さんが本誌読者を熱狂させたのだろう。まこと星の数ほど女はおれど……の感が深い。

ともあれ、こんなことを考えている私は生涯“女性を縛る”などということは出来得ないだろう。おそらく不可能だろうと諦めている。しかしそれが本場で、世の大方のサド漢諸氏も同様ではないだろうか。

だといって、私は縛りに対する憧憬は捨て切れない。この苦しみを本誌によって発散させていた訳だが、近頃、類似模倣的な雑誌が売り出されて、初めはとびついたものだが、近頃、余り縛りが氾濫してもらいたくない気がして来た。

いっどこでも手に入ると思えば、折角の貴重品も価値が下るのは当然だ。ここで、どちらのフォトが優れているか、どの雑誌が真実のマニヤのものかということを書くのは止める。時間と読者の支持によって自ずと判明することだろうから。只、私としては本誌は本誌としてのペースを守って攪乱的なドロ試合に陥らぬよう、何時までも私の憩いの場としていつて戴きたいと希う一念から、かくは迷文を綴った次第なのだ。私は縛りはあくまでも貴重品であってほしい。当然のこと乍ら、稀少的価値を保っていて貰いたいと心から希うのだ。

ックに思わず自分でも訳の分らない叫びをあげて身をよじりました。電気です。心臓が止るようでした。続いて唇へ、手のひらへ、足の裏へ、腹へ……更に下腹部、太股へ、凄じシヨックが続きました。私は呻き、齒を食いしばり悶え苦痛に耐えかねて失神しました。」

彼女は軍事裁判の法廷で、そう語ったといひます。こうして彼女は「自白」させられ、昭和三十一年七月、死刑の宣告が下されました。しかし、あんまり酷いとエジプトやアラブ諸国やインドをはじめ各国の国民の反対助命運動で遂に昭和三十三年三月六日、ギロチンによる処刑の日の一日前、罪一等を減じて終身懲役で砂漠の収容所へ送られました。

ジャミラ令嬢は写真で見ますと、理知的な眼の大きな、濃い髪の美しい若々しい少女です。こんな美少女が、音に聞えたフランスのパラシュート部隊の憲兵の電気拷問を受け、縛られて跳き廻る有様は、どんなに残酷な痛々しいものだったでしょう。アレキサンドリアでも二十人の女優、女学生が牢獄で拷問を受けている。と朝日新聞に出ていました。アラブの国々のインテリ女性達は、こうして現実に緊縛の苦しみにのたうち廻っているのです。今夜も、きつとロープや鎖で縛られて……。

浣腸マニアの告白

私

の

浣

腸

春 村 玲 子

前回では、前置きが長くなってしまいました。が、いよいよ、本論の私の浣腸について述べさせていただきます。

以前、どなたかのレポート?の中に、グリセリンを二倍の水に薄めて……というのがあったようです。私も二倍の水で薄めてみたことがありましたが、私の場合、グリセリン独得の、あの激しい効めが感じられませんでした。まるで拍子抜けをしてしまって、薬液が水増しのインチキ品ではないかと疑問を抱き、比重計で濃度検査済みだという薬品と買い代えて使用致しました。用量は五〇cc対一〇〇ccでした。いずれも、三、四日の便秘

症状の後の施薬でしたが、結果はいつも同様でした。

私は、この奇妙な苦しみの魅力にとりつかれて、大体十二才頃から現在まで、実施回数には左程多くはありませんが、とにかく続いております。だけど決して我慢強い方ではございません。むしろ正反対ですが、だからこそこんな結果が出ますと、特異体質か?とか、習慣性による悪症状か?などと心配でなりません。マニヤの方の実験結果や御意見をお伺い致したく存じます。

それとも、水で二倍に薄める、というのは、等量の水で薄める、という意味なのでしょう。

うか。

私にとって満足すべき効めあるのは、多くとも一・五倍以下の混水の場合のみで、一・七倍になりますと、もう駄目です。普通、五〇ccのグリセリンに対し、水五〇ccの割合で使用致しますが、忍耐力の方は、四、五日の便秘症状でせいぜい五分位。十分となると、少しむづかしいようです。

尤も、いつも独りで行うのですから、強制されることがないだけに、我慢のしかたが生ぬるい関係もあるだろうと思います。

姿勢もいろいろと考えて、実験したこともございます。

一番手間の掛ったのは、「逆さエビ」の姿勢でした。お風呂場に数日前から長時間、無理な姿勢が保てるように紐を張り渡して置き、色々試験した上で、一〇〇ccの混水グリセリンを使って、両膝が床タイルに着く程徹底した

姿勢をとり、両足首を紐で固定してしまったものです。

初めは逆さの腹圧の関係か、無理な姿勢による苦しさは別として、肝心のグリセリンの効めが案外ないのが意外でした。五分も経つ



京子 絵

頃には、目的の効果よりも、この奇妙な姿をだれかに見られたら、という気持の方が強く働き、家中の錠は下してあったのに、どこから、誰れかの眼をしきりと感じてしまっただ目でした。小心さのなせる錯覚に怯えてしまった訳です。

以前、羽村京子様のご告白文にも、この種のポーズが出てきたことがありましたが、私は、その文の発表より以前に行ったのですが、失敗？した後で、この文を読ましていただき、羽村さんの天才的なアイデアと実行力、独創性の斬新さに驚異と讃嘆をしたものでした。そして、御理解ある御主人との御家庭を何よりも羨しく感じています。

次に、一時売り出したイチジク型のオロナイン浣腸器を試用してみたのですが、恰度、グリセリンを二倍の水に薄めたときと同じような結果しか得られませんでした。

この時、大人用を一度に二個使用したのですけど。やはり私自身の体質が、薬品に対して鈍感になっているのでしょうか。

この浣腸器は、容器がポリエチレン（みたいなもの）で出来ているため、胴の部分 が柔らかく、内容薬を十分に押し出すこと

ができて、在来のセルロイド製のものより、一歩前進した改良品といえましょう。しかし、薬液の稀薄(?)なのと、それに嘴部が、全々研磨されてなく、(容器製造のとき、溶解原料を、容器の型器に流して固めたものらしくて、その接合部に凸凹が相当に鋭どくついている)うっかりすると怪我しそうで、私は全部ヤスリで磨きました。その上に、宣伝ではパテントを出しているそうですが、その「嘴部の滑剤油脂」なるものも殆んどついていません。出廻り初めのころは、容器も滑剤も良いものだと思いましたが、売れ出すと製品検査の手間を省いたのでしょうか。その故かどうか、とにかく近頃は姿を消したようです。

また、食塩注射ならぬ「食塩浣腸」をしたことがあります。この時も、例によって五日ばかり用を足さず、約一リットルのお湯に小さじ五杯位いの食塩を溶かして試してみたのです。

約二〇〇cc程で、激しい効きめを感じて驚いてしまいました。それまでは、食塩水といっても、普通のお湯と同じようなつもりでいたので意外でしたが、それでも、タカをククッテ、五〇cc入りエネマ・シリンジ(ピスト

ン型)で七〇〇ccも吸収した頃にはついに、ネを上げてしまいました。

この場合、とても我慢する余地のないみたいなもので、念願の「独得の苦しみ」など、とても味わえるものではありませんでした。もう二度と、食塩水は使用すまいと思ったものです。

それから、心から敬慕する大先輩?の羽村様のレポートにもあったようですが、私も一度、お酒をのんだことがございます。全く好奇心だけから出たアイデアだったのですが、日本酒のおち、ヨコ三杯分程を一合程の水で薄めたものでした。すると、やはり酔ってしまったのです。全身が火照って奇妙な気分になったことを覚えています。

お寿司屋さんでは、生きているアワビにお酒を注いでから蒸すのだそうですが、この時のアワビは、苦しきまぎれだか、或いは酔っぱらってだかはアワビに訊いてみたことがないのでわかりませんが、グニャグニャと激しく踊るそうです。私は、このアワビ踊りもまだ一度も見ることがありませんが、お浣腸後の私のお腹の中では内臓器官が、このアワビのようになっているのに違いありません。

最近のニュース映画によりますと、お腹を

切開せずに消化活動を見られる撮影機が出来たそうですが、こんな機械で、自分のその時の状態を見てみたいものだと思います。

更に保健衛生の教材として、広く紹介されテレビなどで放送されたら、どんなに素晴らしいでしょう。玲子は学校をサボってでもテレビの前から動かないことだろう、などと、独り秘かに空想してしまいます。

よく胃ガンの場合、酒、油、脂肪、砂糖などの多量摂取が原因だといわれています。もしそれが直腸に影響するものなら、パセドウ氏病の場合、排便中には油、脂肪はそのまま含まれていますから、直腸ガンとパセドウ氏病と関係ある筈です。糖分の場合、腎臓ガンと糖尿病と関係あるでしょう。又、グリセリンとは無関係に、便秘による発生有毒物質が直腸ガンを誘発するものとすれば、都会と農村との直腸ガン発生率と、グリセリンの販売状況を比較出来れば、ある程度究明されるのではないのでしょうか。冬の農村婦人には便秘症患者が多いと聞いています。

又、別のニュース映画で、ウサギの耳に毎日コールドタールを塗ると、八百日目にはその部分に異状が起り、ガン細胞が発生したという実験結果が発表されていました。それによ

って「ガンは化学的刺戟によって発生する」ことが立証されたそうです。

それなら直腸ガンの原因はどのようなのでしょうか。私のような浣腸マニアにとっては、全く他人ごとではありません。浣腸という魅力のある魔物にみいられている私は、今後、おそらく生ある限り、この魔力から脱けられまいと思うだけに、実に恐いことです。

直腸ガンというものは、単独に発生し得るものなのでしょうか。それとも、咽喉、胸、胃、腸、肝臓などに発生したものが、直腸に転移して始めて発生するのでしょうか。あるいは、長年のグリセリンや、便秘症に対する化学的刺戟によるものなのでしょうか。また、グリセリン以外のものでも危惧があるものなのでしょうか。

私のような、救いようのない浣腸の囚虜はこういうことが一番の気懸りなのです。

どなたか、常識的な考え方ではなく、真にマニアの身になって研究して下さいお医者さまはいらっしゃらないのでしょうか。とにかく、その映画を観てからというものは、ガンが恐しくて、薬液は用いずに専ら、二、三〇〇ccのぬるま湯で我慢しております。プレイはどうしても諦められません。

やはり、私も命は惜しい。病気になるのはいやです。健康状態でプレイを楽しみたい、否プレイを楽しむために健康を保っていたいです。

それから「日本週報」によりますと、朝鮮動乱中に、中共側の拷問中に「浣腸責め」というのがあったそうです。水道からゴムホースで水を注入し、被拷問者は、胃の中のものに圧力で押し上げられ、吐くのは勿論のこと胸にまで水が入って息も出来ない程の苦しんだそうです。

玲子がいくら熱烈な浣腸マニアとはいえ、

こんな本当の「拷問浣腸」の苦しみはマッピラです。マゾ的羞恥心を程よく強調したロマンチックな感情が何よりも必要で、それがなかったら意味はありません。

でもこれについて、前もって催下浣腸を施すのか？。どんなホースで、どんな開口部を用いるのか？。水圧と流量はどの程度か？。それから、途中、何度も吐いたり、むせたり気絶したり（するでしょうが）しながらも何時間ぐらい行うのか？等の疑問が湧いてまいります。どなたか、詳しい資料などお持ちの方が居られたら発表して戴きたいものです。

新浣腸写真案内

モデル 大塚啓子

大手札印画紙焼付
四枚一組各三〇〇円

イルリガートルの

嘴管による浣腸

四枚一組

(略号「ちい」)

黒蛇のようにウネウネとうねってゴムの管は恐怖の浣腸液を運んでくる。嘴管がマニヤの心をひきつけるように目の前で光っている。

エネマシリンジの

嘴管による浣腸

四枚一組

(略号「ちえ」)

ゴム球を握るたびに一端から浣腸液は絶え間なく送り続けられる。啓子嬢の手の中にあるエネマは妖しい曲線を見せてマニヤの心をゆさぶる。

硝子製三〇〇C

シリンドラによる浣腸

四枚一組

(略号「ちか」)

白い硝子冷たい感触は乙女の手の中でにぶい光を放って浣腸液を吸い上げ、シリンドラの先からはフツフツと白い液が玉になってころがり出る。

連載第三次元小説

影
の
国

雪 俊 遙

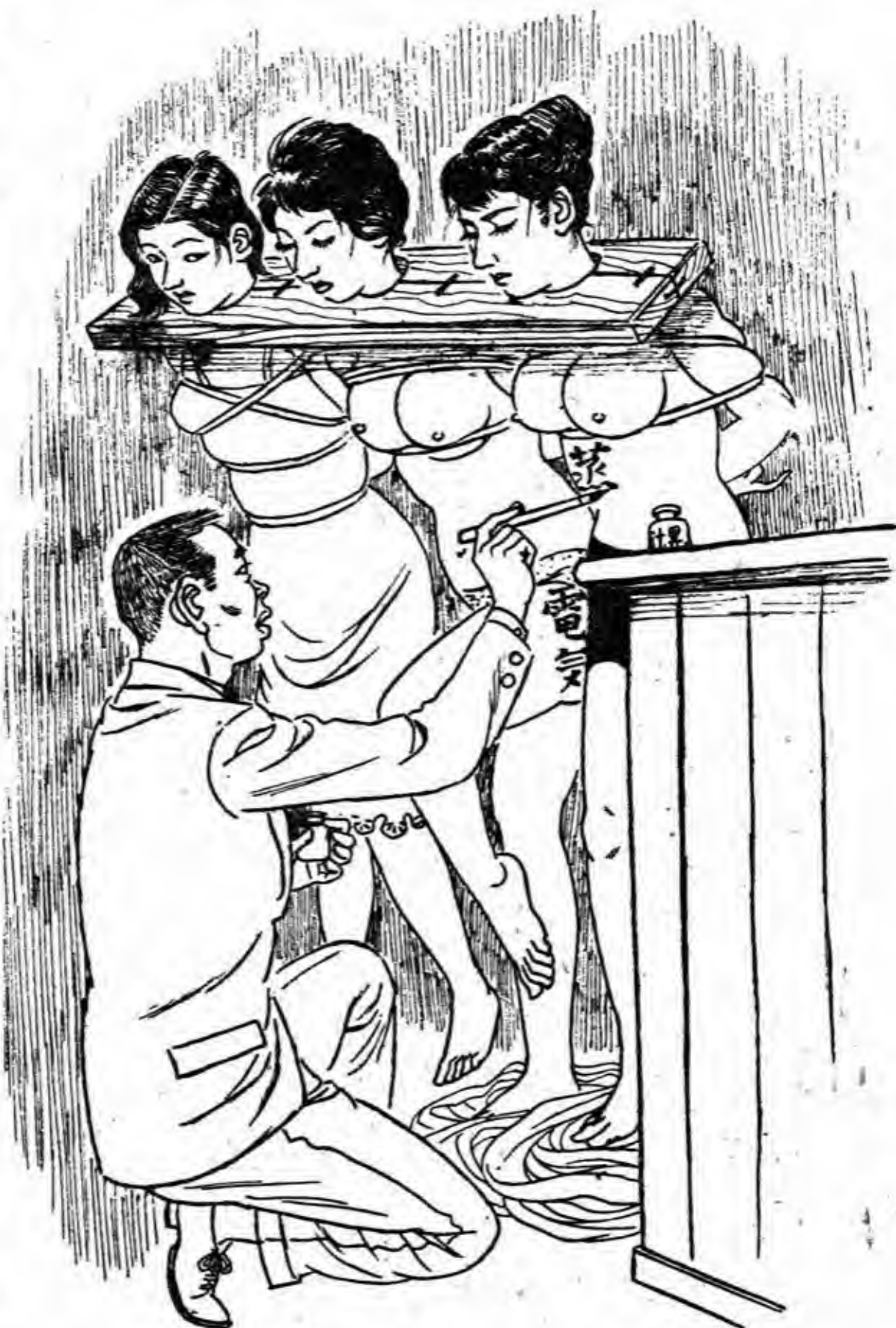
第十章 リンチされる女

中村八重子と前田憲子は二時頃、研究室を出て市境の八幡川に掛る橋の方へ向った。その日は、金の城、事件の三人に地裁の判決のあった日である。二人は午前中、研究室でテレビを見ていた。後手に括り上げられ、地裁の床の上に跪いて判決の宣告を聞く三人の拷問やつれのした細い首には、見るからに重そうな厚い樗の首枷がはめられていた。枷は長さ三米もあって中に三つの穴があいて居り、三人で一枚の首枷の中に首を入られていた。宣告が済むと、三人は立上らされて、書記官が座長の胸と背、類子の腹と腰に大きく墨

で、蒸焼と書いた。珠子は太腿の周囲に、電気と書かれた。そうして三人は外へ追い出された。腰の後にサーベルを突きつけられながら、並んで地裁の周りを一周した後、徒歩で一時間かかる日の出町駅広場まで行進し、駅前から三人が三方に別れて区内の目星い道という道を曳廻され、明日の正午に再び駅前広場に戻って、そこで刑が公開執行されるのだ。

八幡川の方面には珠子が連れて行かれたが、八幡川に架かる大きなガス管の上を特に歩かせる余興があつて、ガス管の上に這わせてある鉄条網に近くを通る高圧線の電流を通して、その上を跨いで歩かせるというので、万一の場合の為に武林研究室から特に二人が出張する事になった。

「『金の城』事件では結局、劇場の主宰者と支配人が悪いんでしょ。それなのに体刑を受けるのは責任のない二人の奥さんなのだから矛盾してるわねえ。法律では夫妻のどちらかに罪があった場合、経済的な罰は夫が引受け、肉体的な罰は妻が受ける。家族の罰は年頃の娘が代表して受け、娘が居なければ母親、というのが治安事犯



者を多く扱うと、すぐ自発的に電気の原理を勉強し、機械の操作にも習熟した。それが、武林先生の目に留って引立てて頂いたのだ。真面目に努力し、常に自分の境遇に感謝して謙虚な心さえ失わなければ、世の中はきつといい様に拓けて来る。という人生観を確信していた。女権党などというのも、男の前に受身である女の本性を忘

の原則なんだって山口さんが言ってたけど、法律なんて男の人が作るものだから、男の人のいい様に出来ているのねえ」
憲子は若い娘らしく、しきりに憤慨していた。

「でも国民が皆認めている事だから仕方がないわ」

麻紐でぎりぎりと縛り上げられていた珠子の姿を思い出し乍ら八重子は年上らしく答えた。
実際、自分も女だが、大勢の見物人の前で仕置されてヒイ／＼泣く罪人は、女の方が見た目に美しいと思うのだ。その癖、自分もそんな破目に陥るかもしれないという可能性については殆んど考えていない。

看護婦の職務上の事は真面目にやっていたし、電気責めの患

れて不逞な男性支配の夢に憑かれた女達で、そんな女が、この世の権力を握っている男達の手で責められ、処刑されるのは当然だと思っていた。

憲子はバカにした様な顔で沈黙した。

八幡川の土手に着くと、工兵隊の一分隊がガス管に巻付いた鉄条網を、歩き難い様に模様替えしていた。北の方から送られて来るガス管で、付近、数区の全家庭にやがて配られるのだから、大人二人でも抱えきれない程の太さで警備も厳重だった。すぐ傍の橋の上には、もう気の早い弥次馬が集っていた。

高圧線工事が終ると、間もなく土手の向うに一塊りの人間が現れた。近附けば近附く程、一塊が大集団になった。珠子は、その真中辺を後手に縛られて歩いていった。白い裏側を見せた両脇が反りかえる様に肩の方まで捻上げられ、手首の縄尻は、俯向けでない様に髪に吊り結んである。膝の上から急に肉づきを増した両足の前と後に、電気という大文字が書かれ、外側には朱で、左に有、右に罪、と書いてある。一足毎に六つの字が軽く踊って刻々に形を変える。

地中を通して来たガス管は、大きな川にぶつかって垂直に伸びて空中に出、水面上を橋の様に通されている。垂直部は三米程の高さで鉄梯子が附いているが、後手の罪人は昇る事が出来ないのでクレインで一旦、高々と十米も吊上げられ、それからガス管の端に吊下された。

それからが観物だった。高圧電流を通した鉄条網はわざと高く張ってあったり、足が間に踏み入れられない程何米にも亘って接近していたりした。大勢の人に見られ乍ら、そんな所を渡らなければならぬというだけでも恥しい事なのに、その上、珠子は或る時は大き

く足を上げて辛うじて線を越したり、何米にも亘って爪先だけをやっと立てて歩いたり、それも難しく、五回も六回も続け様に、百二十度位の大股で、線を纏めて跨いで行ったりした。流れの丁度、真中辺でうっかり下を見た時には、目の廻る様な急流にひきずりこまれそうに思わずクラクラとした。手首を髪に吊られているので下を見るのがとても苦勞なのだ。どうしても足許が定まらない時ぐっと下を向くと、後手が肩まで吊上ってキーンと痛む。そんな時、片足で爪先立ったままだと腰がふらふらした。よろめいて高圧線に一寸でも触ったら落雷の様な火花が飛んで、一瞬、漢方薬の標本の様な黒焼に変わっているのだ。群集は、そうなる事を期待している様な顔で、珠子がふらつくたびに、どっと囁し立てた。西陽に朱く照らされて、珠子の白い顔や背は、膏汗の反射で琥珀にキラ／＼光っていた。足の裏にも、じっとり汗が滲み出て、時々足が滑った。

やっと渡り終ると廻れ右をさせられて又、渡って帰れと言う。群集の惨さに泣き乍ら、珠子は猿廻しの猿の様な危い恰好で又、ガス管の上を歩き出した。何回も途中でうずくまってワッと泣出したかった。もう死ぬかもしれないと思って、母親の顔を思い浮べ目を閉じ、心を静めた。それから又、そろ／＼と歩き出した。やっと渡り終ると、あの残酷な群集が拍手喝采して賞めてくれた。珠子は少しも嬉しくなかった。クレインでもう一度、高々と吊上げられると、足の下の大群集が囁し立て乍ら一人残らず珠子を見上げた。珠子は急に恥しさがこみ上げて来て宙吊りの身をくねらせた。電気、有罪と書かれた大きな字が水に浮んだポスターの様に揺れ動いた。

翌日は日曜で、しかも絶好の公開処刑日和なので、駅前広場は、区内はもとより首都全体、更に近隣の村々からまで見物人が押し掛

けて、朝早くから大変な混雑だった。

午前六時。処刑の立会人として、金の城、専属の六人の踊子が曳かれて来た。彼女達は皆、犬の首輪をはめられ、八時まで罪人の代理として、見物席や刑場を四つん這いで歩かされた。

それから刑場の真中に縁台が出され、背の順に一人宛寝かされて四肢を台脚に縛りつけられた。最初は若山久美。彼女は観念して五尺四寸の美事な体を仰向けて寝た。手首足首が荒縄で縛られ、遅ましい胸にピシッピシッ、と舌が打下された。

「ひとおつ。ふたあつ。みつつ。……」

観衆は大声で数を算えた。舌は唸りを立てて隆起した胸からくびれた胴へかけて振り下ろされた。膝まで叩かれ五十で中止しようとする、

「背中もやれ」

「百まで打て」

群衆が騒いで石を投げたりした。

「お静かに願います。この娘達は立会人で罪人ではないのですが、皆様方が特に熱心に朝早くからお出掛け下さったので、特別サーヴィスとして這わせたり叩いたりして、時間潰しのお慰みに供しただけなのです」

婦人警官の甘い声が呼び掛けたが

「時間潰しなら百までやれ」

騒ぎは一層、烈しくなつて収拾もつかない。遂に久美は俯伏せに載せ直されて答を当てられた。三年間、踊りで鍛え抜いた逞しい強健な体も、無数のみみず腫れで全身が腫れ上った。久美は熱っぽい顔で、うんうん呻いていた。

久美の次には照代が背中を剥かれ、ピシピシと叩かれたが、この二人で意外に時間が取られたので、他の連中は答打ちを免れた。

早くも十時になって、処刑の準備は開始された。刑場の裏正面に六基の礫台が立てられ、六人は十の字姿で括られた。久美は深紅のパンティをはき、照代はブルーのパンティ。ナナは葡萄色。エミは黄。桂子は紫。ユカは白と、ストリップパーらしく皆華やかな色彩のパンティ一枚に剥かれた。

刑場の真中に余り深くない大きな穴が二つ掘られた。底には砂を敷き、その上に丸太を組んで台型の槽が出来た。首の部分に棒が一本立てられ、足の方は垂直に高くなっている。傍には山盛りに砂がトラックから下された。二つの穴の間には天秤秤に似た奇妙な形の拷問柱が立てられた。

十一時三十分。少し早いが類子が戻った。刑場を一周した後、左側の穴に入れられた。長い曳廻しの間に屢々答を当てられて、彼女の白い恰好の良い背は赤く腫れ上って完膚がなかった。後手縄を解かれると、その下だけ腕の形をくっきり残して白い膚が現れた。ごつごつした丸太の台に仰向けに寝かされると、小さな口から呻きが洩れた。顔を起して首を棒に縛りつけられ両手は拡げて縛られた。脚は垂直に立ち、L型の台に括りつけられた。膝から先は穴の上に出た。天秤秤の様な拷問台の左側の金属皿に足首を結えた荒縄が繋ぎ止められた。類子は不安そうだ。

、四十分。座長が到着。右側の穴に類子と全く対称的な姿で縛りつけられた。

五十分。珠子。彼女は天秤の下に立たされた。後手縄が解かれ、両手を前へ上げさせられた。腋の下と頭髮、胸と肱と手首を縛られ

てそのまま垂直に吊上げられた。予め鉄梯子に乗って待構えていた二人の刑吏が、吊上って来る珠子のバタ／＼と泳ぐ脚を掴んで鉄の秤皿の上に片足宛載せた。指の附根と足の平と足首の根本を荒縄で括りつけた。吊縄が全部外されると、高い空で珠子は両手を前に伸し、二つの秤皿を踏んで立っていた。左側の刑吏が珠子に細い丸竹の筥を当てた。

ピュシッと、厳しく短い筥音が肌に鳴った。

「腕を下せ」

言われた通りにすると、右からも飛んで来た。ピュシッと、これ

は白い白膠木の筥。

「後へ手を廻して手首を組み合わせろ」

ピュシッ。又、一つ。左の丸竹の筥。

「腕を深く。肱で組むんだ。」

ピュシッ。又、右の白膠木の筥。

「もっと深く」

ピュシッ。

「もっと深く」

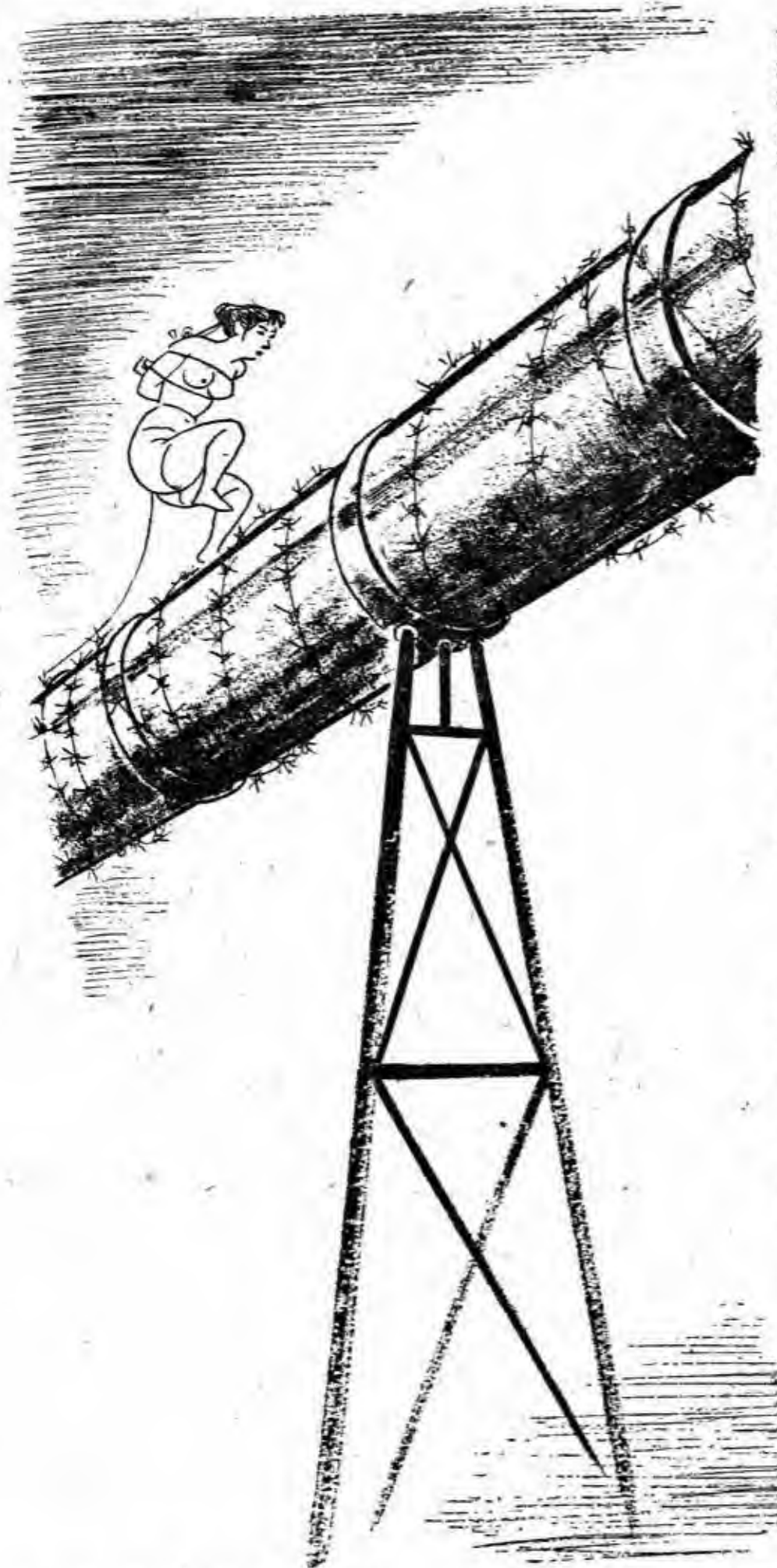
左右から竹と白膠木の筥で責められて腕を深く後手に組むと、天

秤の棒が胸に喰い込み背中交叉した肱が縛られた。

縄尻は長く下に下され五、六貫もありそうな四角い石をつけられた。

十二時。拷問開

始のサイレンが高々と鳴る。黒い制服の刑吏達が八方から台上に寝かされた女の身体にスコップで砂をかけた。受刑者がみる／＼砂に埋って行



く。五寸程の厚さにかぶせると、女達は首と脚しか地上に出ていなかった。生埋めされた生首の生々しさ。白い額に細く髪が垂れている。二人の刑事がその後にはしゃがんで真黒な絹のリボンで固く口を縛った。他の刑事はその間に首と脚の間の砂を均らしている。天秤上の珠子も同じ猿轡を受けた。三人とも色が白いので、光った黒絹の猿轡の美しさは一層鮮やかだった。

焰を吹くまで赤々熾った炭火がスコップで次々に運ばれて、均らした砂の上に移されて行く。炭火は暫く新しい空気に馴染めず火勢を弱めたが、やがて互に火力を強め合って一層烈しくなった。ニョッキリ地上に出ている首は僅かしか動かさぬ。砂層を通して胸や腹を烈火に蒸され二人の受刑者は首を苦しげに前に傾け、後に反らせ丸くよじって悶えた。白い顔が顔前の火の山に焙られて燃えてしまった様に赤い。前髪がジリジリと焦げ、熱気とガスで時々クラクラ目まいがした。頭の中を銀色の稲妻が走る。滝の様な汗を流したがそれは皮膚から溢れ出る傍から乾燥しきった砂に吸収され、すぐ蒸発して砂はもう次の汗を吸っていた。

黒絹のリボンが熱を吸って何か熱い物を当て放しにされている様にピリピリと痛んだ。乾いた粘膜は亀裂を生じ血を噴いた。目も充血して真赤に腫れ上り、睫毛は焦げ落ち、流れ出る涙は目の縁で蒸発して、僅かな白い塩の粉だけを残していた。

とにかくも自由な両脚が、章魚の脚の様にくねくねと、くねり続ける。火に面した脛は真赤で、脛脛の白かった肌には、薄い紫とピンクの蛇紋が浮き出していた。

四本の脚が地上で踊ると、足首の荒縄に引張られて秤皿が縄の動く方向に動く。すると珠子は足を取られて重心を失い、錘の重さで

喰込む棒が一層強く下から胸を圧迫した。痛さと胸苦しさに、無我夢中で暫く溺者の様に宙であがいた。漸くの思いで元の体勢に復すると、下でその瞬間を見上げ乍ら待構えていた刑事が、台の下の電気釦を押した。

忽ち足の裏から強い電流がピリピリ全身に走る。思わず珠子が泳ぐと又、錘がズンと下る。珠子は必死に宙に悶える。その間も電流は体の内側を駆けめぐり、骨から骨へと走る。珠子の足の動揺につれて今度は砂からニョッキリ出た四つの脚が、苦痛にくねり乍ら右に左に引張られるのだ。

この怖るべき酷虐な公開刑は、死の様な静寂の中で進行して行った。薄い絹の猿轡は、犠牲者達の口元をびったりと覆い、何重にも巻かれていたので決して悲鳴を洩らさなかった。咽喉の奥がかすかに鳴るのだが、炭火のパチ／＼はぜる音に消されてしまった。数万の観衆は目を見張り、瞬き一つせずこの惨刑を見守っていた。無論、咳一つする者はない。炭のはぜる音だけが烈しい。珠子はヒクリ、ヒクリ、とけいれんを続けた。

一時丁度に刑の執行は終わった。荒縄を絶ち切り、炭火を運び出し、熱い砂を掘って二箇の生贄を掘出すと、濛々と立ちこめる湯気の奥で、座長も類子も、茹鍋から掬い出された章魚の様に美事に赤く茹で上って櫓台に括りつけられた儘ぐったりとのびていた。

珠子も踏んでいた天秤から下された。三人は警検医の治療を受けた。

死刑ではないので虫の息の座長と類子は戸板に寝かされて冷たいコンクリートの広場の晒の台へ運ばれた。珠子は頭がくらくらして何回も倒れたが、その度にビシビシと全身を竹鞭で殴られて立上ら

された。立上っても立上ってもすぐ倒れてしまうので晒台の所まで這って行かせる事にした。彼女は蒼い顔で這い始めた。途中で何回も地に顔を押し付けて烈しく吐いたが、不思議な事に幾ら長く吐いても口からは何も出て来ない。

失神した座長と類子の真赤に蒸された身体が長々と寝ている晒し台を前にして、街灯の鉄柱に珠子は括られた。麻縄が毒蛇の様に厳しく絡みつき締めあげられた。だらりと垂れた爪先は十糎程地面の上にあった。ぐったりと首を垂れて彼女は死んだ様に動かなくなつた。腕は縄もかけられず、だらりと括られた胴の前に垂れていた。「オイ、電気責めの後は、ぼーとしてると気が変になる女がよくいるんだぞ。しっかりしろ」

親切な刑吏もいるらしく、乱れた富士山型の黒髪をムズと掴んで可愛い顔を引起し、続け打ちに往復ビンタを喰わせたが、手を離すと、首が折れてしまった様に深々と又、頭を垂れた。刑吏は一寸心配そうな顔をしたが、群集は笑っていた。

その夜更け。広場の街灯は晒し台を白く光らせて真昼の様に照していた。流石に台の周りの人影は、すっかり減っていた。減った人影の間で話し声がする。

「なあ、今日はこの三人の後で大原の夫殺しの犯人が死刑になる筈だったちゅうじゃねえか。いってえ、どうなったんだい、その女は」
「あれはよオ。何でもよオ。どこだかの研究室へ生きた儘寄附されしまつたって言うぞ」

「なんだって生きた儘？。そんなバカな事があるか。夫を殺す様な女を死刑にしないなんて」

「どこにあるんだ、その研究室てえのは」

「何でも武林とかいう王立大学の先生の所だそうだが、詳しい事はおら、知んねえよ」

「畜生、人をバカにしてやがる。皆でそこへ押掛けて行って、あの女をリンチしてしまえ」

「おう、そうだそうだ。誰かその大学教授の家を知らねえのか」

「知らなくてよ。こうーッと、俺ッチに訊いて来い」

「リンチだ。リンチだ」

晒し台の辺りに屯していた浮浪人や酔漢の様な人相の良くない男達が歌うように怒鳴り乍ら広場を出て行った。夜の大通りを合唱は少しずつ大きくなり乍ら北へ進んだ。

「リンチだ。リンチだ。あの女をリンチしろ」

三十分経たぬ内に合唱は小流を渡って武林邸の玄関の前に来ていた。途中から加わった者もあって群集は既に最初の何倍かにふれ上っていた。二、三人の者が高い石塀を乗り越えて中に躍り込み、鉄の大門を内側から開いた。群集はワッと雪崩れ込んだ。少数の者が母屋に向ったが、大多数は研究所の建物を目指して蜘蛛の子の様に走り出した。

中村八重子はその時、丁度、研究所内の風呂に入っていた。実験用の人間達は始終、実験台に寝かされたままなので、その身の周りの始末や実験室のコンディション調整の為、三人の看護婦が交代で宿直する事になっていた。八重子は夜半に起出して寝巻のまま研究室を見廻ったが、冷え込む夜なので風呂を沸して入っていた。それが邸内の唯一の灯なのだ。

時ならぬ戸外の騒がしさを審しく思いながら彼女は体を洗っている

たが、門が打ち壊されて、
「あの女をリンチにしろ」

という叫び声を耳にして、アッと立上った。窓から見るとリンチ団の連中が蝗の様にバラバラ飛んで来る。この灯が頼りなのだ。

八重子は急いで肌着をつけると、浴室を飛び出した。しかし廊下をいくらか行かない内に、男達が向うに現われたので浴室内へ慌てて逃げ戻った。途端に後から足を払われた。濡れたタイルの上に転倒し、俯伏せの身も起せず戦っている、

「立て、女」

水道のホースでビシッと殴られた。

「アッ」

八重子は、あまりの痛さに、思わず立ちかけると、ぐいと身を捻られて横座りにペタンと座ってしまった。ビュウッと又、ホースが唸って横から飛んで来た。

「口をあける」

胸をビシッとしたたか叩かれ、何の事か分らず夢中で口をあけると、口中に濡れた石鹼を押込まれた。大きくて、とても全部は入らない。もう一度、ビュッ、ビシッ、と打たれた。

「食い千切れ。食い切るんだ」

ビシッ、ビシッとホースで滅多打ちにされて、とうとうあの嫌な味のする石鹼を、口の外に出ている所だけ噛み落した。その上から石鹼のついたままの濡手拭で猿轡をされた。

ビュッ。ビシッ。

「腕を前で組むんだ」

合掌すると、手首から二の腕へバスタオルで縛り上げられた。ピ

シリ、ビシリと背中へホースを当てられながら八重子は階段を上った。一段。ビシリ。又一段。ピシリ……と。

二階のモルモット控室の前は素通りして三階へ行く。体を薄い白布で覆われた女が、拷問台の様な実験台に太いベルトで括りつけられて、窓から差し込む月光の中に青く浮び上っていた。女は目を醒めていた。

「これか？ あの女は」

黙って肯くと、狂暴な思いに愚かれた男達はバラ／＼と馳け寄って乱暴に布を剥ぎ取った。胸と足の太いベルトをハンドルを廻して緩める。八重子は突飛ばされよろ／＼と廊下の外へよろめき、バタ／＼と倒れた。

ドサリと外された幅二寸もある革ベルトが放り出された。急いで立上ろうとした時、八重子を見た近くの男達が走り寄って来た。皆ギラ／＼光る血に飢えた獣の様な目で、恐怖にくねる八重子を見詰めている。

「この野郎」

一人の男がベルトを拾って、八重子をしたたか打ちのめした。

アッという悲鳴は口の中で空しく消えた。生れて始めての恥辱と激痛をこらえきれず八重子は体をくねらせ、くねらせ逃げ廻る。

ビュン！ ビュン！

怖しい唸りと共に厚さ一握の革ベルトが叩きつけられた。

ビュッ。ビュッ。ビュシッ。ビュシッ。

「アッ。ウーン。ウッ、ウッ」

濡手拭の猿轡の下で八重子はアルカリ臭い石鹼を噛み乍ら呻き、苦痛に歪んだ顔をのけぞる。前手に縛られた腕を胸に押当てた儘ころ／＼転げ廻る。

その時、中から台上に寝ていた女が曳出されて来た。夜気に冷えきったコンクリートの冷たい廊下を、転げ廻っていた八重子は、その蒼ざめた女の顔を見て、アッ失敗った、と思った。あの人は大切な預り物。あれを私刑されてしまったら、先生や桜川さんから、どんなに叱られるか解らないわ……。

しかし、その時、彼女は力一杯、殴打されて、

「ウウン」

消入る様な呻き声と共に失神してしまった。

大きな鞭跡の痛々しく腫れ上った八重子は、残った男達の手で、主を失った実験台の上に載せられた。

明々と灯がつけられ、その中で八重子は何時間にも亘って男達の打撲の的にされていた。

その一群を残した男達は、リンチすべき女を引立て同じ道を戻っていた。ワッショイ、ワッショイという勝ち誇った叫び声の唱和する何かに憑かれた様な男達の群の先頭を腕を胸の前でX型に組んで縛られた女が突きまくられ蹴られ殴られて、よろめき乍ら素足で歩いて行った。青白い足は、どこかで硝子の破片でも踏みつけたと見えて、血糊でベっとり濡れている。しかし女は恐怖の余りその苦痛さえ感じない様子で歩かされている。



ワッショイ、ワッショイ、ワッショイという喚声が遠くの方から聞え、次第に近附いて来た。その声が、街灯の鉄柱に括られて気絶していた珠子の意識を少しづつ覚醒させた。覚醒しても、強い電流を身体の中に通されて責められ続けていたので、頭はクラクラし胸の底がムカ／＼していた。肘や腕の関節が丸く腫れ上って、手足は力が入らない。

群集が、ワッショイ、ワッショイと夜目にも青白い、幽鬼の様な女を引立てて来るのを認めたが、すぐ珠子は又、意識が薄れてしまった。右に左に大きくよろめきながら曳かれて来る女の後から椅子が運ばれて来るのを見た様な気がするが、もう定かでない。

もう一度、意識が明瞭になった時、女は晒し台の上で、鉄の椅子に座っていた。晒し者の二人は地上に寝かされ、まだ失神したきり。女は腕を椅子に縛られ、胸には黒いベルトが喰ひ込んでいた。二、三人の男が台の上に乗って女の足を別々に太い針金で縛っている。太々と縮み上った様な美事な足が針金で幾らでもくびれて行く。見ていて小気味よい程だ。珠子は自分も晒されている事など忘れて、喰ひ込む針金の痛々しさを見守っていた。時々胸苦しさが思い出した様に身を責めた。女はポツテリとよく肥えていたが、若い娘ではない。三十代の女だ。明るい

街頭の中でよく見ると透き通る様に青白い肌をしている。肌を裏打する脂肪はのりきっているのだから、病気で青い訳ではない。長期間、陽の当たらない場所に拘禁されていたための青白さだ。それに細引で縛られた足首の上の方に、長い間、拘束具を付けられていた跡を明示する黒痣が、癌の様に不気味に染めついていた。肥った丸い身体付きは可愛いが、何となく、思想犯の女といった暗い感じが、その身体を包んでいた。

女は頭に鉄の帽子を冠らされた。帽子のてっぺんから電線が上に延びている。帽子の縁には尾錠が附いて、それで頭を締めつける様になっていた。後に廻った男が帽子を締めつけに掛った。ぐいと力を入れて締めると、弾みでガククリ垂れていた女の首が、ガクン、ガクンと揺れて、一瞬、その顔が前を向く。珠子は胸が潰れる程驚いた。その瞬間、又、頭がクラ／＼した。

ヘルメットを取り付けられた女は、帽子の横に付いた革紐で鉄椅子の首台に結びつけられて、スッカリ顔を上げた。頬のフックラした味瓜型の顔でオチヨボの口が可愛らしい。咽喉から下の皮膚の透き通る青白さに似つかぬ、顔面のまっとうな白さ。ふくよかな頬は、ほのぼのと赤味さえ帯び、朱唇は濡れた様に鮮やかに光っていた。どこかの健康な若い女の首を切つて来て女囚の首にすぐ変えた様な



錯覚さえ感じられた。化粧した顔なのだ。それは珠子の母、川島宮子だった。群集に襲われて気の動転した中村がリンチと言うのだから女権党の女なのだろう。と錯覚して、大事な実験を明日に控えて一人だけ別にしておいた宮子の身柄を引渡してしまったのだ。珠子はクラ／＼する頭に渾身の力を集めて電気椅子に載せられた母を救出する方法を考えて見た。しかし、どうすることも出来なかった。

群集は誰も滝川公子を本当に知ってはいないのだ。大原町の住民など一人も居ないのに、浮浪人や酔漢が附和雷同して人違いとも知らずに、宮子をリンチする気分になっていた。足を引っ括った針金の先と、鉄帽子のてっぺんの線の先とは電柱の線に結んである。一人の男が電柱の変圧器の上に乗って、安全装置に手を掛けていた。その手が一寸動けば、五百ボルトの電流が宮子の足と頭から同時に体内に流れ込みショートして黒焦げに焼けてしまうのだ。

川島夫人は人違いのリンチだとは露知らず、観念して若造りに化粧された可愛い顔を毅然と起していた。小さなオチヨボの唇の端がそれでもヒクヒクと震えている。

珠子は又、失神しそうだった。しかしその時、重大な発見をした。

変圧器に高圧電流を送り込んでいた太い電線が、外ならぬ珠子の身のすぐ上を通っているのだ。珠子の足は宙に浮いて括られている。しかし腕は自由だ……。

手を伸した。指の先まで精一杯、ピンと。それでも、やはり無理だった。一尺以上も高い。しかし群集がぶつかった力で電柱は傾き、緩んだ線が街灯より下にある。街灯を倒せば、或いはその線を切断出来るかもしれない。

珠子は齒を喰い縛って胸に喰込む縄目の痛さをこらえ乍ら必死で身をゆすった。しかし街灯はビクとも動かず、胸から血が滲んだだけだった。

万事は休した。

群集の歓声が一際、高くなった。

宮子は諦めた様に目を閉じた。

安全装置が外された。

強い電流が通って、糸切団子の様に真二つにくびれた宮子の丸々とした体が、激烈な痛みに烈しくわななく……。

誰もがそう思っ見ていたのに、宮子は微動もしなかった。皆が不思議そうに変圧器を見上げた。男は首をひねりながら、不思議そうに変圧器を叩いたり、揺ぶったりしていた。

「オーイ。どうしたんだ」

二、三人の男が口々に叫んだ。変圧器の上の男が答える前に、広場の警検用拡声器が、よく透る女の声で警告を発した。

「皆さん。間もなく武装警吏一箇中隊が皆さんを逮捕に広場へ到着します。誰も抵抗することは許されません。現在場所を動かず、そのまま居なさい。私は婦人警吏です」

冷たい電気椅子に座っていた川島夫人はホッと目をあけた。下に集った男達の間に狼狽のざわめきが起った。彼等は、あつという間に一人残らず広場から逃げ散ってしまった。リンチの群集は検挙されると騒擾罪で裁かれる。これは重い罪である。五十才以下の妻か十三才以上の娘を持つ男は、その愛する妻子を刑場に曳出してその公開拷問を見なければならぬ。自分も財産は没収される。

忽ちの内に広場は人っ子一人居なくなった。

誰も居なくなったのを待っていたように、放送ボックスの扉が、そっと明いた。制服姿の婦人警吏が一人、慎重に辺りを窺い乍ら出て来た。

白い賢そうな顔に、フランス人形の様な涼しい目がパッチリ張っている。スナナリした、しかし肩幅の広い、体格のいい身体つき。要捷な身のこなし。

彼女はツカツカと電気椅子に近附いた。川島夫人の胸をくびって締め上げていたベルトが外された。

糸切団子のようにくびっていた針金もほどかれた。恐怖の漸く去った顔で婦人警吏の端麗な顔を見上げた夫人は、思わず声をあげた。

「アッ。あなたは」

婦人警吏はニッコリ笑った。

美しい顔が綻びたからニッコリとも見えたので、実際はニヤリと形容した方が適切な冷たい笑い方だった。

「アハハハ。金の城も遂に潰滅だな」

「若山久美を大京映画に五十万円でバイしたそうですよ。それっぽ

「つちじゃあ罰金の穴は幾らも埋まりやしませんかね」
 「座長の千秋さきりも、何とか言うあの新人も当分、舞台に出る事など思いもよらんよ」

翌朝。日の出東洋劇場の支配人室で声高に話している二人の男。
 珠子が見たらアッといったに違いない。黒いジェット機”の公演を客席で見た日に、少し奥の同じ列で人目をはばかる様に黒いコートの襟を立てていた男と、鳥打帽を目深く被っていた二人連れなのだ。

「それどころか支配人、先刻、近藤部長刑事からの報告によると、

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集

大名刺判

(9×6.5寸)

印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

Y 1	全裸荷造縛しぼり	(大塚啓子)
Y 2	乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y 3	観念した胡坐	(大塚啓子)
Y 4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y 5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y 6	麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)
一組一枚	八〇円	
五組五枚	三〇〇円	
十組十枚	五五〇円	
二十組二十枚	一〇〇〇円	
三十組三十枚	一四〇〇円	
四十組四十枚	一七五〇円	
五十組五十枚	二〇〇〇円	

Y 7	逆十字後手縛	(愛川悦子)
Y 8	裸身の補われ人	(愛川悦子)
Y 9	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y 10	全裸ねの縛り	(田中芳代)
Y 11	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y 12	全裸フットンむし	(大塚啓子)
Y 13	蒲団裏裸またぎ	(大塚啓子)
Y 14	初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y 15	ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y 16	全裸脚股間縛	(絹川文代)
Y 17	セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y 18	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y 19	全裸全身裸自慢	(愛川悦子)
Y 20	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y 21	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y 22	遅ましきヒソフ	(愛川悦子)

Y 23	大の字晒し	(絹川文代)
Y 24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y 25	胸のポリウム自慢	(愛川悦子)
Y 26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y 27	もつこれで許して	(益田房子)
Y 28	むしられたスロース	(花坂道子)
Y 29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y 30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y 31	囚女後手柱縛り	(大塚啓子)
Y 32	全裸強列股間縛	(絹川文代)
Y 33	ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y 34	開股一番一直線	(絹川文代)
Y 35	縛り腰巻色模像	(絹川文代)
Y 36	亀田股間縛正面	(絹川文代)
Y 37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y 38	妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y 39	椅子またぎ後手	(田原美佐子)
Y 40	強烈第手首縛縮	(田原美佐子)
Y 41	ハタカ縛り人形	(絹川文代)

Y 42	濃艶ハタカ縛り	(絹川文代)
Y 43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y 44	全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y 45	後手立木吊り	(村井知可子)
Y 46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y 47	全裸寝台重恥責め	(花坂道子)
Y 48	振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y 49	長編後手しぼり	(花坂道子)
Y 50	ワンピース縛り	(花坂道子)
Y 51	手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y 52	柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y 53	不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y 54	カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y 55	緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y 56	膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y 57	前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y 58	股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y 59	聖壇のさし者	(絹川文代)
Y 60	エビ責めの表情	(絹川文代)

昨晚リンチ団が、あの可愛い顔をしたニューフェイスを何処かへ連去ってしまったので行方を探している真最中だそうですよ」
 「ホウ。そりゃ、ますく都合がいい。これで日の出地区のパーレスクの固定客も、わが東洋劇場チェーンの独占するところとなる日も近いだろうて。近藤君にも早速たっぷりとお札をしておかにならん」
 ワッハッハッハ。という二人の満足気な高笑い、明け放した窓から、青い青い空に向って、いつまでも傍若無人に響いて行くのだ。

(完)



男性
責小説

妖

(ようこん)

禪

榎
青

村
木

審・画
奏

私は、今度新しく執筆する小説の取材の為に、何年ぶりで故郷のS町を訪れようと、五月に入ってからもなく東京を立った。S町はS県のO川を逆上った山奥の小さな町である。といっても社線の沿線にあるから、交通はそう不便でもない。

子供の時分から、親不孝でもないかわりに、大して親孝行でもなかった私が、フト殊勝にも墓参を思いたったのは、正直いって全くの気まぐれだった。ところが偶然は私に思

わぬ拾いものをさせてくれたのである。先祖の墓の前に一刻、もっともらしい顔をして額ずいた私が、迷路のように曲りくねった通路を戻りかけると、それまで他には誰もいないと思っていた墓地に、もう一人、墓参りの人物がいたのを発見した。

遠くから眺めると、黒っぽい背広を着たその男は、余り大きくない墓標の前に凝々と頭を垂れ、もうさっきから長いことそうしているかのようだった。

私は、何とはなしに近づくのを憚り、別の道をとって墓地を出たが、男のことが妙に気

になっただけならなかった。

それは、私の人並外れた好奇心のせいかもしれないなかったし、心を乱すまいと遠慮したほどの男の態度にうたれたからかも知れなかったが、とにかく私は、境内の庭石に腰を下して、男の戻って来るのを待つことにした。

墓地の出口は他にないから、そこに待っていれば、必ず男に逢える筈だった。

そうして理由のない期待を抱きながらタバコに火を点けていると、果して二、三分経った頃、男が姿を現した。

いきなり不躰な言葉もかけられないし、何

といったものかと一瞬、躊躇していると、男はまるで私の気持を知っているかのように、真直ぐに近寄って来た。

「恐縮ですが、一寸、火を——」

「ア、どうぞ……」

私は内心うまうまいったと喜びながら、長身の男が背中をやや丸くして火を点け終るのを待ち、

「おかけになりませんか？……」

と誘ってみた。

男は頷いて私の横にかけると、

「いい陽気になりましたナ」

といって、うまそうに煙をふかした。

年令は五十を少し過ぎていたのだろうか。頭髪はきれいな半白だが、浅黒い顔の皮膚は青年のような艶があるし、肩巾も広くがっしりしている。若い頃スポーツで鍛えたといった感じで、眼許にも精悍さが窺えるが、口のききかたは穏かで、むしろ沈んだ様子さえみえる。

「今日は、ご先祖の墓参りでも——？」

私がポツポツ探りを入れると、男はホッと微かな溜息をついて、

「イヤ、友人の墓参りです。三十年前に死んだ男の、今日は命日でしてな」

「三十年前……随分、古いお友達ですね」

「そう、あの頃は、彼も私も若く、血氣盛んでした」

「その方が亡くなってから、あなたはずっと——？」

「毎月、命日には必ず帰って、墓石の下の彼に逢うのが、今では私の生甲斐みたいなものです」

私は愕き、感動し、そして、いささか呆れもした。

「よほど親しい友人だったんですね」

「それはもう……！」

男は心なしか薄く頬を染めたようである。

「美しくて、優しくて、勇氣に満ちた、ときには無鉄砲でさえある奴でした。その無鉄砲さが、彼を遂に死へ追いやったともいえるんですよ」

男は無然として面を伏せ、再び深い歎息を洩らした。

三十年の間、恰も墓守りの如く亡き友の墓参を続けてきた男。友情といってしまふには余りに深い心情である。私の好奇心は愈々強まった。

「どうでしょうか。もしお差支えなかったら、もっと詳しくお話し願えませんかでしょうか？」

「？」

「いいですとも。実はこのことは今まで誰にも話したことはないんですが、あなたには何かしら私も話してみたくまりました。どうかお聞きください」

「それは、ありがたい。だが一寸待ってください。お見うけしたところ、あなたも、この土地の方ではないようですね？」

「ええ。今は岡山のほうにいます」

「では今夜はお泊りでしょうか？」

「そのつもりでいます」

「宿は、もうおとりですか？」

「いや、まだ——」

「じゃ私の宿へご一緒にいかがですか。お話もゆっくり伺いたいと思いますし……」

男は快く承諾し、私の宿へ泊ることになった。S町には親類もあるし立派な友人もいるのだが、私は気がねをしながらそういうところへ泊るのを好まないもので、帰郷の際には旅館へ宿をとることに決めていた。

最近、手を入れたという『青葉館』の風呂場は、檜の香がプンと鼻について、旅の気分を和らげてくれるようだ。

『瀬木』と名のつた男は、想像した通りの逞しい体軀をしていた。どの部分の筋肉にも張

りがあり、顔を見なければ、とても五十代とは思われない。

「いい魅をしていただけますネ」

私は思わず見惚れてそういった。

「これで、若い頃は鍛えたものです」

瀬木氏は私の無遠慮を咎めせず、静かに微笑する。

「何かスポーツでも？」

「スポーツといえるかどうか、剣道をやりました」

「ホウ、じゃア段をお持ちでしょうね？」

「四段ですが、今は駄目ですよ」

私は、五十代の精緻な男性美をはじめてまのあたりにし、心からの讃歎を禁じえなかった。

夕食がすみ、縁の籐椅子に寛ぐと、夜空の下に黒々と連なる山脈の稜線を遠く眺めながら、瀬木氏は約束の話を始めた。

「本題へ入る前に、一寸変なことをお訊ねしますが、あなたは『九十九本目の生娘』という、妙なタイトルの映画をご覧になりましたか？」

「いいえ。残念ながら観ていませんが、それが何か——？」

「私は、あの映画の内容は知らぬままに偶然、

観る機会をえたんですが、愕きました」

「映画にですか？」

「ええ、いえ、映画というよりその内容、つまりストーリーについてなんです」

「……？」

「あれには確か原作があったと思いますが

「ええ、あります。尤も、そのほうも読んではいませんが」

「原作者は、全くのフィクションであの小説を書きあげたんでしょうか。それとも事実にもとづいて、イヤ、それほどなくても何か資料でもあって書いたものでしょうか？」

「さア、それは判りませんが、それがどうしたというんですか？……」

「実は、私も、あの物語とまるでソックリな体験をしているんです。それがつまり、これからお話ししようとするとなんですがね」

「なるほど。それは面白そうですね」

映画は観なかったが、週刊誌の映画欄が何かで梗概は読んだ記憶がある。何でもそれは荒唐無稽としか思われぬような猟奇物語の筈だった。私は、瀬木の口からどんな奇怪な体験談が語りだされるかと、息をつめて、形のいい髭をたくわえた彼の口許を瞞めた。

「当時、私はこの町の警察に奉職していましたね、階級は巡査部長。友人の及川は巡査で私の部下でした。部長といっても私はまだなりましたのホヤホヤ。及川とは同い年でしたが、彼のほうは遅れて警察に入ったので平巡査だったわけです。当時の警察社会では、上司とその部下が、個人的に親密になることは余りありませんでしたが、私達の場合は例外でした。私達の仲がよすぎるといってヘンな憶測をする者もいましたが、私達はお互いの仲を少しも疚しいとは思っていませんでした。及川は、ことのほか官服の似合う奴でした。その頃の警官の制服は、あなたもど存じでしょうが、今のとは違って、肩章のついた黒いものでした。制帽の底を深く下げ、サーベルをいつも手入れよく磨いていた彼の姿が今も眼に見えるようです……」

二

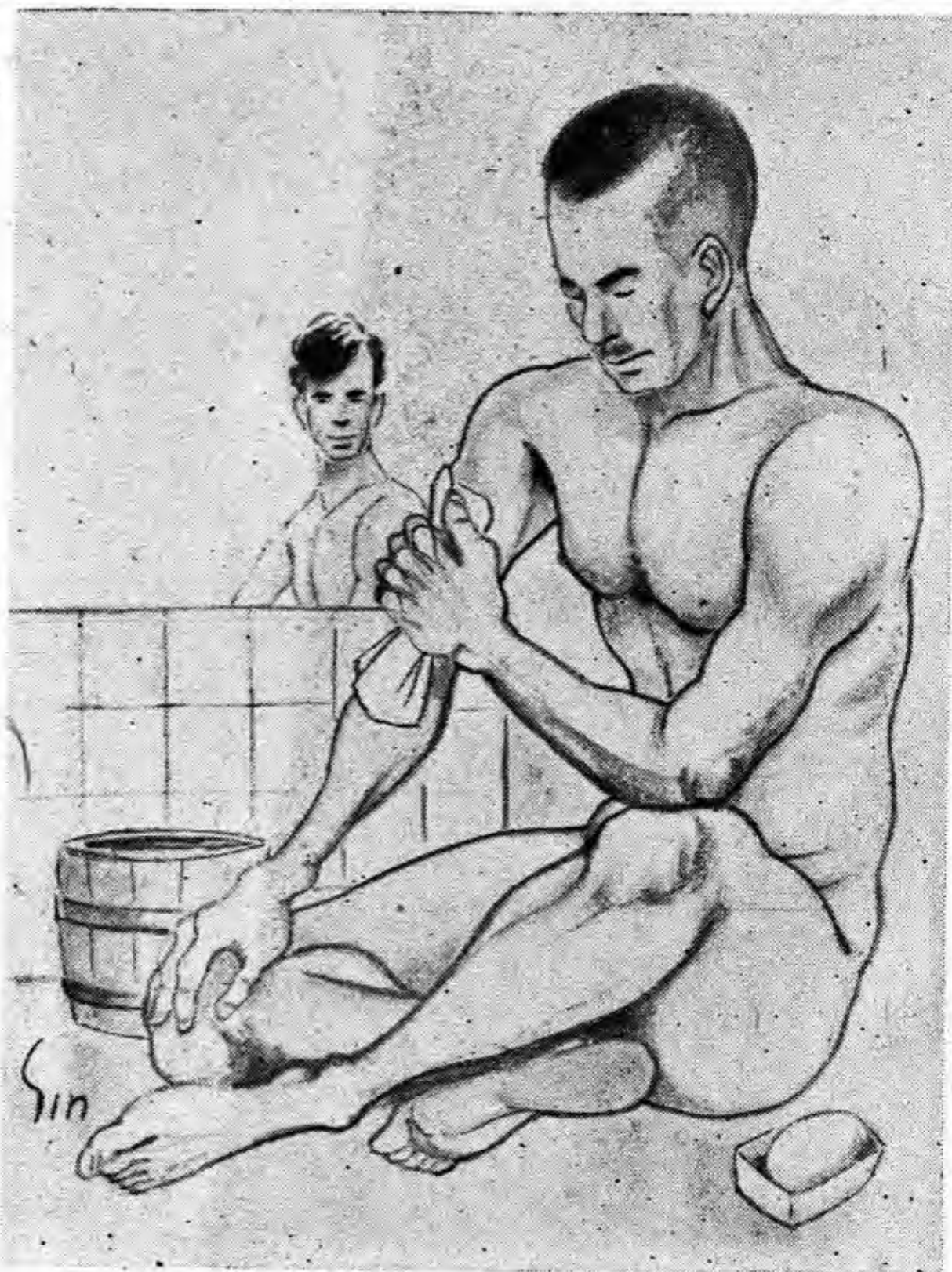
瀬木巡査部長と及川巡査は、非番や休日を利用してよく山歩きをやった。田舎町の警察に勤めていたのでは、町へ遊びに出たところで、ただ家が並んでいるというだけで何もすることがない。瀬木も及川も酒は嫌いなほうではないが、薄暗い居酒屋で昼間から安酒を

汲み交すのもゾツとしないし、それよりも大自然に親しみながら気の向くままに山中を歩き回ったほうが、若い二人には、よっぽど性に合っていた。それに誰にも邪魔されない二人だけの時間を持てることは、お互いにとって何よりも貴重だった。警察官というのは、官服を脱いで私服になっても、いや、たとえ裸になったときでも、部外者と対している限り、己の職業から全く離れるということはない。また同じ警察官同士であっても、階級が異なる場合はそこに拘りを生じる。しかし、瀬木部長と及川巡査とは、すべてを忘れて赤裸な人間になることができた。何をしても何をされても、赦すのがむしろ自然だったし、二人の間では美しかった。山の中とはいっても稀には樵夫や炭焼に出会うこともあるが、挨拶の言葉をかけて通るだけで、男女ならともかく、男二人を怪しむ者はない。

立春を過ぎたとはいってもまだ二月で、

本当は寒い筈なのだが、その日はバカに暖く、少し歩くともう汗ばむほどだった。

隣を見ると、腹這いになった及川のすがすがしく刈られたほんのくぼの辺りに、掬い切られた草の葉が付着していて、瀬木は微笑し



た。

黙って手を伸し、それを摘まむと、及川は一寸頸を動かしたが、それきり死んだように凝ッとしている。

瀬木は空を見上げて、

「俺はネ、こういうときいつも思うんだ。このまま時間が止ってしまふといい。そうしたら、二人はいつまでもこうしていられるんだとネ……」

と呟くようにいったが、及川は答えない。

瀬木は別に答えを期待したわけではないが、フト（こいつ後悔してるんじゃないだろうか？……）と不安が心を掠めた。

「及川！……」

不意に瀬木の腕が及川の肩を掴もうとしたとき、ムックリと起きあがった及川は、

「僕、一寸——」といって歩きだした。

「どこへいくんだ？」

思わず詰るようにいう瀬木の声に、振り返った及川は、

「これ、これ」とすぐに向うむきになると、悠々と用を足し始めた。

（何アんだ……）と苦笑した瀬木が、照れかくしのように、大袈裟な身振りでゴロンとひっくり返ると、まもなく戻って来た及川が、

「部長！」

と呼んだ。

勤務中以外は、「瀬木さん」と呼んでいる及川が、いつになく部長といったのには理由があったのだ。

「これを見てください」

何か光った小さなものをさしだした及川の表情は、すっかり緊張しきっている。

「何だ？ソレ……」

「今、そこで発見したんです。シャープ・ペ

ンシルですよ」

「ふうン。で、それがどうかしたンか？」

「しっかりしてくださいよ、瀬木さん。ホラ、一年前、鉾山技師が行方不明になったのはこの辺だったでしょう」

「うム？うン、まア、推定ではねえ」

行方不明事件というのは、昨年の二月、その付近の山中で起った。被害者の青年技師が何の目的で山に入ろうとしたかは明確でなかったが、とにかく彼はそのまま姿を消してしまったのである。自殺の原因はみつからず、事故で負傷でもしているか、悪くすると死んでいるのかもしれないという推定のもとに、警察では地元民の協力をえて再三、山狩りを行ったが、行方はようとして判らず、遺留品の鳥打帽子を残したまま遂に迷宮入りとなつてしまった。死体が発見されない以上、生死は不明なわけだが、当局の見解は既に死んだものと断定していた。似たような事件が、更に一年前、一昨年の二月にも起っている。分教場へ赴任する青年教師が、多分、近道をしようとして同じ山で消息を絶ってしまったのだ。二つの事件が果して関連のあるものかどうかは判らないが、一年の隔りがあるとはいえ、同じ場所、同じ頃に、あいついで若い男

が失踪した事実には、少くとも偶然とはいいきれぬ何かがありそうだった。

及川の発見したシャープ・ペンシルを、鉾山技師の遺留品だとすぐに決めてしまうわけにはいかないが、外国製らしい高級品をこんな山間の町で持っている者があるうとは思われない。

「及川。かりにそいつがああ技師のものだったとしてもだよ、あれからもう一年も経ってるンだ。それに捜査は一応うちきられているんだし、今更どうにかなるモンでもないさ」

「ええ、しかし……」

いくら瀬木のいうことであっても、同意しかねるように及川が呟いたとき、ガサと微かな物音がして、枯れて茎だけになっている笹の繁みに何かの動く気配がした。

「誰だ？」

及川巡査の誰何が響いたが、辺りは再び静まりかえって異常はないように見えた。

「兎じゃアないのか——？」

つられて立ちあがった瀬木部長がいうと、

「いいえ。確かに人間です。怪しい奴だ！

捕えましょう」

・及川は確信ありげに眼を輝かせた。

・瀬木としては正直なところ気乗りがしなか

ったが、部下の職業意識を咎めるわけにもいかない。警察犬のように頭を低くして笹の繁みに分け入る及川の後から、瀬木もバンドを締めなおして続いた。

及川の鋭いカン、は外れていなかった。前後左右に気を配りつつ十歩ばかり進むと、ゆくての笹の中からヒョイと頭をのぞかせたのは確かに人間である。

「待てッ！」

及川が呟鳴ると、頭はすぐにひっ込み、ガサガサと繁みが鳴ったが、

「オイッ。待たんか！」

と再び呟鳴ったときには、もはや何の気配もしなくなっていた。

「逃げ足の早い奴だ！とにかく、ただ者じゃありません」

「うム。怪しい。何とかして捕えるんだ」

今はその気になった瀬木も、勢い込んで顔にかかる笹を払いのけた。

山に馴れているらしい曲者に比べ、二人の足どりはいかにも齒痒いが、それでもどうか追跡が続けられるのは、見失ったかと思うと、相手が頭や、ときには上半身をチラリと見せるからだ。しかし、逃亡しようとする者が、まるで故意にそうするようにときど

き駄を現して追跡者に目標を与える行動をとるのは領けない。そこには何か企みが存在するのではあるまいか。迂濶にも二人は夢中になり過ぎていたようだ。

いつのまにか笹藪がつきて急に視界が開けたが、ホッとするまもなく、またまた男の姿は消えていた。その辺は齒朶が群生しているが見通しはきくから、隠れているとすれば樹の蔭か、あるいは既にもっと先まで逃げのびているのかもしれない。

「畜生！敏捷な奴だ。また見失ってしまったか……」

肩で息をしながら及川は注意深く眼を光らせたが、瀬木は多少、不安を感じだしていた。

「大分、奥へ入ってしまったナ……」

「ええ——」

「これじゃ、まるで山狩りだ」

「そうですナ」

「二人きりじゃ無理かもしれん。山は深いんだ」

「ええ、でも——」

「それに相手が何者かも判らんのだ。指名手配の犯人とでもいうんなら別だが」

「じゃア諦めるんですか？」

「深追いして道に迷ったなんて醜態だぜ」

「しかし、残念だなア。ここまで追って来て……」

追跡を断念しかけていた二人に油断のあったのも事実だが、それは全くの不意打ちで、どうするひまもなかった。

背中にいきなり激しい勢いで重圧がかかったと思ったときには、二人共、前後して地面に叩きつけられていたのだ。

おそらく別の仲間だろう。樹上に潜んでいた山猿のような男が、瀬木と及川めがけて身を躍らせると、それに呼応してバラバラと現れた数人の男達が一斉に襲いかかったのだ。

二人は勿論、必死に抵抗を試みたが、虚を突いた敵の作戦が結局は功を奏した。

「オイッ。俺達は警察官だぞ！一体どうする気だ！」

軀中をグルグル巻きにされながら瀬木が喚いたが、異形の男共は耳もかさない。二組に分かれて丸太を運搬するように二人を担ぎあげた。

樹々の梢や空の雲が矢のような疾さで流れていくのを見ても、男共の駆ける速度が人間離れのしたものであるのが判る。しかも、道らしい道もない山の中である。彼等は果して

何者なのか。山を住いにし、山を跳梁して獲物を漁る集団らしいことは想像できた。すぐに連想されるのは山窩だが、恨みに對する報復でもない限り、みだりに人を襲うとは考えられない。それならば、極めて排他的な一族が社会から隔絶した生活を営む、落人部落のような集団なのだろうか。男共の風態は髪も髯も伸びほうだい、服装は一見して樵夫のようで異様というほどではないが、腰には一樣に山刀を佩き、獣のような体臭を放っていた。

三

二米四方ぐらいの、丸太と藁で造った檻の中に押し込まれた二人は、ガヤガヤと男達が立ち去ってしまうと、どちらからともなく顔を見合せた。

「瀬木さん。こりゃア、やっぱり例の事件と関係がありそうですよ。山師も先生もこうやって誘拐されたに違いない！」

「うん。しかし、奴等は何者だろう？何の目的で若い男ばかりを狙うんだ——？」

「さア、そいつは判りません。でも今に判りますよ」

「そりゃ、そうだろう。だが俺達は生命の危

険に曝されてるんだぜ。とにかく脱出の手段を考えよう。それが急務だ」

「待ってください。我々はまだ何も掴んじやないんですよ。そりゃア奴等の本拠はわかりました。しかし、このまま逃げ帰ったんじや警察官の恥です。まず奴等を油断させて何か確証を握ってからでも遅くはありません。奴等だって、まさか人喰人種じゃないでしょう。もう少し様子を見ようじゃありませんか」

（無鉄砲だよ）というおうとして、瀬木は言葉をのみ込んだ。警察官としての及川の意見は余りにももっとも過ぎるものだったし、かりにも上司である自分が、脱出を急いで臆病者だと思われたくはなかったのだ。

檻の前は切拓かれた広場になっていて、周囲は森に囲まれ、草葎きの小屋みたいな家が数軒並んでいる。みんな家の中へ入ってしまったのか人影も見えず、シーンと静かなのがかえって不気味だった。

夕方、娘が一人で食物を運んで来た。思いがけず若い女を見て瀬木も及川も愕いたが、小さいながら部落となれば女がいても別に不思議ではない。髪を長く垂らした娘は、さすがに男共とは違い、粗末な木綿の着物ながら

小ざっぱりとし、裾には紅いもののものぞいてゐる。彼女は檻に近寄ると、中から手のとどく位置に食物を置き、怯えた眼つきで囚われた男達を見て、何かいおうとしたようだったが、急にバタバタと駆け去っていった。

与えられた食事は、食べたこともない臭くて固い肉が一片ずつだったが、腹の空いていた二人は、たちまちのうちにそれを平げてしまった。

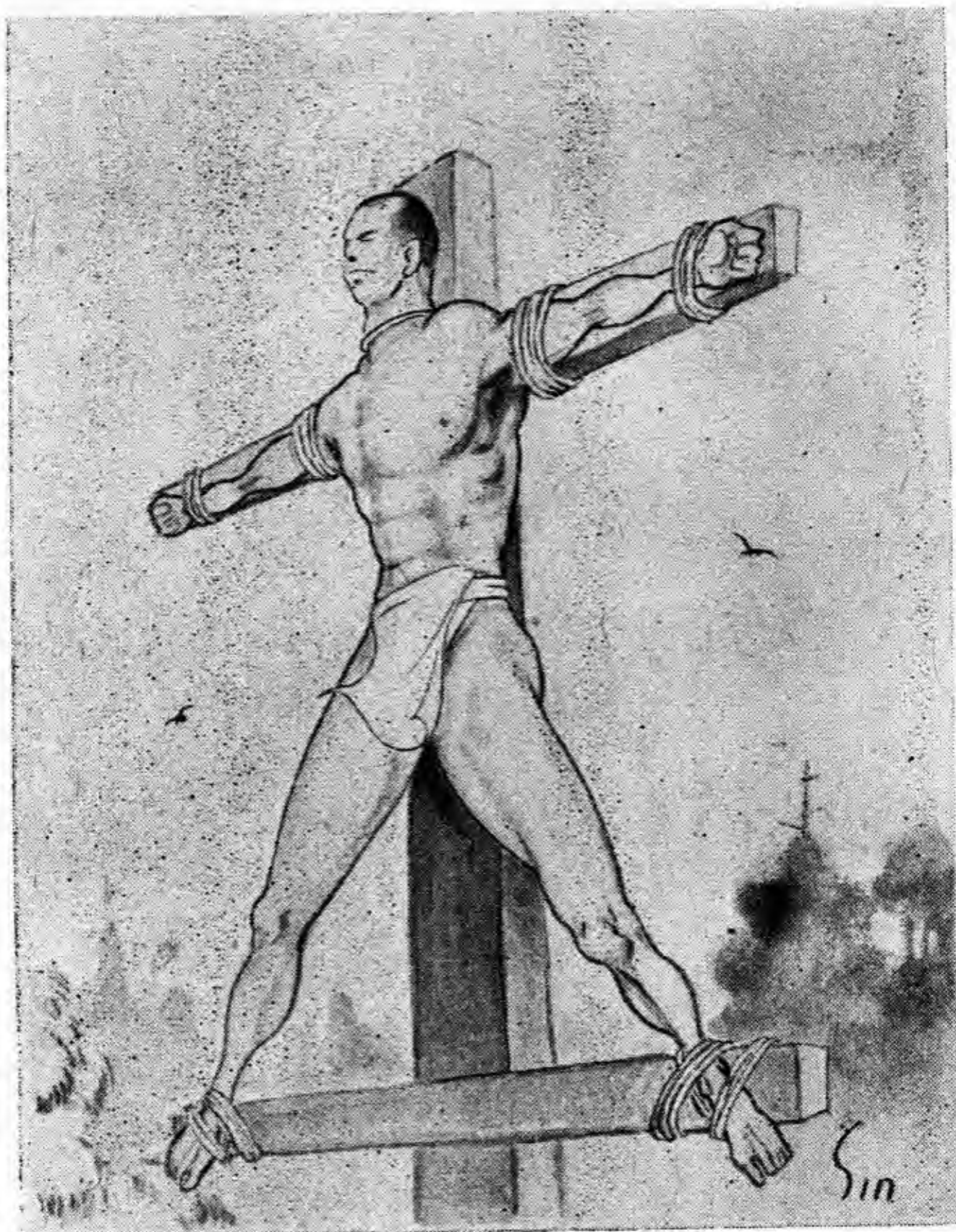
「サア、いつ何が起きてもいいように、今のうちに少し眠っておきましょうか——」

氣負ったようにそういう及川は、普段と変らぬ元氣さだが、瀬木は内心の不安を抑えることができなかった。

寝るといっても地面の上だ。昼間は氣違ひ陽気で暖くても、まだ二月では山の夜の冷えかたは相当にこたえる。二人は抱き合うようにピッタリと軀を寄せ合って仮睡した。いや仮睡したのは瀬木のほうで、及川はすぐに健康な寢息をたて始めた。いくら眠ろうと努めても、瀬木は眼が冴えるばかりだった。それでも疲れがでたのか、いつかウトウトとまどろんだが、ただならぬ物音にハッと眼を醒ますと、夜の明けた檻の外には異様な光景が展開しつつあった。広場の中央にはいつのまに

か祭壇らしいものが設けられ、見馴れないさまざまな供物が供えてある。そして数人の男達が奇怪な形の柱を運んで来ていた。柱には

二本の横木がとりつけられていて、処刑に使う磔柱を連想させた。いや、ふつとすると磔柱そのものかもしれない。



「瀬木さん。こりゃア、ただならぬ事態になりそうですね。もしかすると覚悟しなければならんかもしれません。しかし希望は捨てないことです。とにかく逃げられるほうが逃げて署へ連絡しましょう。二人一緒じゃ無理ですが、別々の行動をとれば望みはありますよ。たとえば僕が暴れて奴等の注意を集める、その隙にあなたが逃げるんです——」

及川がそこまで早口にいったとき、いきなり檻の戸が開けられて、及川だけが引きずり出された。男達はどうするつもりか、寄ってたかって及川の衣服を剥ぎにかかると。たちまちのうちに及川の軀からは衣類が剥ぎ奪られた。「畜生ッ！」

檻の中で瀬木は歯ぎしりした。彼にとっては及川が殴打されることよりも裸にされることのほうに腹がたち口惜しかった。

男達は及川の手足を縛り担ぎあげる

と、ガヤガヤとたち去っていく。

「及川ア！」

瀬木は檻から首を突きだして、大声に喚い

た。及川はあんな気の強いことをいっていたが、このまま惨殺されてしまうのではあるまいか。

(及川。貴様が死んだら俺も生きてはいないぞ……)

瀬木は己の職責をさえ忘れて心にそう叫んだ。

及川の姿が見えなくなると瀬木はグッタリと胡坐をかいたが、そのとき忍び寄るように檻に近寄ってくる人影があった。思わずハッとしたが、昨日の娘だった。

「オイ！ あの男はどこへ連れていかれたんだ？」

瀬木が噛みつくように呶鳴ると、娘は悲しそうに眼を伏せて、

「タキ」と小さな声で答えた。

「滝？ 滝でどうかされるのか？」

「ミソギ」

「みそぎ？ アア、身を潔めるのか。じゃ殺されるんじゃないんだな？」

「マダ殺サナイ」

「そうか。いつかは殺すんだな？」

娘は微かにコックリをして頷いた。

「一体、何の為に殺すんだ？」

「血ヲ捧ゲルタメ」

「血を？」

「先祖ノ靈ニ若イ男ノ血ヲ捧ゲルノデス」

「そうか。それがこの部落の風習なんだな。

奇怪なことをするものだ！ じゃア毎年、若い男を誘拐して生贄にするわけか」

娘はまた黙って頷いたが、大きく見開いた瞳は何かを訴えようとするようにジッと瀬木を睥睨した。

先祖の靈に若い男の生血を捧げるといふ奇怪な儀式が、どういう意味でおこなわれるのかは判らないが、教師と技師があいついで消息を絶った事件の真相は明らかとなった。彼等がこの部落の恐るべき神事の犠牲になったことはもう間違いない。とすれば、まさに犯罪史上、稀有な連続殺人事件である。瀬木巡查部長は牀中の血が沸きかえる思いだった。

「君。俺をここから出してくれないか？」

無駄とは思いつながら、瀬木は哀願するように娘にいつてみずにはいらなかった。

「ワタシ、アナタ助ケタイ。デモ、今ハマダメ」

娘はそういうなりサッと身を翻して駆け去った。滝壺から男達の戻ってくる気配をいち早く感じとったのだろう。殆んど入れ違いくらいに樹立の間から掛け声が近づいてき

た。先刻と同じように及川の牀は大勢で担がれているが、ただ一つ違うところは、真白な六尺禪が締められていることだった。勿論彼等にむりやりに締めさせられたのに違いないし、それが常識的な配慮からではないとしても、及川の受ける屈辱がほんの僅かでも軽くなったようで、瀬木は妙にホッとする気持だった。しかし、事態は既に絶対絶命のところまで切迫していた。及川は柱のところまで運ばれ、手足を開いて括りつけられているらしい。やがて柱が徐々に立てられると、禪一本で大の字に磔けられた及川の牀が高々と祭壇を前に据えられた。及川の体軀が筋骨逞しい見るからに堂々としたものであるだけに、またその容貌が男らしく引き締ったものであるだけに、残酷さよりも悲壮美といたいほどの感動をさえ与える光景だった。事実、おかしな話だが、それを睥睨する瀬木の眼に一瞬ではあったものの歓喜の色が動いたのだ。

部落の長らしい白髪白髯の老人が厳かに祭壇の前に進みでると、奇態な身振りで祈りを始めたが、それが終わったとみるうちに、左右から梟木の下に寄った二人の男が、長い柄の先に刃物を取りつけた槍のようなものを突きだした。

途端に瀬木の口から悲鳴とも叫喚ともつかぬ声が迸る。彼は狂ったように叫ぶことで男達の注意を逸らそうと計ったのだが、結果は失敗でしかなかった。檻の中の俘囚が、たとえば本当に狂いだしたとしても、彼等の関心は、もはや梟木上の生贄にしかなかったのだ。及川巡査は観念の眼を閉じ、口も一文字に固く結んでいる。その顔は（部長、署への連絡を頼みます。うまくやってくださいよ）と喋っているようだった。

及川の胸の辺りで二つの刃先がキラリと光った。反射的に瀬木は掌で眼を覆ったが、部下の最期を見届けようと悲壮な気持で視線を定めた。及川の厚い胸板には無慙にもX字形の創が刻まれ、数条の血が糸をひいて伝い流れている。顔色はさすがに蒼白に変わっているが、まだ生きていることは、苦しげに波打っている腹筋によって判った。創口から滴る血は腰に回した晒に吸いとられ、真白だった禪はみるみる鮮血に染まって真赤な禪となっていく。

不意に、檻の戸が開かれた。

「今デス。早く逃ゲテ！」

あの娘だった。

「しかし彼が——」

「大丈夫、スグニハ死ナナイ。創ヲ浅クツケ晒ニ血ヲ吸ワセル。晒ハ四回トリカエマス。ソレマデ時間カカル。アナタガオ巡リサン連レテクル間、アノ人、生キテイマス。早く逃ゲテ——」

公私の岐路に立った瀬木の表情は苦痛に歪んだが、娘のその言葉は彼に勇気と希望を与えた。

「君の好意に感謝する。逃げよう」

「道ノアルトコロマデ案内シマス」

後に心を残しながら、娘について素早く樹間にすべり込んだ。

「ココカラハ道ガツイテイマス。デハ、ゴキゲンヨウ」

「すまなかつたな。君の名前は？」

「アグリ。ワタシノコト憶エテイテクレマスカ？」

「無論だ。それにすぐひき返してくる。この礼はきつとするよ」

いくら女に無関心な瀬木でも、アグリ的好意の意味は判る気がしたが、彼にはそれに応えるすべがない。瀬木は一度だけ振り返ると

後はまっしぐらに山を下っていった。非常呼集によって全署員が動員され、瀬木巡査部長を先頭に数十人の武装警官が山に向

ったときは、あれから早くも二時間余りが経過していた。

気は焦るものの登りの山道は思うようにはかどらない。瀬木の胸中は、事件の重大さよりも及川の安否で一杯だった。

「オヤ、あれは何だ？」

誰かの叫ぶ声に思わず立ち止った警官達の見たものは、遙かの樹立の梢からモクモクとたちのぼっている黒煙である。

「急げッ！」

不吉な予感に駆りたてられるように瀬木は足を速めた。

「オーイ、女が死んでいるぞオ」

また誰かが叫ぶ。アグリだ。いってみるまでもない。彼女の死体が発見された以上、奴等が感づいたことは確かだ。

果して広場には人影も無く、焼け落ちた小屋の余燼がくすぶっているだけだった。及川の磔けられていた梟木も見えない。だが蹴散らされた祭壇の向こうに倒れている柱を認めると、瀬木は狂気のように走った。

及川巡査は死んでいた。大の字に柱に結わかれたままで……

人前も憚らず部下の惨死体にとりすがって号泣する瀬木の姿に、彼等の友情を知る者も知らぬ者も、一斉に脱帽し深く頭を垂れた。

「——で結局、事件はそのまま迷宮入りです。正体不明の奇怪な部落も、他の土地に移動したと推測されるだけで、その後の消息は判りません。及川が死んだら自分も生きてはいないと思った私ですが、結局はそれもできず、こうして脱け殻のような状態で生きながらえているんですよ」

翌朝、眼を醒ましたとき、私は瀬木氏が一人で先に宿を発ってしまったことを知って愕かなければならなかった。彼は私の分まで宿賃を支払っている。一体、何の為にソツと姿を消す必要があったのか。私は昨夜みた奇妙な夢を憶いだすとドキリとした。夢の中の



「熱いトタン屋根の猫」「いとこ同志」につづいて「去年の夏突然に」と、最近三つもホモを扱った映画が現れた。共に芸術的に優れた作品で、多くの人々の好評を拍したと思う

瀬木氏は制服姿も厳めしい若き巡査部長だった。そして私は及川巡査になっていたのである。

私は瀬木氏の後を追いたい気持ちをジッと憶えて朝食をすますと宿をでた。足は自然と昨日の墓地に向く。昨夜はあんなに私を夢中にさせた彼の体談も、昼間になってみると変色した古い写真のように白々しく思われる。まして彼の行動を思い合わせれば、私が信憑性に疑念をもちだしたとしても無理のないことだろう。

及川某の墓はすぐに見つかった。三十年前この地で及川青年が死んでいるのは事実だったのだ。しかし私はまだ満足しなかった。私

の足は次に警察署のほうへ向かった。受付の若い警官は、余り風采のよくない私を見ても別に胡散臭そうな顔もせず、愛想よく用件を訊いた。歯の白い健康そうな彼に、私はフト及川巡査を連想した。すると不思議にも急に私の気が変わったのである。

かりに瀬木氏の話が虚構だったとしても、それはそれでいいではないか。私は面白いネタを得られたのだ。あの物語は、そっとしておいたほうがいい。それと同時に瀬木氏のこともそっとしておくほうがいいのだ。

私はその場を適当に誤魔化して田舎の警察署を出ると、今度こそ駅へ向って大股に歩きだした。

(完)

倒錯の倫理性

—仏、米の映画にふれて—

菅 良 太

が、それでいて、あのホモの心理を理解できず、「去年の夏……」なども分ったようで分らずにいる人が多いらしいのに驚いた。

この中、「トタン屋根の……」と「去年の夏

……」は、アメリカの劇作家、テネシー・ウィリアムズの原作で、ニューヨークでロングを続けた舞台劇の映画化である。三つの映画の中で、一番ホモを主題の中に押出しているのは「去年の夏……」で、この映画の神秘的な雰囲気は、主人公セバスチャンの異常な性格の中から醸し出されている。映画では主人公の顔は一度も出さない。手とか後姿とかが僅かに見えるだけである。母親のカザリン・ヘップバーンや、エリザベス・テラーに依って、このセバスチャンとい

う、四十近くの独身で、詩を作り、創生紀を表現した巨大な庭園を作る男の神秘性が語られ、刻み出されるように表現される。

セバスチャンは、いとこのテラーを餌にして各国の少年を漁り歩き、スペインの浮浪少年に襲われて鬨り殺しにされる惨劇に終っているが、灼けつくような砂丘地帯を、ブリキや空罐で作った楽器を鳴しながら、狂気じみた隊列をつくって煉り歩く浮浪者群の姿は、異様な詩があつて面白かった。

同じウィルアムスの作でも「トタン屋根の猫」は「去年の夏……」ほど強烈なホモを感じはしなかったが、ポールニューマンの扮する主人公が、美しい若妻（エリザベステラー）を持ちながら一向に愛そうとせず、日夜、酒に浸った生活を送っている。

この男の信ずるのは父親だけで、無知な母親や、美しいだけの妻には一向に関心が無い。そこでテラーの若妻が、トタン屋根の上の猫のように悶えるのである。主人公は大学時代の友人と親密になるが、その友人の自殺によって自暴自棄になり、手がつけれぬ状態に陥るが、結局、父親の大きな温い愛情によりみえるという筋で、男と友人、男と父親というふうな、どこまでも男性優位の作品であり、ここにウィリアムスの主張がうかがえて面白い。

この映画で主人公を演じたポールニューマンは、陰影の深い演技で筆者を満足させてくれたが、「トタン屋根……」「去年の夏……」両映画共、当代屈指の美女、エリザベステラーがホモのだしに使われるような哀れな役を演じているのは皮肉である。彼女は美しいのは確かであるが、聡明美とはいえないところに、ホモの男性から見た女性蔑視の観念が浮び上ってくるのではないだろうか。

「いとこ同志」を観て、ホモを見抜ける人は少ないかも知れない。しかし、あの主題は、完全にいとこ同志のホモであると思う。

プリアリの扮した田舎出の大学生を、パリに住むいとこポール（ジェラルド・プラン）が面倒をみて一緒にギヤルソン・ロジャーに住む。純朴な田舎青年に扮するジャン・クロード・プリアリは、ピツタリと役柄にあてはまった好青年である。

しかし、あの映画の主人公は、やはりジェラルド・プランで、彼は上背のある、やや冷たい感じを受ける美男子で、映画では大学生だというのに口髭と、顎髭を生やしている。その風貌が、いかにもホモ的雰囲気をもたらし出しているといえる。

アメリカでは、キリスト教団体の発言力が強力で、ホモやソドムに対する背徳視は大変なものらしく、その点、この映画が「去年の

夏……」のような鮮明な主張を遠慮したのではないかと思う。

プリアリを誤殺してからのプランの演技がホモ心理を表現しているのだが、このあたりは仲々に見事で、心憎いばかりの演出である。二人の間に女性が出ることは出るが、スポットは、専ら男性二人に当てられ、前記二作品中のエリザベステラー同様の演出が観破出来得るのである。

とにかく、この三篇の映画は特異な題材を扱ったという点で、面白く観賞したものであったが、これによってアメリカやフランスに、ホモ趣味が相当にひろがっているのではないかと推測するのは早計であろうか？

この点、アメリカでは最近の出版物の中に、月刊誌「アイロン・マン」「トモロウ・マン」「モデルマン」「ミスターアメリカ」etc……の男性ヌードを扱ったグラフィック雑誌が発売されているし、「マン」その他の大衆雑誌が、毎月、男性ヌードフォトや男性責めに類似した挿絵を収載しているのを見て、あながち的外れではないと考へる。それに対して、我国のこの種文化の進展は、遅々たるものであるという感が深いのである。

演習地



三 条 卓 史

作 画

ザック、ザック、ザック、ザック――

まだ夜の明け切らぬ崖下の道から、夥しい靴音が響いて来る。

裏のかまどで、薪を燃しつけていた、たきは、急に伸び上ってその方を見た。

連なる山脈から一際そびえ立つ大平山の裾野、乙女ヶ原の高原に続く崖下の道を、背囊を背に、銃を担いだ兵隊たちが、黙々と蟻の

ように列をなして続いて行く。

「ああ、また演習の時期がやって来たんやの」もっそりと起きて来た時造が、たきの傍に立って大きな背伸びをしながら言った。

「ほんに、もう今日あたり大滝から兵隊さんの食糧の割当てが来るじゃろ」

たきはそう云いながら、姉さん冠りの手拭に右手を当てて、ちよっと髪を直した。

「ほんとによ、去年はお前が大

滝へ兵隊さんの接待に行ったで

家へは食糧の割当てが多く、お

金も大分貰ろうたが、今年は大

分、割当ても減るじゃろ」

「うん、だが今年は誰が大滝へ

呼ばれるじゃろけ」

たきは呟やくように、ぼつんと云った。

「今年あたり、下村の藤作の嫌

ぐらいと違うかい？ あのみよ

って女房は、えらく縹緞がええ

ッて評判じゃ……おっと、そ

う云や、お前もあれから、大分

変ったもんだな」

少し間の抜けたような時造の

眼がキョトキョトと動き廻る。

「馬鹿だねえ、お前さんは。もうあの日のこ

とは云わないことじゃ」

「うん、けどもよ。次の朝帰るかと思って

待ってりや、昼になっても帰らねえだろ。俺

アお前が隊長どんと馳落ちでもしたかと吃驚

して大滝へ行ったらよ、昨夜の接待で疲れて

いるから休ませているッて。離れで寝ている

お前の姿を見て、やっと安心したよなア」

ガラガラと鉄輪の音を響かせて、何輛かの輜重車が通ったあと、崖下に兵隊の靴音は消えて、急に静かになった。

「さあ、早よ顔を洗うて、支度をせな。お前さん今日は組合へ縄を納めに行く日だよ」
「そうだったけな。じゃ、お前も早よ飯の用意をして呉れや」

時造はそう云うと、くるりと踵を返して井戸端の方へ行った。向うの竹藪のあたりから朝霧が這うように流れて来た。

○

その日の昼過ぎ――

ドン、ドン、と云う空砲の音と、ワーンと喚く兵隊達の喊声が、広大な乙女ヶ原をつき抜けて、大平山に舒ゆるまっていた。

「たきさん、隊長さんの接待役やて、どんなことをするのん？」

青い穂を並べて五月の風にそよぐ麦畑の外れの農具小屋の蔭で、みよはたきの紺の袂を捉えていた。小柄だが色の白い、男好きのする顔立ちである。

「やっぱりあんたやったのやなア」

たきは、持っていた鍬を小屋の荒壁に立てかけると、紺の手甲の紐を解きながら、其処に蹲った。

みよも並んで腰を下すと、袂からうで卵を二つ取り出して殻を剥いた。

「一つやけど、食べてな」

「ああ、ありがと」

そう云って顔を見合わせて、お互にちょっと笑った。

「大滝の旦那が、誰にも云うな、と固い口止めやで、教えて上げられんのやけん」

たきは、ふっと太い息を洩らす。

「今朝、大滝から接待役の報らせがあつてから、うちの藤作はえらい機嫌が悪いのんや。

人の女房を気儘にしよる、ッて。でも、村のいきなりやったら仕様がなないもん」

みよはそう云いながら白い指を舐めた。藤作と結婚して二年あまり、まだどこかに幼な氣の残っているような、あどけない姿である。

たきは、大平山の峯にかかっている白い雲を見ながら、一年前のあの夜の事を思い出していた。

――このひとも、今夜は去年の自分と同じように、厳めしい軍服を着た将校の前で、縛られて、一晚中くすぐられたり、鞭打たれたりするのネ。そしてその羞恥と苦痛が、後になつて、何となく慕わしく、恋しく、もう一

度と希うような氣持にさせられるのだワ。

たきはそう考えて来ると、自然に心が昂ぶって来た。間の抜けた亭主の時造は、女房が虫に刺された位にしか考えてはいないのだ。

大滝のあの出来事によって、その心にまで変化を来たしていることに氣付かないのだ。

「ちょっと、此処へお入りな」

たきは、つと立つと農具小屋の板戸を開けた。

「教えて呉れるのん？」

「ええ、まあ」

小屋には窓がなかったが、あちこちの隙間から射す光りで比較的、明るかった。たきは小屋の隅から一枚の荒藁を引き出すと、それに腰を下した。そして

「みよさん、其処に縄切れがあるじゃろ。それを持って、あんたも此処へお坐りよ」

「この縄、どうするの」

「まあ、いいからさ。そして、わたしの云う通りにするのだよ」

たきはそう云いながら、ゆっくりと頭に冠っていた手拭を取った。

○

「今期の演習中に必要な糧食一切、お引受け下さるであらうな」

鼻下に髭(ヒゲ)を蓄わえた三十二、三才の将校が、陸軍中尉の肩章を聳やかせて部厚い書類をテーブルの上に置いた。

「宜しゅうございます。一度調べさせて戴きまして後刻、精算書をお眼にかけます。ただし、本年は野菜類が不作でございますので、例年より幾分か価格が変ると存じますが」

赧ら顔の、でっぶり肥った大滝大蔵が、眼鏡越しに中尉の顔をちらりと見る。

「ふん、して大体はどの位値上りする目算かの。軍も予算がやかましくてのう」

「はい、大した事はございませんが、まあ全体の五分か——六分位かと思いますが」

「ウン、まあ一応精算して見て呉れ。予算予算と云うて、兵隊にあまり粗末な物も食べさせられんからのう。ハッ、ハッ」

中尉は、膝の間に軍刀を突いて大きく笑った。

「では、此处で暫らくお待ち下さいまし。お茶でも差上げます程に……」

大蔵はテーブルの上の書類を受取ると、恭しく一礼して応接間を出て行った。

入れちがいに十六、七才の下婢が、手造りの酒と鶏の丸焼きを大きな盆へ載せて入って来た。

「こんな田舎で何もございせんが、どうぞ十分お召上りになつて」

いと、盃ならぬ大きな湯呑に二合徳利から、とくとくと注ぐ。

「ふーん、手造りにしてはなかなかいける」

齡若い子の酌の気安さに、中尉は上機嫌で盃を重ねた。

一刻ほど経つと、もう十分酔いが廻って

「もう沢山、十分頂戴致した。酒は止めて下さい」

と眼の縁を真赤にしてフーッと大きく息を吐いた。

其処へ大蔵が入って来て、小女に眼配せすると、女はテーブルの上の物を大盆に片付けて廊下へ消えた。

「隊長さま、まことに粗末で……」



「いや、あるじ殿、大変な馳走で十分頂戴いたした」

「処で隊長様、この村の珍らしいものをお眼にかけたいと存じますが」

「はて珍らしいもの？ それはどんな」

「はい、只今」

大蔵はそう云うと、部屋の隅の垂れ幕を引いた。

「おおッ」

中尉が思わず声を上げた。若い女が長襦袢の上から、頸から胸、腹、腰、膝から足首まで一本一本、別々の綱で縛られて、後手姿で佇立している。その綱が、無惨に肌を締めつけて、女は今にも倒れんばかりである。女は藤作の女房みよであった。

「隊長さま、その軍刀であの綱を切ってやって下さい。この女は、あなたの軍刀を待っております」

「ふん」

中尉は大きく頷くと、つかつかとみよの傍へ寄った。

「どうした、苦しいだろう」

そう云いながら、スラリと軍刀を抜いた。その銀蛇の尖先が胸元に閃めいた途端、みよは思わず眼を瞑った。

ぶっ、ぶっ、と一本ずつ綱は切られた。

「あるじ、これはどうした事だ」

中尉は軍刀を提げたまま、大蔵とみよを等分に見た。

「へい、何しろ辺鄙な処でお目にかける物もございません。この女は村の女房ですが、今夜は隊長さまの旅のお慰さめに余興のつもりで差出しました。なに、本人もよく心得ておりますで、打ったり、叩いたりする分には存分になさって宜敷いので……」

大蔵はそう云うと、みよを招いた。哀れな接待役が、よろよとテーブルの傍に来る。両手は後ろのままである。

「ご覧下さいまし、女の両手両足首に自動環をつけた輪を嵌めてあります。そして、このテーブルの脚にも、あなたが腰を下していらっしゃる椅子にも、この女の手足を留める自動環がついております。また、大小の鞭はこのテーブルの下に、軍刀はあなたのお手にございます。更にこの女の拘束を望まれますれば、数条の綱がああ垂れ幕の向うに懸けてあります。どうぞ旅のウサ晴しを——」

大蔵は一気にそう云うと、すっと幕を引いて消えた。其処から他の部屋へ行けるようになっていたらしい。

中尉は抜き身の軍刀を手に持ったまま

「うーん」

と大きく唸った。

みよは身を小さく震わせながら観念の眼を瞑った。

○

丁度その頃——。たき、は時造の腕を掴んで必死で振っていた。

「ねえ、お前さんは女房を縛ることさえ出来ないのかえ」

時造は、中腰のたきを見上げていた。

「だってお前、罪もないものを、縛るなんて……」

たきの激しい感情とは反対に、もぞもぞと尻込みをする様子である。

「だからお前さんは間抜けだって言われるんだよ。女房の気持も知らないで……いいさ、お前さんがその気なら、わたしこれから出て行って、浮気をしてやるから」

「おい待って呉れ、お前そんな、無茶な」

「無茶だっていいさ、どうせ無茶さ。去年の今頃、わたしが大滝でどんな目に遭わされていたか教えようか」

「もういい、わかってるよ」

「いいえ、知っちゃいない。大滝の旦那の家

には、机にも椅子にも、いいや家中に女を責める仕掛けがしてあるのんさ。あれは、今夜のような特別のお客を招待した時だけに使うもんじゃアない」

「仕掛けって、どんな」

「お前さんも、よほどウカツなんだねえ」

たきは眼を吊り上げて時造を見た。自分の亭主ながら、その神経の鈍さに呆れているような眼付きである。

たきは、何を思ったか、急に身繕ろいをすると草履を突っかけて土間へ降りた。モンペを脱いだままの、短かい縞の着物の裾から、赤い腰巻がなまめかしく覗いている。

「おいたき、急にどうしたんだ」

慌てて立ち上った時造にくるりと背を向けると、其のまま裏口へ走り出た。

「こら、ほんまに浮気するつもりなんか」

さすがの時造も、じっとしておられなかった。たきに続いて、急いで冷飯草履を突っかけて家を飛び出した。

月は出ていたが、空は一面の雲に覆われて道も川もさだかには分らなかった。

時造は匍いつくばって横顔を地面につけ、じっと耳を澄ましたが、たきの足音は聞えなかった。

「あいつ、一体どこへ行ったンじゃろ」
時造は闇の中で暫らく考えていたが、やがて大滝の邸の方へ向って歩き出した。

○

同じ頃、みよの亭主藤作は、土塀の蔭からじっと大滝の家の門前を窺っていた。

ほの暗い冠木門の前に、銃剣を着けた兵隊が一人、黒い影のようにじっと立っている。

「ちえッ見張りまで付けやがって、糞ッ」

と、吐き出すように呟やいた時、急に後ろから肩を突かれた。

「藤さん、其処で何してるのや」

身をすくませて振り返ると、其処にたきの白い顔があった。

「なア藤さん、あんたみよさんの事心配してるのやろけん、今夜はあかん」

「でも、俺ア、大蔵の旦那が気に食わねえ」

「それだって仕方がねえよな。ほれ、隊長さんが泊ってりゃ、あんなに番兵が付いてるもンな。こんな処にじっとしてないで、あちらへ行こうよ」

「たきさんは、またどうしてこんな処に……」

藤作は、たきが今頃どうしてこんな処に現われたか、初めて不審に思った。

「藤さん。早よう向こうへ行こうな。うちの奴

が追って来よるかも知れんけに」

「なんじゃ、夫婦げんかでもしたンかい」

「うふ……何でもいいわさ」

たきは、含み笑いをしながら藤作の手を取って、そっと土塀の傍を離れた。

○

雲が霽れて、蒼白い光りが高原の野面を一面に照らしていた。黒々とした細長い廠舎が幾棟も麦畑の尽きる辺りに並んでいる。昼間の演習に疲れた兵隊達が眠っているのである。広漠たる大地も、まるで死んだもののようひっそりと静まり返っている。

時造は、疲れた身体を引摺るようにして歩いていった。

——こんな夜、たきの奴何処へ消えてしまったろう——。

そう考えながら麦畑の傍まで来ると、道傍の捨て石に腰を下した。なだらかな丘陵の裾に、点々と部落の屋根が月の光に照らされていた。

時造が立ち上って、何気なく通り過ぎようとした麦畑の隅の農具小屋で、異様な物音がした。

彼は、はッと足を止めると、急に忍び足になって、小屋の板壁に身を寄せた。そして板

の隙間を見付けてそっと中を覗いたが、内部は暗くて何も眼に入らなかった。

——はて、俺の気の迷いだっただかな——

そう思つて一旦、眼を隙間から離したが、それでも何だか気になつて、小屋の傍を立ち去り兼ねていた。

やや暫らくして、時造は再び微かな物音を耳にした。微かな音ではあるが、鼠やいたち

の仕業ではない。

彼は思い切つてぐるりと入口へ廻った。案の定、扉の南京錠は外されていた。安物の錠ではあるが、いつも鍵をかけて、その鍵は扉の上の横棧に置いていた筈である。だが、手で探つて見るとその鍵もない。

——うむ、たきの奴、こんな処に隠れていたのか、俺を困らす気で家を飛び出したが、

行く処がないんで、大方この小屋の中で、延でも冠つて眠っているンだろう——

時造は、稍ほつとした気持で、ギイッと扉を引いた。月の光が入口に射し込んで、今迄真暗だった小屋の中が、その途端にぼうつと薄明るくなった。

「呀ッ」

と時造は声をあげて思わず一步退った。

シャツの腕をまくつた藤作が太い縄の先端に結び瘤を作つたのを手に持つて、中腰でこちらを睨んでいる。

その前には、小屋の中央に梯子を立ててその梯子に手と足を別々に縛り付けられたたきが、頭を下に逆さに吊られてあられもない姿を曝していた。髪が乱れて海藻のように垂れ下っている。頭を出し、唇を開いて大きく息づいているのは、早やこうして暫らく刻がたっているのであらう。

「こら藤作ッ。貴様あ……」

「待て、時やん」

時造が、瞬間の怒りと共に掴みかかろうとする手を、藤作が必死で押えた。

「俺が引ッ張り込んだんじゃアねえ。まッ落着いて聞けや」

藤作はそう云うと、たきの傍へ行って梯



子に両手を掛けた。そしてゴトゴトと三、四回揺って梯子の上端を梁から外すと、静かに小屋の床に横たえた。

「藤やん、解かいでもええ。もう暫らくこうして置いてな」

彼女の縛めを解こうとした藤作を、たきが自分から留めた。

「藤さんには、うちが頼んだのや。なア……」

……それが不服やったら、その縄でも、あそこの天秤棒でも打ったらええのンや。ふふ、今度はこんな格好じゃから、何処へも逃げやせんけ」

たきは梯子の上に大の字に縛られたまま、時造を上眼で見ながら、皮肉に笑った。

「よそ（他処）の男に、こんなにさせるなんて、お前は余ッ程馬鹿だア」

「そうや、馬鹿でええのんや。馬鹿は馬鹿らしい扱うたらええがの」

時造は、そうしたたきの投げやりな言葉に思わずかッとなって、藤作の手からもぎ取るようにして結び溜のある縄を引ッたかった。

「去年の晩、大滝の家ではな、弟子じゃないが、長い机の上に丁度こう云う格好に手足を括られたわたいの背中の下に、軍刀の抜身を挿し込んでな、じわじわと刃を立てられた。」

刀の冷たい刃が次第に上へ向くので、じっとしていると切れやせんかと思うてな、身体を『へ』の字にくねらせた。手足が引きつって息が切れそうになっているところをその軍刀の鞘のこじりで、押したり、突いたりされたのや。カイゼル髭を生やした、怖ろしく背の高い隊長の黒い影が、壁に大きく映ってゆらりと動いたのを見た途端に、意識がぼうっとしてしもうた——。なア藤さん、おみよさんも今頃は、どうせそんな処だろうよな」

たきはそう云うと、一寸言葉を切って藤作の方を見た。

「おれ、もう一度、大滝へ行って来るで」

「おい、今夜は諦めろよ。番兵がいる」

「知ってる。だが、どうしても俺はじっとしておれん。離して呉れ」

藤作の眼は血走っていた。時造の手を振り切ると、身体ごと入口の扉に打つけて農具小屋を飛び出していった。

月が再び雲に隠れて、小屋の中が急に暗くなった。

○

大滝の邸の中はひっそりとしていた。

番兵の隙を窺って、土塀を越えて庭に忍び込んだ藤作は、身を踴めるようにして客間の窓下へ身を寄せて様子を探ったが、何時までたっても物音一つしなかった。燈火も消えていて、人の居る気配は感じられなかった。

——こんな筈はない——

彼は踵を返すと母屋の方へ忍んでいった。

植込みを廻り、縁側の沓脱石に片足かけて締め切った雨戸に耳を寄せた。

「誰や」

と、不意に後ろからの低い声に驚ろいて振り向くと、大蔵が荒い格子柄の寝巻姿で立っていた。

「だッ、旦那、みよを何処へやった。か、返して呉れ」

藤作は夢中で大蔵の袖を掴むと、哀願するように、地べたに膝をついた。

「藤作か」

大蔵は、男が藤作だと分ると

「こっちへ来い」

と言って裏口の方へ歩き出した。

「ど、どこへ行くンで？」

「だまって、ついて来るが良い」

大蔵はそのまま先に立って母屋を廻った。

そして裏口から土間へ入ると、懐から燐寸を出して柱にある掛けランプに灯を点じた。土間から続く低い板の間には、古風な囲炉裏が

切ってあって、煤けた高い天井から自在鍵がその上に吊り下っていた。

「まあ、そこへ坐れ」

大蔵は、火の気のない囲炉裏の向う側にどつかと坐った。

「あの、みよは……」

「さあ、それだて」

藤作が落着かない風で、中腰のまま訊ねようとするのを遮ぎるように

「お前さんが心配する気持は良う分つとる。

だがな。毎年演習のたびに隊長を接待するのは以前からのしきたりだと云うことはよう知つとるじやろう。大勢の兵隊たちの食糧をこの村から納めればこそ、こんな貧乏な村も、

なんとかやって行ける。野菜類にしたって、

こんな瘦地で作った品質の良くない物を、遠くの町へ出したって、碌な値段で売れはしない。幸いこの高原が演習場に指定せられて、

毎年沢山の兵隊達が来るようになった。これらの食糧はこの村だけじゃアない、他の村からも納めようと狙っているのじゃ。だが、それを喰い止めるのには、矢張り隊長に相当の事をしておかねばならん。ただ単に酒食をもてなしたり、袖の下を使ったりするのはどの村でも考える古い手だ。そんな事で他の村

との太刀打ちは出来ん。いいか、村の女子衆にはちっと気の毒じゃが、今のような接待は相当の年配の隊長連には又とない珍らしい贈り物になる訳じゃよ」

大蔵はそう言っ言葉を切ると、腰から煙草入れを抜き出して、その雁首に刻みを詰めた。

「わしだとして、自分一人が儲けるンじゃアない。村の衆のためにと思つて、こんなに遅くまで起きてあれこれしているのじゃ」

大蔵は今しがた、離れの部屋へひそかに隊長とみよの様子を見に行った帰りに、藤作を見付けたのだが、そのことは口へは出さなかつた。

「なア藤作、そう云う訳じゃで、今夜はおとなしく帰るがええ。おみよじゃとて、まさか取って食われはせん。それに差すべき釘はチヤンと差してある。明日の夕方迄にはお前の家へ帰るようになるからの。まあ、考えようによつては、これも女子のええ経験と言つものじゃよ」

そう云つて、煙管の雁首を囲炉裏の縁でトンと叩いた。

○
次の日は朝から雨で、煙るような霧雨が乙

女ヶ原の青草に注いでいた。

輾々として眠られぬ一夜を明かした藤作は納屋で蓆を編んでいたが、みよの事が心に掛つて仕事が出来なかつた。藁屋根を伝つて落ちる雨滴の水玉の色を見ていた彼は、思ひ切つたように、前垂れの前をポンポンとはたいて立ち上り、台所へ行った。そして土間の隅の戸棚から、手造りの芋焼酎を取り出すと、茶碗になみなみと注いで呷るように一氣に飲んだ。

雨で演習も休みらしく銃声も聞えなかつた。酔いが廻つて来ると、居間に上つてごろりと横になった。

何時間位眠っていたのであろうか。ふと眼が覚めて見ると早や部屋の中は薄暗かつた。灯の点つていないランプが、白い笠を傾けて低い天井から吊り下っている。

丁度其の時、裏の戸をゴトリ開けてみよが帰つて来た。

「お前さん、今帰つたよ」

彼女は少しきまり悪げに小さい声でそう云つて、大滝から借りて来た番傘を土間の隅へ立てかけた。

藤作はみよの姿を見た途端、ほつと安心すると共に、押えきれない怒りがこみ上げて来



最近縛られた女優達

大河原珠樹・記

▽ひばりのお嬢吉三

(東映) 円山 栄子

例によって例のごとく、茶屋の看板娘に横恋慕の悪旗本が、娘を拐かす。白布で猿轡をかまし、胸を三巻き後手に縛って駕籠で運び出す。月並な見あきた場面だが、縄一つゆるませずにいる円山栄子の縛られなれた姿が目についた。

▽黒潮秘聞・地獄の百万両

(松竹) 浅茅しのぶ

鳥居甲斐、後藤三右衛門らの悪事の証拠調べ書を握っている矢部駿河守の隠し妻お律が雨の中で取調べをうける。黒っぽい囚衣で後手本縄縛り、お白州の荒むしろの上

に座らされ、雨にしばたかれながら青竹で打たれ苦悶する。最初、後姿で雁字搦目の背中の縛りもみられ佳作。かつて可憐な娘役だった浅茅しのぶにしては少し老け役過ぎるが、その老けぶりがかえって痛々しくってよい。

▽砂絵呪縛

(第二東映) 中里阿津子

次代將軍決定の鍵であるお墨付を手に入れようとする悪臣一味が、正統な世継を推す老中の娘を拐かして牽制しようとする。後手にグル／＼と胸を三巻きした型式的な縛りで、駕籠で運ばれる時だけ、松葉散しの紺色の布で猿轡をされていた。

た。

「上るな！」

藤作はガバと起き上ると、けわしい声でそう言いながら彼女の前に立ち塞がった。

「おや、どうしたのだえ」

みよは、帰る途々考えていた悪い予感が当たったような気がして一足後ろに退いた。

「どうしたと。おい、そのままこの家へ入って来て貰いたくねえ、出る」

「出るって、お前さん、雨の降っている戸外へかい？」

「ぐずぐず言わずと、こっちへ来い」

「待っておくれよお前さん。わたしは何も好んで大滝へ行ったんじゃないものを」

みよは藤作に右腕を強く引ッ張られて裏手へ引き出された。

「この雨で、清めてやる」

「ねえ、お前さんの気には入らなかったろうけれど、あたしも、痛い思いを我慢してきたんじゃないから、ひどいことはしないでよ」

みよは哀願するように言った。

夕闇の濃くなった軒下に、人魚のように白くみよの姿が浮び出た。その手首にも足首にも赤い疵のような筋が入っていた。藤作の心は激しい嫉妬に波打った。

▽おさい権三・燃ゆる恋草

(松竹) 嵯峨三智子

無実の罪に問われるおさいと笹野権三が妻敵討ちにされるための旅の途中に、己が罪のむくいを想像する幻想シーンで、磔にされる。嵯峨三智子の久々の縛られ役だが、白の囚衣、束髪姿で十字の柱へ、手首を二巻、胸に菱縄、続いて胴縄、太もものあたりにX型に四力所の縛りだった。期待した割に、せい、喰味に欠けていたのと、どの映画でもそうだが、手首の縄がゆるくだらしのないのが不満。

▽照る日曇る日・前後編

(第二東映) 雪代 敬子

勤皇御用盗の暗躍を幕府の威信にかけて阻止しようと図る佐幕派暗殺隊へ、恩のある細木年尾の父を救うために向う女泥棒白蜂お銀が短銃の弾がつきて捕われる。後手、胸を四、五巻したいいつもの型で連行され、暗殺隊の屋敷の一室へ閉じ込められる。以上が前編で、後編では仲間達が救いに来る。

▽白馬童子・南蛮寺の決斗

(第二東映) 水木 淳子

黒蜘蛛党に殺された商人の娘が拐かされ

て一味の地下室につながれている。上半身だけを大写しているの、縛り方はよくみないとほとんど判らないが、後手縛り、縄尻を柱につながれ、しょんぼり座らされていることだけ判る。

なお、予告までに

▽スパイと貞操 (新東宝) 万里 昌代

シミーズ姿で双手吊りの拷問をうける

▽草間の半次郎・霧の中の渡り鳥 (東映)

大川 恵子

後手に縛られ猿轡されて駕籠で運ばれる

▽酒と女と槍 (東映) 舟橋圭子ら

上藤達の処刑(打首)シーンがあるが、縛りはどうだろう?

▽女と命を賭けてブツ飛ばせ (新東宝)

三条魔子・星 輝美

三条は和服、星はワンピース姿で後手に縛られているスチールをみたが内容は?

▽桃太郎侍・南海の鬼 (第二東映)

朝風みどり

ハリツケの刑にされかける。松竹スターの鳳八千代の妹だということだ。

▽甲賀の密使 (大映) 阿井美千子

これも刑場へひき出され処刑されようとするらしいが、どのような縛りだろうか?

「向うをむいて、其処の榎の傍へ行くんだ」
みよはぐいと背中を突かれて、よろよろと雨の中へ出た。

藤作は荷造用の木箱を榎の下へ持って来てその上へみよを立たせた。

「落ちないように、その幹をしっかりと抱えてろ」

「この箱を取るの?」

「其処から降りたら承知しないぞ。そうやって雨に打たれていりゃ、少しは汚れが落ちるだろう」

「ああ、痛い」

落ちまいと、一生懸命抱えている榎の樹肌の粗い皮が、滑り落ちそうになるのを喰い止めようとする動きに肌を擦って、その圧迫感と痛さにみよは思わず声を上げた。

「ああ、落ちる。あんた、もうゆるして」

雨が、みよの髪の毛をぐっしり濡らして後れ毛がべったりと額にくっついていて。

夕闇がいよ／＼濃くなって、庭の草も、緑の若葉も鼠色の闇に沈んだ中に、みよの哀れな姿だけが妖しい格好でうごめいていた。

(おわり)

x

x

x

愛好者の記録



—私はこの味を

愛する—

とやま・かづひこ

(148)

アコちやん

週刊シンニチ5月27日号に、浅草観音ウラの広場に巣喰うアコちゃんという十五、六の少女に、匂いをかがせてと哀願し、のぞみを叶えてやると五百円出して、とても喜んで帰る粹人？の話が出ていた。

匂いはフェチズムに通ずる。

外人は、この匂いに酔うとか。それにしても、乞食にちかい十五、六の女の子にも、五百円を投じて、花の香りを慕う虫のように粹人が近づくというそのことは面白い。

そして又、切なるねがい叶えてくれたアコちゃんは、その粹人にとっては天使とも見えたとに違いない。

趣味のない人達にとっては、ハナをつまみたくなるような話であろうが、こんな情景を空に描くだけで胸をときめかす、かずひこのような存在があることも知って貰いたい。

(149) 青い女馬

フランス映画「青い女馬」には、映画史上はじめてという場面がある。

II サンドラ・ミローのマグリットが、牧場

で小用を足す場面があった。女といえば、恋ばかりにふけて、飯も食わなければ屁もたれないような顔面をしたものばかりが出てきやがる日本映画では、とても、このような小便シーンにはお目にかかれまい……。

右は、作家、今東光氏の批評。

ヒミツ？のシーンが、堂々と出てくるとはさすが、フランスのお国柄か。とにかくかづひこにとっては又とない素晴らしい作品であるといえる。

(150)

おむつサービス

かづひこの住居の窓からは、お向うのアパートの生簾が一目で見える。

午後三時となると、ピンクのサービスクーが、このアパート団地へやってくる。赤ちゃんのいるお宅相手の、オムツのクリーニングサービスクーである。

お向いの多田さんは、結婚一年足らずの若夫婦。ところでオカシイのは、この家にはまだ赤ちゃんがいらないのにオムツが配達されるのだ。それが毎日のことなので興味をそそられる。だが、団地でも、ウワサの拡がるのは早

い。どこにでも放送局は設置されているものらしい。

わが家にも、時々放送局の方から出張してきて親切にニュース解説をしてくれる。お蔭で、いながらにして、このスリラーめいた多田家のオムツのナゾが判った。

若く美しい多田夫人は、三月程前に流産して、それ以来床にいたり、起きてても無理はできず、毎日医者に通ってはいるが、狂った体の調子が治らないそうで、近頃は一層ひどくなり、日中、意識せずに粗相する日が多くなったとか。

「赤ちゃんもないのに、オムツを干すこともできないというので、私がお世話してサービスクーに來てもらっているんですよ。ホホ……、とんだ赤ちゃんで……」

こう、この放送局は云って解説は終った。

気の毒なことである。しかし、半面、かづひこにとっては、身を乗り出して聞き入る魅力ある話。

病気に苦しむ夫人を、そんな風に思うのはいけないことだが、かづひこには、美しい若夫人とオムツの関連が、妙に実感となって迫ってくる。サービスクーの従業員がうらやま

しい。

(151) サド旋風

Ⅱ略Ⅱストリップ劇場が、さいきんは傾向をグッと変えてきた。一口にいえば、セメが濃厚になり、サディズム・ストリップにだんだん移りかわってきたということだ。Ⅱ略Ⅱところが、さいきんは、コジキが美女を木にしぼりつけて暴行したり、がんじがらめにしぼって叩くとか、ハダカのまま水車にしぼりつけてグルグル回すといったむごたらしいシーンが、各劇場に登場してきたのである。Ⅱ略Ⅱそれにしても考えさせられることは、だんだん「変態」の度合が濃厚になってきたが、この調子で行くなら一体どういうことになるだろうか？というところ。このままいけば舞台でほんとの人殺しでもやらない限り、芝居をする方も観る方も気がすまなくなるのではなからうか。イヤハヤたいへんな世の中になったものである。このあたりで、健全な色気売りものにしてはどうだろうね。

以上は、五月二日付、毎夕新聞芸能タワー欄から。

Sを、この頁で取扱うのは筋違いかも知れないが、サドは、ウラを返せばMにも通ずるものだから一応紹介しておく。

サド流行が、いつの日か、マゾ流行へと転じ、ステージで堂々と、かよわき男性がイジめられるようになれば素晴らしいではないか。

(152) 撮 取

漫画読本6月号所載「本場もの奇書艶書ばなし」という記事のなか(一八二頁)に、これは中国の物語りで、

Ⅱ小坊主が、夫人の体内で棲息し、その体液を吸って食としているⅡ

という一節があった。体内の某所と述べられてあるので、想像以外のテはないが、日常、体液を食としているというところに強く惹かれる。

コプロ派にとっては、単に口にするというよりも、更に一歩進めて、それによって命をつなぐという考えの方が、よけいマゾヒスティックな気持にひたり得るものなのだ。

奇妙な事件の謎を解くカギは？

或る強盗事件

南 時 夫



皆さんは昭和三十三年の十月頃の夕刊に、次の様な記事がのっていたのを御記憶だろうか。今では余程特殊な方法か、被害者が有名人でもない限りはそう大きくは扱われない平凡な強盗事件の記事なので、新聞もほんの僅かなスペースを割いただけで特別な関心を持つ人でない限り、読まれたかどうかとも分らないが、それは次の様なものであった。

重役宅に覆面二人組

女ばかり四人を縛り上げ奪う

○日夜十一時半頃、東京都〇〇区〇〇番地、会社重役椎名喜三郎さん(四三)方裏木戸より黒覆面の二人組の賊が侵入、妻良江さん(三八)長女幸子さん(一八)次女喜美子さん(一六)女中の星和子さん(二二)の四人を短刀のようなもので脅迫し腰紐やネクタイで四人の手足を縛り上げ、サルグツワをはめたうえ室内を物しよく、現金六万円と指環、腕時計等を奪い、翌朝四時頃までねばって逃走した。なお主人の喜三郎さんは関西



方面に出張中であつた。賊は二人とも二十四、五才の長身の男で……

被害者の方達には申訳けないが、私がこのありふれた強盗事件に特別の関心を寄せたのは、ずっと後のことである。

私の大学の友人に検事の卵がいて、過日一寸した会合の席で久し振りに逢つた。何か変つた事件でもないかと水を向けると、別に法律的に問題があるというわけではないけれど現在、担当しているので……と前置きして語ってくれたのが右の強盗事件であつた。私はこの話を聞いた時、異常な興味をもつ

ある。

一、事件のあらまし

た。それはその結末においてアブノーマルなおいを感じたからである。以下彼の話を骨とし関係者の供述、証言等で肉付けながら紹介してみよう。氏名は実名か仮名かは分らないが新聞記事のままで

残暑も過ぎて秋らしい気候になり、夜長を楽しむ人々の多い十月初旬の一夜、椎名さん宅でも一家団らんの一刻を過し、さてそろそろ寝ようかという時刻になった。母親と娘二人が茶の間である奥の六畳でテレビを見、女中の和子さんはお勝手脇の四畳半の部屋に居た。主人の喜三郎氏が出張中のことで、家族はこの四人で全部であつた。長女の幸子さんは十八才で日本橋のMデパートに今春より勤

めはじめたサラリーガール。次女の喜美子さんはY高校の二年生で十六才。二人ともまだ遊びたい盛りである。母親の良江さんは仲々の美人であつて肉付きのよい身体なのでまだ三十そこそこしか見られなかった。女中の和子さんは二カ月前から住込んだもので、丸顔の温和しいよく働く娘であつて、いい女中にあたつて本当によかつたと近所の人達からも云われる程であつた。

二人組は戸締りのまだしていなかつた勝手口から侵入した。風呂敷のようなもので覆面した二人の男であつたが、台所から出刃庖丁を持出し、直ぐ女中部屋に入つて来た。和子さんは本を読んでいたという。あつと云うまもなく二人に抑えつけられ、手足を縛られて猿ぐつわを嵌められた。少々物音がしても奥の座敷には聞えないのか、茶の間の三人は全然気がつかなかつた。包丁をつきつけられて怖しさに声も出ない母娘を脅迫した賊は、三人を麻縄や腰紐で縛り上げ、茶の間と客室を物色。翌朝四時頃までねばつたうえ、裏木戸より逃走した。

賊の逃げたあと、長女の幸子さんがやつとこのことで縄を解き、六時半頃、届出たということであるが、調べてみたところ、茶の間に

あった現金と、娘さん達の部屋にあった腕時計、宝石類が盗まれていることが判明した。以上が事件の概要であるが、これを多少、詳しく当時の模様を知るために、被害者に直接登場して貰うことにしよう。茶の間で恐怖の数時間を過ごした次女の喜美子さんは次の様に語っている。

二、次女、喜美子さんの話

私はその日は秋の展覧会の作品を仕上げるために学校に残っていたので、帰ったのは八時半頃だったと思います。お姉様もまだお勤めから帰って居らず、茶の間にはお母様が一人でテレビを見ておられました。お姉様は東劇に行くと言っていましたので、丁度その日だったのかも知れません。自分の部屋で明日の下調べをして、ふと気がつくと茶の間でお姉様の声がします。私も少し疲れたので座敷に入ってテレビを見ることにしました。お姉様はまだ外出着のままです。今帰ったところらしく、ケーキの箱を開けているところでした。「今日、来たお客様でね、こんな人がいるのよ……」といったものようにお姉様がデパートの出来ごとを話します。女中の和さんがお茶を入れに入ってから四人でとめどもないおしゃべりの連続。「喜美ちゃん、このス

カーフいいでしょう」お姉様は今買ってきたらしい白地に緑の水玉のあるスカーフを出して私に見せました。「まあ素敵……じやー今しているの私に頂戴」お姉様が頭を包んでいる花模様のスカーフに眼をつけていた私は、早速こう云って無理に貰ってしまいました。「そっちの方が布地がいいのだけど……」残念そうにお姉様が云うので、もう一度新しいスカーフを一生懸命はめてあげました。

十時を廻っていたところだったでしょうか。和さんもお部屋に引込んだ様で、私もそろそろ眠くなって来ました。お姉様が「顔を洗うの面倒になったわ……」と云いながら立上って洗面所に行こうとした時、お姉様が開けるより前に廊下側の障子が開いて二人の間が、にゅーと入って来たのです。

お母様はテレビの方を見ていたし、私は眠たくて半分うとうとしていたので一寸の間、気がつかなかったのですが、お姉様の変な気配に振向くと、黒っぽい洋服を着た大きなものが眼に飛込んで来ました。「声を出すな!」そう云われるまでもなく顔が引つって、声はおろか身体も動かさません。怖ろしさというものの方が足の方から急速に全身を包み、知らず知らずの内に震えてくるのです。お母様やお

姉様の様子を見るゆとりとてあろう筈もなく私は石のように座っていました。「金さえ出せば何もしない。変に騒ぐと……」賊は二人でした。黒眼鏡をかけ顔の下半分を風呂敷のようなものでかくして手には庖丁を持っています。「金はどこだ!」庖丁がお母様の胸もとで気味悪く光り、それが新しい恐怖を呼びました。

お母様が、がたがた震えながらタンスの抽出しの方を指しました。一人の男が近寄って乱暴に引出し「これだけか!もっとあるだろう……」今度はお姉様の方に庖丁を突つけ、無言で差出したハンドバッグからお財布を抜き取りました。気がついてみると二人の賊は土足のままで畳は泥だらけでした。「おい、縛ってしまえ!」一人の男が命令するように云うのを遠くの方で聞いたような気がしました。私はもう半分、気を失っていたのかも知れませんが、恐怖で気を失いかけている者を又、更に縛ることなどなにかないと思いますのに、二人の賊は私達の手足を麻縄で縛りはじめました。

お母様とお姉様が手を後ろに廻され背中縛られると横に転がされ、足首も縛られるのをぼんやりながめていた私は、強い力で腕を

ねじ上げられると上体を前に抑えつけられ、手首に縄が掛けられてから、やっと恐怖の他に別の生々しい実感が湧いてきたと申せましょうか。庖丁を突きつけられた時は「殺される！」という怖ろしさが全身を占めていたのですけれど、実際に縛られると、何かもうあきらめのような気持で僅かながら自分を取戻したといったところでした。男達が持ってきたのか家にあったものなのか分りませんが、縄飛びに使うような細引が蛇のように私の手首にからみ、胸から二の腕に廻されて厳しく縛られ半身の自由を失った私は、突かれてもろくもそこに倒れ、足を引張られて足首を別の紐でくくり合され起上ることも出来なくなりました。

私達を座敷に転がすと二人の男は「騒ぐとためにならない……」と念を押しながら一旦部屋を出て行きました。お父様の書齋にでも物色しに行ったのでしょうか。十分位してまた入って来ました。私は起上る気力もなく転がたままでしたが、やがて引起されると頭髪を掴まれ顔を上向きにされました。「口を開けるんだ！」低い気味の悪い声でした。思わず開けた口の中にハンケチのような布切を押込まれると、その上を先程お姉様から貰ったばかりのスカーフで縛られました。顔の骨がく

だけるかと思うくらい強い力で後頭部で結ばれて、あゝこれが猿ぐつわというものののだと思いました。映画やテレビでもよくこのようにされている人を見ていましたので猿ぐつわという言葉ぐらい私でも知っていたのです。引起されると矢張り後手に手足を縛られたお母様とお姉様の姿が眼に飛び込んで来ました。お母様は手拭で、お姉様は真新しい水玉のスカーフで、同じ様に猿ぐつわを嵌められておりました。

二人の男が茶箆箆の上にあったお父様のウイスキーに眼をつけ、縛られて石のように座っている私達三人を眼の前にしてちびりちびりと飲みはじめたのは、もう十二時近くであったと思います。それは身動き出来ない女達を酒の肴にしているような飲み方でした。私はその時、映画や雑誌でよく見た別の恐怖が湧いてきました。身を守ることも身体的自由を失っている今では、どうすることもならず、ただ男達に変な刺激を与えてはならないと、じっと動かずにいることだけでした。私の眼の前で背中を見せているお姉様の高々と交又してくくり合わされた手首が痛そうに動ききました。お姉様、動いちゃいけない！」

私は自分のことのようにハツとなりました。ありふれた言葉でしようけれど、恐怖の数刻は流れました。

「一人が動く」と他の奴の首が締るからな！サツに届けやがると、きつと礼をするぜ！」三人は背中合わせに座られ投縄の輪のように作られた縄を首に掛けられました。私の首からお姉様に、更にお母様から又、私の首にと継ぎ合わされました。

二人の賊がお部屋から姿を消してもまだ私は動く気力も無く、じっとそのままの姿で座っていました。まだどこかに男達が眼を光らせているような気がしていたのです。十分二十分、いや一時間、二時間……。私の首の縄が締ってきて思わず声をあげました。でも勿論、満足に声が出る筈がなく、よろよろと倒れそうになると、私の指にお母様かお姉様かどちらかのかは分りませんでしたけれど、組合わされた手首が触れました。自分で自分の縄を解くことは出来ないのです、私は指先に触れたその結び目を必死にほどこうとしました。何しろ後手の儘、しかも首を動かすこともせず、本当に手さぐりですのですから、とても大変でした。爪がはがれるかと思う程痛みました。口の中に押込まれた布切れが気

持悪く、吐気がしてきました。縄の掛った胸と二の腕が痛み、私は何度も指先の運動をやめようと思いました。お姉様が何か言ったのでしようが、でも「うーうー」という呻き声が聞えるばかりです。苦心の末、やっと半分程ほどけかけた時でした。突然、物音がしたのです。お勝手の方からお姉様のお部屋の方へ行く足音と、何か物色している気配。男達がまだ居る！私はこれほど怖しかったことはありません。物音がしなくなった後も、まだどこかに……と思うと身動きも出来ず、私は縄で締めつけられた身体の痛みを必死にこらえておりました。

私達が、やっとお互いに縄を解き合い、ふらふらと立上ったのは、もう夜明け時分だったと思います。

「喜美ちゃん、早く」お姉様が口を縛った布を顎の方にずらせて、こう言うのを聞いて、私は我に返りました。直ぐ電話をかけようとしたのですが線が切られていてどうにもならず、早く知らせなくてはと外へ出ようとした時です。「和さんは？」とお姉様が聞くので私は女中部屋を聞けてのぞきこみました。私のすぐ足



もとに和さんが倒れていました。「和さん！しっかりして！」後ろから入って来たお姉様が呼んだ時、和さんは初めて「うーうー」と呻き声をあげ、必死に藻掻きはじめました。

和さんも矢張り縛られていたのです。それも、それはそれは無惨な姿でした。敷いたふとんから身体は半分以上、転げ出ていましたが、どうしたことが下着だけの姿なのです。

いつもは、とても身だしなみの良い人で、洋服か和服をきちんとつけ、私達の方が恥しい格好をしているのですが、その時はどうした

ことかスリッパも着けない巾の細いブラジャーとパンティだけなのです。私達は思わず後ずさりしました。私達を驚かせたのは、そのような和さんの姿もさることながら、その体に巻きついていた数多くの縄でした。

私達もつい先程まで後手に手足を縛られ浅間しい姿で座っていたのですが、和さんの姿と比べれば数十倍も楽だったと思いました。

なにしろどこから縛りはじめてどう縛り終えたのか、何本の縄が巻きついていいのか、それらの縄がどう連絡しているのか、さっぱり見当もつかない程なのです。縄も一

種類ではなく荒縄の太いもの、小包に使う丈夫な麻縄、縄飛びに使う木綿の縄。私達は主に木綿の縄と腰紐で縛られたのですが和さんはこのような生易しいものではなく、一本々が可成り使い慣らされて、しかも解くことも切ることも不可能と思われる程に固く引締った縄で全身を締め上げられているのです。それが計算されたように適当な長さのものばかりで別々になっており、一本の縄が解けても他の縄はゆるまないようになっています。

足首が固く縛ってあったのを最初として、膝の上下を別々に嚴重に繩は巻かれ、それがずり落ちないよう腰に廻って、とめてありました。これで和さんの両足は、ぴたりとはりついたようになってしまつて、その間に一寸の間隙もありません。上半身はまず両手首が背後に厳しく組合わさつて縛り合わされ、別の繩で胸がくびれる程縛られていました。思い切って締め上げたのか二の腕の肉の中にめり込む程の緊縛で、結び目は前にあり、これではほどもほどもどけません。二の腕から胸を縛られている繩は首に廻つて首がぐるぐると巻かれています。和さんの顔が真赤に見えたのも、この首に巻かれた繩のせいだったのでしようか。手首を縛った繩は、背後で胸を縛った繩に通され吊上げられています。更にひどいことには、その一旦、縛りつけられた繩がずっと足の方に回り、足首の繩と連結されて、くの字型に引張られていたのです。和さんのブラジャーとパンティだけの身体は奇妙な格好でそり返つて一本々々の繩が固く肌にくすまり、凸凹にな



つてみました。

又、鼻と口には絹の布が厳しく掛つていましたが、後で分つたことにハンケチが二枚も口の中に押込められていて、溢れ出ようとすそのハンケチを腰紐で無理に押込むように唇を割つて三重に頸の後ろで縛り、その上から巾広い絹の布で二重に覆われていたので、声を出すどころか、よくも窒息死しな

つたものと思ひました。そんな無残な姿で和さんは転つて藻掻いていたのです。一寸でも動けば膚が切れる程に縛り上げられた姿でよくも藻掻けるものと思ひましたが、その時はもう夢中で、口を縛られた下からよだれを流し、うーうーうーと呻いている和さんの姿はあまりにも無残でした。

「和さん、しっかりして！」私達は二人がかりで、まず鼻口を覆っている布を解き、口の中からべとべとになったハンケチを取出してやりました。「お嬢様、すいません」口が自由になると和さんは案外、元気な声でそう言う、又、不自由な身体を動かしました。「痛くて……早くほどこいて下さい……」和さんの頼みを聞くまでもなく、私達は手分けして雁字搦目になった繩を解きにかかったのですが仲々思うようにほどこけません。何しろ一本の繩をやつと解いても別の繩はゆるみもしないのです。私は爪がはがれるかと思ひました。お姉様がハサミを持ってこなかったら、まだまだ時間がかかったでしょう。

「もう大丈夫です。とても苦しかった……」
お巡りさんが来て色々調べている時、和さんがこう言って出て来て、私達は初めてお互に身体に異常がなかったことを不幸中の幸として喜び合いました。調べてみると被害として現金とお姉様の指環、時計等が盗まれていることが判ったのです。

次女の喜美子さんは、このように一夜の恐怖の模様を語っていた。茶の間の三人の方の行動はこの言葉で、よく分ったと思われるが、別室にいた女中の星和子さんの申し立ても聞く必要がある。

三、女中、星和子さんの話

ハイ、私がお茶間の方で奥様とお嬢様方にお茶をお出ししてから部屋に戻り、雑誌を読みはじめたのが九時半頃だったと思います。少し眠くなりましたので、ふとんを敷いてから、寝巻に着換えようと下着だけになり、スリッパは明日、洗濯しようとそれも脱ぎ、ブラジャーだけになった時でした。

突然ふすまが開いて、ぬーと大きな男が二人入って来たのです。私は思わず寝巻で胸をかくして逃げようとする、いきなり眼の前

に庖丁をつきつけられ「静かにしな！」と低い声で言われました。とても怖しくて声も出ません。早く奥様達に知らせなくてはと思いながら、歯がガタガタ鳴るだけでどうすることも出来ません。ふとんの上に押倒され、寝巻の紐で手を後ろに、更に足首も手拭で縛られてしまいました。それから一人の男が私の口をタオルで巻いている間に、もう一人の男がお座敷の方へ入ってゆくのが見えました。

私は怖しさのために、じっと転っていました。それからどのくらいの時間が経ったのかはつきり分りませんけれど、カタツという音も止んで静かになったのを覚えています。お嬢様方も私と同じようにされているのだと思うと、何とかしてとは思いますが、どうすることも出来ません。静かになってから私は手首の紐を解こうとしました。手首だけ縛られていたので、腕を突張ったり手首を動かしたりしている中に、どうにか紐がゆるみ、やっとほぐることが出来ました。急いで足の手拭を取って立上った時、怖い顔をした男達が眼の前に再び現われました。

まだ居たのです。「変なまねをすると、ためにならないぜ！」私は殺されるかと思いましたが、折角、自由になった私は、二人の男に

手足を押えつけられ、多分、物置からでも持ってきたのでしよう、それはそれは痛い縄で足首から首まで巻かれ、解くどころか一寸も身動きすることも出来なくされてしまったのです。口に布が詰められ気持が悪くなり、何度も吐きそうになりました。これが猿ぐつわっていうものなのでしょう。私も映画や雑誌で人を縛ることは知っています。でも自分が初めてこんなひどい目に合わされて、なんと怖いことだと思いました。腕はしびれて気も遠くなり、お嬢様方に助けて頂いて、やっと正気に返った程でした。男達が実際に何時頃、逃げたのか、どのくらい家の中に居たのかもよく分りません。

簡単ではあるが女中の星和子さんは以上のように語った。喜美子さんの申立と一緒に考えてみても完全な二人組強盗事件であった。

所轄の警察は当然のことながら、被害者から再び詳しい犯人の身長、人相等の特徴を聞き、二人の男を追った。明方に逃走したことから、一番電車を利用したと思われるので、その方の足どりを追う一方、盗品を検討し現金はとにかく、幸子さんの指環、腕時計を有力な手がかりとし、入質の可能性ありとして

その方も至急手配した。指環も時計も可成り高価な品物であって、犯人は必ずそれを金に換えるであろう。その時がチャンスと思われた。これこれの男が指環と腕時計を持って現れた場合は直ぐ届出るようにと、都内の質屋にこまなく手配し、その結果をまつた。

ところがどうしたことか一週間経ってもなんの届出もなく、犯人の足取りも掴めない。賊は盗品の処分に慎重なのだろうか。強盗の手口からみて、可成り前科のあるものの仕事と思われるが、それだけに簡単に尻尾を出すようなことはしなかった。

事件後一カ月も無為に流れ、当局も焦燥を増してきた矢先、横浜方面で二人組強盗事件が起きた。この方は未亡人一人だけの家が襲われたのであるが、その女性が気丈な人だったらしく賊の油断をみすまして、縛られたまま表に飛出し騒いだため、スピード検挙されて一気に解決した。

ところが二人の男の人相、年恰好、その手口から椎名家を襲った二人組に似かよっており、厳しく追求したところ、ようやくにして一か月程前に東京〇〇区で強盗を働いたことを自供した。一時は迷宮入りかと心配された椎名さん宅の事件もこれで解決したと警察も

ほっとしたのであるが、その裏づけ調査に乗出してから妙なことが発見されたのである。

奇妙なこととは、まず被害品のことであった。椎名さん宅からの届出では現金約六万円と長女幸子さんの指環と腕時計であったが、男達の自供では現金は確かに奪ったが、その他のものは知らないと言いつ張った。

初めは盗品を処分したために仲間をかばっているものとも思われたが、どう追求してもその覚えはないと言う。もう一度、幸子さんに尋ねてみても、指環と時計が確かに無くなっているとは返事は交わらない。こうなっては何等かの届出があるまでは、どうすることも出来なかった。

第二に賊の逃走時間の点で被害者の言葉と違っていた。自供によると十一時少し前に侵入し、逃走したのが午前一時半頃で、それから深夜喫茶でウイスキーを飲んで一番電車を待っていたと言っている。ところが椎名さんの二人の娘さんは、一旦静かになったが夜明け近くに確かに足音と物音がして逃げていったのは四時近くではなかったかと申立てている。女中と母親の良江さんは恐怖でよく分らなかったと言っていたが、娘さん達の記憶も

万更あいまいではなさそうである。

ただこの問題は、深夜喫茶の女給の証言により男達の自供の方が正しいことは判明したが、この喰い違いは奇妙であった。第三に犯行の手口、使用した道具等で取調べている中に、ますます変なことになった。

男達は椎名家の勝手口より侵入し、そこにあった庖丁を持ち、まず女中部屋に押入った。敷かれたふとんの上に女中が寝そべって本を読んでいたが、素速く寝巻の紐で後手に縛りタオルで猿轡を噛ませ、話声のする奥の部屋に入って母娘三人をおどし、女中部屋にあった縄と紐で同様に手足を縛り上げてから現金を奪った。それから多少、居直ったがそのまま又、裏口から逃げた。……と申述べている。すかさず

「現金を奪ってから又、三人を背中合わせに縛り首に縄を掛けたということだが……」

と追求すると二人ともそのことは認めた。

しかし再び女中部屋に引返し女中さんを縛り直したことにについては、その覚えはないと言いつ張った。

「念のために聞くが、その時、女中さんはどんなものを着ていたか？」

「……多分、まだ洋服を着たままだった……」

この喰い違いは、ことごとく奇妙だった。どちらかが嘘をついているとしても、どちらにも大して利益になることではないように思えた。特に椎名家の人々は被害者である。ウソの届出をする理由は全然ない。二人の強盗犯人にしても、きびしい取調べに対して、このような点でだけウソの自白をする根拠も薄い。このような疑問を残したまま、この事件

も一応、片づいたように思えた。椎名家でも、だんだんとその夜の恐怖の感じも薄れて、茶飲み話になろうとしていた矢先であった。千葉県警察より意外な連絡があり、幸子さんの指環と時計が発見されたというのである。

入りに来たのは二十二、三才の丸顔の女で都会的な仲々の美人だったということであった。あらためて二人の男を取調べてみたが、相変らずそんな女は全く知らないという。どちらかの男の情婦かも知れないと追求をきびしくしたが、どうも男達とは関係がなさそうであった。

(以下次号)



マゾ通信

マゾ男性よ

嘆くことなかれ

諸岡堅雄

鞍良人さん。本誌二月号読者通信欄のぼくの拙文がお目にとまってうれしかったですが、なによりも我が意をえたことは、あなたが女性というものが夫婦になれば、サド女性でな

くとも、きわめて大胆に振舞うことを発見された点です。(本誌六月号一七二頁以下) 本誌の読者にはおなじみの森山美歌、乗杉貴代子、荒井貞子、鷹野めぐみさんといった

サド・タイプの女性を現実にもつけ出すことは容易ではないでしょうが、「痴人の愛」のナオミ・タイプの女性なら世間にはザラにいるのです。小説でも映画でも、ナオミ自身が

サド女性として描かれていない点に、世のマゾ男性が案外、無関心なのは、いったいどうしたことでしょうか。女性の個性にもよるけれども、夫のリードいかんによっては、叶順子のナオミではないが、「ようし、こうなれやプロレスだ」とばかり、脚で亭主の首をしめることなど朝飯まえでしょう。

若い夫人同士の会話をきいていると――

「かれ氏、あたしには馬のように忠実よ」

「いうことかなきゃ、しめちゃうわ」

「降参さすなんて、わけないことよ」

といった物騒なことが出てきますが、かの女たちかならずしもサドではなく、かれ氏たち、また、かならずしもマゾではありません。しかも、こうした女性にかぎって夫とつれだってどこかへゆくときは、もっともマソリッヒ（男らしい）な態度を要求するのがつねです。ただし、帰宅してから

「あなた、きょうとてもすばらしかったわ」

「すばらしき男性か」

「その男性をこれから征服できるかとおもうと、ウズウズしてきた」

なんてことを平気でいう夫人もまた少くないようです。かの女たちの心理はおそらく、すばらしき男性を独占し、しかもかれ氏をお

もうままに操縦することに愉悦と満足を感じているのではないでしょうか。ぼくの経験にかんするかぎり、すくなくともそのようにおもえるのです。

妻が夫を操縦する方法はいろいろあり、腕づくでかれを握り伏せるなどは、もっとも原始的な方法ですが、ぼくの知るかぎり、たいていの女性は、この原始的な方法をもっとも好み、いちどはやってみたいと念願しているようです。ぼくが若いときには、妻が柔道好きだったせいか、集まってくる若夫人たちの話題ももっぱら柔道で、

A夫人「奥さんに教えられたとおり、急所をびたりと抑えてやったら、かれ氏、悲鳴をあげちゃったわ」

B夫人「あらあ。あたしもよ。ゆうべ習ったばかりの片十字絞めで、降参させてやったの。いままで馬乗りになっても、うちの人のとおり胴が太いでしょ。だからいつも横へひっくり返されてたんだけど、奥さんにいわれたとおり、馬乗りの姿勢で片膝をたてて絞めたら、完全に一本だったわよ」

C夫人「そうすると、あたしんとこのは、おとなしいのねえ。あたしにいったん馬乗りになられると、それだけで抵抗力がなくなっ

ちゃうらしいの」

A、B夫人「ちよっと張り合いがないわね」

C夫人「そうなの。やっぱり男らしく向って来なきゃあ、つまんない」

A夫人「抵抗するやつをびたりと抑えつくとところに柔道の醍醐味があるわけねえ」

このように男性を組み敷いて、高き誇りを感じている夫人たちが、マゾ男性を歓迎しているかといえば、そうではなく、折にふれてぼくなどがマゾソッホの話をしても、「病的でいやらしい」と一蹴してしまうのでした。いったい、これはどういうことなのでしょう。か。A、B、C夫人とも、男らしく立ち向ってくる男性をたたきつけることに快感をもっていたようです。

いま「週刊朝日」に連載中の今東光の「悪名」という小説（第四回、五月一日号）で、お千代という人妻が村きつてのわんぱく少年朝吉をやっつけるところがありますが、お千代は朝吉の頸に手をかけてひきたおし、もがきながら起き上がろうとするかれを上から抑えつけ、かれの頭を股倉へ押しこんでしまします。お千代のような平凡な女性でも必要とあらばこんな姿態を平気で演じるのです。や

はりこの「悪名」のなかで、朝吉の姉がかれに向って「おいど(お尻)の匂かがしたるか」という、くだりがありますが、このように一見、サド、マゾのプレーみたいなのが世間でおこなわれているのが普通のようにです。今東光は、お千代に顔をしめつけられた朝吉を「何ともえたいの知れない女の匂いが鼻をかすめると、身体がしびれるように動けなくなってくるのだ」と描写していますが、たしかに大の男といえども、朝吉同様のていたらしくなってしまうでしょう。

とにかく、いったん男を知った女性というものは、普通に想像されている以上に大胆に振舞うものです。すこしオキヤンな若夫人ならご亭主を馬にして、這いまわらすことぐらいめずらしくないでしょう。「あたしまるで赤ちやんみたいねえ」と甘えるかとおもうと次の瞬間にはご亭主を廊下に這わせ「さあ女王さまをベッドまでつれていくんだ。ハイハイ」とおごり高ぶった気持に急変するなどこの辺の心理はなかなか複雑で、サドだマゾだと一方的にわりきれないものがあるようです。といいますのは、このときの女性の心

理は、かならずしも征服感に酔っているのではなく、むしろ反対に、男性に甘えているばあいさえあるのです。そして男性はまた男性で、かの女のいいなりになることによって、精いっぱい愛情を捧げているともいえましよう。

さきほど、女性は大胆に振舞うものだとし上げましたが、それにつけ加えて、かの女が意欲的であればあるほど、そしてアクティブであればあるほど、サド女性も顔負けする、ほど猛烈なものであることを、書き加えてお



く必要があるようです。ただし、ほくのはるかぎりでは、緊縛や鞭打の儀は、ごく特殊のばあいを除いて、ないようにおもわれます。

それからもう一つ付け加えておきたいことは、つねに馬乗りでほくを責めつけている妻にしても、また妻の友人たちにしても、結婚するまえは、そうしたことは夢想だもしていなかったということです。妻の後輩で、げんざいは子どもまであるY夫人は、イルゼ・コッホも顔負けするするほど積極的な女性ですが、しかし、かの女もBG時代に、マゾ男性にいいよられたときは、身ぶるいするほど嫌悪をおぼえたといっております。

「そんなやつは、踏んづけてやればよかったのに……」

と、ほくがいますと、

「あんな痩せっぽち、踏んづけるのはわけないけど、ベロベロなめてくるんですから、ぞうツと、しちゃいましたわ」と答えました。Y夫人はバレーボールとテニスできたえただけあって、そのポリウムは物すごく、S信託勤務中はマゾ男性を随喜させていたらしい

のですが、かなしいかな、かの女が未婚だったということが、かれらマゾ男性の願いをかなえてやる事ができなかったとおもうのです。しかし、いままら大丈夫です。それが証拠に

「いまその男が奥さんのまえに現われたら、あなたどうしますか？」

と、きいたところ、即座に、しかも平然と

「便所掃除に使ってやりますわ」と答えたのです。

そこで調子に乗ったほうが、こういいました。

「いっそあなた専用の便器にしちやいなさいよ」

ところが、かの女は顔をあからめるところか、にっこり笑って

「あら、ほんと……。あの男、そのほうが喜ぶかも知れませんかよ」

瞬間ぼくは、この身長一メートル七十八、六十八キロという逞しい女体が、世にもあわれなマゾ男性に打ち跨った情景を想いうかべながら

「それに奥さん、人間便器は便利なもので、すからねえ」

柔道の醍醐味が

あちわけねえ



SHIN

とでしようか。未婚時代にはマゾ男性をみただけでも、その気味わるさに身ぶるいしたかの女が、りっぱな主人をもち、子どもまでこしらえて妻の座に安定すると、いまは「そいつ」をひつとらえて便所掃除をさせてやろうという意欲——といっているすぎなら想像——を燃やすまでになったのですから。

ところで、世のマゾ男性にとって、女性のこうした変り方ほど勇気づける材料はほかにありません。マゾの世界は空想ではなく、現実にも存在するという意味で。未婚時代は終始受身で結婚すればまず生活の安定だけを願いきわめてつつしまやかに過してきた女性も、いったん女房の座につき、思いどおりに生活が安定し、それをエンジョイしはじめるや、受け身な態度から能動的な態度に一変し、ふておてしくも女王の地位につくというこの現実をみると、男性マゾの世界はゆくりなくも展げてゆくといってもいいすぎではありません。Y夫人などその典型といってもいいようです。

このときY夫人は、さもわが意をえたというふうな、「あっはっはっ」と大声をあげて笑ったのですが、

「だめ。だめ。この人ときどき妙な妄想するくせがあるのよ」という妻の言葉に、ぼくの幻想はいっぺんにふっとんでしまいました。

「現実論」をもち出されては、ぼくとY夫人の楽しき会話も中断されざるをえませんでした。それにしてもY夫人の未婚時代と既婚時代のこの変わりようは、いったいどうしたこ

懸賞愛読者原稿入選作品

零の舞踏會

(その四)

彼は机を叩いた

「零にするのだ」

|| コルヴィッツ ||

氷 見 龍 也

特別研究生教育の篇 (四)

なぜ、このように苦しまなければならないのか、というのは非難ではない。疑いでさえない。それは苦しみの道を歩まねばならぬという、いわば芸術への宿命的な憧憬の血を悲しんだ、悲哀にすぎない。この快楽的な悲し

みの底には、選ばれた者の誇りがある。誇りこそは苦難を耐えさせる要因であり、逆境を非難に転化させない条件なのだ。

水原淑子は特別教室の体技室の入口の椅子に、きちんと膝と手を揃えて、正座していた。そうして彼女は、打ち据えられて悲鳴をあげる節子を見た。四ツ這いに体を波打たせる節

子を見た。長い睫毛の臉を閉じて、節子の呻き声を聞いた。

それは、いままでになく、盛りあがるような烈しい懲罰であった。

水原淑子の表情に憂愁の翳が深くなって、正座した脚がいつとはなしに、わななきを止められなくなっていたのは、自然なことだ。

しかし、そのわななきが恐怖であったか、緊張感であったのか、さだかではない。彼女は罰を受ける当事者ではなかった。が、彼女もまた、夜めいた暗いルームを埋めつくす異常な熱気にまきこまれて、昂ぶった感情裡にあった。それは事態を明瞭に直視させえない。

彼女もすでに四週間の第一期教育のあいだに、しばしば罰を受けていた。それはこれほどまでに烈しく厳しいものではなかったにしても、やはり罰せられるにふさわしい事情があったからだ。

罰せられるべき理由があつて罰を受けるのに、なんら非難すべき点はない。曖昧に済まされるよりも、叱られるときは、きちんと叱られた方がよいということを、彼女は考えるというより、生理的に気持のすっきりするのとだと感じていた。これは、かなり知的な感覚だ。

しかし、知的だということは常に冷静だということではないし、物事を誤りなく直視するということでもない。むしろ知性というものは、しばしば人間の視力を狂わせる作用をするものだ。

罪には罰が加えられるべきだ。そのことに間違いはない。しかし、なにが罪であり、そ

の罪に価する罰がどれだけのものであるのがふさわしいかは、合意に基づいたものでなければならぬ。時の社会の常識に合ったものである必要がある。

水原淑子は、しかし選ばれた者であり、自分の立場を特殊なものだと認識しすぎては、いなかったか。特殊な立場のものは、社会的な常識に合致していても、それは止むを得ないことだというふうに納得する。盲点はどこから生じたのか。彼女の特殊な立場からであったのか、宿命的な芸術への憧憬の血からか、誇りからか、使命感からか、特別な隔離状態からか、栄光の座への夢からか、彼女の知性からであったのか。いずれにしても彼女の毅彦にたいする恋心が、正常な人間的な眼差しを狂わせるのに役立っていたことは疑いない。

しかし、世の中に正常な眼差しといえるものが、どれ程あるのか。なにが正常な眼差しであるかを断言できるものはない筈だ。そのとき置かれた状況を正當に判断できないといつて、それこそが、当り前の人間の常態ではないのか。罪と罰のあり方も例外ではない。

このことは、苦しみにあいたいという願望では、勿論ない。しかし、苦しまねばならぬ

なら、思い切り苦しめられたいという背筋のひき緊つて戦慄する思いには通じている。彼女の血のうずきが、ここへ結びつく。

悶えている。叩かれてゐる。でも、節子は先生のお心を独占している。

と彼女は昂ぶった脳裏で思った。これは悲しかった。しかしこの悲しみのなかに、選ばれた者の悲しみのほかに、節子にたいする同情がなかったわけではない。しかし、その同情は、呻くがいい、悶えるがいい、という嫉妬にかき消された。そして彼女は、うなだれて思いもした。毅彦の叱るのも無理はない。嫉妬などするのは、気持がたるんでいるということの証しではないか、というふうになだ。

ああ、でも、悲しい。悲しいのだ。と彼女が、つきあがるように思ったとき、毅彦の声が、突然、彼女に向けられた。

「なにをしているのだ」

と毅彦は呼びかけた。

はっ、と気を取り直して臉を開いた彼女は立ち上っていた。

毅彦の声を唐突だと聞いたのは、淑子である。いつのまにか、節子はぐったりとマットの上に倒れ込んで横臥して休んでいる。

彼女が喘ぎながら五周を終ったのに淑子は

全く気づいていなかった。彼女は昂ぶった脳裏に想念を千々に乱していたのを、なぜか恥じた。

「ぼんやりしている」

と毅彦の声が厳しかった。

「え？」

「準備はどうしたのだ。なにをしにきたのだ」

「はい、すみません」

毅彦がいったのは、体技室に個人レッスンを受けにきたので、そのレッスンでは服をとって準備するのがあたり前だということだ。

「レッスンを受けにきたのなら、ここでもなに行われていようと、その準備をしておかなければいけない。自分のつとめを忘れるな」
ぼんやりしている、と彼女は自分を叱りながら、急いで、部屋の隅で制服をとった。こ



ういうとき、三島毅彦と綾小路学園長の高貴で威厳のこもった姿は重なりあって、特別研究生の淑子を、圧倒するようであった。

「第二期教育に入る前に身体状況のテストをやってみる。きつい調査だ。準備体操は十分にやっておくことだ」

と毅彦は、慎しみ深く背をむけて服を脱ぐ淑子を、おびえさすようにいった。

事実、彼女はおびえた。はい、という返事が失われた。彼女は一瞬、息をのむようであった。しかし、ためらっていたとしても、どうにもなりはしない。彼女は衣服を脱ぎ捨てると、白磁の肌を、輝やく照明の真下にとびこませた。

下肢の運動、上肢の運動、首、胸、体側、背腹、胴、ジャンプ、後転足先つけ、膝立後曲げ、仰臥脚の横倒し、と彼女は次々と微妙

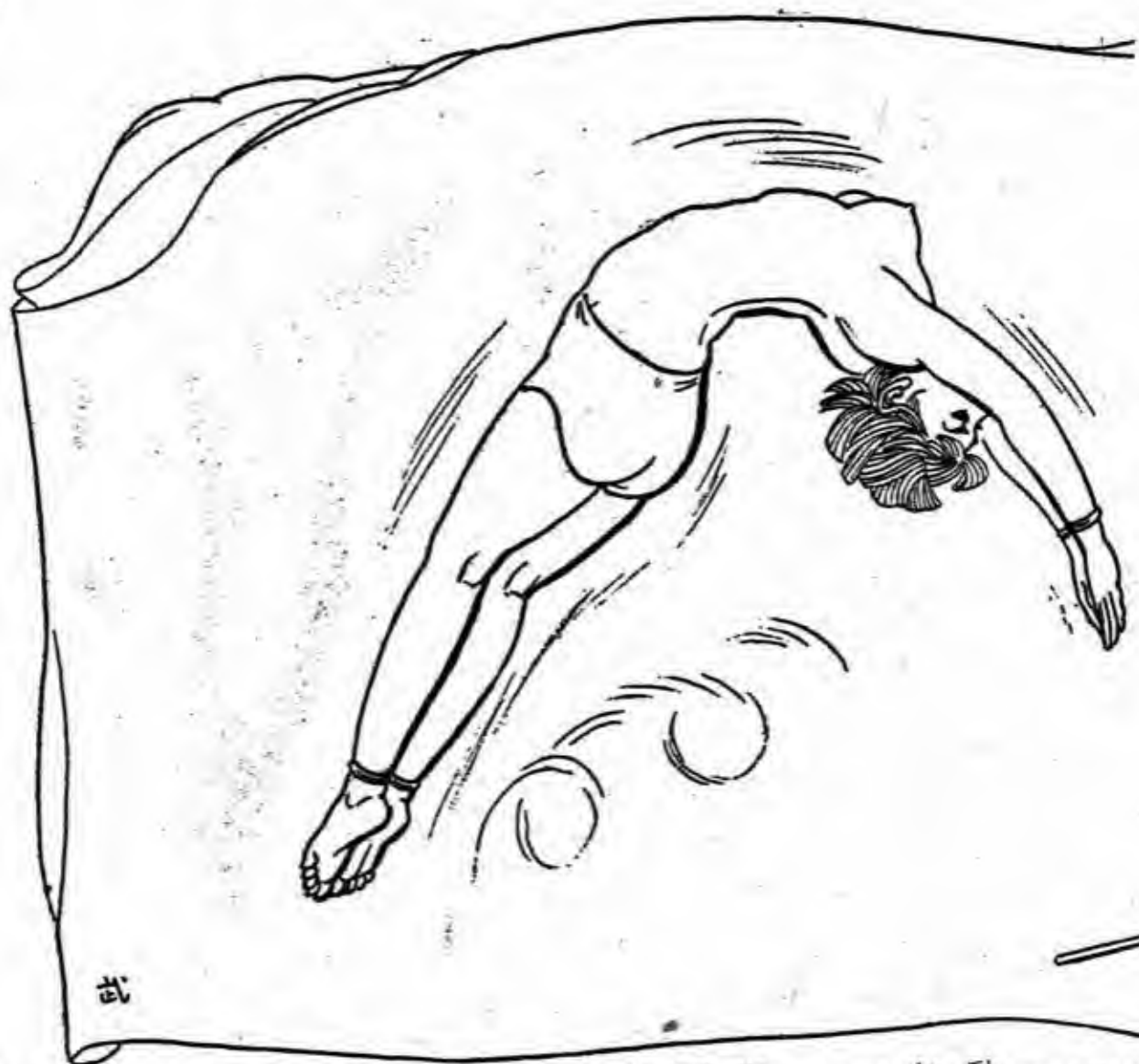
なカーブや震動を画く柔軟運動を念入りに行っていた。その体は美しく、無駄な肉はなく、未熟でもなく、すっきりと若々しく整ってみずみずしい。美しく可憐な女は虐められ

るために存在するものようであった。彼女は十分に準備体操を続けた。それは十分に、正確に虐めぬかれるための準備であった。

その間に、毅彦はマットを開き、吊環を下した。吊環は二組あった。淑子が柔軟体操をしながら不安の予感を抱いたのは、毅彦が吊環を下したのを眼にしたときである。平行棒とか平均台、鞍馬、などはともかく、吊環の体操は女子体操にはない。女子にはその体操はこなせないからだ。吊環はいままで淑子はしたことがないし、そればかりか、それはこれまで体技室にはなかった器具だ。毅彦は新設した吊環の具合を調べると、室内の照明を青白い光に変えた。その光線は冷気を誘った。
「よし」

と毅彦は準備を終えて淑子と呼んだ。
淑子は直ちに毅彦の前に駆け寄って直立の姿勢をとった。その折、ふと、節子が悶えるように軽く呻いて反転したのが眼に入った。臉がそっと閉じられて、唇が僅かにあき、顔の表情が弛緩している。それは、激しいトレーニングの苦しみを耐え終った後の虚脱したような疲労の表情とうつつた。ああ、と彼女は自分もそうなるのだと直感して、胸の慄えを感じた。どんなふうになされて私はあなる

のか、という気がふっとした。穀彦は、ひたと淑子を見つめた。彼女は彼のくいいるような眼差しにあうと、戦慄と同時に気の遠くなるような催眠状態に落ちいるのを感じた。



調した。それは、いままでになく烈しい運動が科せられるという意味であろうし、彼女は覚悟を要求されたのだと悟った。従わねばならぬ。

「しっかりやるのだ」
「はい」
「わかってるな、行動は、はきはきしなければいけない」
「はい」
「マットに横になれ。脚を真直ぐに伸ばして両手を頭の上に伸ばす」

彼女は固い布地のマットの上に美しい体を倒して、すんなりと成熟した体を伸ばした。固いマットの荒い感触と肌理細かな肌は対称的である。観念したように長い睫毛がはらりと閉じられた。

観念した状態がこよなく美しく似つかわしい女というものがいるものだ。穀彦は一瞬その美しさにうたれるようであった。
「最初はマットの横転だ」
しかし穀彦は胸のつかえを押し切って声を響かせた。途端に淑子は足首になにか冷めたものをあてられる感触を感じた。カチッと鍵のかかる音がした。彼女は思わず眼をひらいて、おびえた視線を走らせた。つながれている！と彼女は自分の両脚が、革製の手錠のようなもので揃えたまま固定されたのを見た。
穀彦は、さらに彼女の上に伸ばした手首に同様に革手錠をはめようとした。
「先生……」
彼女は恐怖の予感に思わず半身を起しかけて穀彦を仰ぎみた。下から見上げる穀彦は、仁王立ちになって、強力な絶対者の印象をかめた。
「なんだ？」
「……あの」
と彼女は絶句した。端的な言葉は、こわい、というものだった。しかしそれはいえなかった。哀願の言葉は非難と受けとられそうだった。非難をするなにごとがあるというのか。

彼はテストをするといったただだ。それはテストには必要なことだと彼が判断したことなのだ。

「いたみません？」

とだけ、彼女はようやくいった。

「ばかなことをいうな」

これは、痛むとも痛まぬとも、どっちともとれる言葉であった。

「……でも、それではうまくできません」

「どれだけできるか、それがテストだ」

抗いはここまでである。淑子の声は細く慄え、毅彦は無をいわず断言した。しかしこの抗いの底には、意識するしないにかかわらず、本能的なともいえる被虐感を昂める感情のゲームがあるようだ。革手錠が細っそりした手首にはめられたとき、彼女の顔は、うるんだような瞳を閉ざした。彼女はしゃくりあげるような鋭い吐息を洩らした。おるつと体が慄えて彼女の体は、ぴりと緊張した。拘束はじわじわと体の内部にしみいついていきそれは心をも深々と拘束するようであった。

無力に拘束された姿を、無抵抗に恋する人の眼前にさらしているという事情は、快よい絶望的な感情を誘いだすもののようである。当然のことながら、このあえかな被虐の快感

は、相手が誰れでもよいというのではないしいたずらな暴力が、それを惹起するものではない。少くとも尊敬とか好感とか信頼感がそれにともなわなければならないが、彼女の相手は恋する教師で、彼女を導く人であった。しかし、淑子のその感情は、いわば片想いであっただけに、すべての感情も行動も姿態も哀感にあふれた。

「横転運動を反復する。始め」

毅彦の声がかかった。どのように拘束された体をあつかったらうまくそれを行えるかということだ。この思考に可憐な嗜虐を認めるのは微妙だが、実際のだ。

淑子は腕と脚の関節をそりかえらせて、不自由な体をひねった。彼女の体は半回転して仰臥が伏臥の姿勢に変わった。

それから彼女は一呼吸、深く息を吸い込み、唇を結び、不自由な手足を曲げると、自分の体を弾き上げるようにして横に投げつけた。固いマットを叩く音がして、彼女の伸びのびした体は、見事に一回転した。続いて弾みを利用して一回転する。また手足の関節を曲げて体を弾きあげる。回転する。二度、三度と回転する。

それは丁度、捕われて陸に上げられた美し

い魚が、しなやかな体をきらめかせてはね返り、水を求めてのたうつ恰好に似ていた。青い冷めたい光が白さを冴えかえらせてはねる彼女の姿態を妖しく映えさせた。

回転運動は思考力を奪いとる作用が殊に強い。忽ち彼女の脳裏はくらくらするように霧を渦巻かせはじめ、黒髪が白い額に乱れてまつわり、彼女の柔肌は荒いマットにすれて赤らんできた。青光のただなかに喘ぐ彼女の動きは、二往復を終る頃には、ありありと乱れて焦立ってくるようであった。方向を失ってマットから転げだす回数が多くなった。その度に這うようにマットに体をにじり上げる。

羞恥というものは些細なことで、はげしく噴きだすことがあるものだ。

「どこへいこうというのだ」

と毅彦がわずらわしそうにマットから落ちた淑子を足で蹴るようにして押し上げながらいったとき、彼女は身悶えるような強烈な羞恥に打たれた。

もともと回転運動は方向感覚を狂わせがちなものである。しかも彼女はさらに手足の自由を失っていた。うまく自分の体をあやつれないのは当たり前なのだ。だが、毅彦にそういわれたとき、彼女は奇妙なほどの劣等感に打

ちひしがれ、羞しさに息をつまらせて、焦った。よくみられたいという思慕の裏返しがその劣等感と羞恥をよぶようであった。

そして広いマットではない。しかし、全身回転のもたらす疲労度はたかいし、苦しい。

「まだまだ、よいというまで続けるのだ」

教師の命令とは、もともとそういうものである。始めといわれたら、よしといわれるまで続けなければならない。しかし淑子の弾みつける動作が途切れがちになったのをみて毅彦が投げつけた言葉はむごかった。全身の筋肉が重く硬直してくるようであったし、革錠のあたる部分が、殊に痛みをましてきた。

「にぶい」

「とても、疲れて」

といいかけて、彼女は荒い息使いで

「はい」

と自分の弱いにぶさを認めた。

「新村は五回だった」

と毅彦は、ひとりごちるようにいった。

「……」

淑子の顔が、さっと紅潮した。新村節子と比較されたのは、意外に衝撃をあげくさせた。

「いいえ……」

と彼女は自分の体力がまだ限界に達してはいない、と否定した。まだまわらなければ、と、彼女は焦った。この気持は、恋の嫉妬からか、自尊心からか、少女くさい強情さからであったのか。彼女はただ、節子に劣りたくない、とはげしく思いつめた。彼女はマットに身をくねらせて這いあがった。それだけで息切れが烈しかった。彼女は力をふりしぼった。固く重い筋肉、喘ぐ胸と唇、底深く思いつめた輝きを光らせる瞳、いたずらな収縮、しかし、どれほど回転できはしなかった。

「蹴って」

と突然、可憐なものがきに力をふりしぼっていた彼女は、唇をあえがせた。

「蹴ってください」

必死な口調だった。毅彦はちょっと表情を崩した。それは笑いのようであったが、淑子の眼にははいらなかった。

「やれるか？」

「はい」

毅彦は足をあげて彼女を蹴った。

「そらっ」

と彼は懸け声をかけた。あつ、とその打撃に思わず洩らした淑子の声が懸け声にだぶった。弾みは蹴られたことでついた。

弾みは確かについた。しかし、それは哀れに無惨な努力であった。いたましさを強めたのは、毅彦の蹴るテンポにうまく調子を合せて体を回転できないほど、彼女の体は疲れ切って、鈍くなっていたことだ。彼女は二度に一度は、いたずらに蹴られた。しかし、それはしかたのないことだった。それでも彼女は蹴られることで回転しなければならなかったのだ。

「もっと……」

と彼女の声が高く細かく震えた。

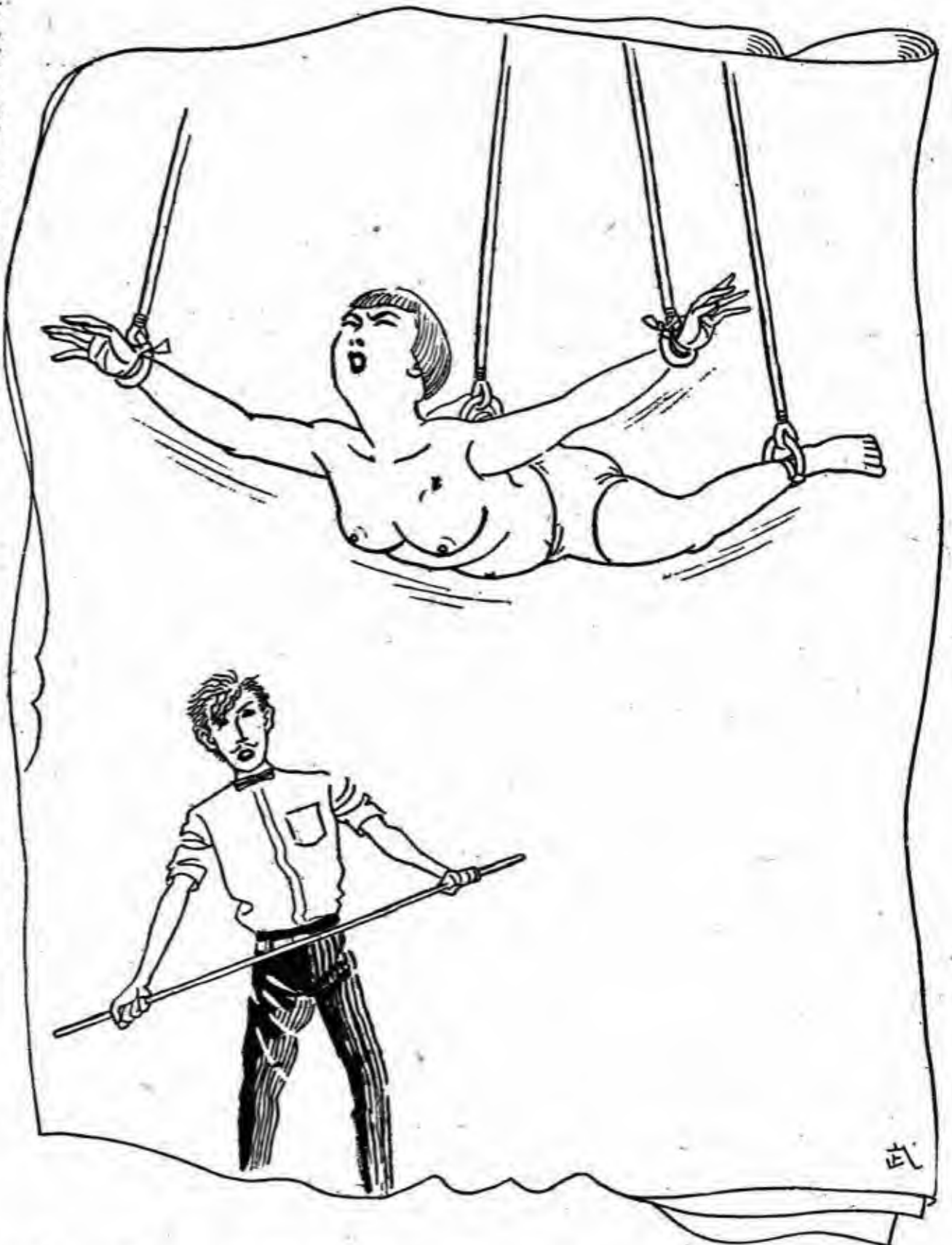
「蹴って！」

新村節子の懲罰が終った後、いったん静まりかけていたルーム内の青白い熱気は、また急速にもりあがって、すさまじく充満してくるようであった。毅彦の顔色も、それとともに精悍さをましてきた。

異常な熱気が頂点に達しようとしたのは、青ざめた淑子が、吊環にかけられたことだ。そうなるまでに、彼女は、鞍馬と平均台でテストされていた。彼女は、そりかえり、跳ねよるめいて打ち倒れ、鞭をあてられていた。吊環で最初に課せられたのは、体のねじれのテストだ。彼女の爪先だった垂直に伸びた姿勢は、腕を吊環に固定されて丁度、洗濯物

をしほりあげるように、ねじられた。
 勿論、彼女の柔軟な若々しい肢体は、洗濯物のようにねじれはしない。彼女は骨なしでもなければアクロバットダンサーでさえもな

い。彼女はそれどころか衆に抜きんでて美しい。さわやかに均整のとれた、正常な体の持ち主だ。だからこそ、無理にねじりあげられようとする彼女は、苦しみの汗をにじませて



武

悲鳴をあげ、呻かすにはいられなかったのだ。

しかし初めから彼女は吊環に縛られて固定されていたのではない。彼女は無理な体の振れと苦痛に堪えかねてしばしば吊環を握っていた掌を離した。

「だらしない」

と毅彦は叱り

「がまんができないのか」

と叱責を浴びた。

「掌が……」

と彼女は弱々しく、可愛い膝をがくがく震わせていった。

「握れないのです」

「くくってやろうか？」

「……はい」

彼女は頭を垂れ、済みませんと詫びて両手を差し出した。

そうして、彼女は革縄で吊環に縛りつけられたのだ。

しかし、さらに彼女は吊環に宙吊りのように吊られた。二組の吊環の間隔は、うつ伏せになって手足をぴんと伸ばした彼女の身の丈よりも、いくらか狭い程度だ。四つの環の中へ彼女は別々に手足をいれ、革縄でし

っかりとくくりつけられて、体を水平に宙吊りにされた。が、フロアにすれすれの宙吊りであったとはいえ、空間に浮いた彼女は当然水平状態を保ってはいられなかった。上になる体の背面はきつく縮み、下になる前面はそりかえって彎曲した。

空間にしまった淑子は、吊環を僅かにあげられた瞬間から、忽ち悶えはじめた。それはそれまでのテストに比べて、圧倒的に強烈な酷苦をもたらした。

「一分、二分……」

と毅彦は吊環の滑車を操りながら、タイムをとりはじめた。

「ああ、先生！」

彼女は血の逆流に叫んだ。

彼女は自分の体の重量を、初めて自分の感覚で知らされたようだった。咽喉を叩く呻きがつきあげ「いたい、先生」とあられもなく悲鳴がほとばしった。

痛みが襲ったのは手足のくくられた部分だけではない。それは体の表面も底も、縦にも横にも、斜めにも突走った。宙吊りになった彼女の全身をめがけて、骨身をけずるような苦痛が殺倒するようであった。彼女は脚をばたつかせた。必死に腕に力をこめて、彎曲し

た体を、水平にもどそうとする。体をよじる。しかしそれははかない努力で、体のどこも満足に動きはしない。吊環がカチカチとふれあって音をたてるだけだ。吊環が揺れ、彼女の身悶えする体も白々と揺れる。その揺れはさらに苦痛をまさずにはおかない。

事実は全く逆だった。しかし、その悶えはさまざまなテストにぐったりと疲れ切った彼女に、生気がもどったようにみえた。

烈しい痛苦に耐え得られる時間は知れている。妖しいスローモーションの動きをみるような悶えは、しだいに弱まった。重く、痛く、首はがっくりと垂れた。腕の付け根が、はずれそうに曲った。一分という時間が、これほど長いものなのか。

言葉とも、呻きともつかぬ悲声が走った。歯が痛んだのは強くかみしめて耐えていたためだ。涙がでた。視力が狂った。なにかの光が彼女の眼の奥で、くらくら明滅する。その明滅の度合はテンポをました。意識が遠のいて、鞭が鳴った。ひくっ、と意識が戻る。くっくっ、と体が限界を示して戦慄した。

それは、意識が失われようとする寸前の状態であった。そのとき、危うく吊環は、フロアに下された。毅彦は彼女の状態を熟知して

いるようであった。彼女はフロアに伸びて、喘ぎながら泣きじゃくった。

しかし、それは終りではなかったのだ。ほっと、しばらく休ませられたかと思うと、吊環はまた非情にひき上げられた。

「ああ、あ……」

「まだ、参るのは早い」

毅彦は、彼女に強い視線を突きさしながら吊環を操作した。

吊環はひき上げられ、きしんだ。下される上げられる。その反復。彼女は揺れた。悶えた。それは体力へのいたぶりだけではなく、この上もなく精神的な強烈ないたぶりでもあるようだった。

こうなることを彼女は予期したのか。勿論予期しはしない。被虐をたかめるためのような抗いが最初にあったとしても、それは、このような烈しさを望んだものでも、予期したものでもない。

しかし、これは教育であった。初期に強烈な苦痛をあたえておけば、次の段階には、苦痛を実際よりも過小に思わせる効果はある。

人間はなかなか苦痛には慣れぬにしても、刺激は一度から二度に上るよりも、三度から二度にさがった方が耐え易いものなのだ。

……が、青白い熱気が頂点に達しようとした時、不意に毅彦は吊環を操るのを止めた。淑子はフロアに投げ出されるように下された。彼女は乱暴な衝撃に呻いた。彼女は、なぜか不意に毅彦が彼女を放ったらかしにしたのかわからなかった。思考をはたらかせる力は全く失われて、彼女の体は、ただ間断なく、ぶるぶると震えていた。

しかし、毅彦は、隣りの主事室から電話のかかるかすかなベルの音を耳にしたのだ。それを聞きわけたのは、毅彦の冷静さを示すもののである。彼はつかつかと主事室に入った。主事室は明るい。が、すでに夕陽は落ちて残光が中空に輝いていた。

彼は受話器をとった。電話は女の声だった。それは毅彦を確認すると、別の女の声になった。電話からフランス語が流れた。

「アロウ、モ、トワ、ジャック？」

ジャックと呼ばれた毅彦も、流暢なフランス語で応待した。

「マダムか、待っていた」

と彼はいった。その折、彼の表情に、ちらと年令にふさわしい若い和やぎが見受けられた。

「お眼にかかりたい。貴方と貴方のマドモア



マニアの独り言

S・S 生

雑学博士、徳川夢声老の隠居さんと、その道の至宝、金語楼師匠の八つつあんの名コンビで説く巧みな時事解説。NHK・TVのコンニャク談義は、肩のこらない点でわたしのよく聴視する番組である。尤も帰宅の遅くなるわたしには、テレビといえは時間的に自然と視なければならぬ結果になるからだろうが、この番組で、先日（六月十八日）トバク問題をチョット論じていた。

トバクの性格論だが、八つつあんの、正月に子供がスゴロクをやってお菓子の取りっこをするのも、バクチの一つじゃないかとの論法に、隠居さん答えて、つまり程度の問題で、少しならいい。程度を越さなければいいという訳だ。………という意

味のことをいつていた。

わたしは、この時、奇妙に考えこんでしまった。何も殊更考えこむ程のことでもないし、事トバクに関してだけのことでなく諸事に共通する問題なのだが、わたしのその時の気分がそうさせたのか、妙にアブ・プレイと結びつけて考えてみたのだ。

NHKの意図を曲解して引合に出すように、誠に相済まぬことだが、そう考えてしまったものは仕方がない。

罪のない者をしることは、勿論刑法にも触れる罪悪であろう。不法檻禁云々の六法全書に見える言葉もある。みだりに人の自由を拘束して許される害のものではなからうことは当然である。人を縛ることは罪悪である。という良識？ があればこそ

ゼル達に」

と電話の彼女はいった。

「生徒のことか」

「クラブ『ゼロ』の例会に連れてこれますか？」

「それは、わからない」

と彼は低く笑った。

「それはあなたには関係のないことだろう」

……電話はクラブ『ゼロ』の例会が開かれるという連絡であった。

受話器を置いた彼は、深い吐息を洩らした。それは一種の安らぎの吐息であるようであった。

彼はフロアに唾を吐いた。自堕落な仕事だったのが妙に洗練された印象だ。それから彼はデスクの抽出しの鍵をあけて、中から一本の鞭をとりだした。細い白色の鋭敏さをそなえた革鞭だ。

彼はそれを夕陽に映えらせて打ち振ってみた。握り手にクラブ『ゼロ』の刻印があった。彼はその鞭を握ったまま、再び、主事室から特別教室へ通じるドアの把手を廻した。

（特別研究生教育の篇、了）

○ ○ ○

声なき声を張り上げて悶えている多くの、異常血の持ち主が居るのだろう。果してこのやっかいな領域にも、トバクと同じように、夢声隠居の言葉が通じるものだろうか？ 私と思う、本人、つまり被縛者の同意なくしては通じないだろう、と。

被縛者の同意があれば罪悪ではなくなるのか？と考えると、一がいにもそうとも断定出来ないような気もする。進んで同意する者と、いやいやながら、仕方なしに我慢する者との違によって、厳密な意味での同意解釈の開きも当然出てこようし、デリケートな相違点が生じてくるのは明白だろう。前者は、職業的に当然のこととみなしている映画演劇俳優や緊縛フォトモデルの現状からみても、問題はないし、後者の場合でも脅迫的言動の伴わぬ限り、同意した以上は罪悪とは云えないだろう。

要は、縛るといふことの目的、すなわち不法拘束か、遊戯拘束かの違いだろう。

問題は違うが、到底治る見込のない重病人が、救れると思って殺してくれと頼み、苦しむのを見兼ねて、楽にしてやりたい一心から息を引取らしてやっても、これは立派な殺人行為である。比較にはならないといいながら、縛って欲しい、鞭打ってほしいと思いつめ、悶え抜いて頼む、罪のない

マゾ者の苦しみを見兼ねて、希望通り縛ってやった場合、問題になるならぬは別としても、理屈は同じ事であろう。

官公吏には職務上の対民間人接触に於てどの程度までの接待は受入れてもいいという内規的なものがあると聞く。つまり許容量だろう。当然そうあるべきで、でなかったら、たとえお茶やコーヒーの一杯、タバコの一箱でも、贈収賄の対象になりかねない。

程度を越さなければいい……という訳か。アブの世界も、この調子で世間が認めてくれる範囲内なら、罪悪感のどうのということもないだろう。ならば、どの程度までがその範囲なのか？……と又、考えなければならぬ。実にやっかいな血を持って生れたものだ。

本誌連載中の「影の国」へでも行けて、至るところで縛られた女性が眺められたら時々思うが、もし、そうだったら幻滅の悲哀を感じるだろうとも考える。やはり容易に果し難いが故に尊く感じられるのだろう。

所詮、吾らは本誌の緊縛フォトでも眺めて見果てぬ夢を追う内が、一番安全で幸福なのかも知れない。

乗馬ズボンシリーズ

夕陽を染める乙女たち

皇紀二千六百年の夢破れて

プロローグ



衰弱して行く肉体に鞭打って、此の頃の私は、乗馬にはげんで
おります。残りすくない一生に名残りを惜しむためです。

乗馬から帰れば、必ずといっていい程、発熱してしまいましたが
その苦痛の中で、馬装の上から、トレンチコートを、きりっと着
こなし、フードもまぶかに、シャワーの栓をひねるのです。濡れ
ながら喘ぐ私。...

「乗馬女性」と一口に云っても、私は、とても、奇クの皆様が、
乗馬女性として憧れて居られるような、サディスティンではない
ようです。

乗馬クラブにも、私のような人が居られます。お話はしたこと
ないのですけれど、純白の厚地の乗馬ズボンを穿き、男風のスポ

藤山秀緒

ーツ・シャツのエリを立てて、馬装のまま往復されているのです。ななめにかぶった乗馬帽の下から、ゆたかな黒髪が、ふさ／＼として、エレガントな雰囲気の方です。しかも、純白の乗馬ズボンは、いつ見ても新品同様の清潔さ、長靴も黒光りがしているのです。そして乗馬の方は、あまりお見事とは云えないのですが、馬場へ見えた日は、いつも一人ぼっちで、柵にもたれて、目の前を通過して行く騎手の、拍車、靴、ズボンなどを、熱っぽい眼差しで見送って居られるのです。それも女性の…。

ああ、私は、何という女でしょう。同性の乗馬ズボンを注視する女性を、亦一人発見しただけで、嬉しさのあまり、その方の、心の秘密にまで立入ろうとしています。

でも、私は、それをここで詳しく述べようとしているのではございません。

その女性と似た方の写真が、十一月二十二日号の週刊明星にのっていました。私が、はっとしたのは云うまでもありません。そしてもっと、私を惹きつけたことは、その方のポーズでした。

あぶみに片足をかけ、鞍を両手で抑えて、いまのび上って馬に跨ろうとする処なのです

が、右足は宙に浮いたままで、まだ跨るところまで行かないポーズ。

美しい顔をゆがめつつ必死に這い上ろうともがく、あの方の陶酔的なポーズ。……それは、決してサディスティンのポーズではないのです。

足をしめつけ、膝を曲げることさえ苦しい乗馬ズボン、重い長グツ、がち／＼と足にまつわる拍車……そうした拘束をしのびつつ手をかりずに、顔をゆがめて、力一杯に飛びつく鞍……何度かの失敗……。そして、ぐうっ、と力が入り、鞍の上まで上った瞬間。

自虐……

そうした言葉が、これほどびったりする瞬間はないと思います。

私も、馬に乗る時は、人手を借りず、写真と同じようなポーズをとってぐうっ這い上るようにしています。

疲れて行く私にとって、これは苦しいことですが、何度しくじっても、きっと一人で乗ります。

馬を乗り廻すだけでなく、馬には、このようにな変った楽しみもあるものなのです。

私のどぎつい乗馬服切腹物語も、此の女性の方には理解していただだけそうな気がするの

です。

ああ、この方がヒロインになって、乗馬ズボン割腹に一役買っていたら……。そんな勝手な妄想が、私のペンを走らせて行きます。乗馬服に身を固めた秀緒が、週刊明星を机に開いて、あの方の切腹する姿を思いうかべながら、凄惨きわまりない自虐のテキストを、ここに発表しようとしているのです。

敗戦

ソ連軍がA町へ迫っていた。ソ連の急な参戦は、日本軍にとって本当に思いもかけないことである。勝敗は明らかであった。

A町には、憲兵隊が駐屯していて、その家族も移って来ている。隊長の千原は、叶わぬまでも抵抗しようと決心した。

千原は、新妻の咲代をはじめ、隊員の妻子や、看護婦たちを集め、撤退するように命じた。

みんな残って最後の抵抗に加わりたかったのを、千原は説得して、撤退がきまったのである。

が、どうしても説得に応じない人々が居た。

隊長の妻咲代と、看護婦たちであった。隊

長の妻と、六人の看護婦は、軍と運命を共にすることになった。

七人の女性も、もとより足手まといになりたくはなかった。彼女たちは、力のつづくかぎり後方で手伝い、見苦しい姿とならないうちに自決するつもりなのである。

咲代を班長に、看護班が編成された。

乗馬服を持っていた咲代のほかは、彼女たちは、全部軍服に長グツを穿くことにした。

カーキ色の、いかめしい軍服、乗馬ズボン長グツに身を固めた看護婦たちは、りりしい乗馬服姿の咲代のもとで、家族の撤退を手伝い、そして、最後の車が地平線に消えるまで涙さえ見せないのであった。

咲代は、僅かな守備隊の力では、一時間ももちこたえられないことを知っていた。

まして、女性の働く余地はあり得なかった。

乱戦になれば死損じる者も出るであろう。

咲代には、いまこそ、死すべき時に思えて来た。

自決。

せめて、彼女たちの血汐で、日の丸でも描くことができたなら、それを押立てて、最後の突撃に使ってもらえることになり。彼女たち

も戦場へ突撃したものととして、最後の御奉公を仕遂げて散ったことになるではないか。

咲代は六人に相談した。

「班長殿、旗に染めるほど血を取るのには、相当大きく傷つけて自決するのではありませんか。可能でございます。ピストルでは無理ではないでしょうか」

「班長殿。妙子さんのおっしゃる通りです。

血染の日章旗は、素晴らしいですけど、腹でも切らねば、とても血が足りません」

「腹！」

六人は一せいに息を呑んだ。軍の病院で、軍隊精神を強調されて育って来たこの看護婦たちにしてみれば、男子の切腹には、憧れに近いものさえあったのだ。

「秀子さん！ 切腹を……」

「……ええ、私、本で読んだことがあります。女だって、立派に切腹できる筈よ。……それに、私たちの死体は、もう決してお葬式なんか、してもらえやしないわ。切腹して、血や腸を出して死んでいたら、敵兵だって決して手なんか出せやしない。怖しがって逃げてしまうかも知れなくてよ。……しかも、私たちは男装なんだわ。ズボン穿いて、長グツまで装備しているじゃないの。さあ、少しも早く切

腹して、血染の日の丸を作りましたようよ！」

覚悟の注射

夜がふけた。がらんとした会議室には、焼却したものか、皇室の写真はなかった。七人の女武者は、皆、上衣をぬぎ、純白のワイシャツに乗馬ズボン、乗馬靴の姿で集っていた。咲代はグレイ、あとはカーキ色の乗馬ズボンである。

中央に大きな白布と手術用のステンレスの皿が七枚と、水入れのボールが一個、水さしと、コップが一つ。

短刀が七ふり、軍刀が一ふり、そして、太い筆が一本であった。

上衣をぬいだのは、死体となってから、かけて貰うためであろう。

七人は、守備隊員たちの右往左往する物音を、はるか宮庭にききながら、いま、心静かに自決しようとしているのだった。咲代は、「女だてらに腹を切り、その血で日の丸を染める。と云えば、隊長は、きっと固くとめるでしょう。とめられてからではおそい。切腹と、相談がきまった上は、一刻も早く決行したいと思えます。いま、手術皿をくばります。このお皿へ血をうけて下さい。私が集め

て、このボールへ入れ、私も腹を切り、苦痛を泳えつつその血で日の丸をかき、お後を追

います。死にきれぬ方は介錯いたします。なるべくは、描き終るまで、とどめはお待ちに



「なんのなんのこれしき……」

なって、一緒に死にたいのですけれど……
 ……では皆さん。お心静かに」
 六人は、切腹の作法もしらべていたしまささら悪びれる者もなかった。
 ワイシャツのエリを立て、男風に装う者、きりと鉢巻をしめる者、化粧を直す者など思い／＼に最後の身づくろいをしている。
 皆はきはきと男のように振舞っているのは、乗馬ズボン姿の魔力か。
 ……お互に目と目をあわせ、別れを告げる合うのである。
 ワイシャツのエリを立て、宝塚の男役のようなシルエットの秀子は、切腹の提案者だけに、すべてにリードしていた。
 咲代に、日の丸を染める任務を進言したのも秀子だった。そして、進んで其の介添えも引受けていた。あどけなさの消えていない秀子の美貌は、一の瀬千恵子さんを思わせた。
 高倉みゆき型の、くらいかげりのある美しさを持った咲代とは対照的だった。
 可愛いお小姓のような、乗馬ズボン姿の二人が、何か最後の打合せをつづけている。

五人は、まめ／＼しく注射の準備をつづける。興奮剤を打つのだ。冷静になつては仕損じる。祖国への愛情を、より激しく燃え立たせねば、必ず脱落者が出ると考えたのであるう。

七本の注射器が薬液を吸上げて並んだ。

咲代は、真先に注射器を取上げた。ワイシャツの左腕をまくし上げて、ズブとばかりに白い肌へ突刺している。

「皆さん、さあ、急いで、準備を！」

咲代は、薬の痛みを微かに左腕に感じながら、針を抜いた。六人も、次々に注射器を取りあげるのだった。

男風に、扮すれば扮するほど、あどけなさの残る彼女たちであった。殺風景な、戦場での勤務が、いつしか彼女たちを倒錯的な性格に導くのか、彼女たちは、「腹切り」ときいて一様に気負い立ち、その苦しみの激しかれとねがうのである。負傷兵の断末魔の絶叫に胸をときめかせたように……

秀子

「あせらず、弱らず、女乍らも武人の自決として恥しくない最期をとげたいと思います。秀子さんのお申し出をお受けして、秀子さん

の切腹をお手本に拝見しようと思うのですが皆さんの御意見は……」

咲代は秀子と打合せた通り、こう云った。一同に異議のある筈はなかった。

注射のききめか、心持ち赫らんだ美貌を恥しげにうつむけながら、秀子は咲代のこの言葉にうなづいている。

ワイシャツの衿を立て、乗馬ズボンのベルトを締め直して、秀子は凛々しく身づくろいした。

秀子は、一寸会釈して、

「切腹、と私が云い出した時は、こんなに皆さんが力をあわせて下さるなんて、思いもやりませんでしたわ。私って、変った女なんです。切腹して、のたうちたい……。自虐……そんな女です。でも、祖国を思う心は変わりません。お先きに力のかぎり、かき切って、切り方を見ていただきます。呻くでしようけれど、どんなに苦しくとも……目的は一つ……十文字腹です」

十文字腹……

皆一せいに秀子を凝視した。

すでに、秀子は、ワイシャツのボタンをはずし、がばとばかりに雪の肌を寛げているのだった。

「ああ、皆さん。私は、十文字に切りますけど、皆さんは一字に切りになるだけで充分ではないでしょうか。では、班長殿、園秀子、只今より、自決いたします！」

少しも暗さのない、遠足にでも行くような秀子の態度だった。

「皆さん、短刀は、このように刃先を出してあとは、ハンケチで巻いて下さい。刀身は、こう握って下さい。では、やります」

衿を立てたワイシャツ姿が、妖しいまでに魅力的だった。

秀子は、右ヒザをつき、左ヒザを立てて、身がまえをした。

六人の看護婦は、云いあわせたように秀子のまわりに立った。一秒、二秒……

オウツ、と静寂を破って秀子の気合いが響いた。

秀子は、この時短刀を、左脇腹ふかく突立てていた。

云いようもない嘆声が、周囲から湧きおこった。秀子は、顔をあげて、気丈に、にっこりと笑った。

「……平気、平気よ。皆、がんばってね。……こ、これから、これからよ。見て、見て。これが、一文字腹……。ああうーっ、く、く……」

六人は、秀子の、うわづった声に、憑かれたように聴き入った。

注射のききめが、彼女等を大胆にしたのであろうか。秀子の凄まじい自決の光景にも石のように動かない。動かないばかりか、一秒でも、見のがすまいと、十二の瞳が彼女の血みどろの腹を凝視しているのである。

「……っ、っ、っ、ああ、なんの！」

喘ぎつつ秀子は、短刀に力をこめる。じくじくに切口が開いているのは、渾身の力をふるいおこして掻き切っているからであらう。

「ううむ、うーっ！」

天井の一角をにらみつけるように、眼を据え、呼吸をつめて、きりきりと刃が右へ進んで行く。血が、乗馬ズボンを伝わって床に紅の花を散らせている。

「ウウツ！」

流石に秀子も、襲いかかる苦痛と闘うのが精一杯であった。ひきつった美貌には脂汗がうかび、歯をくいしばって泳えつつけるのである。

「むうっ……」

短刀を右脇まで引廻して、抜き取った。

「……な、なんの。なんの、これしき……皆様、見て、見て、そ、園看護婦……お、女中

らも、十、十文字腹……十文字腹は……こ、こうしてッ！」

魂も凍るばかりの呻きが、男装の乙女の唇を裂いた。苦しいのであらう。紙のように蒼ざめた頬、血走った眼、ふるえる手もと……

「ウ、ウームッ！」

秀子は、腹から絞り出すような呻きと共に鳩尾に刺さった短刀を、下へと下へ切りおろして行く。刃が一文字の傷と合致し、二、三度喘いだと思うと下の切口を裂いて、乗馬ズボンのベルトへと進んで行った。

秀子は、激痛と闘いながら、

「……た、誰か……容器……容器をッ」

気丈な声に、六人は、氣を取り直した。

ああ、十文字腹を仕とげた秀子が、容器に自らの血汐を移し取ろうとするのだ。

咲代が、銀色の手術皿を秀子の右手に握らせてやった。

「い、いざ……」

秀子は、皿を傷口にあて、のしかかるように身構えた。短刀をしっかりと握った右手が、かすかにふるえた。

「さ、さようなら。そ、園の、ち、血……血汐を……」

腹部大動脈からほとばしる血汐は、見る見

る皿を一杯にし、そして溢れ出た。

咲代は、ワイシャツの袖口を朱に染めつつ

秀子の手から容器を受取った。

秀子は、両手に傷口を抑えて、えびのように床を這い廻る。

「ウーッ、ウーッ」

泳えかねた呻きが、そして、もがくたびにひびく長ぐつの重味が、この凄惨な光景に、云いようもないすさまじさをもって迫っていた。

秀子は、自分の予想通り、大動脈を切ったからは口がきけなかった。

壮烈な断末魔であった。

「う、う。」

四肢が虚空をまさぐった。そして硬直した「ぐ、ぐうっ！」

ああ、死は静かに秀子の上にのしかかって行く。

咲代が、秀子の肩に軍服をかけてやった。それを合図のように、秀子は、がっくりと床に倒れ伏した。

(次号へ続く)

× × ×

一 悦 虐 者 の 回 想



快

楽

一ノ瀬悦子

動 機

ほんのチョットしたことが人間の一生を、いや、性格までも変えてしまうということは事実あり得ることなのです。かくいう私もその一人で、今は、どうしようもない運命の呪縛にあえいでいる女なのですが、どうか皆様は、私のこの拙い手記をお読みになっても、噓い捨てて、ゆめゆめこのような真似は、なさらないで下さいまし。

私という女は、エドモンを知るまでは全く平凡な女でした。幼くして両親を亡くした私には、学校を出ても一流会社へなどは就職できず、大して好きでは

なかったけれど、人並より容姿がよいと言われていた（同僚の言では、白川由美ばりの美人だ）ので、或る喫茶店に勤めました。そのお店は、所謂、デラックスな雰囲気を持った、かなり有名なお店でして、お客さんは大體、男の方が多いのです。このお仕事も、他人から見れば楽なようできて、勤めている本人にとっては案外、労働量の多い職業です。私なんか、勤め初めた頃には、四時もあるハイヒールをはいて何時間も立っていたりするために、しまいには足がぐくぐくしてきて困ったことを覚えております。

しかし、それにもやがて馴れて、余り苦にもならず適当にサボり方なども覚えて毎日を過していたのです。

そんな私にとっての楽しみといえば、遅番の時にぶらぶら散歩にゆくことでした。朝十時頃に起き出し、朝食とも昼食ともつかぬ食事後、ぶらりと家を出て一時間ばかり歩きまわります。その時の私の服装が、とても変わっていたのです。こんな姿をしていた為に、とんでもない運命にめぐり合わせたのですからチョット説明して置きましょう。

髪は寝起きのままのザンバラ髪（肩の上ま

でかかります)、派手なナイロンのカー・コート(これは後に皮製のにかわりました)にデニムのパンツ、それに男物の半長靴を穿いて、ネッカチーフで衿元を包みサングラスをかけていました。何故、こんな姿で歩き回ったかという理由はないのですが、お店でのエレガントなドレス姿に対する反撥心のあらわれだったかも知れません。こういう服装をしようという積りはなかったのですが、なるべく投げやりな姿で散歩のひとつを楽しまたいという気持ちから、手当たり次第に買っては身につけたのがこの服装になり、それが何時の間にか、私の散歩用として習慣のようになってしまったのでした。時には、後ろから若い男が「凄げえナァ!」などとひやかしながらついてくることもありました。

ある春の朝、私は例のように、長靴の音をコツコツ響かせながら、ゆるい坂道を港の見える丘の方へ上って行きました。その時、一人の外人が前方から下ってきました。二人の距離が縮まり、どちらからともなく立停ってしまった。外人は何か照れたような表情で微笑しました。私は、今までにそんな経験は一度もなかったのですが、なんととはなしに会釈を返していました。この外人がエドモン

だったのです。

この偶然が、これだけだったならそれでよかったのですが、それから半月程も経ったある日、思いがけもなく、お店のソファアーにその外人を見出したのです。二人連れで、一人は日本人でしたが、彼は可成りの流暢な日本語でしきりに話し込んでいました。私は知らぬ顔をしていましたが、彼の方では早くから氣付いていたようで、帰り際に私に近寄り、名刺をソツとよこしました。その裏には、彼の待つというレストランの店名が書かれてありました。銀座の、外人客の多いと聞いているお店です。その日は私の早番の日でして後一時間程で交替になるという時でした。私はその一時間をどれ程長く感じたことでしょう。

こうした誘いが、多くの場合よくない結果を生むということは、お友達や、同僚の話でよく承知していたのに、どうしてあの時は、あんなに気が逸り立ったのか自分でも不思議なぐらいでした。交替を待ちかねたようにそのレストランに駆けつけたのです。そして、初老に近く品のよい、貴公子然としたエドモンの、文字通り紳士という言葉にふさわしい物腰にいたわられながら食事を共に致しました。私はチョットしたシンデレラ姫気分に浸

っていたようでした。

その後、エドモンは度々お店へ来るようになりました。大抵は商談らしく連れがありました。三度に一度位いの割りりで独りの場合がありました。そんな時は明らかに私がお目当てです。レストランでの食事、それからクラブへ行くこともあり、又、すぐ車で送ってくれることもありました。しかし、彼はあくまで紳士然と振舞い、決して無礼なこととはしませんでした。私は彼のこうした態度が好ましくありましたが、時折、何か腹立たしいような物足りなさを感じたものでした。

春も過ぎて、動いたりしたとき、そろそろ肌の汗ばむ初夏の頃でした。私のアパートの前でクラクションの音がきこえました。私は咄嗟に「エドモン?」という予感がしました。しかし、それまで彼一人で私のアパートを訪れたことは一度もなく、東京からの帰途、私をこのアパートの前で降してくれるだけだったのです。

ノックの音にドアを開くと、私の予感の的になっておりました。その日の彼は乗馬服装をして居ました。仕立のよいズボンに、黒光りする英国風の長靴、小脇に鞭まで挟んで、いつものように鄭重な調子で私をドライブに誘い

ました。私はお店を休むことにして彼の誘いに応じたのですが、車の中で「乗馬に行くの？」という私の間に、彼は形のよい口髭を心持ちゆがめただけで「イエス」とも「ノー」とも答えませんでした。私が「エドモンさんとても素敵！ 私もそんな服装をしてみたいワ、お馬には乗れないけれど……」といいますと、「では一つ、してみますか」と、咄くようにいい、そのまま黙りこんでしまうのでした。

車は多摩川添に北上して、やがて小高い丘陵地帯に入ってゆきました。一時間以上も経った頃でしょうか、もうその辺りは随分、田舎じみた自然の中を私達の車は走っていました。道は竹藪を過ぎると急に狭くなり山かけになっていて、車がようやく通れるぐらいでしたが、しばらく行くとこんもりと木立ちに囲まれて一軒家があり、彼はその家の前で車を停めました。一軒家といっても別荘らしい立派な邸なのです。

私はなんとなく不安になりました。けれども今まで孤独の中に育った気強さというか、どうでもなれという気持が湧いて、無意識の内にその不安を消そうとしていました。

この邸の中で、私はエドモンの友人という

七人の外人男女に紹介されたのです。六人の男性と一人の女性でした。一人でも同性が居るということで、私はとても気強く感じました。彼等はエドモンと同年輩、もしくはそれ以上の何れも人品いやしからぬ人ばかりで、女性には、私より幾つか年上と思える栗毛の髪の毛のやせ方の人でした。

私達は揃って昼食を摂ったのですが、お酒と焼肉が主で、次から次へと種類の違ったお酒と料理が、ただ一人の日本人である私の気持を解きほぐすように運ばれてくるのでした。私は、先刻感じた不安などどこかにふき散ってしまつて、いい気分になってハシヤイでしまいました。その間、エドモンがじつと私を覗めている視線を感じては、露骨なウイנקを彼に送ってやりましたが、その内に立ち上つて、「諸君！ この素晴らしいドミナに一つプレイをお願いしようではないか」というようなことを英語でいいました。私は余り英語は得意ではありませんが、少々ならわからないこともありません。酔っていて、明瞭には判断出来ませんでした。ドミナとは自分を指しているらしいとは思いましたが、プレイとは何を意味するか全く見当が付きませんでした。皆が拍手して口々に何か云つていま

した。エドモンが、私の耳に囁きました。「これからは君が皆の主人なんだ。何をして、どんな無茶を要求してもいいんだ。君はこの邸の女王様なんだ。さあ、女王様、お召替えに参りましょう」彼は私の手をとって微笑しています。私はふらつく足を踏みしめて導かれるままに隣室に入りました。

その部屋は、ぶあついカーテンの深く垂れた陰気な部屋で、ソファアが二つに小さなテーブル、それに粗末なベッド、隅に大きなロッカーだけがあり装飾類は全然ありません。エドモンは去り、ヘレンという唯一人の女友達（ということにしましょう）が入ってきました。「私、お手伝いします」と、彼女は正確な日本語で申しました。「何を着るの？」「あなたの御自由よ。でも余り着込まない方がいいですよ。お互いにネ」と、意味あり気ない方をして、ロッカーの扉を開けて、私にどうぞという素振をします。中には様々の衣裳が、ずらりと並んでいました。よく見ると、女性用の乗馬服やスポーツ着の類なのです。下段には長靴がズラリと並んでいます。英国風の堅胴のもの、細身の軟胴のもの、ウエスタン・ブーツ、編上長靴等々、皆、手入れよく磨かれて、艶々しく光っています。

「ヘレンさん、あなたが選んで下さい。私にはどれがいいか分かりませんから」と、私はヘレンに頼みました。

彼女はロッカーの抽出しから、黒の艶革のコーセットを取り出しました。このコーセットはブラジャーと組合わされています。私は彼女にいわれるまま、それを身につけます。ヘレンが後に廻って、組紐を締めてくれました。胸が苦しい位、よく締ります。ついで彼女は多くの長靴の中から一足を選び出して私に示しました。ハイヒール付長靴とでもいうのでしょうか、軟かく、エナメル仕上の皮製ですが、強い光沢ある長い脚部は、四吋あまりのハイヒールに接続していて、長いストッキングの役割を果しています。

私はもともと、女だてらに長靴を好み、散歩用に愛用しているぐらいですので、西洋の婦人の中にはこうした特殊の長靴を穿く人が居るらしいということは前から雑誌や新聞などの紹介で知っていましたが、その長靴を現実に見るのは初めてでした。私は、珍らしさも手伝って大変魅力を感じました。早速にナイロンの靴下のまま、長靴に足を入れました。長靴は皮が柔かいので、仲々思うように穿け

ません。

私が酔っている上に穿きにくいのでフラフラしますと、ヘレンが私の前に跪まずいて手伝ってくれます。ようやく足首のところまでは穿いたのですが、それ以上は何かを台にして踏み込まねばなりせん、跪いているヘレンの高貴な顔が爪先にありました。その時、私はエドモンの言葉を思い出しました。ヘレンは爪先を額につけんばかりにしています。思い切ってそのまま踏みこんでやりました。靴の底でヘレンの「ウッ」という呻きが小さく起り、長靴はピタリと私の足を受け入れました。続いてヘレンは、もう一方も同じ方法で穿かせるのです。そうするのが当然のような顔をしながら。

私は本当に女王様になったような気持ちになりました。長靴は思ったよりは短かく、大腿部の半分ぐらいまででしたが、太さや大きさは、私に合せて作ったもののようにぴったりと合い、尾錠を閉めると、まるで足に同化したような気持ちよい穿き心地でした。

次にヘレンは私に皮の長手袋を穿かせました。肘の上、殆んど上膊部全体を包む程の長いものです。

姿見に映る自分の姿の異様な装いに、私はしばらくうっとりと思惚れていました。ヘレンが後から私の長い髪をとき分けて肩へたらし、ルージュを強くひくようにしました。私はその通りにしてみました。姿見の中の私は、一段と妖しい美しさを増しました。

振り返った私に、ヘレンは感嘆したような素振りです。跪まずいて鞭を捧げました。皮の犬の訓練用の鞭でした。

私は、今はもう下女のように跪まずくヘレンに、乗馬服装をするように命じました。彼女は柔順に私の命令に従いました。私は酔った頭の中で奇妙な優越感を感じ、何か説明し難いような錯乱した気持ちに襲われるのを覚えました。

私が長靴をききませ、犬鞭をしなわせながら、侍女のようにヘレンを従えて先程の部屋へ引返したとき、迎えた七人の男の瞳は驚嘆を表わし、口々からは異様な嘆息が洩れました。

この瞬間です。私の乱れた頭の中にある種の残忍なアイディアが閃めいたのは……。

(次号へ続きます)

告白

女装の楽しみ

△この告白記は、人名等多少変えた点もありますが、略完全なノンフィクションであることを申添えます。▽

比良野

裕ゆたか

長襦袢の着心地

その後、隣の奥さんに会ったのが何となく恐ろしくなりませんでした。所が一カ月程後に奥さんが私をたずねて来ました。

「裕ちゃん、お願いがあるのヨ」

「何？小母さん」

「一寸お留守番をして頂戴」

「留守番だって？」

「一時間ばかりなの」

私は嬉しくなりましたが、とぼけて、

「一時間ぐらいなら、空けといたって大丈夫だよ」

「いいえ、あのね。この間、空巢に入られたのヨ。それから、こわくて家があげられないのヨ」

私はギョッとしました。しかし先夜の自分の行為は空巢泥棒とはちがうのだから、大丈

夫だと、自分自身で弁解しました。

「じゃ、留守番してあげよう、いっていらっしやい」

「じきに帰ってくるから、おねがいするわ」

彼女はソソクサと出て行きました。

私はうれしいやら、恐ろしいやらで胸が一杯でしたが、いつもの腰巻がどこかにありはしないかと家中を探して見ました。果せるかな、衣桁の下に紐にからけておいてあるのを発見しました。その上、衣桁には鹿の子斑の長襦袢を掛けてあります。今日の腰巻は都でなく、薄い透き通る生地のものでした。

私は大急ぎで、自分の着物を脱ぎ捨て、先ず腰巻をはき、長襦袢を着、伊達巻をして鏡台の前に立って見ました。鹿の子斑の派手な柄、歩く度に裾が乱れ、その下に腰巻、その下に二本の脚がすけて見えます。その魅力に陶酔し、この体がもっとふくよかで胸が豊かに盛り上っていたなら、もっとチャームینگだろうと思いました。私は家の中をあちこち歩いたり立ち止って脚にシナをつくって見たり、またワザと片足を高くしてももまで見える姿をしたり、ワザと裾を乱して座って、赤い腰巻の間から白い膝を少し出して見たりして夢中になっている時、玄関の戸があきました。私は驚いて、長襦袢を脱ぎ、腰巻のまま、自分の着物を着ました。

唐紙をあけると、小父さんが立っていました

た。私は慌て、どもり乍ら弁解しました。
「小母さんに留守番を頼まれたのです」
小父さんは私の様子にあやしみもせず、
「裕ちゃんだったのか。留守番していたのだ
ね。ご苦労さん。じゃもう帰ってもいいよ」
私はいささか困ったのですが

「では、帰らして貰うヨ」と言って便所に行
き、腰巻をぬぎ紐でからげて、小父さんに気
づかれぬように、先刻の場所へソッと投げて
逃げるよう帰りました。

初めての化粧

私の腰巻や長襦袢への憧れは、只身にまど
うだけでしたが、お化粧して身を質的に変え
て見たくてたまりませんでした。この欲望は
簡単には参りませんでした。ついにふくよ
かな香りの白粉を顔につけて、自分の体が女
体になって行く、いきづまるようなよろこび
に浸ることができたのです。

申しおくれましたが、隣の主人、つ
まり小父さんは武藤清二郎といい、相
当大きな材木問屋の次男坊で、私とは
十五、六も年が違うのですが、小さい
時から私を大変可愛がってくれ、よく
上野の動物園や浅草の映画につれて行
ってくれたのでした。奥さんの恵美子
さんは、近所の糸屋の娘で近所では一
寸目立つ綺麗な人でした。でも大変内
気で、商売柄と申しましようか、和服
がよく似合う人でした。この二人は恋
愛結婚だったそうですが、私はその間
の事情を知りませんし、本編には関係
無さそうですから省略します。

その日は主人の清二郎さんは商用で
高崎の方へ行き、奥さんは親類の法事
とかで出かけるため、昼過ぎから留守
になるのです。私はその留守を頼まれ
ました。

私が隣へ行った時は、清二郎さんは
もう先に出かけていて、奥さんが双肌



を脱いで鏡台の前でお化粧をしていました。私は勉強道具を持って行きましたが、奥さんのそのお化粧姿を見ると「あんな鏡台に向ってお化粧をしたら楽しいだろうナア」と心の中で思い、その仕草を見ていました。奥さんはこちらへ振り返らず鏡の中から私を見て言いました。

「裕ちゃん、すみませんわね、またお留守脚おねがいするわ、夕方六時頃には帰って来ますからね。あら本を沢山もって……勉強ね」

「……」

私はお化粧する奥さんの発散する女性の香りに胸をふさがれて何も言えませんでした。「おやつは茶ダンスに入っていますから、みんな食べてもいいわ。それから誰が来てもお留守だといって断っておいて頂戴。でも、お金がいることがあったら、鏡台の小抽出しに入れておきますから、出しておいて頂戴」

「どこ？」

と私はワザと鏡台に近よりました。

「この抽出しよ」

これで私は鏡台の抽出しをあけることを許されたのです。お化粧が終ると奥さんは隣の部屋へ行って着換えを始めました。やがて、法事の着物に改めて出て来ましたが、全体が黒っぽいので、白い顔と白い足袋が鮮やかで眼をひきました。玄関で「ではお願いするわね」と黒の鼻緒の草履をはいて出て行きました。

私は玄関や裏口の錠をかけて、奥さんの着換えをした部屋に入って見ますと、さっきまで奥さんが着ていた着物が、すみに脱ぎすてられていました。その原形を失わぬようにソツと持ち上げて見ますと、肌襦袢や腰巻、足袋や腰紐などが丸めてあり、まだ奥さんの体のぬくもりさえ感じられます。もう勉強どころではありません。私ははやる胸をおさえ乍ら自分の着物をスッカリ脱ぎました。まず腰巻をはき、肌襦袢、長襦袢を着て見ました。最後に銘仙の着物を着て、さっき奥さんがしていたように双肌を脱いで鏡台の前に座って見ました。

鏡台の抽出しをあけると、コールドクリーム、粉白粉、頬紅、口紅等沢山入っています。クリームの瓶をあけて、奥さんのしていたように手のひらにクリームをつけて顔中にひろげ、それからパフに粉白粉をつけて、顔をはたいて見ますと、やわらかい香りがあたりにただよい、鏡の中の自分が見る見る白くなります。唇にルージュをひきますと、もう殆ど女性と変わります。頬紅をホンノリとさし、眉墨を引くと、全く別人のように美しく変わりました。わずかの間にこうも美しく変わるのですから、女の人がお化粧を楽しむわけをシミジミと感じました。頭は手拭であねさんかぶりをして鏡の中の自分を見乍ら、立ったり、座ったり、少し裾を開いて腰巻をチラチラさせ

て見たり襷をかけ、腰をはしよって掃除をする姿などして見たりしました。

もう自分がこの家の奥さんになったような気がして、茶の間に座ってお茶をいれ、お菓子を食べ、またお手洗に行つて女のようにしやがんで見ました。

私はダンスの中にもっと綺麗な衣装が入っていると思い、そっと引手に手をかけて見ますと、幸いカギが掛つていなかったので簡単にあきました。中には、冬物、夏物、袴、単衣、帯も広巾、半巾といろ／＼入っていました。ので、着て見たい気持は山々でしたが、元通りにたたんでしまうことができそうもないので、そっとさわって見るだけにしておきました。しかし思わぬ収穫がありました。ダンスの上の小抽出しに、歌舞伎や新派俳優のブロマイドが沢山入っているのを発見したので、それは二百枚以上もあったでしょう。か。

その中から女形の写真だけを取り出して、しげしげと眺めました。お染やお七のような娘役、八重垣姫や時姫のようなお姫様、高尾や八ッ橋のような遊女、新派では桂子やお薫など、役者の名前は分りませんが、どれも皆、女形であるというだけで魅せられてしまいました。

今度は鏡台にうつった自分の女装の姿を、これらの女形の姿に真似して、あたかもその役になったような気持になり、浪子が武男と

別れる時のハンケチを振る様をして見たり、熱海の海岸で貫一に蹴られたお宮の所作をして法悦境にしたりしておりました。

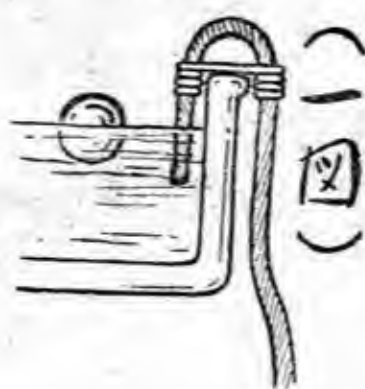
やや暗くなった頃、玄関に人の気配がしました。鍵がかかっているから安心ですが奥さ

んが帰ったのだといけないと思って、散らかっているプロマイドを片づけていると、外から小父さんの声で

「裕ちゃん、あけてくれ、小父さんだよ」と聞えました。私はもう絶体絶命です。

浣腸
通信

あるヒント 津川 八郎



浣腸マニアである私の新発明？を御紹介してみましよう。鞆に浣腸器を入れていて、もし他人にみられたら……と云う懸念で、あるヒントから思いついたのですが、これは、水洗トイレのオーバーヘッドタンクを利用する簡易イルリガートルです。

ものは透明ビニールホースで、二・五米程の長さ、巻いて鞆に入れる必要から、太さはガス管位の物を選びました。これをタンクのフチにかけてサイホンを作る訳ですが、支えにラジオ用のヤニ入り糸ハンダを使いました。これは針金と違って自由に曲るし、目方もあるので便利なのです。(一図) 御承知のようにこのタンクは、ボールバルブの作用で、いつも水面が一定されますので吸込口は余り深く沈まなくてもいい訳です。パイプに水を吸わすのは、指でパイプ中の空気をしごき出す方法を探っています。止めるのは、書類バサミでパイプを挟むだけで済むという訳です。(二図)

ビニールホース、糸ハンダ、書類バサミなら、鞆に入れても別におかしくもないでしょう。新案特許にでもならないかと思いますが、いかがなものでしょう。



管をつぶし
下にしごく
と真空が
出来て水が
吸われる
に持つ

「一寸まって下さい」

と衣装だけは脱ぎましたが、お化粧を落す暇がありません。

再び「裕ちゃん」という声です。

もう仕方ありません。玄関の鍵をあけました。清二郎さんは、私の白粉をつけ紅をさした顔を見てビックリしていました。

「どうしたの？」

「ごめんなさい。一寸いたずらしたので……」

「ウム、そうか。そんなことをするのが好きかい？」

「……………」

「心配しないでいいよ」

「ごめんなさい」

「いいんだよ。子供の時には誰にでもあることだ」

「今、始末しますから……」

「面白かったかい？この間、裕ちゃんが長襦袢を着たのも見て知っていたのだよ……」

「ア、小父さん、知っていたのか。こんなこと小母さんや家の人には言わないでね」

「あ、大丈夫。でも帰ってくるといけなから早く顔を洗ってしまった方がいいよ」

「ええ」

私は小父さんが案外わかってくれたので安心しました。

(次号へ)



○ 麦秋増大号と銘うって新鮮味豊かな充実ぶりを見せてくれるKK誌上で、私達は爽快な被縛女体のデヴィウに接することが出来ました。優雅で瑞々しい裸身、のびのびとしたしなやかな四肢、美しく均齊のとれた若い女体に心からの讃辞を惜しみません。その名は津川路子！『新入荷品陳列、今度新しく生体家具が入荷しました。年令十九才、身長一五九センチ、体重四十六キロ、中肉中背で洋装のよく似合う御覧の通りの美貌です

……『モデルに要求される美しさは、単に顔立ちばかりでなく、整った女体のヴォリュームが不可欠なものです。彼女はスラリとしてゐるものの、決して瘦せつぽちではなさそうです。伸び盛りの嬌やかさが見られ、これから肉のつく楽しみがありそうに思います。十九才という年令からしても、頬やおなかに量感が増し、肩や腿に丸味加わる希望は充分です。身長が五尺二寸余というのは理想的です。体重十二貫余りはスマートな比率ですが、これからは女体として成熟してゆく過程が愉しめる肉体です。胸の隆起も全体にマッチした適度なもので、それでいて女体の柔らかみが充分窺われる処は清潔感に満ちています。悦虐モデルの肉体美が必要なのは勿論ですが、いつて顔はどうでもいいという訳ではなく、美貌であることは極めて重要な条件で、唯、両面を兼ね備えたモデルが少いために、勢いヌードを求めて猿轡美人をも誕生させる訳なのです。そこで彼女ですが、確かに美貌です。角度やポーズによって、或いは落着いたムードがあり、或はあどけなさもあります、一言で云えば聰明な感じがあります。淨らかな額、切れ長

の眼に優しく冴えた瞳、愛嬌のある鼻と淑やかな口許、観る人の好みによって違ふでしょうが私には清純な美しさが映るのです。上の歯が少し出ているのも可愛らしく唇を合わせた処は慎ましい情感があります。輪廓が典型的な細面であることは、何といつても好感を呼ぶのです。丸顔の女性からは観念した女の美、悦虐に悶える女体の香気が、どうしても充分に出ないからです。彼女の髪の手入れは申し分ありません。慎ましく哀しげに訴える眼差、切なげに喘ぐ鼻孔と唇、乙女の羞恥心が巧みに醸し出されています。私の大好きな新東宝女優、高友子さんに似ている感じですが、それと同時に彼女の持つカマトト的雰囲気を持つてゐることを意味します。唯それが強くなりすぎないのは、津川嬢の口許に弱々しさが見られるからで或いは胃腸が弱いのではないかと案じられます。顔も体も佳いというモデルは稀少です。実績の豊富な奇クでさえ、従前は顔のアツプが乏しかったせい、誌上で重用されたモデルの中で私が文句なしに推賞するのは萩千恵子嬢くらいでしたし、最近の美女モデル、春丘リル嬢も何か力弱い感があるの

です。これは好みの相違で止むを得ませんが、川端多奈子、伊吹真砂子、そして現在活躍中の絹川文代、大塚啓子というモデル諸嬢のムードと別の、もっと靜的で外觀の美しさというものが津川嬢に在るのです。津川嬢がこれからのどのよう活躍するか分りませんが、できれば末長くその美貌と美体を曝して欲しいと思います。編集部の方は少しの遠慮も不要ですから充分な縛りと責めに遇わせ、彼女がモデルとして耐えうる限り、心ゆくまでの悦虐フォトを産み出して下さい。或いは何か不測の事態に立至つて津川嬢が再び奇クのグラビアを飾れなくなつても、私にはいつでも忘れ難い新鮮な魅力を残してくれるモデルと思います。

(近藤 一)

○ 小生は三十四才、十七貫ほどあり女性からも男らしい男と云われております。しかし小生はMです。S的な女性と格闘をして倒され、遂に馬乗りになることを夢想しております。鳥取の花田様、三隅千恵子様のようなSの女性とプロレスごっこをし、小生は抵抗しますが、Mの小生など敵でなく忽ち引き倒され、胸の上に馬乗り

に跨られ、小生の両手も足の下に敷かれ、首を両足でしっかりと挟み込まれ身動き出来ぬよう押えつけられ、そのままの姿勢で一時間でも二時間でも上から見降しながら翻られたら、どんなにか素敵でしょう。Sの女性で男性を組敷きたい方がおられましたら、ぜひ御連絡下さい。

(吉川三郎)

始めて便りする輝ファンです。

男性被縛写真「穴倉幽閉」はウツトリと見ているが何故あのモデルに輝を締めさせないのか残念だ。

来月からは是非、輝を締めさせて欲しい。それにつけても近頃、女性の緊縛は本誌はじめ色々は入らんしているが、いささかおくびが出る。何だか、だらしない縛り方で緊張も何もない。処が男性の身体は引締り、其処へ真白いサラシの六尺輝を締めさせ、今一人の男性が(無論、六尺輝を締めている)手、足共、キリキリと縛り上げて行く。こんな処を組写真としては是非のせて頂きたい。毎号、輝ファン、男性の六尺輝での緊縛ファンは読者通信等を読んでも増え行く一方なのに写真では少しも載らないのは本当に残念だ。真白いサラシの輝を締めて相手の男性をキ

リキリと縛り上げる。又、相手の男性から縛られる。こんなプレイをしたい。どんなにか嬉しいだろうと思う。同好者の方々(東京近郊の)御便りを待つ。最後に青木審様の挿画、本当に良く画けているが、いつも思うのは六尺輝のころ、六尺輝は締めた時は前垂れないものです。これは輝を締めて見れば分ること、前垂を下けたら「ニルフン」になってしまつて六尺輝にはなりません。一寸参考までに……

(東京 K・M生)

K誌六月号の読者通信欄のT・K氏へ、貴方は二十一才といえ、昭和十四年前後の生れとして、継母に折檻された年令はいくつ位の頃ですか?十六年には戦争が始つたのですから貴方は三つ位になつていたのでしょう。そして終戦の時には六つか七つ位で、貴方が父責め等を覚えて居られるとすれば終戦後と思われるが、当時、もぐさ等よく手に入れたものですね。貴方の故郷はどちらですか?貴方は継子いじめに興味を持っておられるようですが、小生もその一人です。小生は小学校一年の頃から四年までS市に住んだことがあります、近所に継子いじめを

する継母と継祖母が居り、わずかに五、六才の女の児を二人がかりで折檻するのを面白がつて見にいったものですが、そんなことで継母の全てが継子いじめをするように考えるようになってしまいました。しかし貴方が云われる通り、S傾向の継母のみが継子いじめをするのを知つたのはK誌を愛読するようになってからです。旧赤線があった頃には、女の母親が実母か継母か確かめ、継母に育てられた女には、どんな虐められかたをしたかを聞きました。しかし継子いじめをされた女の少いのは、いささかがつかりしました。しかし一人だけN市にこんな女がいたことを報告しておきました。背中、腰のあたりに五つ六つ、一寸から五分ぐらいの灸のあと、肩から胸にかけて熱湯を浴びたようなやけどのあと、背中に電線で打たれた傷あと等。これだけ書けば彼女がどんなに継母に虐められたかお分りのことと思ひます。しかし赤線がなくなるとともに、その女の消息もわからなくなり残念に思っています。貴方の誌上にてのお便りをお待ちしています。

(九州 昼行燈生)

島直樹様、ご返事が遅くなつてしまい申しわけありません。私のつたない文を毎月読んで下さるなんて、とても嬉しくございます。これから文通をしたいですわ。是非おたより下さいませ。それから浣腸に関する資料やフォトが有りになるとのこと、一度拝見させていただきます。七月号に新しく登場されたモデルの津川路子さん、素晴らしい方ですわね。私と同じ年令なのも何か親しみがもてますわ。又、私の悪いくせが出ますけど、津川さんの浣腸フォトを作つたらいかがでしょう。(1)ネグリジェ姿の津川さんがイルリガートル、ガラス製浣腸器の前で悲しそうな表情のフォトです。(2)はビニールを敷かれたベッドに仰けに寝かされて浣腸を待つ不安げな表情のものです。(3)ネグリジェを脱がされ両手を上に開いて縛られ、両足は揃えて頭に持って来られた処です。(4)イルリガートルを挿入される処です。この時は本当に液を注入します。(5)は施薬中の津川さんのアップです。(6)はガラス浣腸器でグリセリン浣腸を五〇〇C施薬されるところ。(7)は津川さんの我慢している時のアップです。以上のよ

天星社代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13)印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶園の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

うな浣腸フオートを是非お願いしま
す。又、津川さんが浣腸をどう考
えているか書いて下さったら嬉し
うございます。是非、津川さんと
お友達になりたいと思います。四
馬先生の口絵、楽しみに毎月見て
いますが、一度、浣腸責めの口絵
の特集のようなものを作っていた
だけませんかしら。(上原由紀子)

○ 島直樹様、御健筆をお喜び申し
ます。浣腸についての色々の面か
らの検討をしつくりしてみたいと思
いますので、貴下の御研究に興味
をもっています。最近、色々の男
女について浣腸を受けた経験の具
体的な例についての感想を、アン

ケート式に集めておきます。もと
より問題の性質上、大変困難です
が、不可能でなく、少しずつ貴重
なデータが集り、それを分析す
ると極めて興味あるものであるこ
とかわかります。たとえば各人の
職業、性別、配偶者の有無、年令
だけで姓名は不要なものですから、
投書によって体験を集めることも
可能です。何才のとき、どの様な
病気で、どの様な器具と術式で浣腸を
受けたか、ということ、その時
の自分と施術者との応対会話、心
理的及び感覚的体験を書いて貰え
ばよいのです。貴兄及びその他、
浣腸に興味ある方々が、この様な

企てに御賛同頂いて、この様な結
果を御発表下さると大変、有用だ
と存じます。社会の良俗に反しな
い様に、純粹に浣腸というものの
もつ側面を調べて行こうとする方
々が協力出来る組織が出来ました
ら……と考えます。(久里須照雄)

○ 麦秋号、拝見して久しぶりで本
誌に対する不満が消えました。読
物がヴアラエテイに富んでいて、
従来の女性一辺倒を避け広義の文
献資料としての仕事をしています
た。ただ口絵の豊富さに対して男
性緊縛があの程度しかないのは、
ひどいアンバランスではないでし
ようか。あんな貧弱なフオートで
も読者欄をみると、皆、随喜の感
激の辞をよせているのでも御分り
の事と思います。編集部としても
いくらか反応を示さぬという事は
ありません。次回には更に良きサ
ービスを怠らないで下さい。小生
の旧稿、掲載していただいて喜ん
でいます。しかし欲をいえば小説
の掲載を待っていた次第です。
宇宙のどこかで、のようなマゾ小
説が、あんなに好評なことでも御
分りでしょう。男性マゾ小説の長
篇を是非もう一篇ぐらい載せて頂
きたいと思ひます。小生の「黒曜
館」など毎月二十枚程度で五、六
回に亘って連載してほしいと思ひ
ますが、編集部意向がわかりま

せんで控えております。内容は「猩紅匪」にやや似た構想です。しかし、「立石様縁起」の投降部隊、「童貞中尉」など、オクラになつてゐるのだとすると、絶望視する他はありません。大変我儘ないい方ですが編集つれづれ草にでも御解答下されば幸いです。特高室「宇宙のどこかで」ふんどし奇譚」など、それぞれ面白く拝見しました。梅雨の候、ますます健康に留意され斬新な企画をされんことを祈つて止みません。

(菅良太)

はじめてお便りします。小生は二十七才のサラリーマンですが、以前より本誌を愛読しています。七月号にはメンスバンドの御意見が二、三みうけられましたので、勇氣を得てペンをとりました。小生はゴムの匂いや感触よりも、女性の下着の一部といつてはおかしいですが、直接肌につけるものとして、バンドそのものに愛着を覚えるのです。小生は昨年の秋に結婚したのですが、それ以後は妻に色んな型のメンスバンドを買い求めさせ、毎月、妻には一日ずつ違ったのをさせ、その後、小生が着用しています。パンティ型のバン

ドは肌にピッタリとつき、ヒヤリとしたゴムの感じもマニヤでなければわからないと思います。

(加古川 山脇生)

私事、日頃より熱烈なる貴誌のファンであり、毎月欠かさず愛読しております。前月号の読者欄に私宛の鳥取市の女奴隷いよりのお便り拝見いたし、大変嬉しく存じた次第でございます。現在、私事又となきマゾ男性を対象に悦虐のプレイを行つておりますが、実は私も貴男のような新しい方ともプレイをしてみたいと、かねがね思つております。編集部並びに写真部の皆様へ。最近号の白線地帯：：のマゾプレイのワンカット・シーンには、サド女性として、この上もない参考となり、思わず息がつまりそうになり乍ら、いつまでもいつまでも、じつと見ていました。マゾ男を両手を後につかせて仰向けに反り返らせ、その肩口のところドッカと馬乗りに跨られ「どうだ降参か」といわぬばかりに男の髪をわしづかみにして両太股で男の顔をはさみ込んでおられる勇姿、ほんとうに素晴らしい思いで拝見させていただきました。一体どなたでいらっしゃるのです。

でしょうか。春日ルミ様？それとも絹川文代様？私の想像では絹川様に似ている様に見受けましたが：：。どうか今後もしどしこの様な哀れな男性マゾ共を屈伏せしめて頂きます様、お願い致します。あの場合、若し私でしたら、もつと勇敢に振舞つて肩口より更に上方の首のあたりに馬乗りになつて男の頭髪をわしづかみにして写真の様に頭を後の方に押えつけるのではなく反対に前の方に持ち上げて男の口と鼻先を私の股でピッタリさるぐつわをかませておいて、両方の太股の間に男の顔をしっかりと挟み込んでしまふでしょう。そしてそのままでの姿勢で私の身体を上下にドシンドシンとゆさぶつて男を仰向けに寝かせてみたら又どんなにか素晴らしいでしょう。この外、私の日頃行つて参りましたものや、考えておりますアイデアとして、うつ向にした男の顔の上にお尻をのせて敷きつぶしているもの、仰向けにした男の顔の上に逆さ馬乗りに跨つて組敷いているもの、仰向けにして男の首のあたりにお尻を据えて腰かけ、両脚を開いて男の両手首を踏みつけているもの、胸の上に馬乗りに跨つて両膝で男の両肩口を踏み敷いてい

るもの、同じく首の上に跨つて男の顔を両太股の間に挟み込んでい

(米子 秋葉まり)

○ 久方振りに女斗美の記事が載りました。私は大の女斗美ファンです。女相撲の方ですが：：。五月号で雪崎京人氏の記事を拝見し、六月号の読者通信で二、三の女斗美ファンの通信を読み、同趣味の人達の案外、多いのに頼もしく思いました。私も雪崎氏と同じような事をして楽しむ事がよくありま

天星社代理部案内

☆最新作女体緊縛写真
大手札(9×13)印画紙焼付

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せっかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歓

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 機(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

す。女の相撲は何ともいえないエロチックなエレガントなものですね。雪崎氏のお抱え力士?と私の方の力士と、どちらが強いですか?又、同好の士が各自、女力士を持寄って女相撲大会を催したら楽しいものだろうと思いますが、どうしたらいいでしょうかね。世界裸美画報の七月号グラビアに非常に珍しい女相撲の写真が出ておられます。ファンには垂涎の品です。本誌も何卒、女相撲ファンの要望にこたえて、分譲写真で結構

です。女から女相撲四十八手集等是非おねがいします。貴誌のクリン・ヒットを待っております。
(大阪 K・U)

○
僕は自分がサディストかマゾヒストか良く分りませんが、そういう事に興味を持っています。恐らく、この世で一番楽しい事ではないかと思っています。しかし、引込思案のために、いつも一人で貴誌を読んで慰めています。本当に責めたり責められたりしたいと願っ

ています。どうか、どなたでも結構です。僕とプレイをしてくれる方お便り下さい。(大阪 H生)

○
小生、毎月、本屋にて購入していますが、六月号よりグラビア頁も増頁になり、内容も一段と充実して来て、旧号の特大号に優るとも劣らぬようになって来たことは大変喜ばしい事と思っています。特にグラビア写真では新人モデル嬢の登場により、従来に加えて一層、魅力のある頁となつて来ました。モデル諸嬢の色々なポーズは小生の目を楽しませ、又、心を癒してくれました。ここでお願いしたいのは、四馬孝氏の責面によく出て来ます皮製のヌイグルミ、これを使用して色々なポーズで写していただけたらと思います。モデル嬢の体をピッタリと締めつけている黒光りする皮製のヌイグルミ……もたえる美女。考えるだけでもぞくぞくします。又、男性のモデルにも使用すると面白いと思います。マゾヒストである小生も、女性の緊縛写真を見てゾクゾクしてくる状態ですので、若干サドの傾向があると思います。同好の方のお呼びかけをおねがいします。
(名古屋 T・S生)

○
若鮎のようにビチビチした若者を思う存分、責めた絵を掲載して下さい。最近の読者通信も、この種の希望がだんだん多くなつて来ています。写真の責めはモデルなどの条件によつてイメージを失うことがありますが注意して下さい。責め材料は七月号の小川辰次氏の意見を全面的に賛成します。じめじめした地下室に無理矢理に薄いナイロン・パンティ一枚にされ、手足を太い鎖で縛られ、全身にベトリとオリブ油を塗られて跪いている図など掲載して下さい。又、デニムのGパンを穿いた若者に興味を持っています。それも足長でピッタリと肌に食いこむほどのもので、股間から尻に吸いつくような、そしてふくらみはつきりわかる様なものです。まるでパレーのタイツと同じ様です。それを意識的に穿いている若者が多くなりました。大体、この種のズボンには作業用に使われたものですが、最近では白は勿論、赤、黄、ピンクまであります。本誌の責写真もGパンを穿いている様ですが、よほど厳寒でない限りパンティの上に直ぐに穿くもので、下着などつけないのが普通のようなです。そ

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	昭和30年10月号	△売切
復刊第2号	昭和30年11月号	△売切
復刊第3号	昭和31年4月号	△売切
復刊第4号	昭和31年5月号	△売切
復刊第5号	昭和31年6月号	△売切
復刊第6号	昭和31年7月号	△売切
復刊第7号	昭和31年8月号	△売切
復刊第8号	昭和31年9月号	△売切
復刊第9号	昭和31年10月号	△売切
復刊第10号	昭和31年12月号	△売切
復刊第11号	昭和32年1月号	△売切
復刊第12号	昭和32年2月号	△売切
復刊第13号	昭和32年3月号	△売切
復刊第14号	昭和32年4月号	△売切
復刊第15号	昭和32年6月号	△売切
復刊第16号	昭和32年7月号	△売切
復刊第17号	昭和32年8月号	△売切
復刊第18号	昭和32年9月号	△売切
復刊第19号	昭和32年10月号	△売切

復刊第20号	昭和32年11月号	定価二百円
復刊第21号	昭和32年12月号	定価二百円
復刊第22号	昭和33年1月号	定価二百円
復刊第23号	昭和33年2月号	△売切
復刊第24号	昭和33年3月号	△売切
復刊第25号	昭和33年4月号	定価二百円
復刊第26号	昭和33年5月号	定価二百円
復刊第27号	昭和33年6月号	定価二百円
復刊第28号	昭和33年7月号	定価二百円
復刊第29号	昭和33年8月号	△売切
復刊第30号	昭和33年9月号	△売切
復刊第31号	昭和33年10月号	定価二百円
復刊第32号	昭和33年11月号	定価二百円
復刊第33号	昭和33年12月号	定価二百円
復刊第34号	昭和33年12月号	定価二百円
復刊第35号	昭和33年12月号	定価二百円
復刊第36号	昭和33年12月号	定価二百円
復刊第37号	昭和33年12月号	定価二百円
復刊第38号	昭和33年12月号	定価二百円
復刊第39号	昭和33年12月号	定価二百円
復刊第40号	昭和33年12月号	定価二百円
復刊第41号	昭和33年12月号	定価二百円

復刊第42号	昭和34年5月号	三百五十円
復刊第43号	昭和34年6月号	定価二百円
復刊第44号	昭和34年7月号	定価二百円
復刊第45号	昭和34年8月号	定価二百円
復刊第46号	昭和34年9月号	定価二百円
復刊第47号	昭和34年10月号	定価二百円
復刊第48号	昭和34年11月号	定価二百円
復刊第49号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第50号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第51号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第52号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第53号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第54号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第55号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第56号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第57号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第58号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第59号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第60号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第61号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第62号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第63号	昭和34年12月号	定価二百円
復刊第64号	昭和34年12月号	定価二百円

れでないとい生地を通して肉感的な感じが生まれません。今年の夏あたりから海水パンツのような半ズボンでも流行したらまた楽しみです。

(間宮 浩)

絹川文代さんへ。貴女の表情はこの頃すっかり堂に入ってきて、この上なく楽しませてくれます。例えば六月の悦特第五集「君知るや魔囚の真意を」の一頁右、二頁

右上、左上、三頁右上の顔の表情など何れも真に迫っているし、一頁左上の足の指、三頁中の脚線、左下の右足指の表情など何れも堪能させてくれます。ただしクロール・アップでないのが残念。又、もう少し欲をいいますと三頁右上の右足指は、あれでもいいのです。が、もう少し親指に力をいれて、足を押すようにし、あとの四指は反

ら、もつとよかつたかも知れませんが、それから一頁右と二頁右下の左足指先は、もつと力をいれて、の字形に曲げる。正座が二枚ありますが、これは横座りの方がよいでしょう。(もつとも、これは貴女の問題ではないかも知れませんが)何れにしても、貴女はこの頃の顔の表情は勿論のこと、手の指や足の指の先まで表情がメッキリ豊かになって、私達を充分に楽しませ

せてくれるのは有難い。紅色の自画像。大変、面白く拝見しました。後を続けて下さい。益田房子さんへ。貴女が本誌に登場したのは、たしか三十三年の夏だったと思います。そうすると、もう二年経ちました。その割には、出場の回数が少いですね。いろいろ、お忙しいとは思いますが、沢山のファンに答えて、もつともつと出て下さい。それから今までは

表裏が少し固かったと思います。紐が貴女の柔肌にヒシヒシと食い込むとき、貴女は全くの無感動でしようか。否、貴女がはつきり意識するとしなは別として、貴女の胸のうちは必ずや、恥じらい喜び、悲しみ、苦しみ、恍惚等の織りまざった微妙な感じに打ち顫えているのに相違ありません。それで、それらを思いきって卒直に大胆に表情に出して下さい。それも顔だけでなく、手の指や足の指の表情にまで、その気持は出せる筈です。そして貴女が積極的にやられることは、奇巧のモットーである緊縛の中に健康な美を見出す精神に合致するだけでなく、その緊縛美のレベルを貴女のような清純なモデルさんを通じて高めることになるわけで、このことは貴女に課せられた大きな使命だと思えます。それで今までみたいな簡単なポーズだけではなく、思いきって下さい。それから、そのうち手記を書いて下さい。

(東京 小林生)

○ 悦唐小説と緊縛写真、特集号第五集の御恵贈にあずかり、愉しく拝見しました。本号の小説の挿画

が、それぞれ既刊当時のものを参考にしておられるのは一つの特徴だろうと思います。特に古川裕子さんの二つの告白において、この行き方は成功していました。愛恋の日に、の鎖で縛られた裸身が坐っているポーズや、旅館の丹前らしい和服で仰向けに悶えている姿、夕暮の窓辺にて、の鏡に見入った被縛陶酔の表情などは、正に悦唐の美の極致と云えるものでしょう。視覚に強く訴え娛ませるグラビアページは、やはり第一に注目されるものですが、四馬氏の麗筆が愈々冴え、裸足で吊られた美女や汚水に漬けられた美女が描かれたことと、その表情、殊に瞳が活かされていくことは嬉しい限りです。現代緊縛風景百二十態と題した写真集の充実ぶりも見事でした。トップに現われたニューモデル、春丘リル嬢は確かに明眸で、角度により山本富士子に似た瞳を持っています。まだ頬や口許に硬さがありますが、まあ容赦ない緊縛で苦しそうですし、また縄目の間に窺われる下腹部の柔らかなみは、やはり美人モデルとして今後の活躍が期待できると思います。トップの春丘リル嬢から始

○ 浣腸フオート

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

まつて絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、館典子、花坂道子、桜井葉子、益田房子、岩井知子の諸嬢が登場する本号は、正に豪華なものです。中では、やはり絹川嬢以下の三人と新人グラママーの桜井葉子嬢が重用されているようですが、各モデルの特徴を活かした作品揃いで、遜色ない出来ばえです。プロファイルの岩井嬢のモードが、これ程見事とは思いませんでした。清潔な可憐さ、ムツチリと肉付いた柔らかみ、とにかく若さが匂うような美しさで、胸、脇が長く見えるのも好感を呼ぶと思います。高く吊られた後手首、キツチリ締った縛しめが肌を責めるのも嬉しい風情です。益田房子嬢の被縛ポーズも清涼感が溢れています。やはり小柄でムツチリとした肉付であり、然も常に純白なパンティに象徴される清潔感があるの

○ 浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

肌に黒っぽい紐の股間縛りも嫌味がないし、常に素足で就縛して一遍もハイヒールなど履かない点も好感を持てるのです。題して、債辱を包む麗姿」というのも、膝頭を寄せ腿をピッタリ合わせるポーズにマツチします。幽艶なる受刑の花坂嬢は顔の識別が判然とつきませんが、痛々しい美しさが漂っていて、殊に厳しい縛しめの結び目が喉許に在るのは残酷な思いつきです。襟足のスツキリした感じ、下腹部や剥き出しにされたお尻のブツクリした盛上りは愉しい見物で、何よりも純粹で、つつましい姿が好感を呼ぶのです。懇謝の眼差しの館嬢は、むつかしいテーマを無難に演じています。惜しいことに背に廻された手首が見えないので緊縛感が弱く、もっと体を倒した方が良かったのでは

ありませんか。それに、たとえ両脚を合わせていても、前に投出すのは感心しませんし、もっと瞳が活かされてもよいと思います。そ

女体 『浣腸風景十二態』

(9×13Cm)
十二枚一組印画紙焼付
九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

れにしても襦袢姿で、ピッタリと鼻や口を覆う猿轡を受けた姿は独特の柔らかみがあり、デヴィューの洋装被縛と思ひ合わせると、花坂嬢と絹川嬢をミックスしたようなモデルになれそうです。新人の桜井嬢は、仇怨の欄間、蓮戯の拘束、で大活躍ですが、どうも責められる女体の哀美が出ていないようです。それは、やはりヴェオリュームというより顔立ちのせいでしょうし、顔の表情の弱さによるようです。前者では、頭上に吊つてある両腕の縛り方が佳く、次第に脱がされて行くパンティを見やる眼差が良くて美しい作品ですが、後者は後手に縛られた体を棒でこじられながら苦悶もなく、何か傍観者のな表情があり、うちとけられませんか。桜井嬢の額や頬骨の張りを考えて角度を選ぶ必要がありそうです。もうベテランになった愛川嬢の「格子なき監房」は、悦慮雨ざらし」と同趣の作品と思われま

すが、これなど、やはり彼女の独壇場で、現在こういった残酷なボーズに耐えられるのは絹川、大塚愛川の三嬢だけだと思います。全裸の肌を無残に括り上げられ、腿にまで泥をはね上げながら水溜りの中にベッタリと坐らされている姿は冷酷な懲罰です。彼女の場合、深々と項垂れた姿や、恐る恐る見上げる表情に思ひがけない美があつて、私の好きな作品の一つになつていくのです。『罪なき女囚』、戯話の反抗、軟強肌の大塚嬢も流石に大活躍です。全身これ弾力という程ムチュメ肉づいた彼女は、それが既に大きな罪と云えるでしょう。暴れば暴れるだけ肌食い入る器具を施され、殊に後手を更に縄で吊上げられると、あとは下半身で浅間しく悶えるだけ、足首を繋がれては、歩行は愚か起上ることさえ不可能です。この場合、彼女の長い髪が実に効果的だと思ひます。太目の縄での股間縛りは、彼女の逞しい裸身に浮世絵的な悶えを創らせ、前屈みの妖しい美しさは絶妙です。荒縄縛りの猿轡で冷水を浴びせられるのは、懲罰と云うより修道女の苦行を思わせる神々しさがあります。

こういうことを体当りで演じられるのは、やはり仕事への誇りとも云えるモデル根性なのでしょう。絹川嬢は、やはり余裕のある好演で貫禄を示しています。苦痛への迎撃、でわけぞつた顔は高峰三枝子のようなノーブルな処がありといつて唇を開いた喘ぎのボーズもよく、慾を云えば折角あぐらをかいしたのですから思ひきつて海老責にしたなら、と思ひました。黒蛇の獲物、は可憐な感じで、恋人か、夫から困惑させられている新妻のムードがあります。美女縲綹は行儀の悪いボーズで、折角の美女が活きていません。和服で羽織まで着ると脚線美が弱まり、脚線を露わすと行儀が悪くなりま

す。順次に着物を脱いで行ったらよかつたと思うのです。君知るか、監囚の真意を、は、嚴重に施された柱縛りと固い猿轡の下で、彼女の腫と脚線の演技力が最大限に發揮されています。これで彼女の体内にマゾの血が流れていないとしたら不思議な程で、KKの愛読者としては、彼女をこのまま放置する筈はなく、彼女の全身から訴えかけられた求めに応じて心ゆくまで愉しむのです。彼女の手にあつたように、ヴェオリュームを増して来た彼女は、特に頬とお腹に美しい肉がついて、顔立ちといひ肉体といひ演技といひ申し分ないモデルでしょう。諦観、怨嗟、悔悟、哀訴、自棄、喜悅、陶醉が如実に表現される時、彼女がやはりKK・Kのモデルとして一級存在であることは間違ひありません。『歎泣の像』が何を訴えているか、視る人によつて違ふでしょうが、胸と腰の膨隆、ウエストの見事なくびれ、艶やかに伸びた脚線が悦虐のボーズをとつてくれることを拝見して、KKの愛読者としての幸せをつくづく感じます。この処、定期的になつた特集号の刊行や特大号の刊行で、私は恵まれた思ひです。こういう楽しみを産み出す編集部各位やモデル諸嬢、寄稿家諸兄姉の御健康を祈り、今後の御活躍を希うものです。

女体浣腸連続フォト

(9×13センチ)

略号(ちよ)

印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 愛川悦子嬢

花坂道子緊縛フオト集 大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)

八枚一組 八〇〇円

○股間縛集 略号(はな2)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

(近藤 一)

七月号、杉江美津子氏の女装緊縛、高島田は私達女装マニヤの渴仰やまなかつたもの。今まで女性緊縛のみで物足らなかつた私には、正に旱天の激雨とも云うべきで、今後女になつてゆく過程、着付の順序、縛られてゆく姿など色々なアイデアで続けて頂きたいと願っています。自分も女装マニヤです。この欄で同好の方が多いのを知り、今まで人に知られたいくない恥かしい性癖と卑下していましたが、意を強くしました。近頃ではむしろ男としての自分と、女としての私と二重の喜びを味わえる幸せを喜んでさえいます。昼間こそ男性として暮していますが、一日の仕事が終り、夜ともなれば鏡台の前で丹念にお化粧し、お腰、長襦袢、お召や錦紗の着物を着て女になつて翌朝まで暮しています。

この姿で縛られる事を念願としていますが、自分だけでは思う様に緊縛できません。同好の方と緊縛プレイを楽しみたいと思っています。(神戸 鈴木二三夫)

○ 麦秋増大号、拝見致しました。

乗馬服の方のお写真、お美しくとても素晴らしいですね。乗馬ズボンが革製のようなですが、これも魅かれます。宇宙服と私も昂奮させられます。私にも、あのようになりたい出があるし、いまま厚地のレインコートにストラップス、ゴムブーツで歩くのが好きです。私がいま構想を練っているのは、宇宙服の女性の断末魔です。まだ半月ほどは健康が恢復しきらないので書くのはそれからになります。酸欠の欠乏と戦うために体中にナイフを突立てて苦しみながら報告を続け、遂にハラを掻き切つて陽をつかみ出し、祖国万歳を絶叫し

ながら散るソ連の女性です。人工衛星の中の物語りです。今月は私の作品がないので、がっかり。それを励みに生きています。私なのです。どんな、どきつい表現でも没にしないので下さいませね、では……。(藤山秀緒)

○ 最近の貴誌を見て、その進歩に敬意を表します。原氏の件は誠に

くやしき限りです。他人に迷惑をかけず理性の範囲内でのMクラブが出来たつていいではないかと思っています。読者通信欄は、いつも一番先に見ます。私の傾向は歯(金歯)によるフェチとコブログニIがあり、又、S的で特集号など読み、相当刺激されました。本誌こそ、いかなる弾圧にも屈せず続けてほしい只一つの雑誌として私は全面的に支持します。フオトは私自身とるので殆んど不用ですが記事は毎号、楽しみに読んでおります。作品の評など私には出来ません。……茨城の栗野さん、女性の歯に興味あるとの事、ぜひ御投稿お待ちしています。私のは金歯フェチですが、フェチは案外、蒐集の強い人間として取りしまりの対象にはなりません。切手を蒐める人、プログラムを蒐める人を

当局はどう出来るのでしょうか。只、世に存在するアブニストの赤裸々な文を待ちます。その中に告白手記でも書いて送ります。真実の私の姿を又、他の傾向の方も一応理解出来ます。頁数も制限がありませんので短いですがこれで筆をおきます。KK誌の発展を祈ります。(東京 岡本生)

○ 初めてお便り致します。二年ほど前より貴誌を愛読しておりますが、多くの写真とサド小説には感激しております。小生はサド趣味ですが、余り残酷な鞭打や吊りよりは、精神面で苦痛を与えるのが好きです。だから裸よりは和服を着たままで胸を露わにしたり、又はオシメやオシメカバーを当てて羞恥心をおこさせるのなどがよいと思います。大阪の春木京子様、お便り下さい。では又、お便りします。(東京 旭)

○ 私は女装というものに異常なまでの興味を抱いているものです。その点、四月号は圧巻でした。村田良夫様の手記には、夜も寝られぬぐらいの感動でした。何度となく読み返しました。欲をいえば、この写真がグラビアであれば、ど

んなに良かったでしょう。ブラジャとパンティ、海水着、スリッパ等、胸をしめつける様な痺れる様な感激は、同好者でなくては味わえぬ気持でしょう。私もその夜は蒐集品を出して身につけました。女装にこの上なく魅力を感じるので、残念ながらかつらもなく化粧にも自信がないので、衣服のみにて満足しています。そのかわり、婦人下着は相当数あつています。腰巻、パンティ、スリッパ、フルフアッション靴下、ベチコート、ブラジャー、コルセット等。

女体責写真厳選集

大手札型印画紙焼付
各三枚一組二五〇円

危機一発 略号「きき」

後手猿轡の無防備な身体に襲いくる悪魔の手に引きはかれようとするパンティ (絹川文代)

女体開陳 略号「かい」

美しい女がきびしい縄目に足をくの字に曲げての喘ぎようはただでない。(絹川文代)

哀花悶々 略号「あい」

白く輝く柔肌をぎりぎりとタテに縛りあげて悶えに悶えぬく哀れにも艶な姿。(絹川文代)

雁字搦目 略号「から」

首、胸、腰、股とガンジガラメに喰い込めとばかり滅茶苦茶に縄をかけらる。(絹川文代)

寝室俯瞰 略号「ふか」

ボリウムのある愛川さんの肉体が縄目にくびれて盛り上りベツドに転々と……(絹川文代)

柔肌地獄 略号「やわ」

押せば凹こみ放せば弾き返えす張りのある全裸の柔肌を余すところなく露呈。(大塚啓子)

それも色とりどり、布地もナイロン、トリコット、ペンベルグ等バラエティに富んでいます。今では普段でもトリコットのウイクリー・パンティを穿いています。ゴツゴツした男物のパンツと違ってしなやかな、さらりとした感触は一度でも着用した者でなければ、わからぬ気持でしょう。一度、ネールの赤い腰巻をしてズボンをはいた事もあります。余りゴワゴワして人に知れないかと、ひどく心配した事があります。それ以後はデシンの薄いピンクかナイロンの

ものを着ける様にしています。が一度、パンティとナイロン・トリコットの洋服の下に着けて外出してから、腰巻などゴワゴワするばかりでスタイルに影響するので止めました。夜はネグリジエを着けて寝るのです。勿論、パンティです。又、長襦袢の時もあります。腰巻を毎日、違った色や布地でかえるのも、何ともいえぬ楽しさです。本当に女の幸福は下着にあるといっても過言ではないと思うぐらいです。女装愛好者の人も、この下着の魅力から進んでそうなったのでしようか。五月号に出ていました山田政二様の手記でも判断出来ますが、ピンクのしなやかな腰巻が素肌にぴったり触れる感触は、一度体験したならば忘れ去る事の出来ぬ強い誘惑となつてくるのではないでしようか。外出の時の下着も女物だと云って居られる様に、人に隠れてこっそりとしていて腰巻の肌ざわりは何とも云えぬものです。夏はトリコットのパンティだけしか着用出来ませんが、冬は下着を沢山つけるので割に自由に着用しても、それほど目立ちません。スリッパ、フルフアッションなど毎日違ったものを

着用しています。只一つ困ったことは洗濯です。夜、こっそり洗っておいて夜干するのです。昼間は家の中においでいます。山田政二様、北海道の愛好生様、名古屋の坂井様、静岡のM様、体験記をぜひ御投稿下さい。私も折を見て投稿したいと思っています。女装特集号の発行を是非ともお願いいたします。定価が高くて仕方ありません。女装という文字のある本はどんな本でも集めています。もう十冊ぐらゐあるでしようか。その他もスクラップを相当に集めているのです。特集号が無理でしたら毎号一つ二つの女装記事をのせて下さる様おねがいします。又、かつらの製造元、そしてその価格、洋髪和髪等、お知らせ下さい。誌上にてお返事下されば幸いです。(愛媛 乙生)

久しぶりに七月号でマゾ的読物に満足しました。又、挿画で渾一本の姿が沢山出まして渾愛好者のマゾに取っては旧刊以来の喜びです。宇宙のどこかで、は、私の様なマゾにとっては、たまらない魅力です。渾一本で鎖に縛られ賑やかな街中を歩かされるその恥しい

気持は何ともいえぬ興奮を感じました。第一本の緊縛写真は数多く見ましたが、又挿画は格別の味があります。数人に連れられて浅間山を歩いた姿を街頭にさらし、喫茶店の前で後手に縛られ正座している姿、背景がとても良く、只の責写真では味わえぬものです。今回は久しぶりの内田武男氏の、ふんどし奇談の告白に、すっかり興奮しました。宇宙のどこかで、は空想ですが、内田氏の告白は生の真実感が出まして、私も内田氏の様な境遇に一日でも良いからなりたいたいもので、内田氏はこの点、幸福だと思っています。今の社会で縛を強制せられ第一本で働かされる処は仲々見つからないでしょうが、これをもとめて止まないマゾの気持です。私の様に壮年期になっても、まだまだこの気持は抜けません。東京の百生氏のいわれる如く沢山の女性に第一本にて責められてみたいと思います。男性ばかり相手を探しても数少ないので困難です。マゾの天国は何処かにないものでしょうか。清水の赤禪様、度々お便り拝見しております。一度お会いしたいと思っておりますが貧乏漁師ではなかなかお伺いも出来ません。内田様ぜひお便り下さい。

い。

(豊橋 角田)

ボクは二十八才の独身の、サラリーマンですが、今年の春ごろから本誌を知り、アブに対する豊富な資料にびっくりしています。ボクは十五、六の時から同性に興味をもち異性には全くというほど関心がありません。同性といっても優型の美男子や美少年は好まず、中年に近い人の成熟したたくましい体に心を引かれます。内気なたちで、そうした人を会社の中で見かけても仲よしになつたりプレイじみたことをする勇氣は、とてもありません。しぜん、そうした読物に興味を持つようになりましたが、本誌のいくつかの読物はボクをひどく満足させてくれます。女性の裸体や責められている写真などは正視できず、いたまじさと、むごたらしさばかり先立つて刺激は全く感じません。増頁になりましたが、女性のものが氾濫したばかりでボク達は少しも充たされていません。どうか徐々に結構です。から七月号の男性縛写真のようにケチなものでなく、もつと堂々としたものを掲載して下さい。その場合の希望を申し上げますと、女性に責められているようなマゾフォト

麗しき縛しめの乙女たち

大手札型印画紙焼付
各組三枚一組二五〇円

聖壇の裸女	略号(けい)	のぞき見極楽	略号(けへ)
△モデル	絹川文代▽	△モデル	絹川文代▽
カーテンの翳	略号(けろ)	開股悦虐境	略号(けと)
△モデル	絹川文代▽	△モデル	大塚啓子▽
艶姿色模様	略号(けは)	ダンロの開股	略号(けち)
△モデル	絹川文代▽	△モデル	田原美佐子▽
浴場の欲情	略号(けに)	開股絶命	略号(けり)
△モデル	大塚啓子▽	△モデル	愛川悦子▽
いけにえ人形	略号(けほ)	悲鳴開股	略号(けぬ)
△モデル	絹川文代▽	△モデル	絹川文代▽

ではなく、男が男を責めているようなものが望ましいと思います。男性責の読物でしたら時代物でも現代物でも結構です。時代物では大友柳太朗のようなたくましく男らしい武士が大勢の武士に責められ、第一本の姿で悶え苦しみが反らも苦痛を耐えしのび男らしく反抗を示すという筋のようなのが好みます。最近のには殆んど、そうしたものが残念です。こどもの時に古い草雙紙で若いりしい武士が第一本の裸で奥庭の松の木に吊られ、三、四名の折助に割竹で叩かれている図をみて昂奮しました。それから責の効果をあらわすために毎日縛を替える。白禪、赤禪、黒禪、そして紫禪などに毎日、色を替えて責められるという場面を想像したことがありました。木馬責、吊責、海老責、駿河責、水責、火責、など好きです。但し石抱責というのは苦痛があっても効果が少いので嫌です。一度そうした草雙紙風の男責場面を誰かに書いていただけたらと思っております。だから映画で時代物の家の隠密など見ますが、大てい女の隠密が捕えられて責められる場面ばかりで、いつも失望してい

女性『切腹風景十二態』(9×13センチ)印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

禪美切腹

大手札判(9×13センチ)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
二枚一組 二五〇円
略号(こせ)

女性自刃三態

大手札判(9×13センチ)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(じじん)

切腹のプレイ

大手札判(9×13センチ)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(れい)

豊麗切腹三態

大手札判(9×13センチ)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(ほう)

ます。加賀騒動の大槻内蔵介、伊達騒動の原田甲斐などの苦味走った中年の武士が吟味の拷問を受ける場面をあかれています。そういうものに趣味のある方と、この誌上でお近づきになれたら幸々と思っております。

(時代物男責ファン)

貴誌御隆昌の段、大賀の至りに存じます。編集部の方々様には如何でしょうか。私は貴誌をこよなく愛し、勿論、貴誌の愛読者ですから私の願いをおきき下さい。そ

れは一人の意地悪な若い看護婦に四つ這いを強いられた二人の若い女が、浣腸をされている処や、浣腸後もなかなか用便を許されず、もだえ苦しむ態をたのしみに眺めている若い看護婦の冷たい目など、そうした口絵を四馬先生が滝れい子先生の健筆によってお願いできれば大変いいと思います。また貴誌には女の魅力である鼻責め(苦悶の鼻責め)の写真が掲載されませんが、これもぜひ載せていただきたいと思ひます。又、愚生が「女看守と被告」と題して体験を書

いておきます。脱稿次第、貴社にお送りしますから採用され貴誌の末席を汚せば本望です。又、貴誌の傑作であった篠原咲恵「赤札囚」をKK業書として発刊下されば最上の喜びです。(T・H生)

苦しみと喜び……。宿命的なこの一体感が、いまの私をしめつけています。輸血につぐ輸血で内臓に影響が出はじめたのでいまはそれも出来ず、注射をつづけながら全快を待っている私。通いの看護婦さんの目をぬすみ一晩に一回だけと心にきめて穿く乗馬ズボンの疼きは、のぼりつめてしまった後、あの目まいと疲れの苦しみさえ物の数とも思わぬ激しさ。息をつめて絶叫を泳え、必死に雑誌や写真を見据え、アアと泳えかねた呻きにワイシャツの肩を噛みしだいてかがみこみ、のたうち、遂にはウーッという男のように歯をくいしばって、しばしは心も飛んで、乗馬ズボンの両肢は虚空に泳ぐ……

鞍にとりつき、あぶみを踏みしめてのめり悶える……。そして朱に染ったこわばる火のズボンを我にかえった私が見下すときのみじめさ。乗馬ズボンの表側までも血汐が滲んで、本当に切腹したかと思う様……。でも私は苦しい。何故このような苦しみに悶えなければならぬのでしよう。今宵もベッドの上に馬装を横たえつつ書いています。病院でもウワ言のように「乗馬ズボン!」といったとか。恥しい……。でも病院では「馬術の好きなB・G」といつて下さったとか。ソ連女性の最後を描く創作は、いま夜毎に書きつづけています。(藤山秀緒)

新作『血紅使用切腹フォト』分譲

モデル 絹川文代嬢

第一集 五枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 五枚一組 八百円

略号(によ2)

盛夏の砌、貴社の御発展を心から御祈り申し上げます。奇巧もだんだん復刊前の豪華さになつてくる事が何よりも嬉しく心強い限りに思つて居ります。毎号、一篇、浣腸記事が発表される事は何よりも嬉しい事と存じます。私はオシ

メ・マニヤの一人としてフォトに越した事はありませんが、四馬氏の素晴らしいタッチに依る絵を一度でも良いので発表して下さい。美貌の女性が赤ん坊のように派手なオシメ・カバーをつけられてゐる。意地の悪そうな女性がオシメをつけてゐる。そばに人相の良くない男達がニヤニヤして見ている。何んとサジチックなフェチ的な絵ではないでしょうか。是非、発表して下さい。絵物語、又は分譲画として御一考願えましたら幸いです。七月号の北原女史の絵の様に、折檻のアイデアを加えて考えると、常連の客を仮病をつかつて逃げたため、お内儀さんにお仕置を受ける哀れな女。怒ったお内儀が惨々に打ちのめした上、浣腸を施し、オシメをあてて常連客の目の前へ、恥しい姿をさらけ出す。こんな絵物語を北原氏の筆にて発表される事をマニヤの一人として大いに期待したいものです。静岡のS子様、七月号で貴女様の、緊縛と浣腸とオシメのアイデア、私は嬉しく拝見いたしました。若い女性にとっては、いくら病氣とはいえ浣腸を受けるという事は、特に羞恥以上の屈辱への極みと思うのです。それを緊縛に依って自由

を奪い、泣きわめいても如何にする術なし。タップリとグリセリンを一杯に吸い込んだ浣腸器が容赦なく挿入される美しい女性の表情は、羞恥と苦痛に美しく歪み大粒な涙が頬を伝う。その上にあの赤ちやんの様に派手な浴衣地のオシメがはさまれ、その上からゴムのヌメヌメした大きなオシメカバーがはめられる。美しき大きなベビは恥しい姿で放置される。何と素晴らしい事でしょう。貴女様がいつておられる一〇〇〇〇Cも注入されてオシメを用いる点は少々オパービやないでしょうか。赤ん坊と異り不可能かと存じます。一番効果的なのは矢張り濃いままのグリセリンを三〇〇C、又は五十Cの方が遙かに素晴らしい事だと思います。オシメ地も赤ん坊のと同じ柄でオシメカバーも派手な柄のを用いたら一層よいものと思ひます。いかがですか、貴女様一人の胸にひそめずに思いのままに誌上に意見を發表されては。キット女性の同好者も發表されると思ひます。上原由紀子さん先鞭をつけて下さい。名古屋の山本進様、私は直ぐ近くの岐阜に居ります。何とか意見の交換をしたいものです。ねコレクションの紹介、意見の交換

等をしたいものです。

(岐阜 S・A生)

皆様の仲間に入れて戴きたく筆をとりました。小生は特に禪に関心を持っております。今まで禪の愛好者など全くおらないと歎

ヌード初縛り

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子
略号(みい)

敷布の白さよりも白いヌードが縄目にもだえて……

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 岩井 知子
略号(みは)

稚き柔肌にまといつく縄目は痛々しいまでに苛烈だった。

観念の座

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子
略号(みほ)

縄と縛の祭壇に上ったいけにえは観念の眼を閉じていた……

開股縛くらべ

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 絹川 文代
略号(みと)

黒い紐は白い肌に奇妙なコントラストをかもし出した。

て居りましたが、去る五月初旬、偶然にKK誌を店頭に見出し意外に同好者の多いのに感激、早速、禪関係の記事の出ているものを旧号、復刊号、あわせて二十冊ばかり揃えました。追々他の号も揃える予定です。小生の禪についての

ヌード初縛り

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 田原美佐子
略号(みろ)

初々しい裸身が縄で自由を奪われて描く美しい女体構図。

全裸後手くらべ

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子
略号(みに)

艶やかな色香に満ちた餅肌も縄にくびられて哀れな表情……

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 絹川 文代
略号(みへ)

白磁の肌にヒシヒシと喰い込む妖しい縄の魅力……

椅子開股縛

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 絹川 文代
略号(みち)

身動きも出来ない後手しぼりと剥がれたズロースとは……

懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ ☆ 賞金 ☆

告白と手記と体験記

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千元	若干篇
佳作	一篇に付	二千元	若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
- 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

経歴は次の様なものです。小学校五年の時、臨海学校で漁師のたぐましい輝姿に憧れる。中学一年の時、臨海学校で黒モス六尺褌を規定され、その感触に感激、以後バソツの下に褌を着用、時々身体検査の時など都会の事なので少々テレたことがあります。入隊中は新兵時代は暫く越中を使用せるも、いくらか自由がきくようになってからは六尺褌を使用、現在に至っております。勿論、ユル褌は大嫌いで常に文字通り緊褌一番です。尙、十人並以上にS・M的傾向があり

S七十パーセントM三十パーセントぐらいと思っております。あまり苛酷なのは御免です。次の事を御教示戴ければ幸いです。各種、褌のしめ方。目的による生地の中、並びに長さ。褌による責めの方法旧号にテストイクル責めの記事があります。晒の腹巻に最適の巾、並に長さ、最も合理的な巻き方、特に巻初めと巻終りの上手な止め方などです。現在、小生は褌として巾の狭い晒の六尺を使用し、腹巻は巾三十センチ以上の晒、六米余

(つまり七巻)を常用しております。褌はどんなに暴れても絶対にゆるまぬ自信があります。小生は平凡な勤人ですが、褌をしめていると、一般の人はどうもヤクザか暴力団を連想し勝ちなのは本当に残念です。私は、かつて大病にかかった時、医者にも見放されまして、末期の願いとして新しい六尺褌を強くしめて貰い、「俺は日本男子として褌をしている。今、死ねないぞ」と精神を統一し、その後、驚異的な恢復をして親戚、友人を驚かしたことがあります。清水のふんどし男様、静岡の緊褌生様、その他、褌愛用の皆様、色々御教示下されば身に余る光栄です。KKの発展を祈ると共に巻頭口絵にもっと男性の褌姿を掲載して戴きたいものです。

(鎌倉 S・A生)

二年程前から貴誌を愛読しておりますが最近のフォトと絵には心うばわれるものがあります。殊に大塚啓子、春丘リル両嬢はすばらしく毎月楽しく見ておりますが両嬢のファンである私にはフォトの数がもう一つ少いように思われます。私はSなのですが激しいムチ打ちのような肉体にひどい苦痛を

与えるより若い女性を恥しめるということに興味をおぼえるので縛り、浣腸、女褌にかぎらない憧れを抱いているのです。Uの字型に縛ったり柱を抱くようにして浣腸したら(勿論縛るのは一定時間便意をこらえさせるため)と考えたり又小さくなった水着を無理に着せたら息もつまりそうな激しい圧迫感にたえかねて喘ぐであろう。大の字縛りも腰巻一つの縛りも悪くない。又褌をきりりと締めた女性と夜の海で泳いだら——誰もいない深夜の飛込台に彼女を縛ったら、或は浣腸を等と責のアイデアをいろいろと頭の中で描くと時間の経つのも忘れる位だ。然し毎日心の中で思うだけで現実には誰一人相手になってくれる女性はいません。本当に残念でなりません。その様な時、同好者と思われる上原由紀子さんの告白「由紀子の手記」(八月号)のラストにある、「——こうした生活に由紀子は強いあこがれを抱いているのです。この様な生活のお相手をして下さる方がいたら、由紀子はどんなに幸福でしょう。」という一文は、その前の文章を面白く読んだ私を夢の世界にひきずり込むのに十分あまりありました。又同嬢が読者

懸賞原稿募集

規定

- 一、原稿の内容は本誌の掲載にふさわしいものであれば、どんな種類でも結構です。
- 二、形式は創作小説、文獻、研究、告白、体験、手記、物語等どんなものでも構いません。
- 三、枚数は百五十枚位まで。
- 四、必ず未発表の自作品であること。既発表のものは、その旨を明記して下さい。
- 五、締切は毎月十日。以後到着の分は翌月廻しとします。
- 六、入選作品は毎月の誌上に発表掲載。賞金は一篇につき二千円以上五万円まで贈呈します。
- 七、掲載外の佳作には本誌三分乃至一年分贈呈します。
- 八、原稿は原則として返戻いたしかねます。掲載に際し発表に支障のある箇所は訂正又は削除することがありますから、予め御承諾をお願いします。

天星社 編集部

読者原稿募集

〔体験、告白、手記〕

内容や長短は問いません。御遠慮なく、どしどしと体験記や告白をお寄せ下さい。掲載篇には本誌半年分以上贈呈します。

〔創作、小説、物語〕

一度小説といったものを書いたみようと志された方は先ず一応御投稿下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

〔映画、雑誌通信〕

映画や既刊雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。映画は撮影所名、題名。雑誌は発行所名、雑誌名、発行年月号の明記をお願いします。採用の分には本誌三月分以上贈呈します。

〔新聞週刊誌切り抜き〕

新聞紙週刊誌の切り抜き並に感想をお寄せ下さい。掲載の分には本誌二月分以上贈呈。

〔読者通信〕

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、希望、感想、或は読者相互間の交歓文通、応答、御意見などの通信をお待ちいたします。

通信に「——どうしても見ず知らずの人でそうしたプレイを由紀子にして下さる方を見つけだす事が出来ず、大変残念に思っている云々」と記しているのを拝しあなた様の様な人をあなたの様に見つけ出せずに残念がつている者がここにいるという事を由紀子さんにお知らせしたく思いました。この破廉恥な粗文を由紀子さんが見て下さったらくれしく思います。(東京 厳生)

七月号八月号と清楚な表紙に盛り上げた内容はいずれも素晴らしい

往年の重量感のある特大号を思わせるものがあります。七月号で四馬孝氏の「白線地帯」と滝さんの二枚の絵はいずれも力作、「せむし」の女の顔は花坂さん似ですがもう少し表情に苦痛を出した方がよかったです。八月号の口絵も他誌に見られぬ力のこもったもの、両号を通じたグラビヤ写真は緊縛感の溢れたものばかりでベテラン絹川大塚の活躍と春丘リルをはじめとした新人の抬頭が目ざましい。今後の毎月の発売が楽しく待たれる次第である。(広島 津山生)

本誌御購読案内

一月分	(1冊)	三百円
三月分	(3冊)	八百円
半年分	(6冊)	千五百円
一年分	(12冊)	二千八百円

購読御希望の方は上記の通り割引させていただきます故なるべく月極にてお申込み下さい。毎月発行の都度厳重包装の上急送申し上げます。尚景品の贈呈は今後中止いたしますから御諒承願います。

奇譚クラブ 早秋特大号(9月号) 定価三百円

昭和三十五年八月二十日印刷 昭和三十五年九月一日発行

発行所 大阪市阿倍野郵便局 私書函第十四号 天星社

振替口座大阪五〇〇四二番 電話天下茶屋三六〇七番 編集印刷兼発行人 吉田 稔

◎本誌発表の口絵並に写真の複写転載を固くお断りします。